

京都大学図書



8680148324

人文科学研究所

298
N-131

『マナスル』にててくる山岳用語

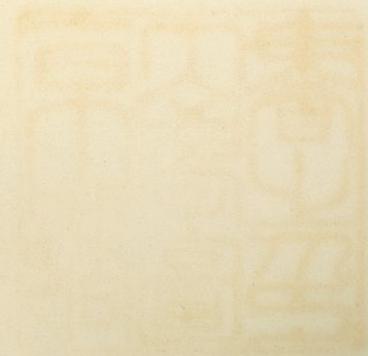
- アイス・フォール 氷瀑地帯
アイゼン 氷雪の斜面を登降する際に、くつ底につける鋼鉄またはジュラルミン製のスパイク状のすべりどめ、8本または10本の爪がある。
- アルプ 歐洲アルプスの山腹にある高原の牧場。
アンカー いかりのことから転じて自己確保（セルフ・ビレー）を意味し、また下降の時の最後尾の者をさす。
- アンザイレン 登攀者相互にザイルで結び合うこと。
あんぶ 鞍部 尾根の低くなった部分。
イグルー 氷雪で造ったドーム型のエスキモー家屋。テントや雪洞と併用して積雪期露営に利用する。
- ウインド・ヤッケ 防風用上衣。
ウインパー・テント ウィンパーの設計になる両端に交差した支柱を持ち、グラウンド・シートを縫いつけた屋根型テント。
- オーバー・ハング 岩壁や氷壁が前方にひさし状につき出て、頭上におおいかぶさるようになったところ。
- カール 圏谷。氷蝕によりかまの内面のような形になった谷。
- クラスト 雪が風雨、太陽熱などの影響により堅くなること。
- クレバス 雪溪の亀裂。
クロアール 山の斜面に浸蝕のためできた急しゅんなくぼ地。
- コース 1コースは約1.5キロ。ネパール人の間で距離をあらわすのいう単位で、大体葉をとってしばむまでの時間というからいいかげんのものである。
- コル あんぶ。とくに高山にある峠をいう。
ゴルジュ 兩岸の岩壁が狭まっている大きな岩溝。氷蝕や氷蝕によってできたものが多い。
- サダー シェルパの親方。
サーブ 主人。ヒマラヤのポーター達が遠征隊員に対して用いる呼び名。
- サポート 登攀隊の登降を支援すること。
ジッヘル アンザイレン中、スリップを予防する動作。
- スカブラ 風のため雪面が波のようになったもの。
スクリー 急斜面のすそにある風化された岩くず。
スノー・ブリッジ 氷河のクレバスに雪が橋のようにかかっ

—裏に続く—

MANASLU

1952~3

日本山岳会編

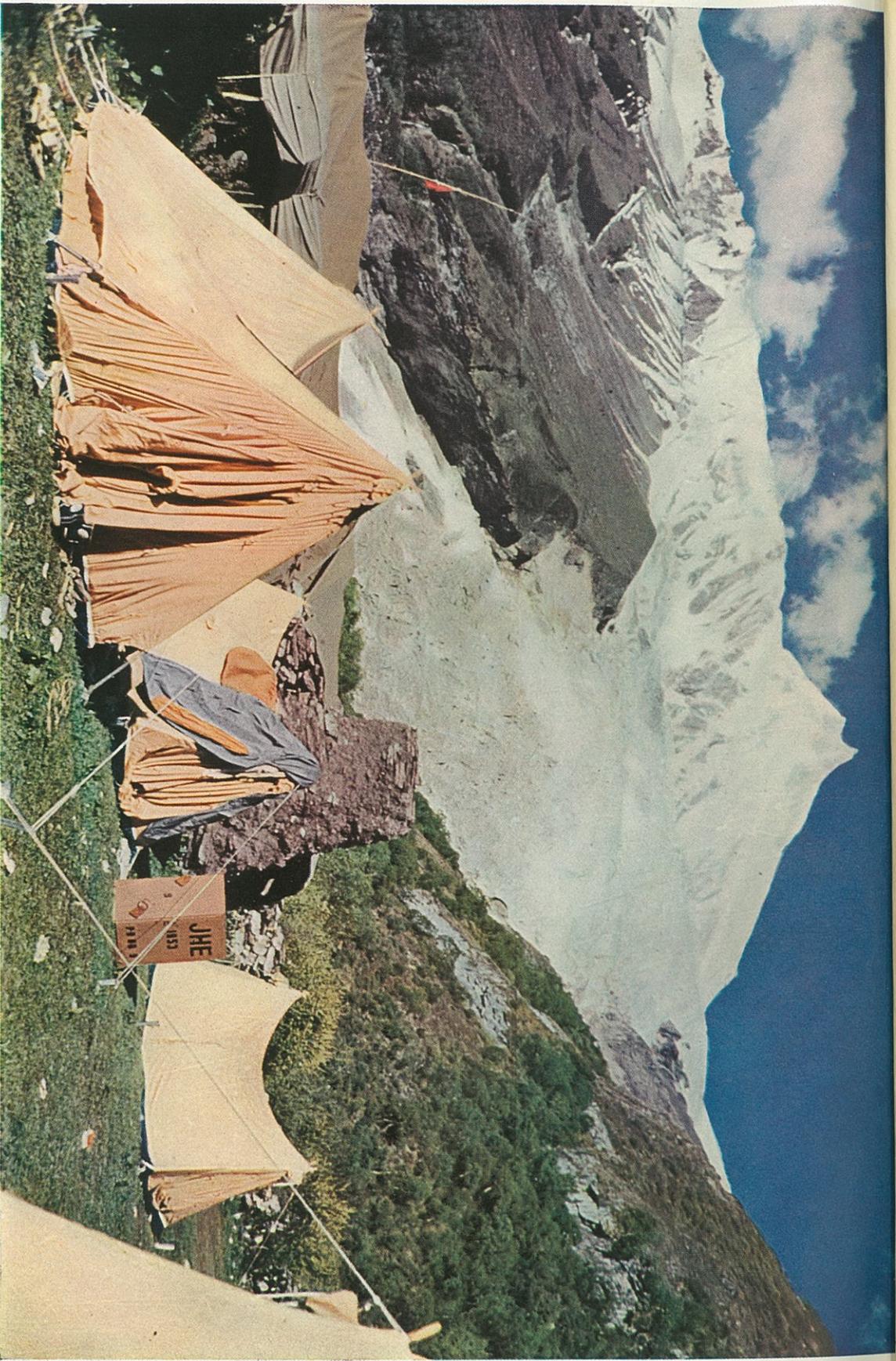


毎日新聞社

MANASLU

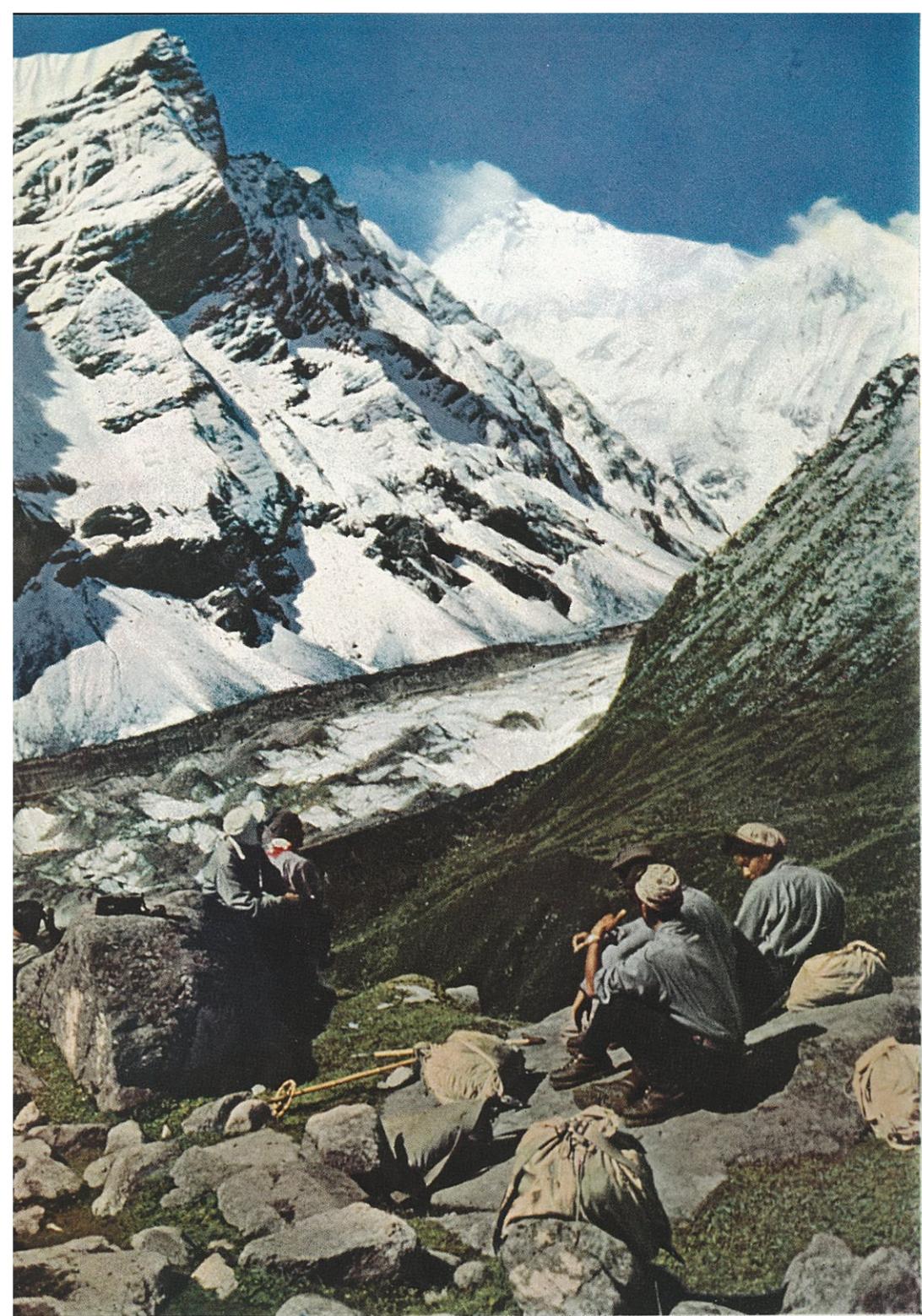
1952~3

三島三
970851
昭和 29. 6. 17



巨峰マナスルを見上げる朝のベース・キャンプ 6月5日 竹節作大隊員撮影
キヤノン 45b セリナー F2.8 35mm フジカラーフィルム 総り8 20分の1秒

Morning scene of Base Camp with background of great Manaslu. —Photo by Sakuta Takebushi.



ラルキヤ峠の中腹から見たマナスル北面 6月9日 依田孝喜隊員撮影

ニコンS型 ニッコール F2.5 35mm フジカラーフィルム 絞り 8 50分の1秒

1952年の踏査隊

1936年 ナンダ・コットに遠征隊を送ってから 16年間 ヒマラヤ遠征の希望を胸に岳人らの訓練は続けられていた 1952年ついに時きたり 日本山岳会のヒマラヤの巨峰、8125メートルのマナスル目指す踏査隊は 9月中旬カトマンズをあとに秘境の地ネパールを3ヵ月にわたり踏査 マナスル山群をひとめぐりして 東面にその可能な登路を見いだした



酒代をしぶる旅人たちは こうして 3~5人手をつなぎ合って浅瀬を選んで渡るので

2



カトマンズを出て3日目にタディ・コーラを渡る モンスーンの最中は心細い丸木舟で運んでもらう 酒代をせびる雲助のがらの悪さは日本もネパールも変りない



6200メートルのチュール頂上目ざして5850メートルのキャンプを出発する朝 ここから見るアンナフルナ第3峰はいよいよ高い



ネパールの街道筋には 至る所にこのような立て場がある ボダイ樹とバンヤンが一對植えられ根本を石垣で囲んである 旅人のオアシスだ



タディ・コーラの岸には 木賃宿と茶店が並んで川渡しを待つ旅人を呼び止めるなど昔の東海道をしのぼせるものがある



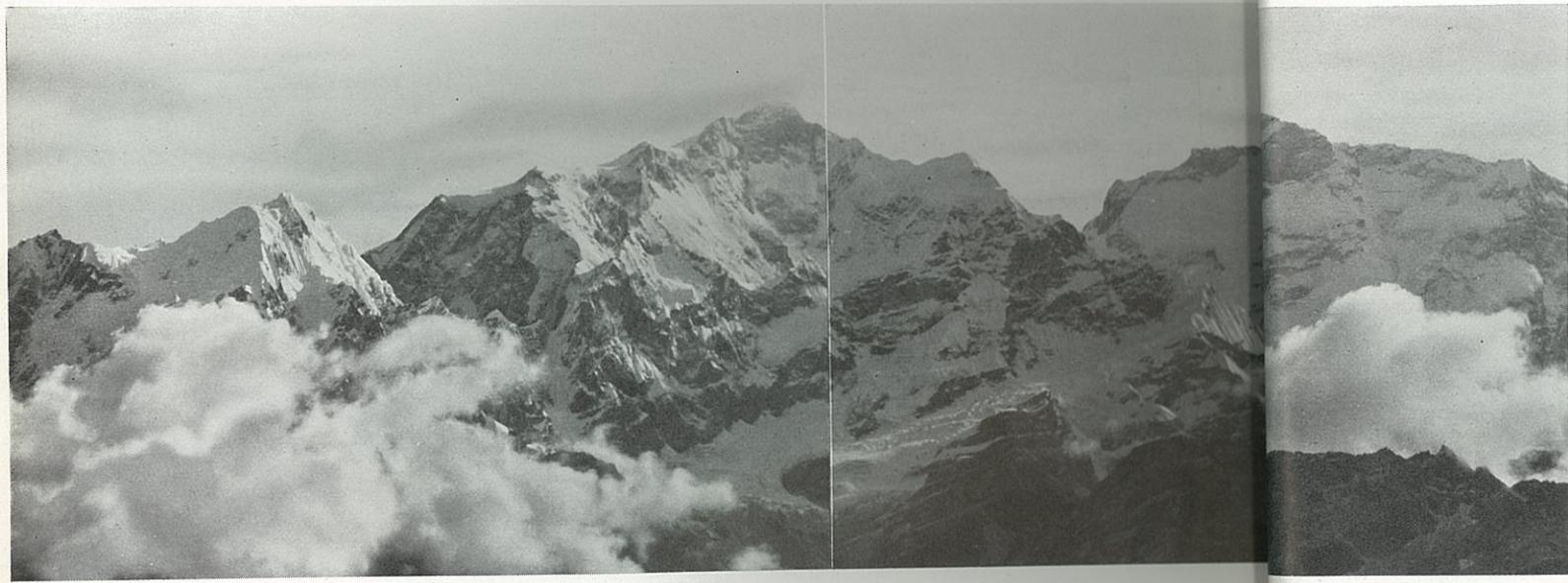
アンナフルナ第4峰下での 左から林 高木 今西 中尾 田口 右は後発した竹節の各隊員



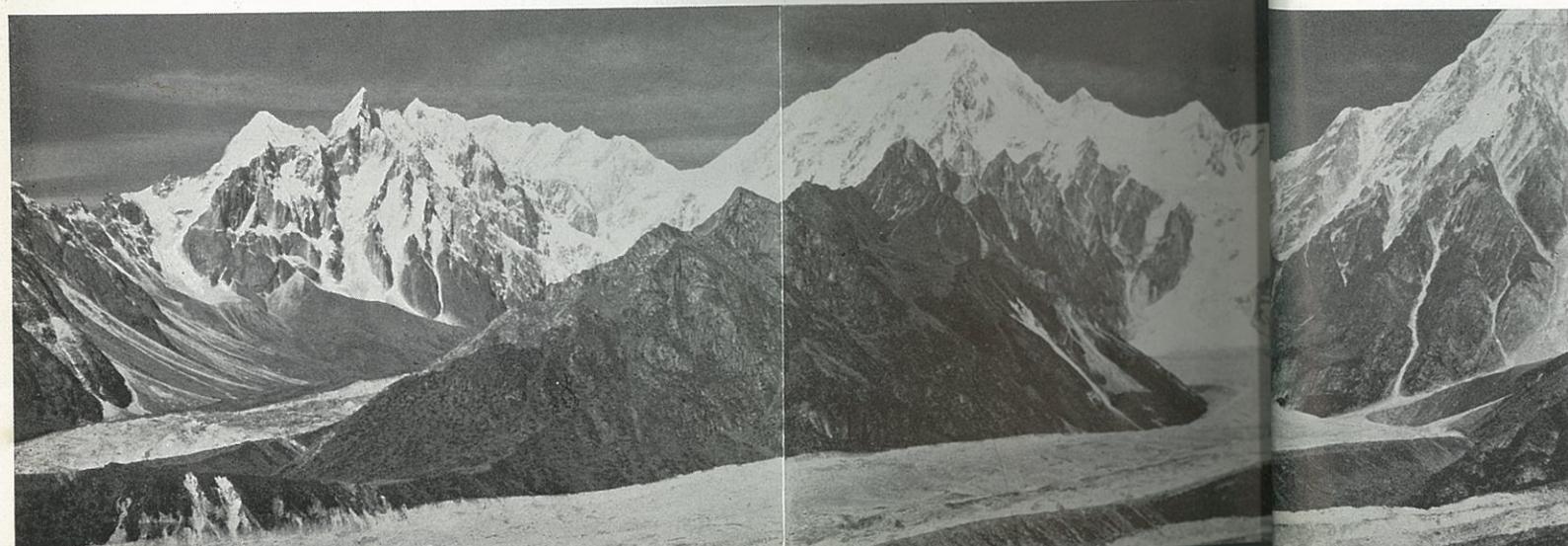
協力してくれたシェルパたち 左からアンノ サルキダーコ ガルツェン バンシー アンツェリン4号

10—ナムン・バンジャンの4300メートル付近から はるかに望むマナスルの西面 東面とは似てもつかない重量感は さすがに8000メートル級のジャイアンツとうなずけるだけある 右はP29

11—ラルキヤ・バンジャンから見たヒムタコーチ奥の山々 この付近では珍しく発達した氷河が3本出ている 左がチェオ・ヒマール 右がヒムルン・ヒマール ともに7000メートル級の山だ



10



11



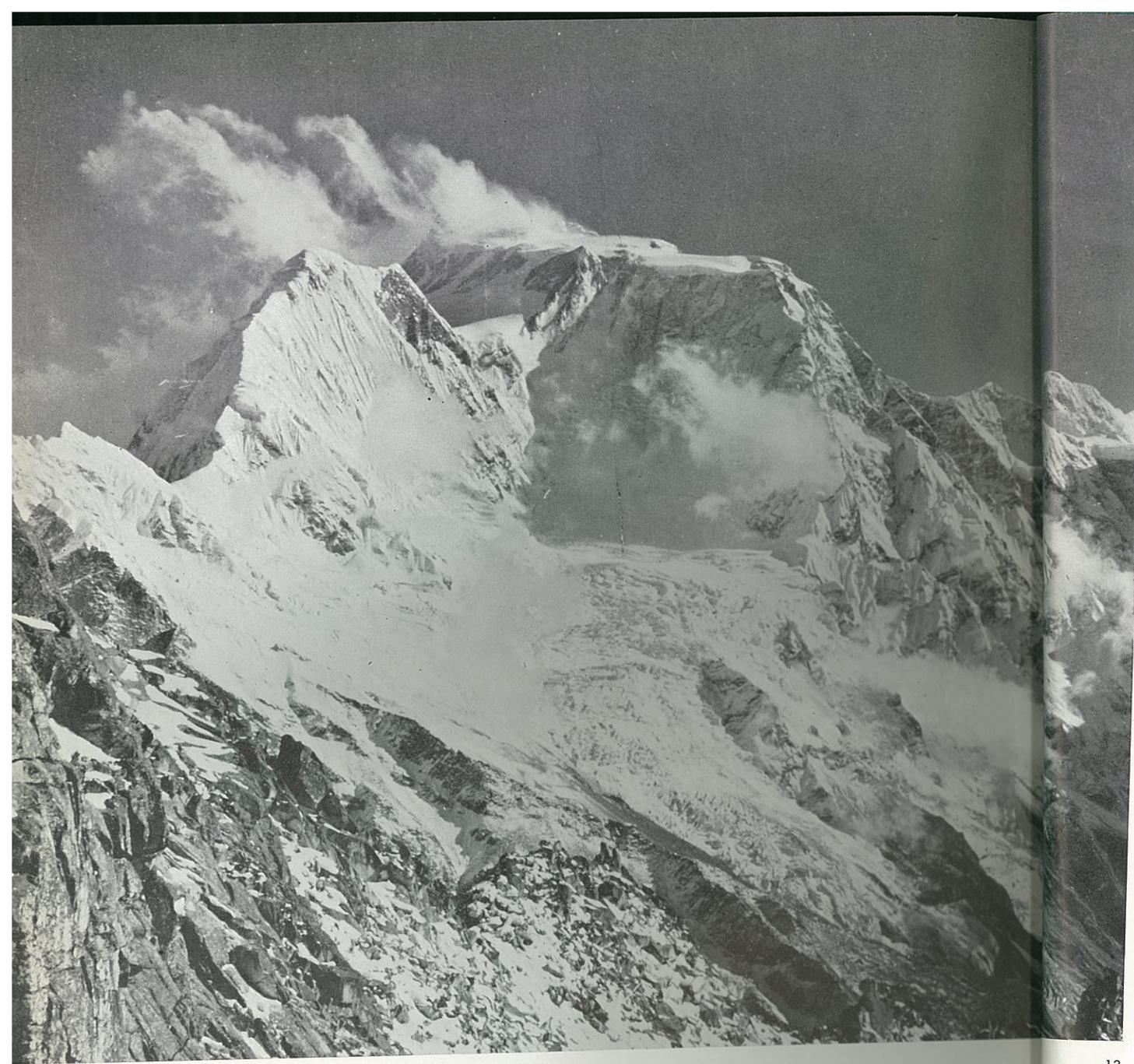
8



9

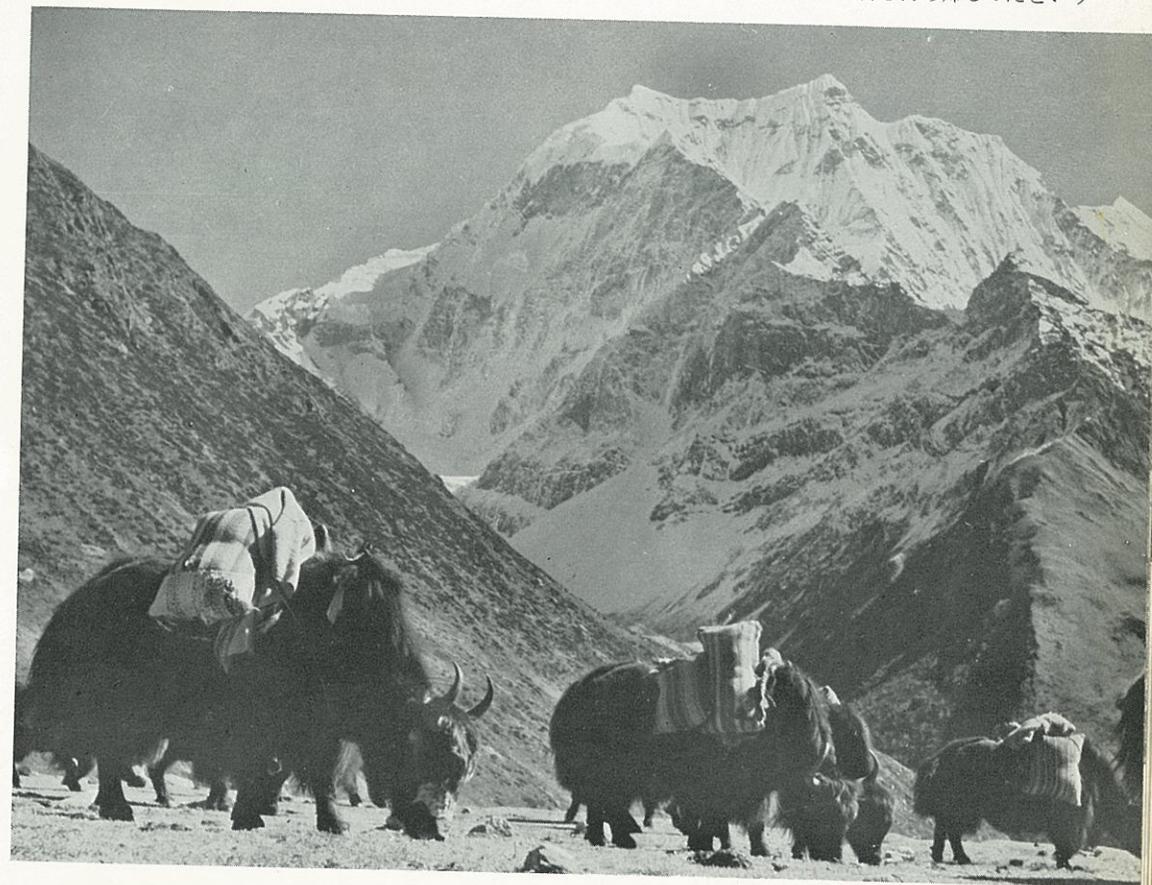
8—ブラガ村はいまちょうど部落民総出の麦打ち最中である アンナプルナ連峰を望む岩壁に ワシの巣のようにはりついたチベット家屋 映画『失われた地平線』の一コマを思い出す

9—チベット部落の出入口にはチョルテンやメンダンがある メンダンには信仰あつい部落民や旅人の寄進になるラマの経文や 絵を刻んだスレート石が並んでいる これは歓喜仏である



ビムタコーチ付近から見た雪煙あがるマナスルの西北面 東面のようなスマートさはなく 非常な重量感に威圧される ヒマラヤのベテランであるティルマンも さすがに手を上げたほどのことはある

13



5230 メートルのラルキヤの峠を越えてきたヤクのキャラバンと道連れになった 平地の穀物をチベットへ運び 岩塩と染料を持ち帰るのだという

12



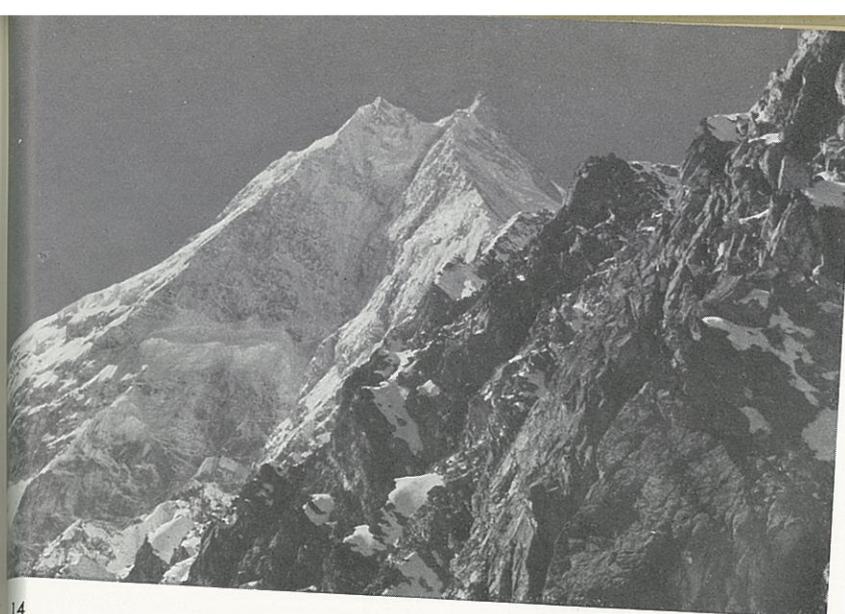
16

カル・タールはヒマルチュリのふもとに静まりかえる美しい湖だ 雪山はスリンギ・ヒマールの峰々である

17



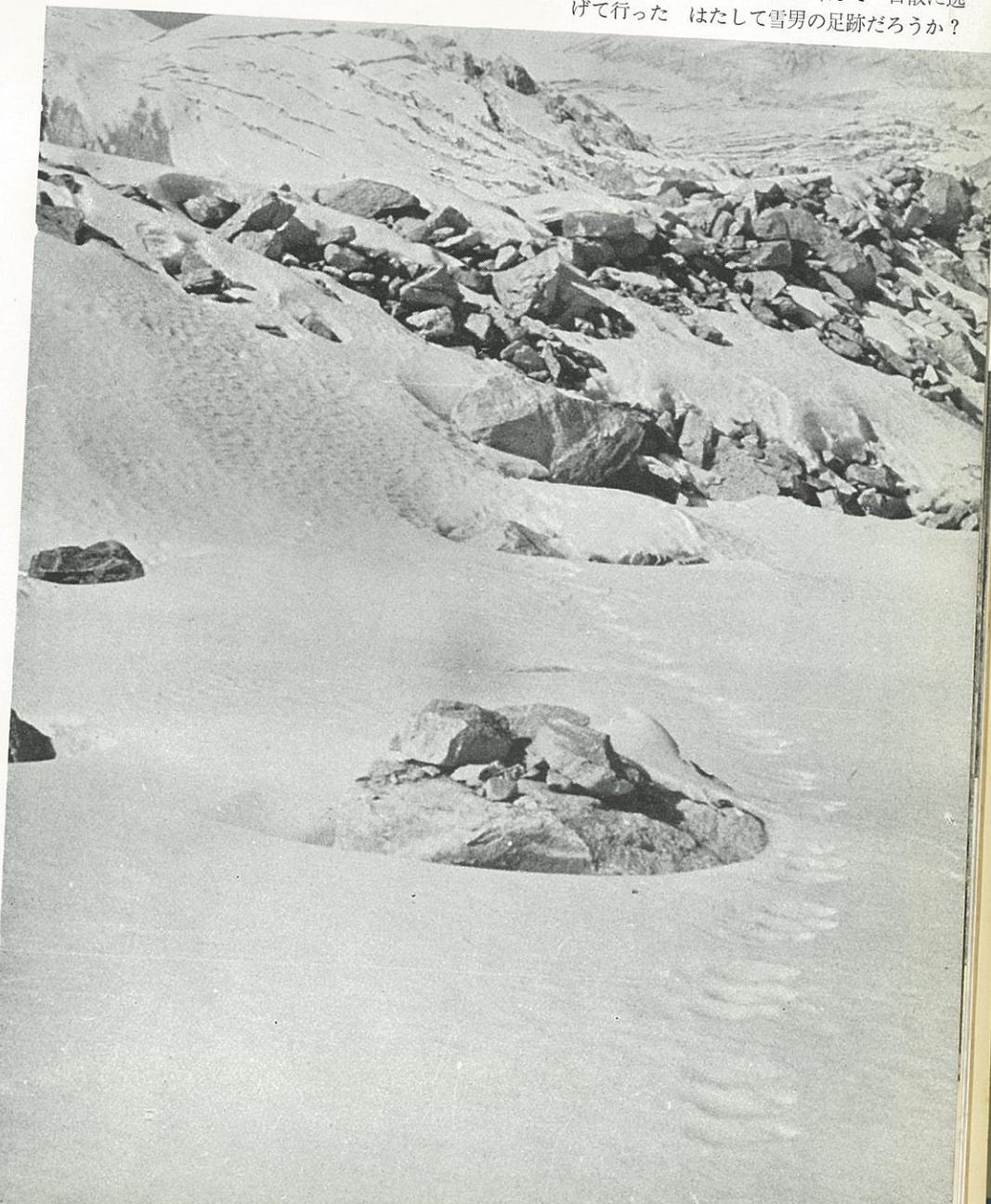
ラルキヤ・マーケットはチベットとネパールの交易場で ブリ・ガンダキの右岸にあたりサマはもう近い 南にヒマルチュリの出尾根が見えてきた



14

東尾根の 5300 メートルの鞍部に立つとマナスルの東南面は さわれば切れるような水晶のはだを現わすかのマンメリーでも脱帽したことであろう 左が主峰で 右がピナクル

マナスル東尾根のモレーンの上に大動物の異様な足跡があった 連れのチベット人シェルバは「イエティだーッ」と叫んで一目散に逃げて行った はたして雪男の足跡だろうか？



15

1953年の登山隊

踏査隊の調査をもとに準備は進められ いよいよ3月下旬 三田幸夫を隊長に 13名の登山隊を処女峰マナスルに送った 4月なかば根拠地をサマに建設 凍った世界目ざしての登高は開始された だが不運にも征頂ならずたがいに再挙を誓いあった しかしこの貴重な体験は今後のヒマラヤ遠征に大きな基礎を作った

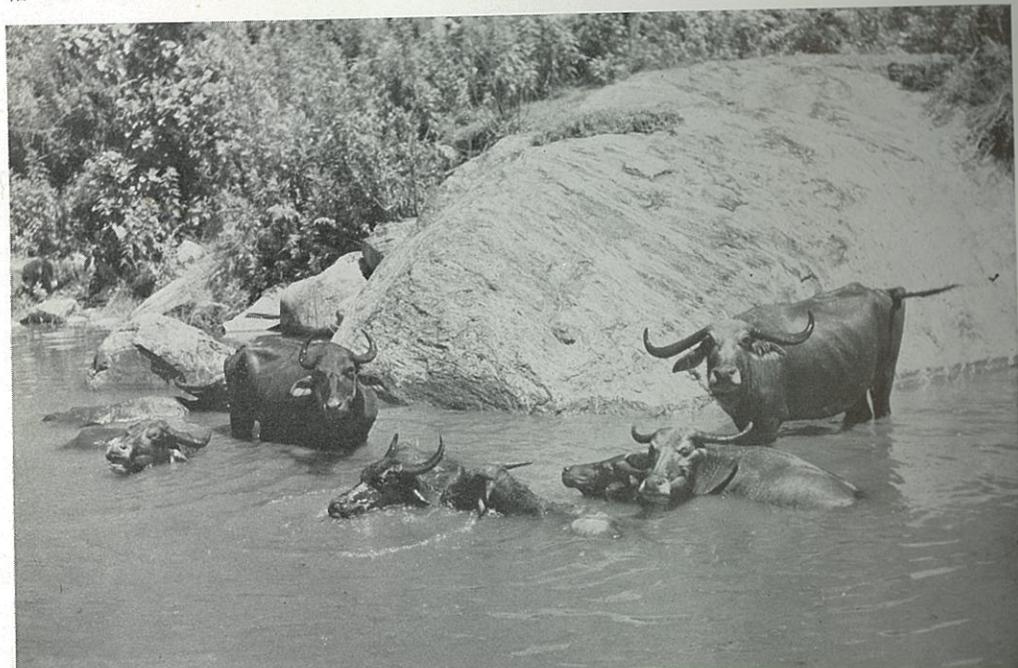


マンズでいっさいの準備を整えた登山隊は シェルバ 人夫300名とともに 3月26-7の両日それぞれマナスルめざして出発した



低地の旅行は40度を越す真夏のような暑さが続く 川さえ見れば裸で飛びこむ田口隊員に ほんものの水牛も顔負けの形

沼沢地帯には 水牛が群をなして水浴している姿が随所に見受けられる





田植えをする娘さん 田植祭りというのがあって この日は娘も盛装して苗を植える



竹細工をするネパール人 しの竹をさいて かごやざるを作る



ネパール女は働き者だ 田もたがやせば人夫仕事もやる 黒い衣裳に赤い首飾りをつけた彼女らは 山を越え谷を渡って行商にも行く

ネパールの子供 牛を追いやとたわむれる かれらは純朴そのものの愛らしい表情をしている

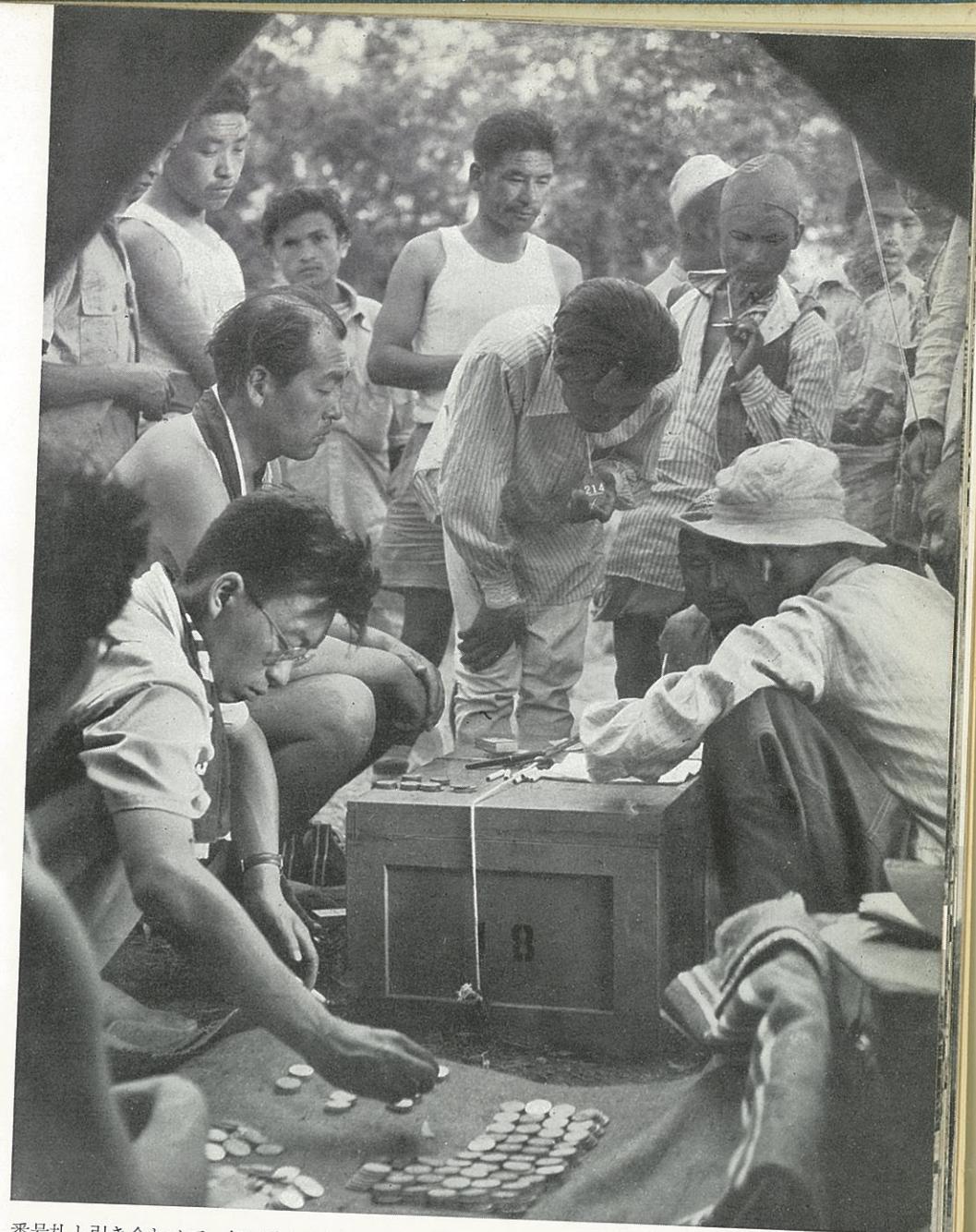


建築材でもあろうか 80キロもあると思われる木材をかついで山道をおりて来る娘さん

貧しい農家の軒先 土間に裸ですわりこむ女の子 揺りかごをゆすらかみさんの腹には もう次の子が宿っている



ブリ・ガンダキの溪谷
にはいと 間もなく
険路 悪路がうち続く



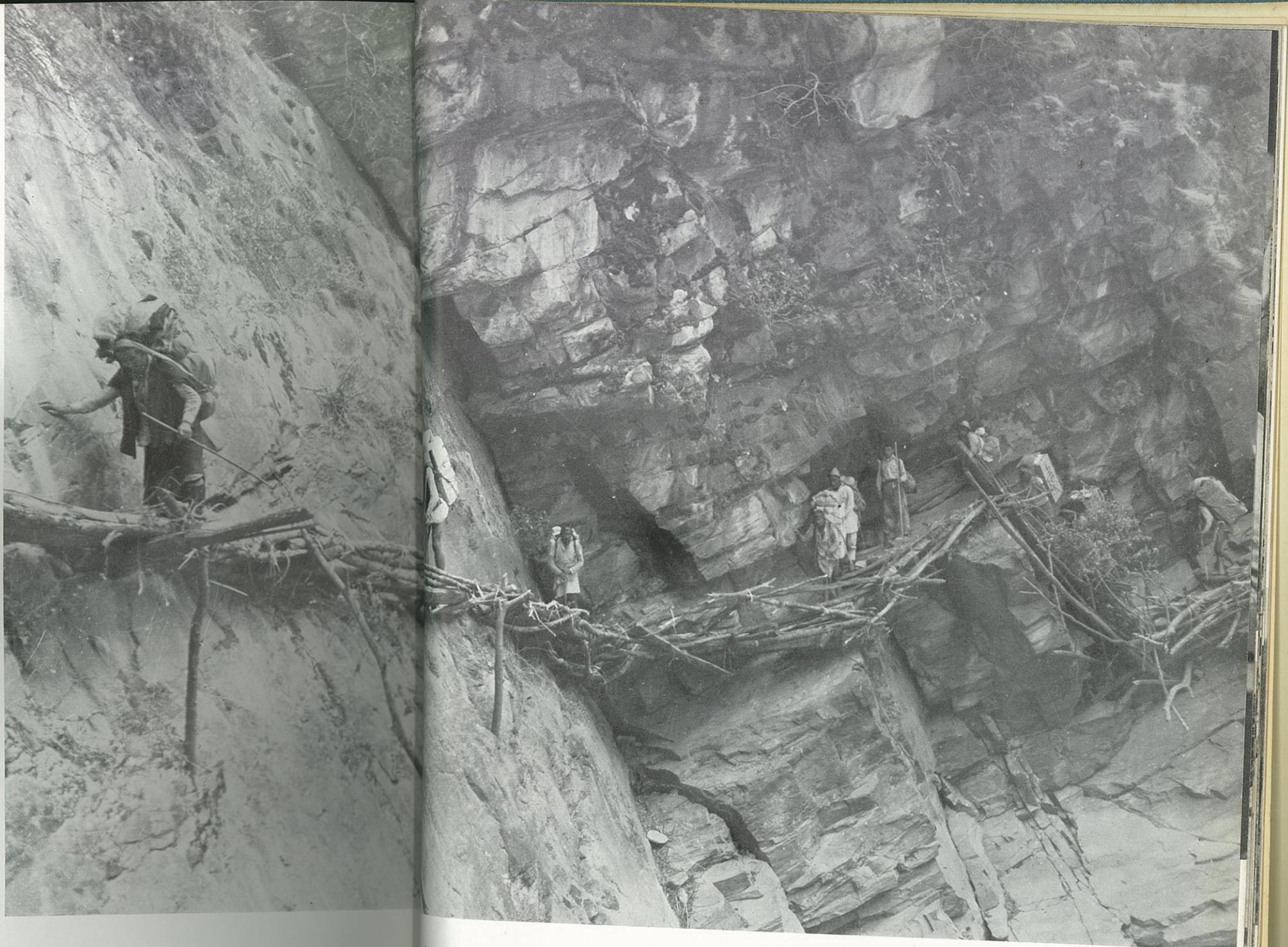
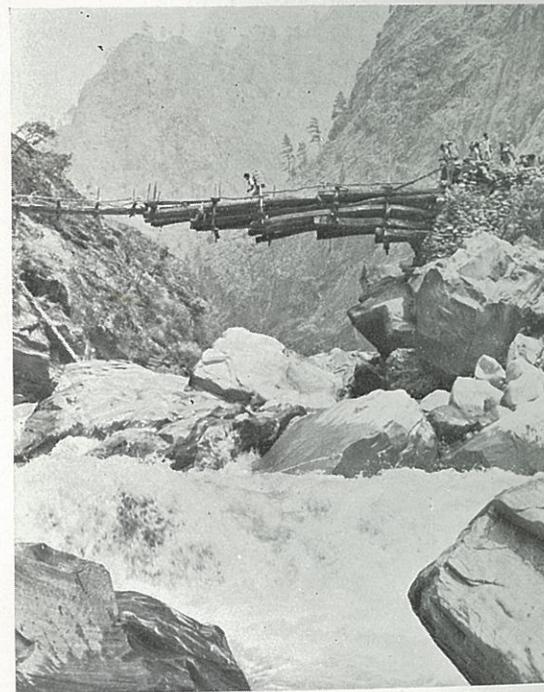
27

番号札と引き合わせて 何日分の賃金が慰勞のタバコととも
に人夫たちに与えられる 銀貨を数えているのが村木隊員



28

マンゴーの大木にか
こかれたトリブ...



カリ・ガンダキの難路

足のすくむような地獄道 岩壁をえぐってかけられた棧橋を 重い荷を負った人夫らが渡るときは 念仏を唱えながらはうようにして渡る このブリ・ガンダキの溪谷にかけられた素朴な橋は

チベット部落へ入る



リダダ部落にはいると 間近に雪をかむった岩山が見えてくる もうこのあたりはほとんどチベット人ばかりが住んでいる

35

36



ニヤック・テント場の周囲には大きな松林があり この五つ葉の松かさのばかでかいのに驚かされる

1日先行する隊員と 何日ぶりで相会し食卓を囲んで
だんらんするニヤック・テント場のひととき (4月8日)



33

34

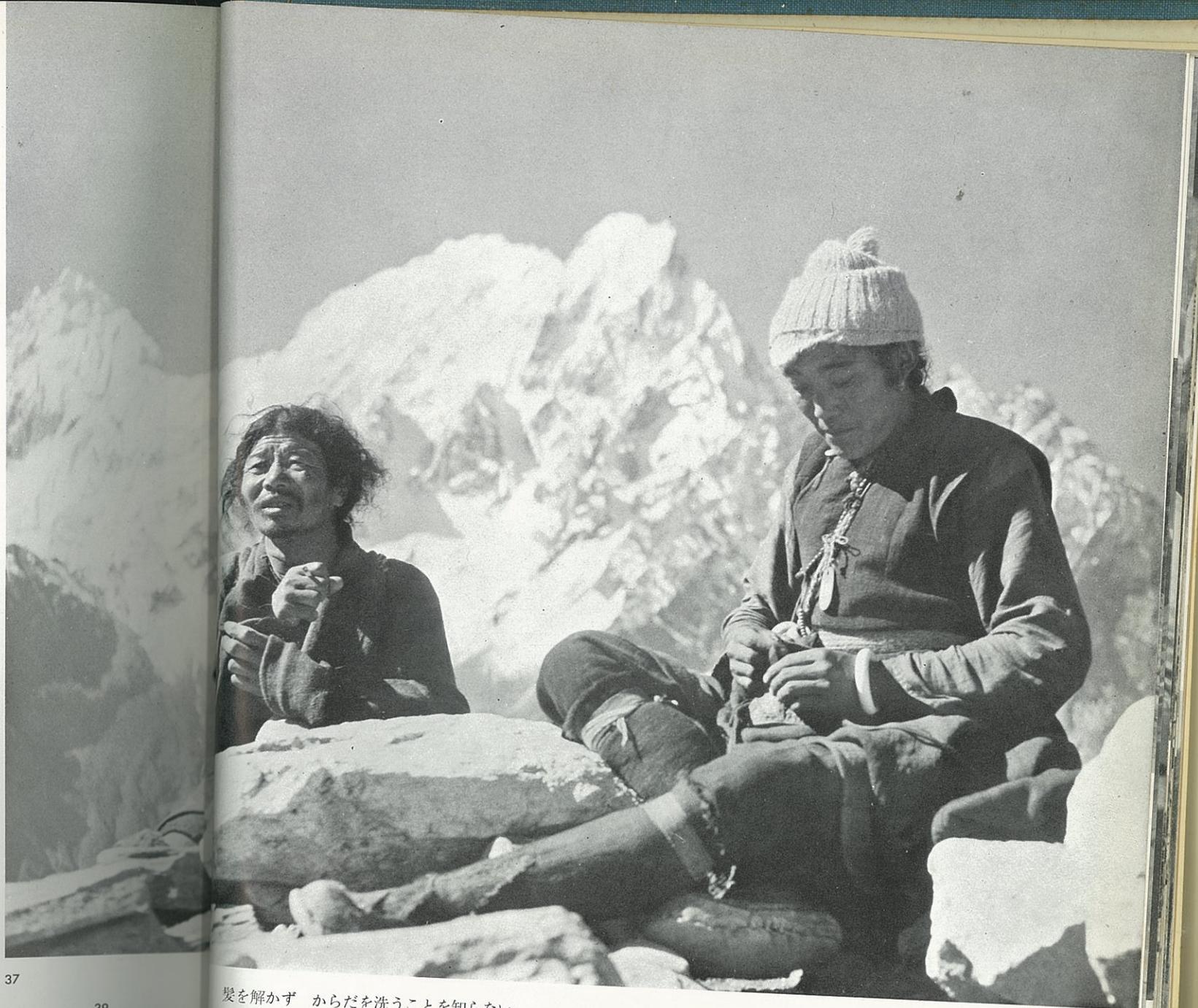


バンシンの部落 右上にガネ
シュ・ヒマールの一角が見える

白い峰を背にしたチベット人 ヒマラヤはかれらの故郷でもあるかのようだ

羊糸を紡ぐチベットのラマ尼

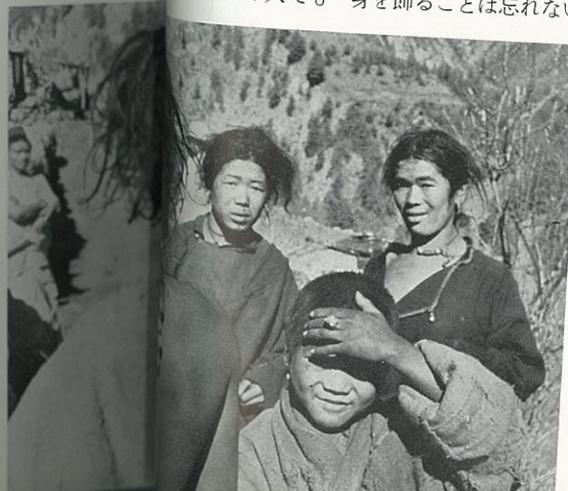
40



37

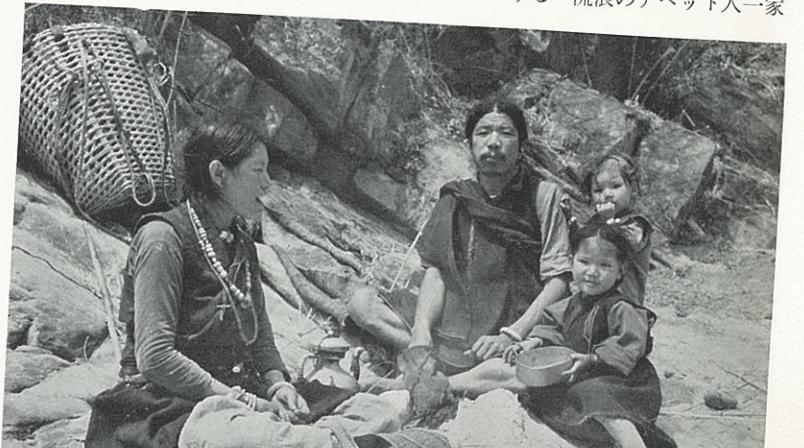
髪を解かず からだを洗うことを知らない
チベット人でも 身を飾ることは忘れない

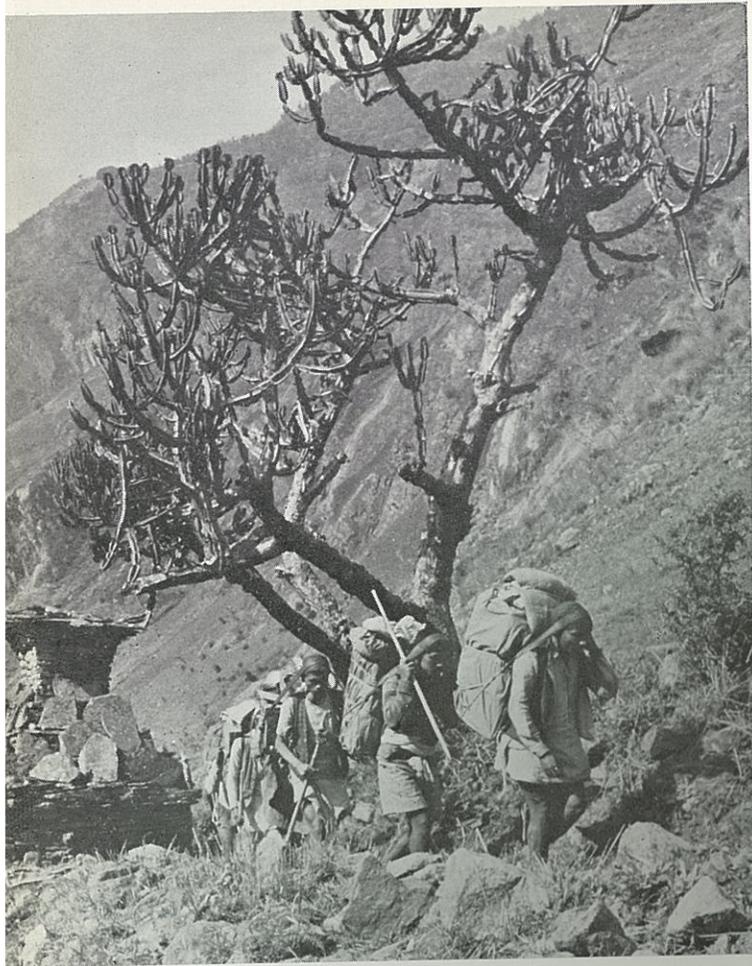
39



38

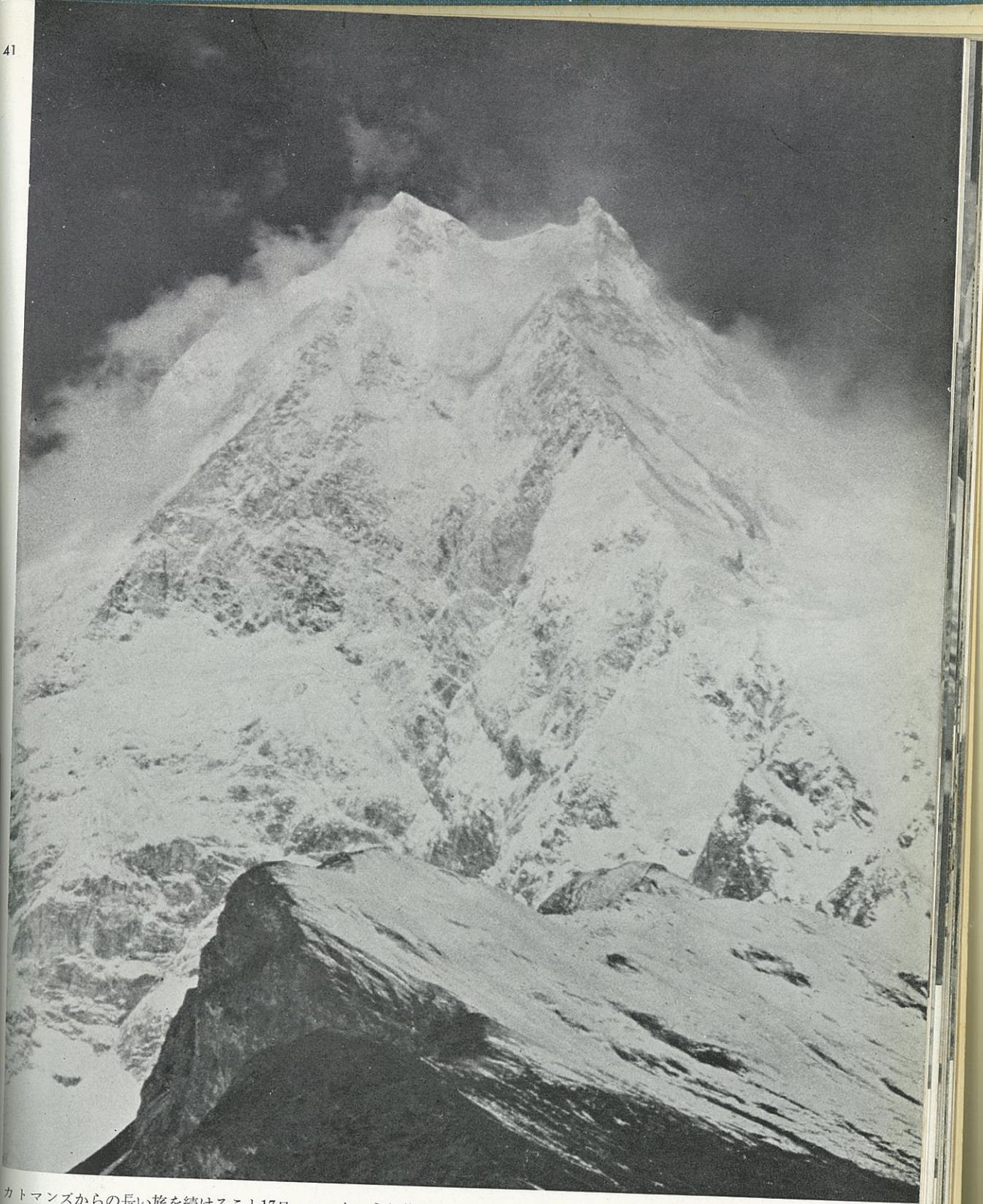
ヒマラヤの峠を越えて行き来
する 流浪のチベット人一家





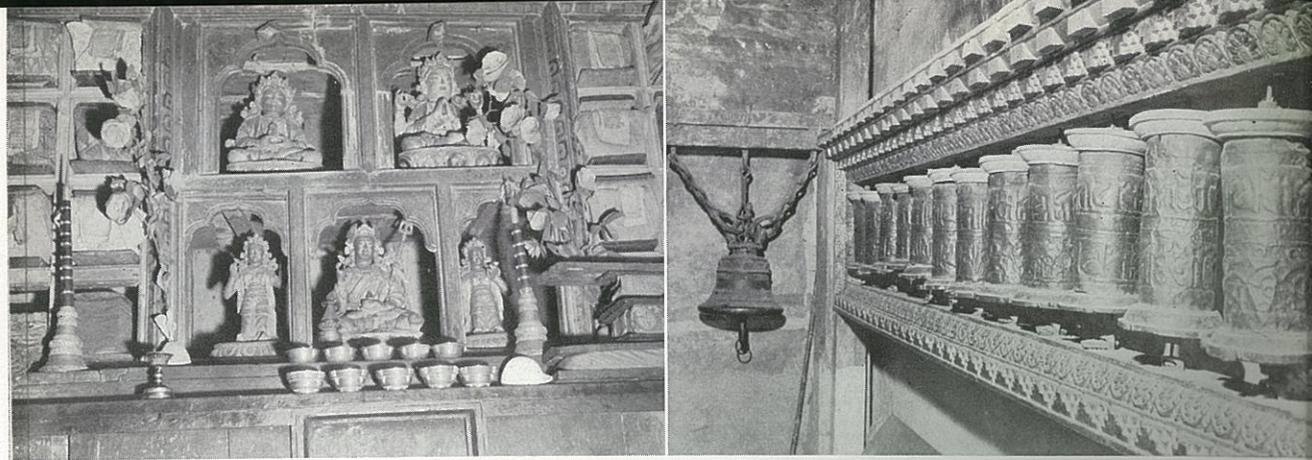
ヒマラヤの山すそ近くにも 南の国を思わせるような ユーホルビアの木立があった

ローの部落から見たマナスルの全貌 部落の入口には チョルテンと呼ばれるラマ塔があって 旅人たちは左側をとおり



カトマンズからの長い旅を続けること17日 ローという部落ではじめてマナスルの姿に接することができた 東側から見たマナスルは左に頂上 右にピナクルと 耳を立てたように鋭い尖峰を虚空に突き上げている (ローの丘の上から250ミリ望遠レンズで撮影)





あるチベット部落で 村長の家に仏堂があった 入口には経文を納めたマニがならび これを一つずつまわして中へはいると りっぱな仏だんに いろいろな仏像が飾られてある



スレート石を積み重ねて 城塞のように作られるチベット人の家 二階づくりの上は住まいで 下は家畜小屋になっている 中で若い夫婦がトウモロコシをひいて粉を作っていた



サマ部落入口のチョルテン ラマ教を信ずるチベット人らは信仰のならわしとして 至るところに経文や仏像を刻んだ石をうず高く積み重ねて塔を建てる

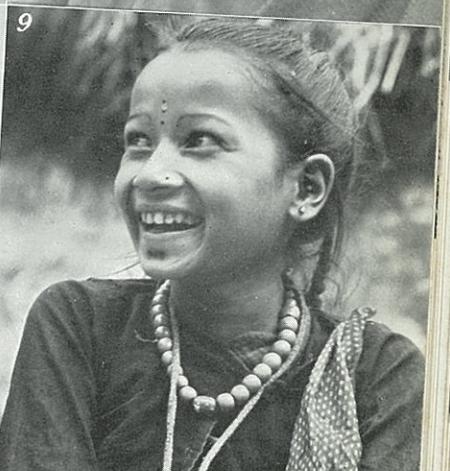
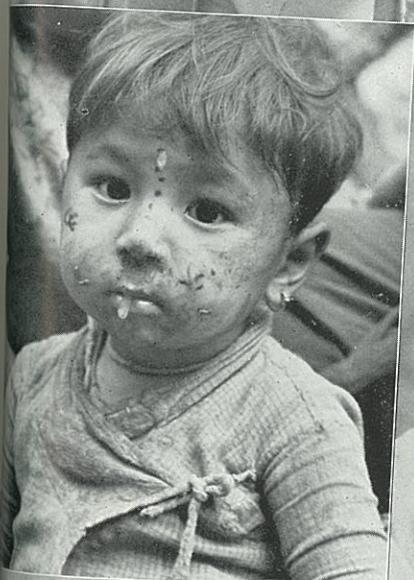
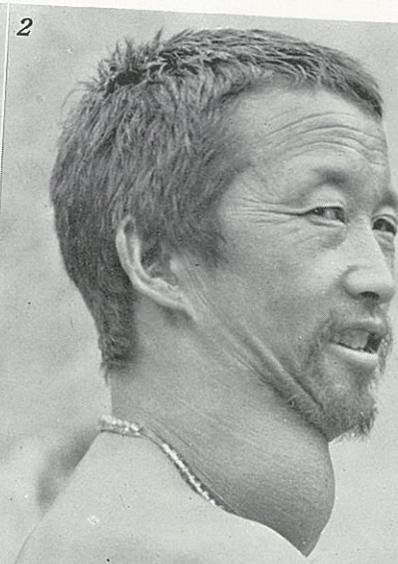
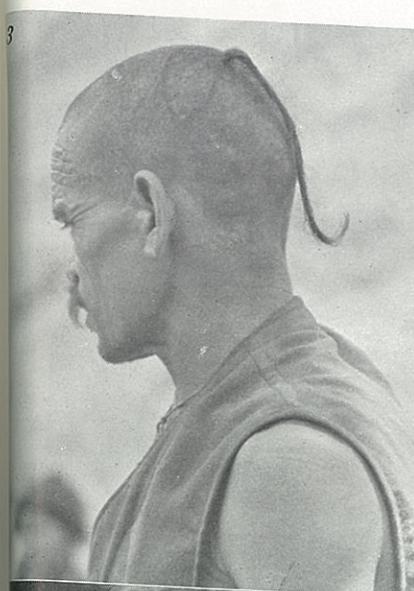


ラマ教徒は死ぬとほねを粉にしてこれにどろをまぜてツァツァというダンゴを作り ラマ寺に納める



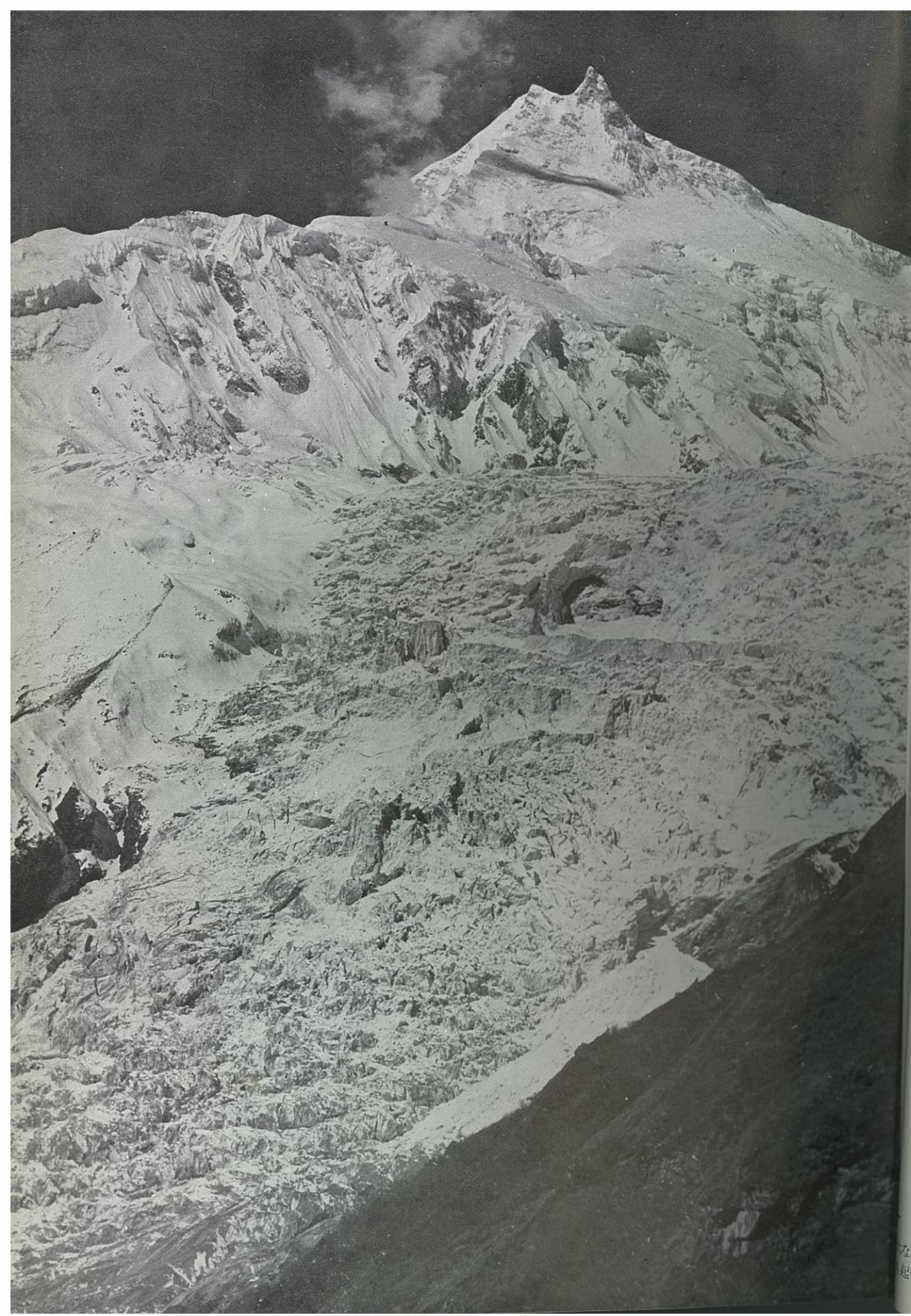
土民の顔

48



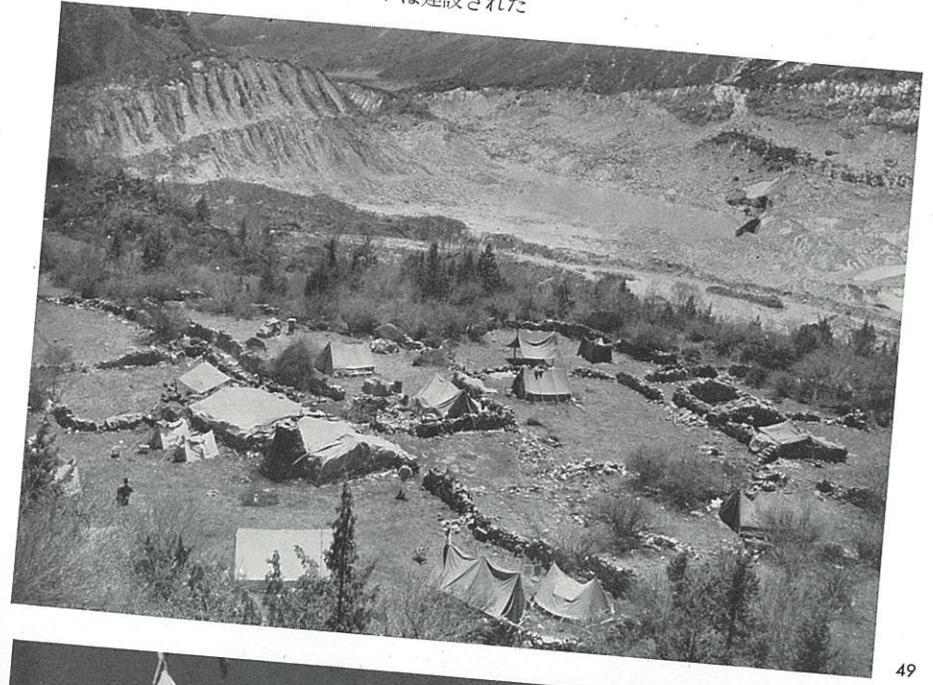
13

ネパール住民は大体において蒙古型と北インド型の顔をしている ②⑤⑥⑩などの蒙古型はヒマラヤ主嶺の北側に多く ⑦⑧⑨⑪⑫などの北インド型は主嶺以南に多い ①③④はインドの原住民ドラヴィタの血が強い ⑦⑧⑨の額や鼻につけた印はティカと呼ばれるインド教の各宗派を現わすもの ③の頭にある一握りの長い髪はインド教徒のつけるチョティである ⑩ブリ・ガンダキ溪谷に住む牛飼いのグルン族の女たち



われらが基地

マナスル氷河の絶端に近い標高3850メートルの地点に われわれのベース・キャンプは建設された



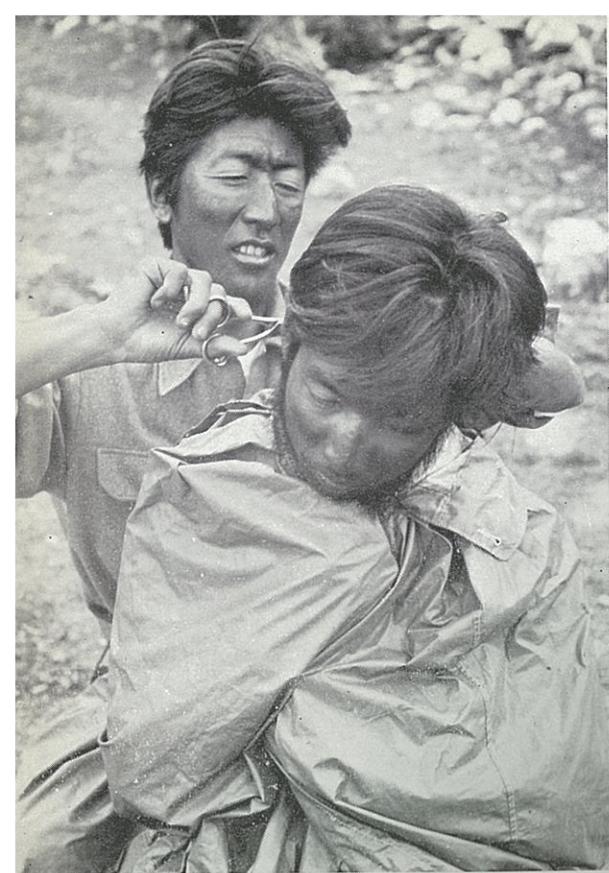
49



マナスル氷河は 大きな口をあき 幾重起伏して マナスルのふもとに伸びていく

日本隊を象徴する日の丸

ベース・キャンプの一日



休養のひととき 山田隊員の髪をかりとる加藤喜一郎隊員

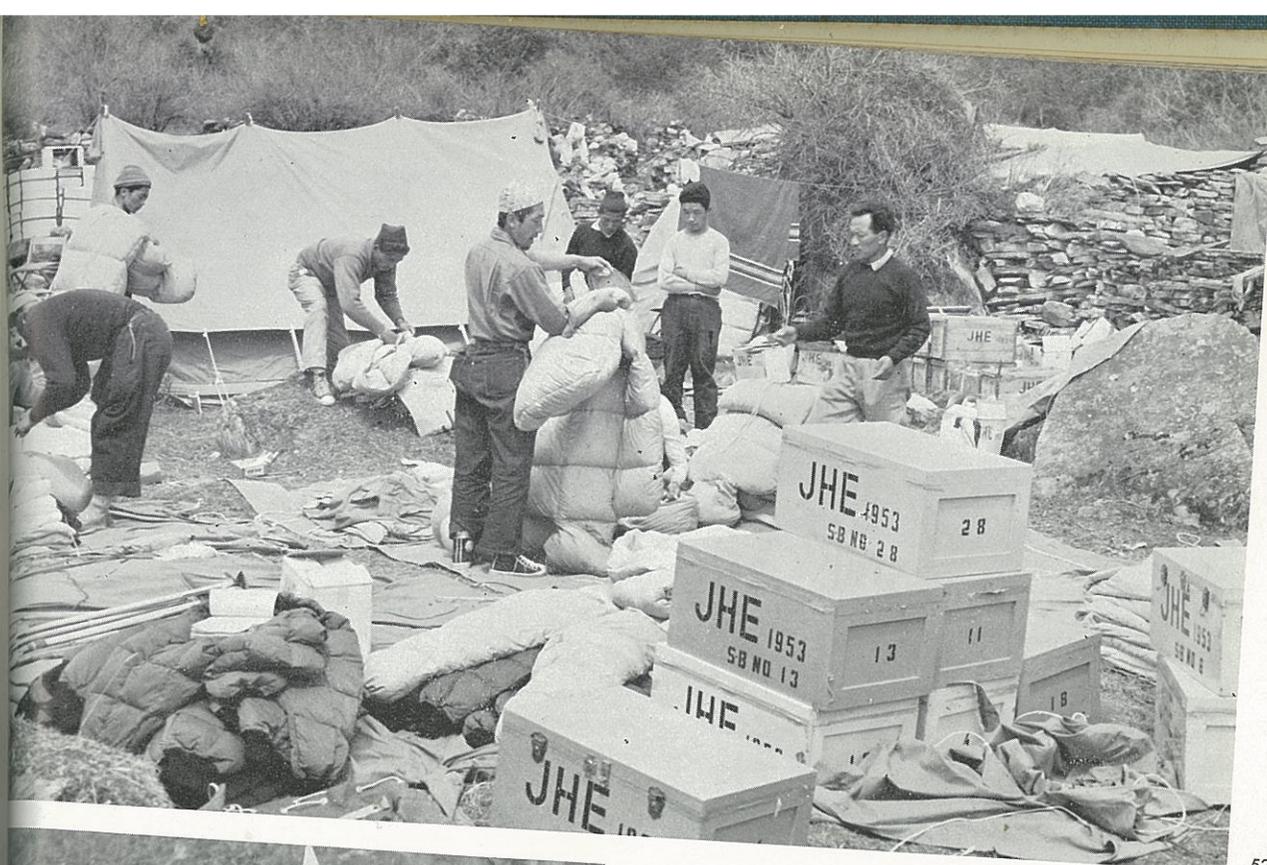


56 テント村の一隅につくられたむし風呂 焼石に水をかけるだけの簡単な仕掛だが 効果は満点



57 野天の夕食 風変りなヤク肉の石焼きで 16キロもの肉も隊員の食欲にあってはペロリ平げる

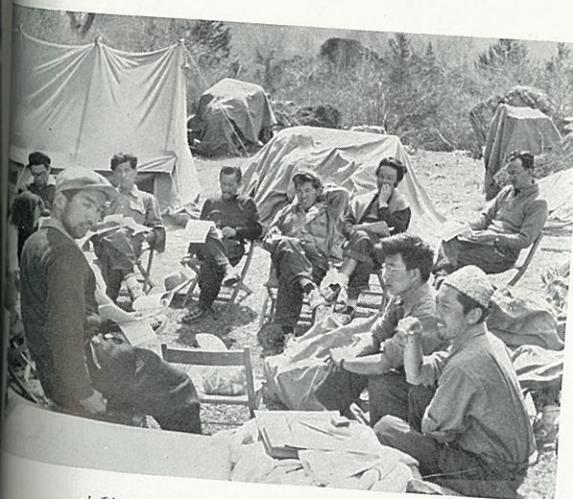
たき火を囲んでシェルパの踊りに興ずるいこいのひととき



キャンプ建設が終ると 早速装具や食糧の整理 点検が始められた

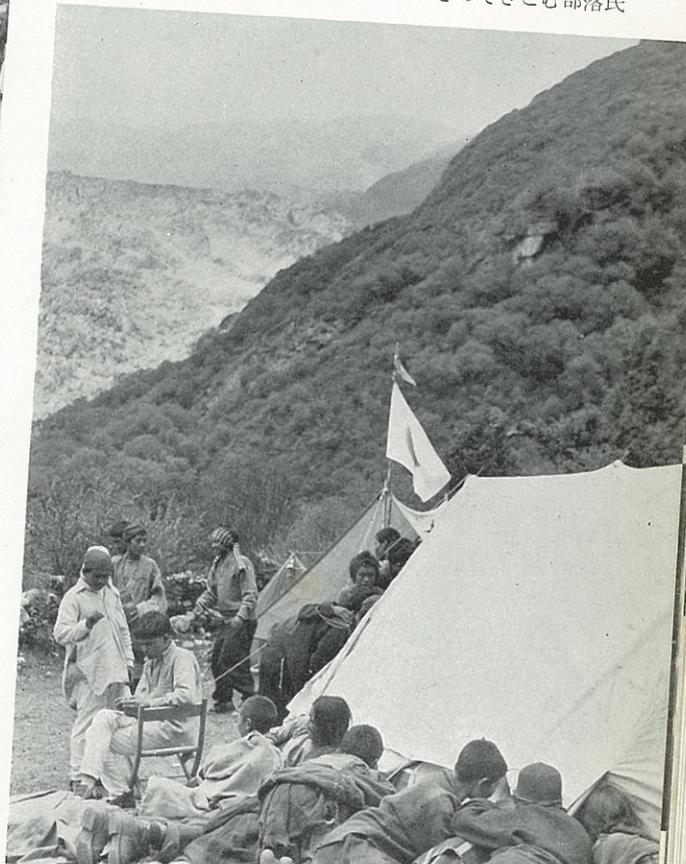


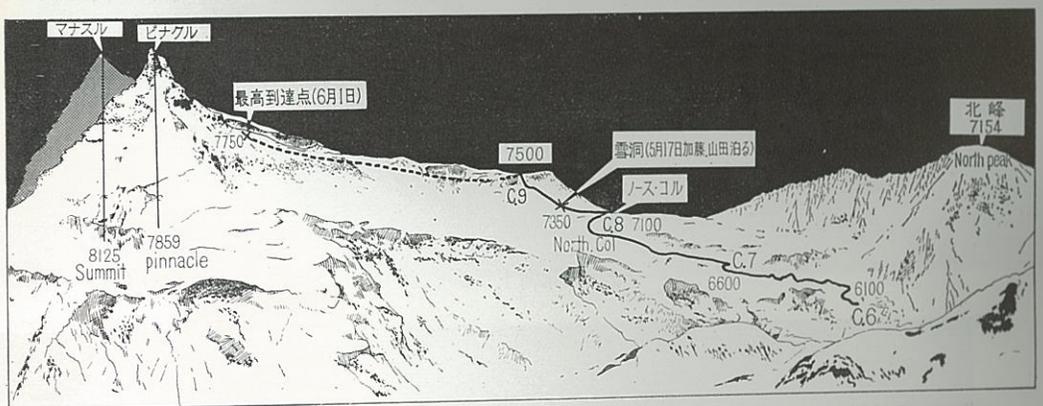
ひと仕事終えて ベース・キャンプに勢揃いしたオール・メンバー



山積された食糧を前に山田食糧係からレーションの説明を聞く隊員

携帯ラジオの音に奇異の目をみはって テントをのぞきこむ部落民

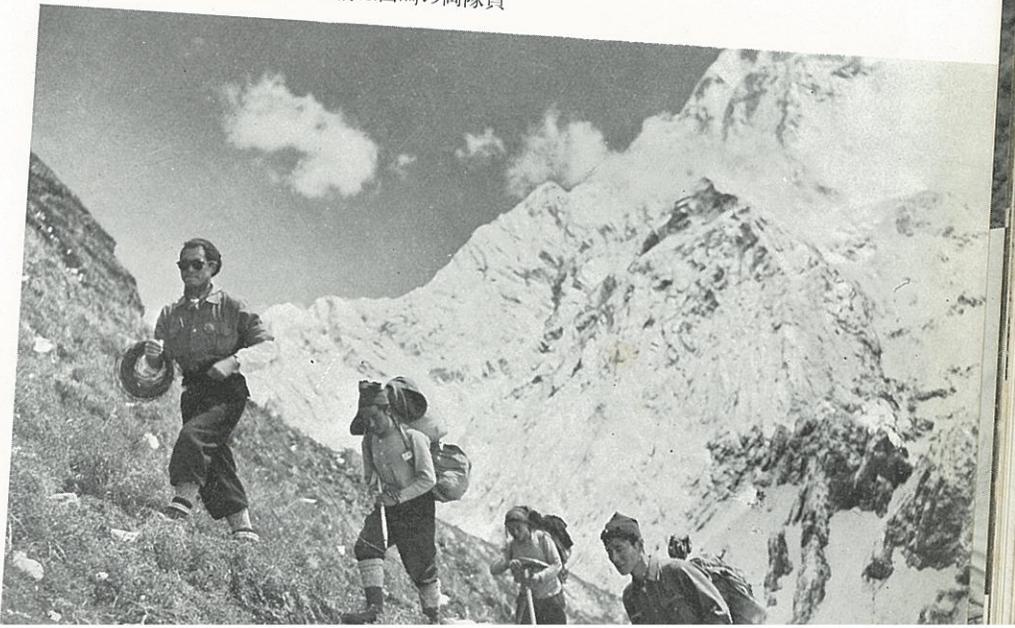




60

ベース・キャンプ後方4000メートルの高地から見たマナスル北東面

前進キャンプの建設と並行して 電話線の架設が行われる 先頭は石坂 手前は山崎の両隊員



61

62



4月21日 高度4600メートルに第1キャンプが建設され いよいよマナスルの山はだにはいりこんだ



午後の斜陽を浴び 荘厳な輝きを見せるマナスル

隊員といっしょにカトマンズからついて来た赤犬は「ロン」と名づけられ 皆からかわいがられていたが とうとう第4キャンプまで上がって来た

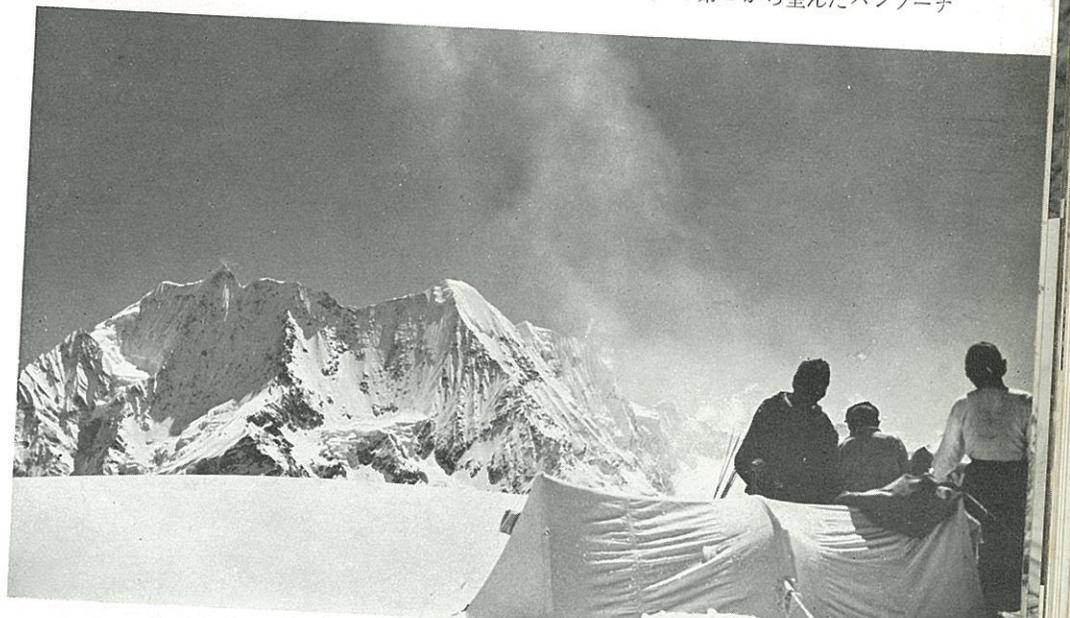


67



66

マナスル氷河上 5000メートルの第2から望んだバンブーチ



65

63

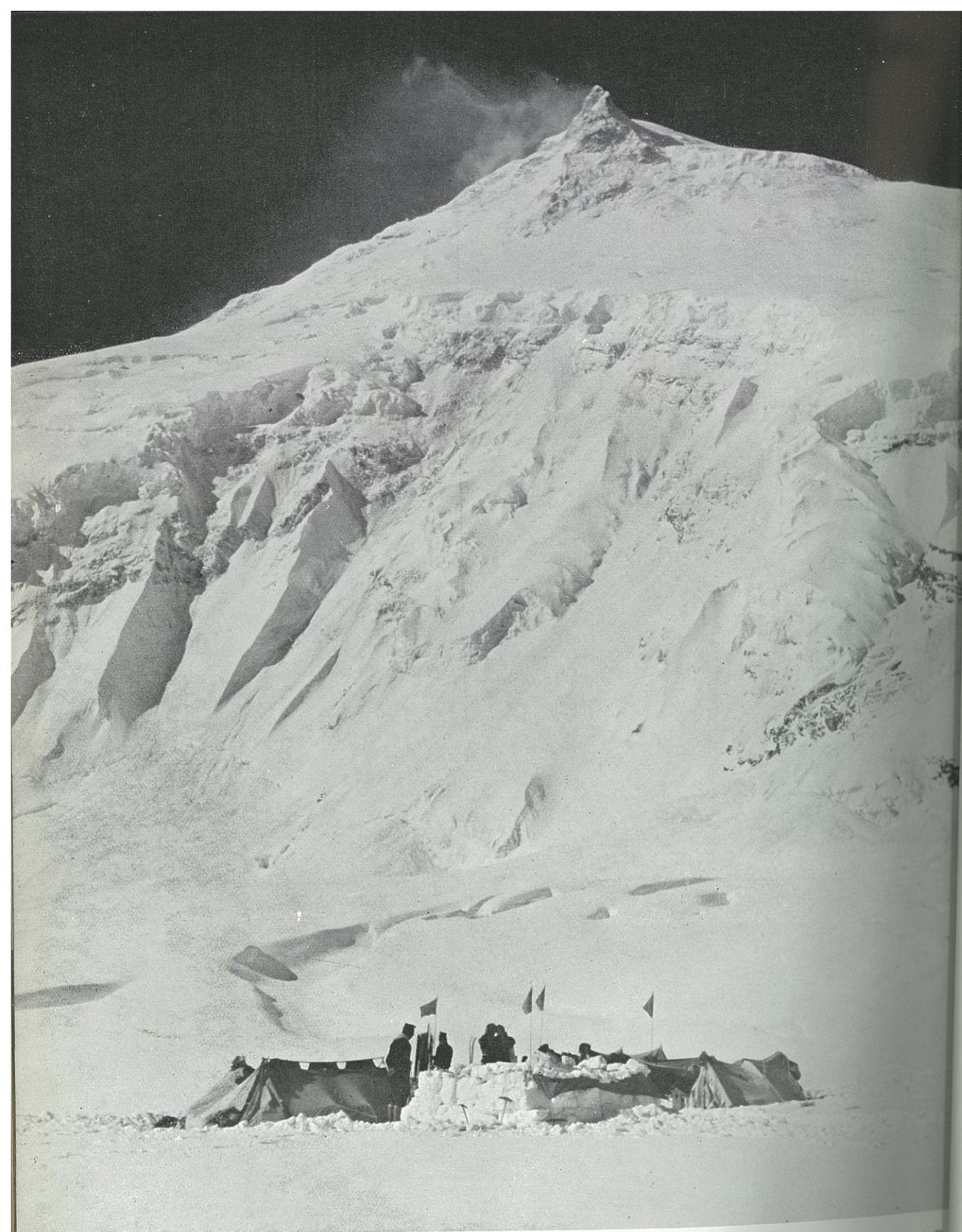


5300メートル付近の氷河上を スキーでいさつに向かう隊員

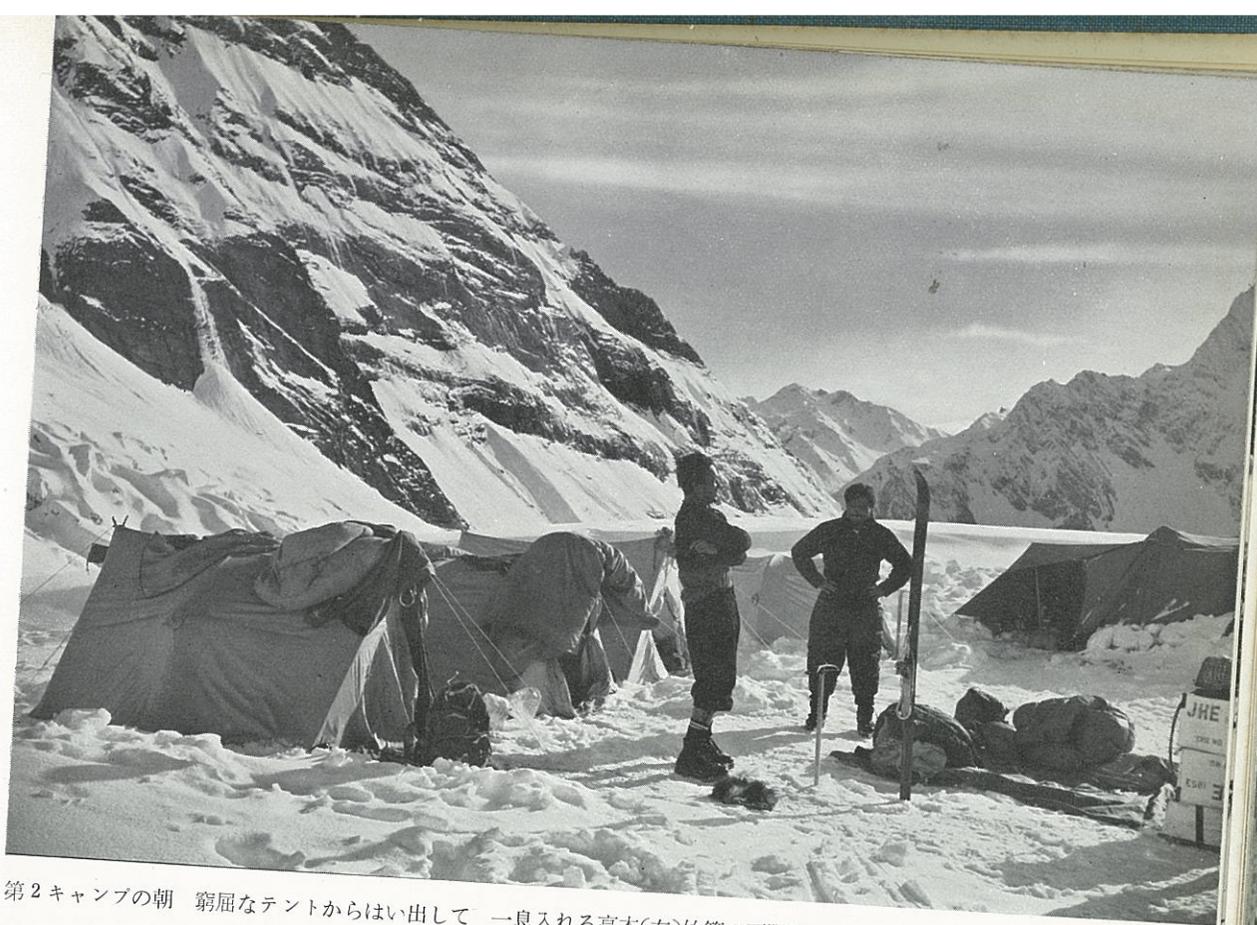
64



シェルバは毎日のように装具や食糧の荷上げに奮闘してくれた

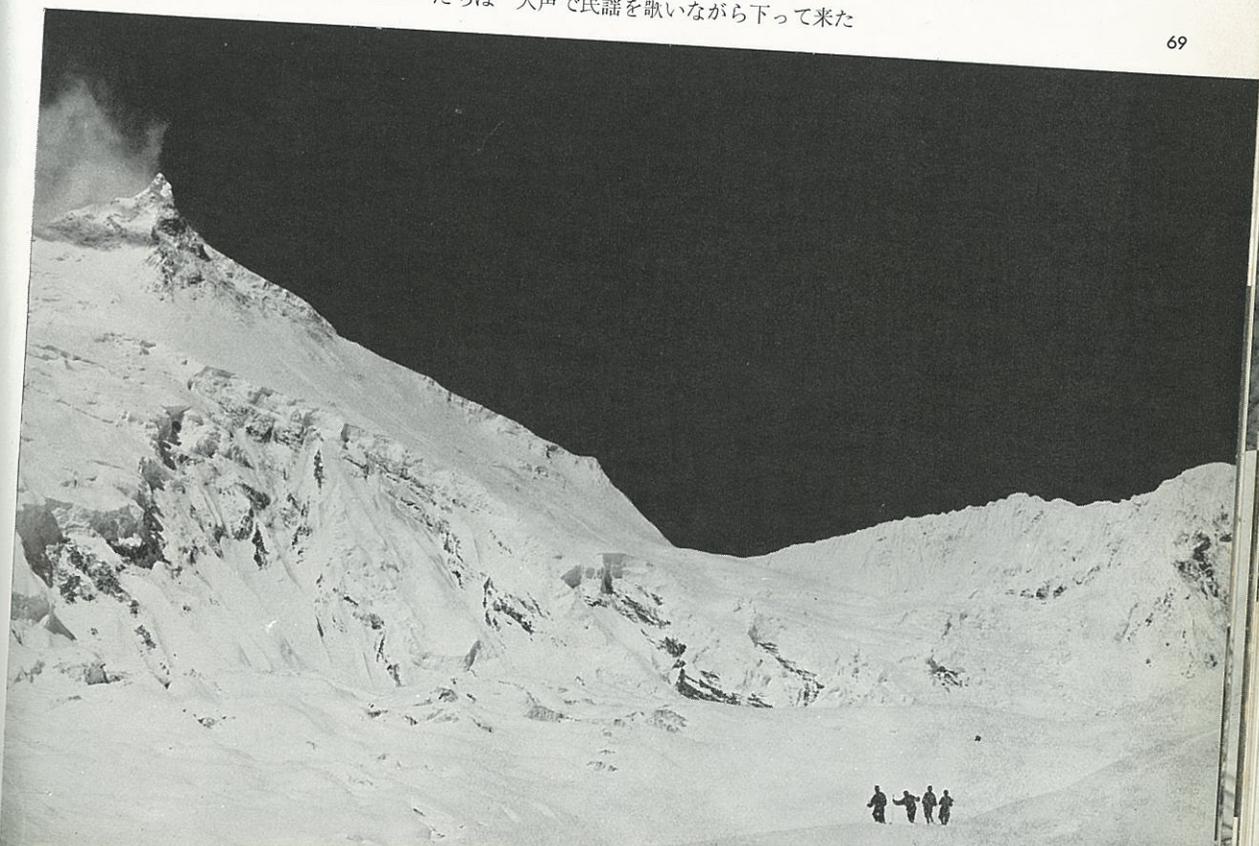


頂上攻撃の前進基地ともいべき第4キャンプは ナイケ・コルと呼ばれる5600メートルの雪原上に建設された ここから見るマナスルの北面は のしかかるように眼前に迫ってくる



第2キャンプの朝 窮屈なテントからはい出して 一息入れる高木(左)竹節の両隊員

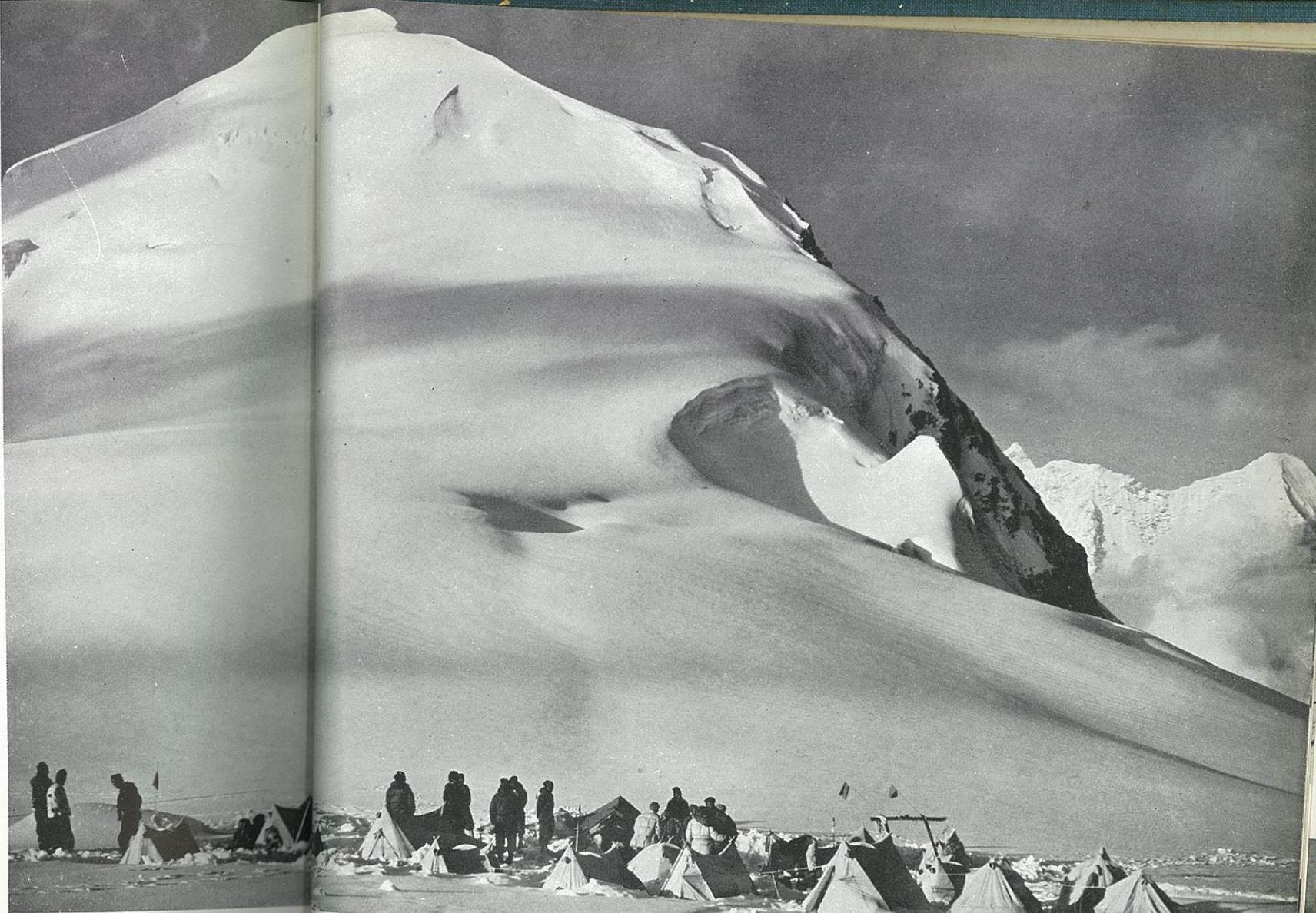
朝早く荷上げのために第4からシェルパたちは 大声で民謡を歌いながら下って来た



第4キャンプの東側には ナイケ (6700メートル) の白峰が美しい曲線を描いている

5600メートルの第4キャンプから東方を望めば ガネシュ・ヒマール山群が手にとるようだ (上の写真) 中央のピラミッド型の峰はガネシュ第1峰 その右が第2峰=250ミリ望遠レンズで撮影 下の写真に見える左の峰はスリング・ヒマール

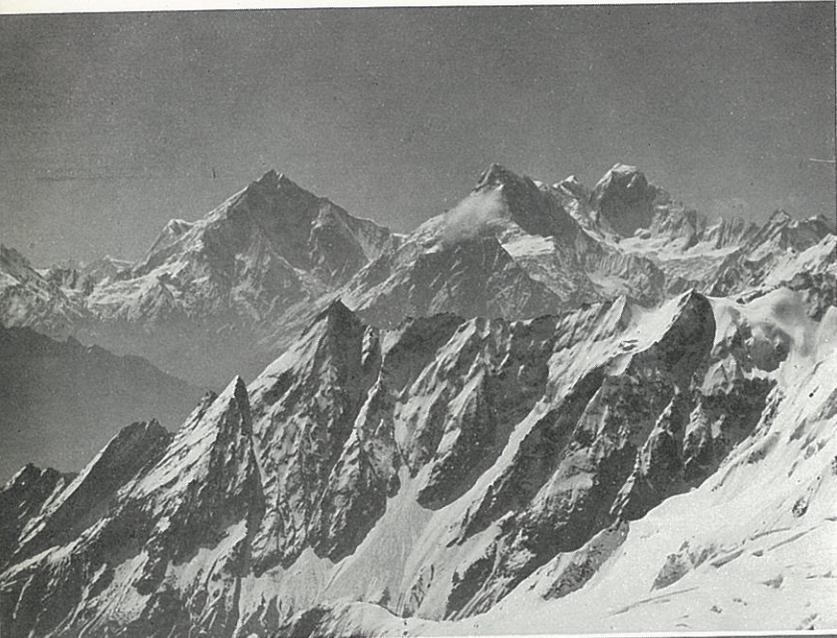
74



71

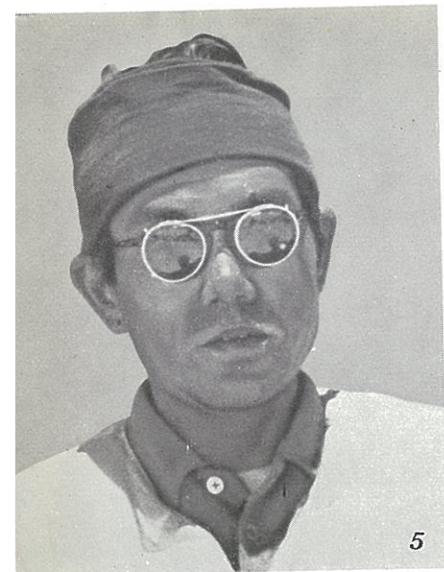
採血検査のため村木隊員 (右) の耳から血液をとる山崎隊員

第4キャンプへ届けられた毎日新聞で マナスルの写真の説明を竹節隊員 (中央) から聞いて感心しているシェルパたち



73

72



5

辰沼広吉隊員



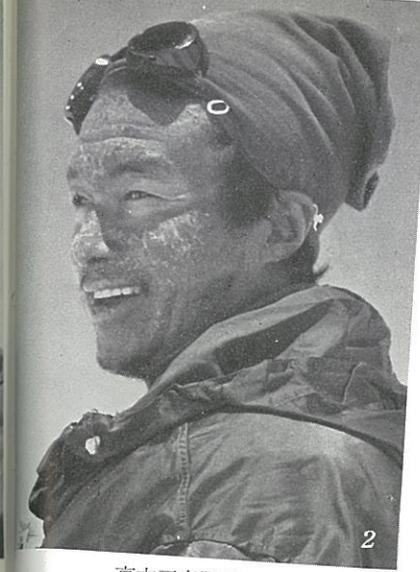
4

加藤泰安隊員



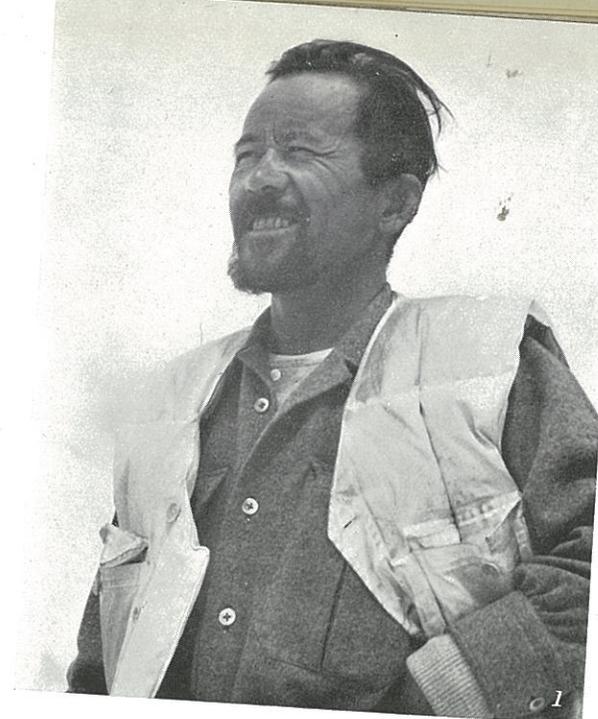
3

田口二郎隊員



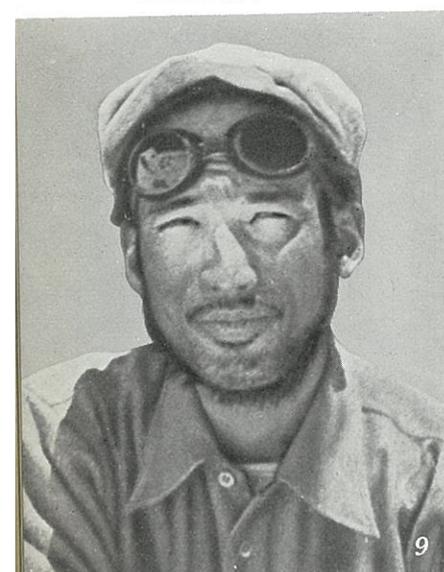
2

高木正孝隊員



1

三田幸夫隊長



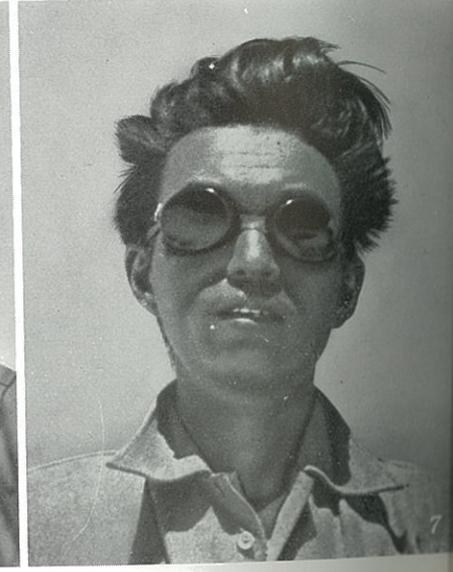
9

山田二郎隊員



8

加藤喜一郎隊員



7

村木潤次郎隊員



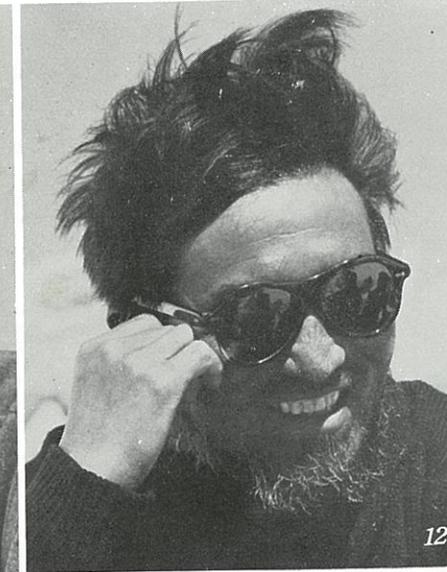
6

村山雅美隊員



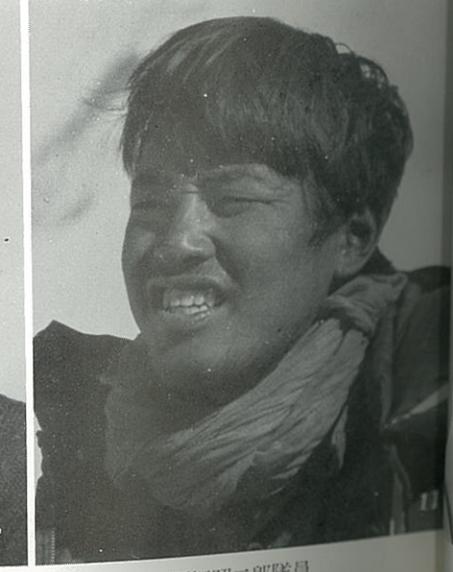
13

依田孝喜隊員



12

竹節作太隊員



11

石坂昭二郎隊員



10

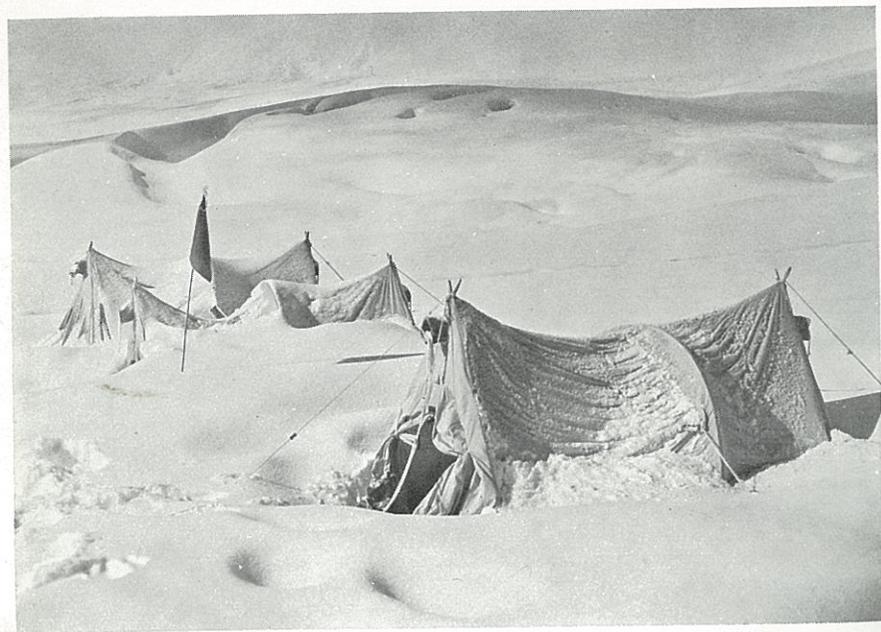
山崎英雄隊員

登山隊の顔

75



第4キャンプに集まった全隊員



77

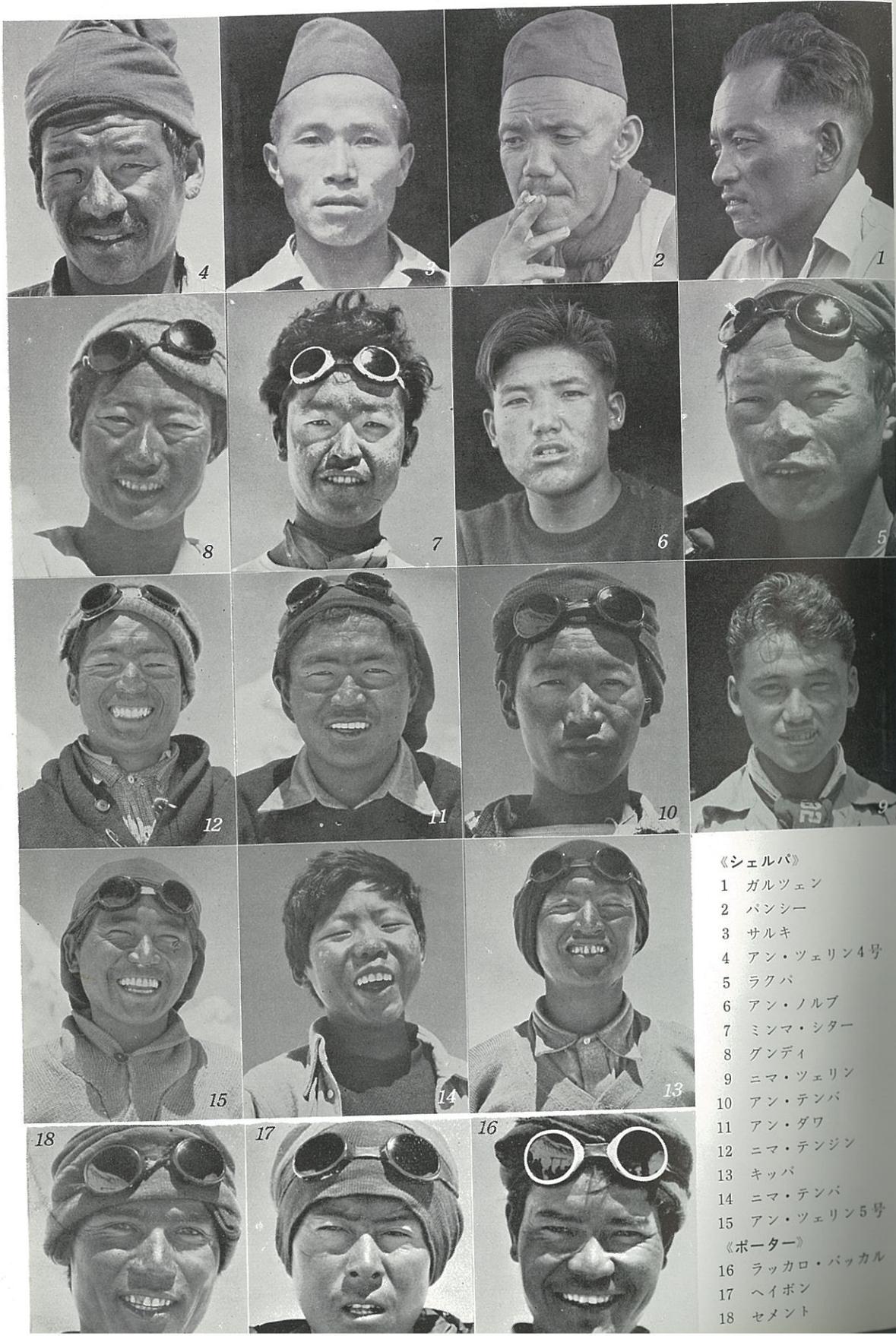
烈風に荒れ狂うナイケ・コル 吹きつける雪にテントは刻々とうずめられていく この大自然の猛威の中でも 隊員の生活は続けられていった

雪崩!! マナスル北面の壁に出たこの大雪崩は ものすごいゴウ音と振動を伴って 2000メートルも落下して行った

76



マナスルの協力者



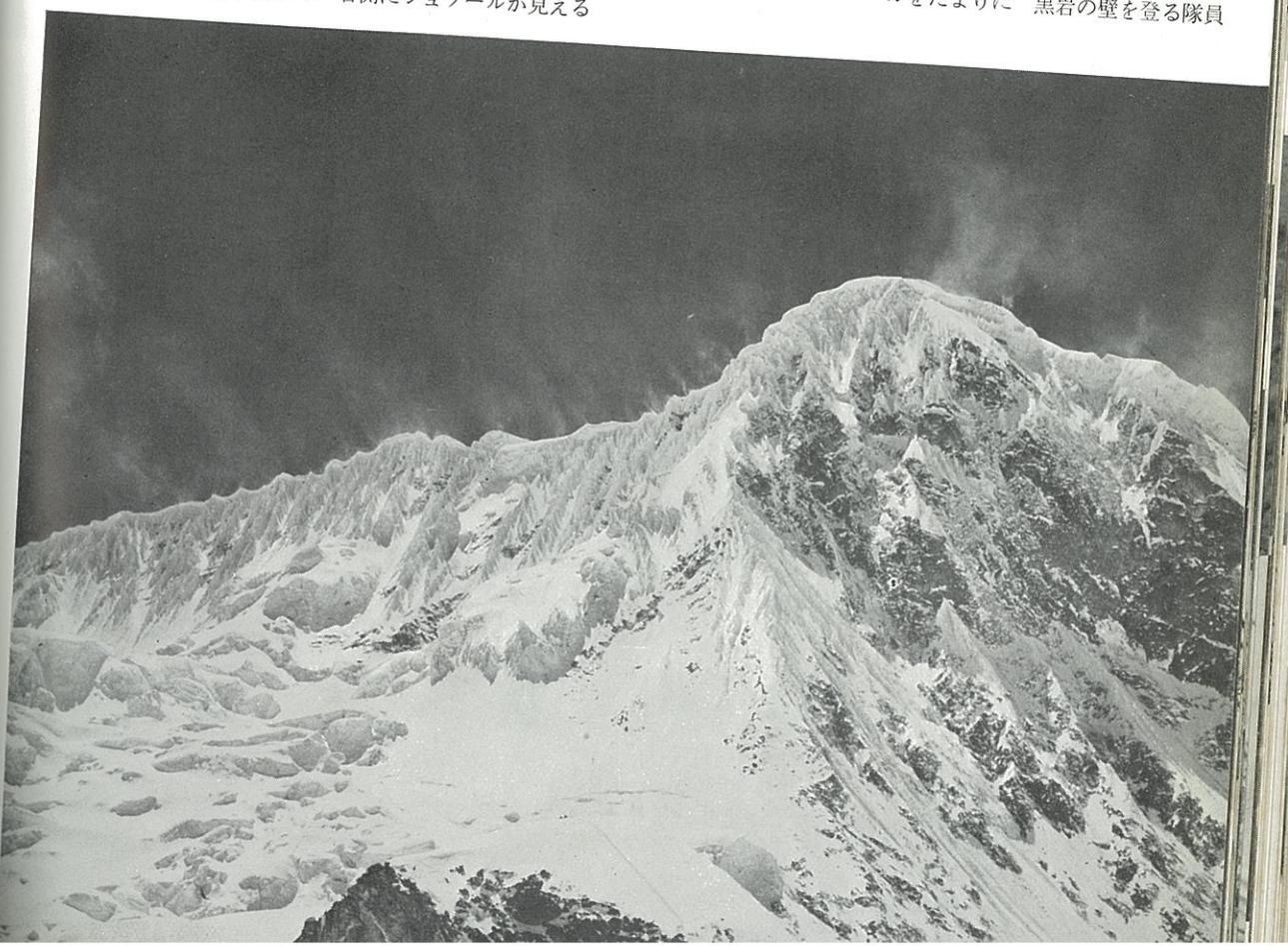
- 《シェルパ》
- 1 ガルツェン
 - 2 バンシー
 - 3 サルキ
 - 4 アン・ツェリン4号
 - 5 ラクバ
 - 6 アン・ノルブ
 - 7 ミンマ・シター
 - 8 グンディ
 - 9 ニマ・ツェリン
 - 10 アン・テンバ
 - 11 アン・ダワ
 - 12 ニマ・テンジン
 - 13 キッパ
 - 14 ニマ・テンバ
 - 15 アン・ツェリン5号
- 《ポーター》
- 16 ラッカロ・バツカル
 - 17 ヘイボン
 - 18 セメント



78

西の烈風にあおられて 高く雪煙を吹き上げるマナスルの北峰 下方の岩が黒岩で 右側にシュプールが見える

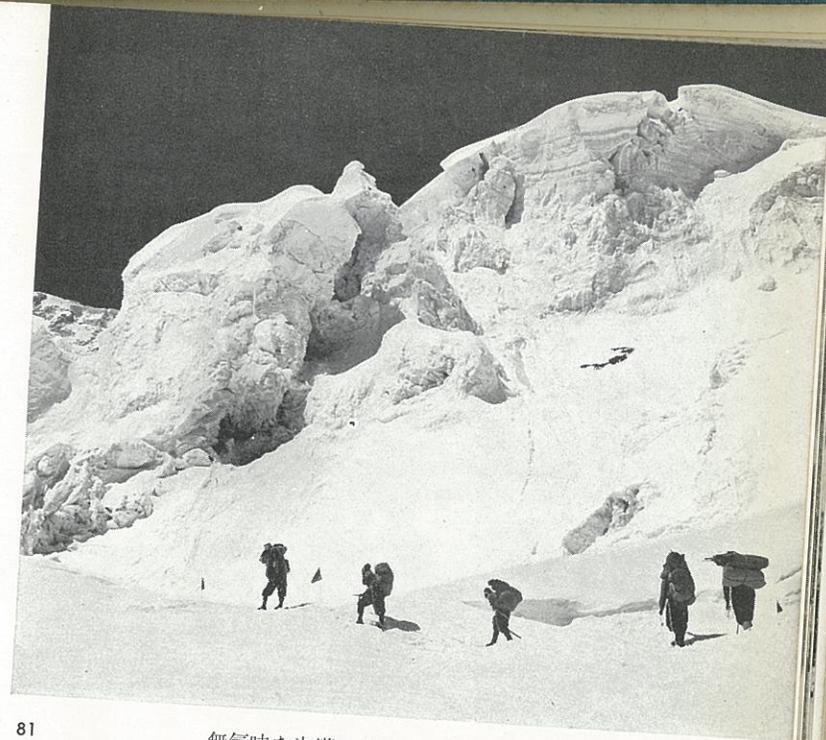
第4から第5キャンプへ 固定ザイルをたよりに 黒岩の壁を登る隊員



79

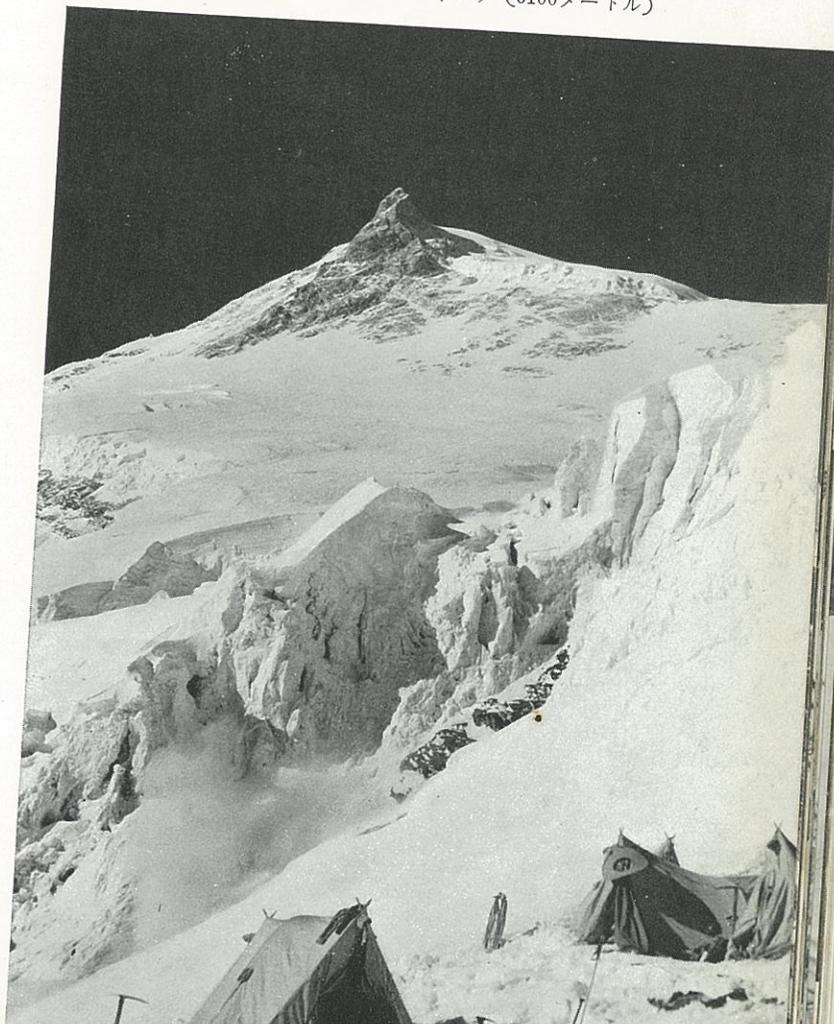
第4キャンプから見れば アイス・フォールを登る隊員の動きは アリの歩み
にも似て巨大なヒマラヤのスケールに圧倒される(250ミリ望遠レンズ撮影)

83



81 無気味な氷塔のそそり立つ アイス・フォール地帯を 赤旗をたよりに荷上げは続く

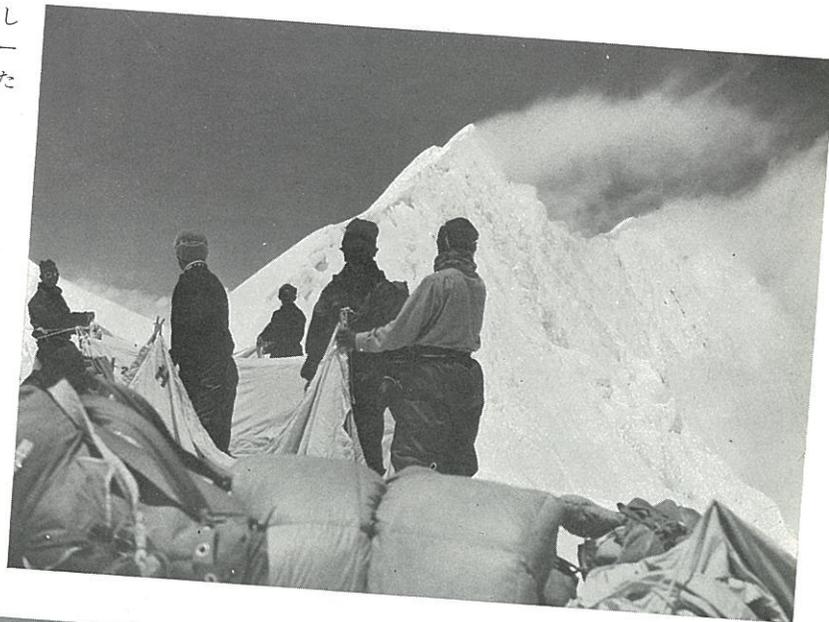
82 アイス・フォール地帯の急斜面を切り開いて張られた第6キャンプ(6100メートル)



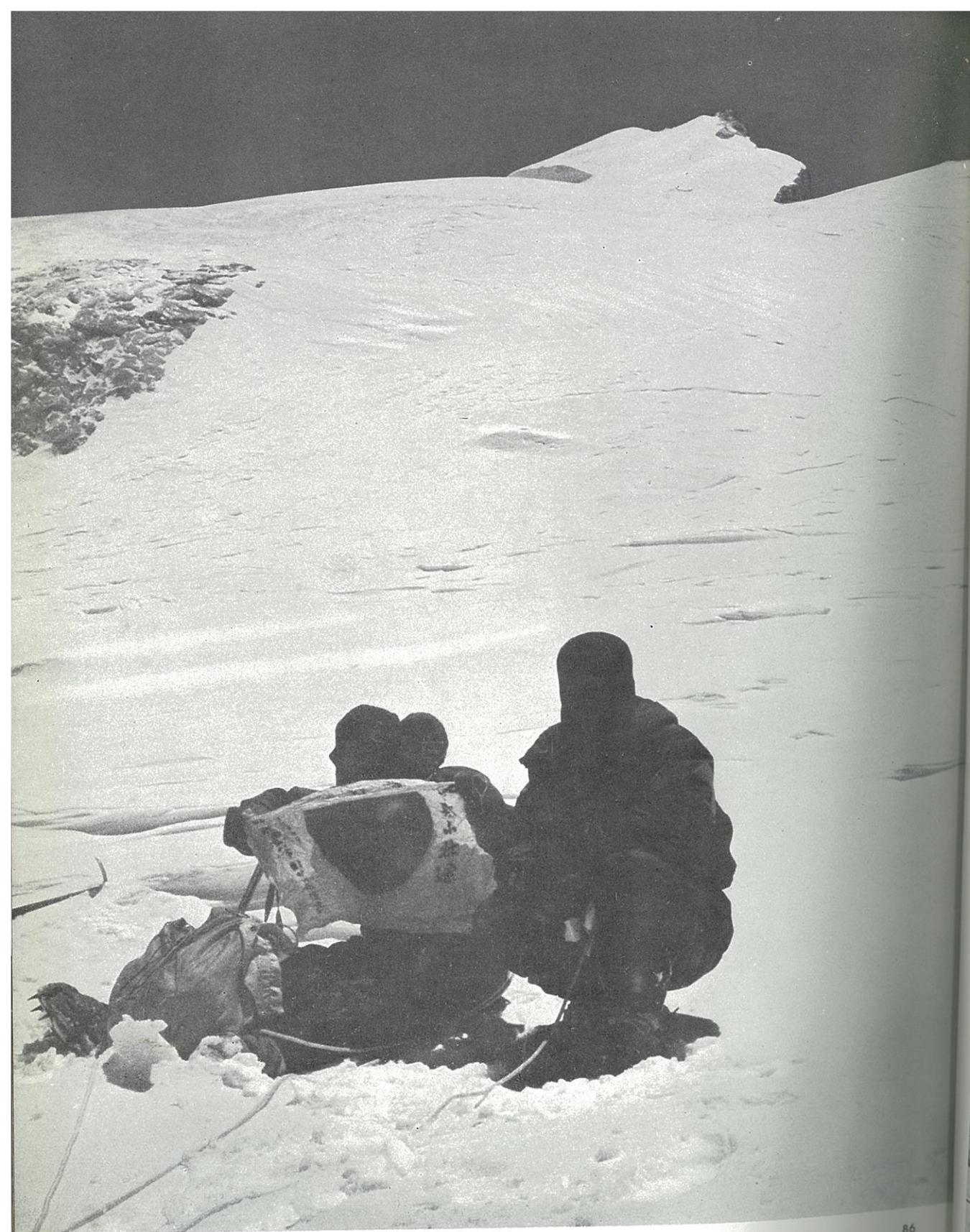
征頂ならず

84

5月29日 第2回目の頂上攻撃めざして ついに高度7100メートルのノース・コルに第8キャンプが建設された

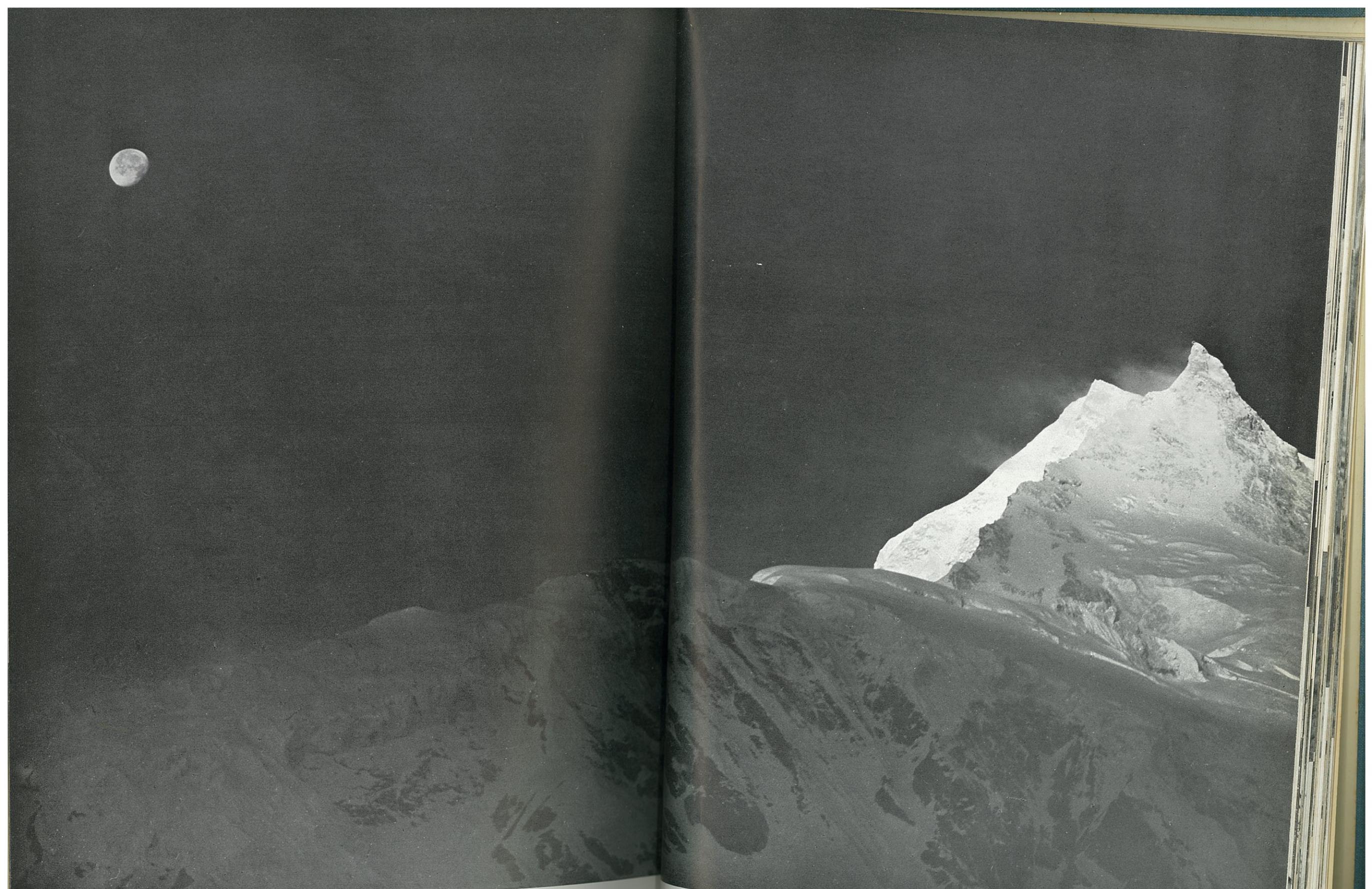


5月31日 山頂攻撃に向かう左からの加藤(喜) 石坂 山田の登攀隊員は 高木(左端)竹節(右隣)隊員らと激励をこめた握手をかわして勇躍出発した



86

プラトー上の第9キャンプ(7500メートル)に一夜を明かした加藤 山田 石坂の三隊員は 6月1日早朝から登高を開始 正午近く7750メートルに達したが時すでに遅く 天候の悪化も予想され ついに登頂を断念 頂上を眼前にして無念の涙を吞んで引き返した 最高到達点で石坂(左) 加藤の両隊員 頂上は前方のピークのくぼんだ付近で ここからは見えない (山田二郎隊員撮影)



残月かかるマナスルの夜明け 下界はまだ明けやらぬうすやみに包まれているころ 8000メートルのマナスル雪稜には 早くも朝の曙光が輝いて 雪煙を上げる尖峰は さながら暗緑の虚空に浮ぶ黄金の発光体のようだ 左肩にかかる残月が一層の神秘をそえて 美しくも荘厳なヒマラヤの夜明けである (6月5日午前5時—ベース・キャンプから250ミリ望遠レンズで撮影)



Anemone rupicola (アネモネ・ルピコーラ) 和名=イワバイチゲ 松の疎林の中や岩かげにかれんに咲く 純白のアネモネ

92



Primula stuartii (プリムラ・スチュアルティ) 黄色のサクラソウ ベース・キャンプ付近に多く一においはキツネぐさいような悪いものだ

93



Primula denticulata (プリムラ・デンティキュラータ) 和名=テマリ・サクラソウ ヒマラヤの代表的なサクラソウで一桃色の花がかたまって まりのようになって咲く

94



Berberis aristata (ベルベリス・アリストタータ) ツギノ類は刺があるので家畜は食べない 春になるとタマゴ色の花が房になって咲きはじめ



Rhododendron campanulatum D. Don (ロドデンドロン・カンパヌラツム・デー・ドン) ライラ色の花が群がって咲き サマのベース・キャンプ付近の春は この花にうずもれるほどだ

91

Androsace strigillosa (アンドロサセ・スツリギローサ) サクラソウに近い植物 疎林や岩かげに多く咲き 花弁の表は純白で一裏は濃紅色

90

マナスルに咲く花



Polygonatum hookeri (ポリゴナツーム・フーケリ) 和名=イツسنナルコユリ 淡紫の花が 春早く咲き出してくる 近縁のものうちでも非常に小型で 花の色もあざやかな種類

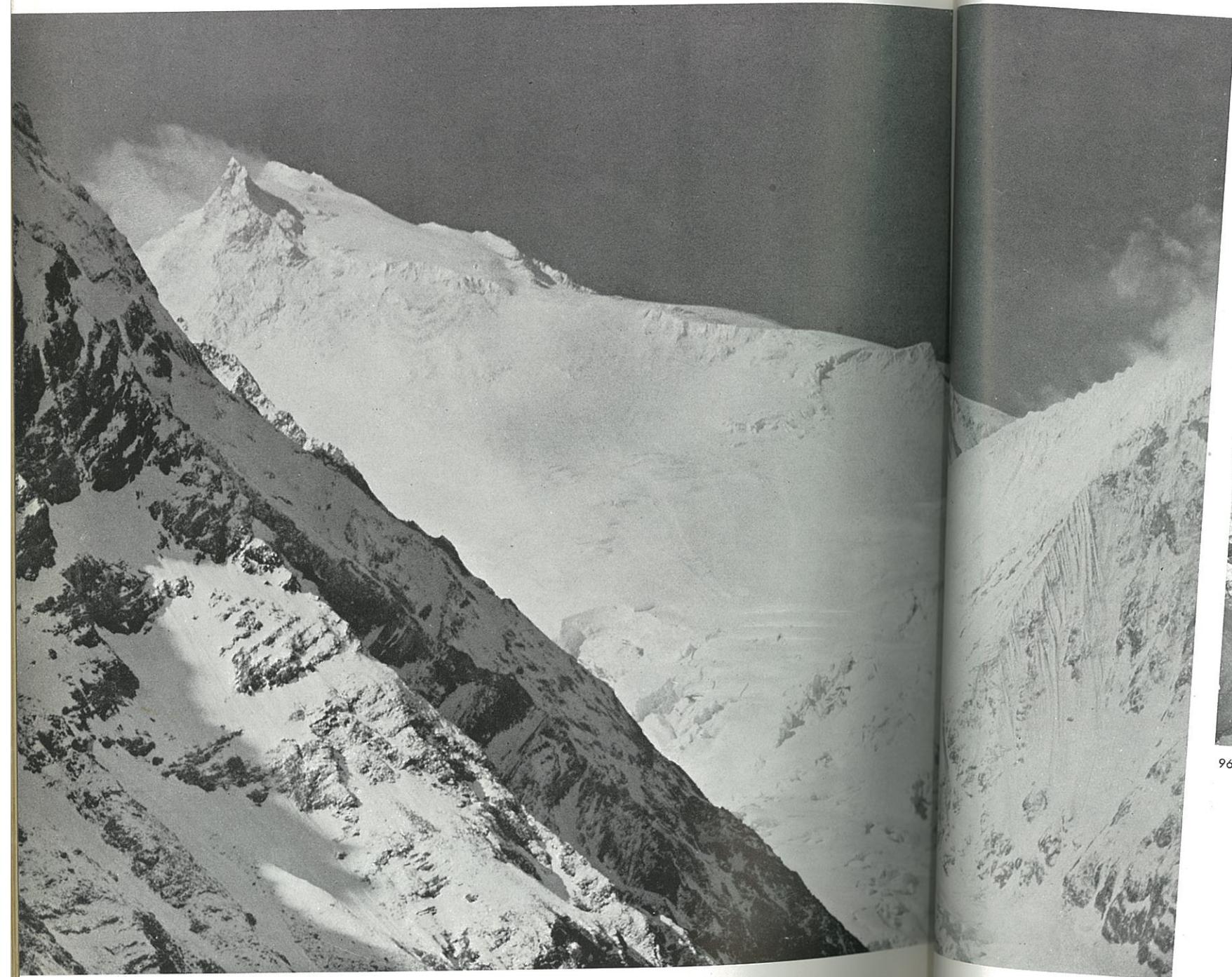
88



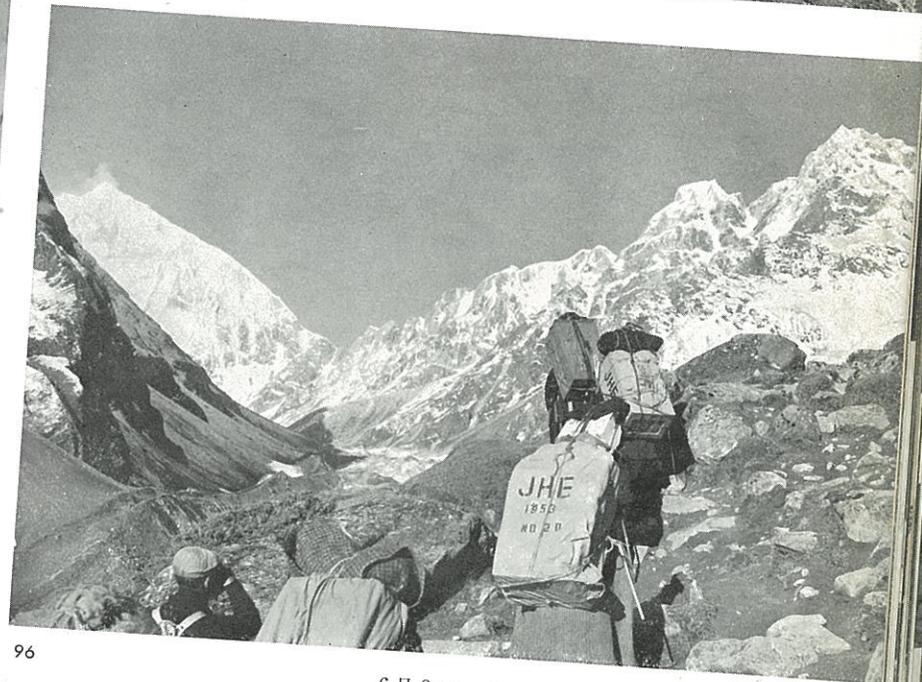
89

ラルキヤを越えて

ラルキヤ側から見たマナスルの北面 ビナクルの後方に一段高く頂上が望まれる われわれが第7と第8キャンプを張ったあたりの壁には幾条もの雪崩の跡が見られる



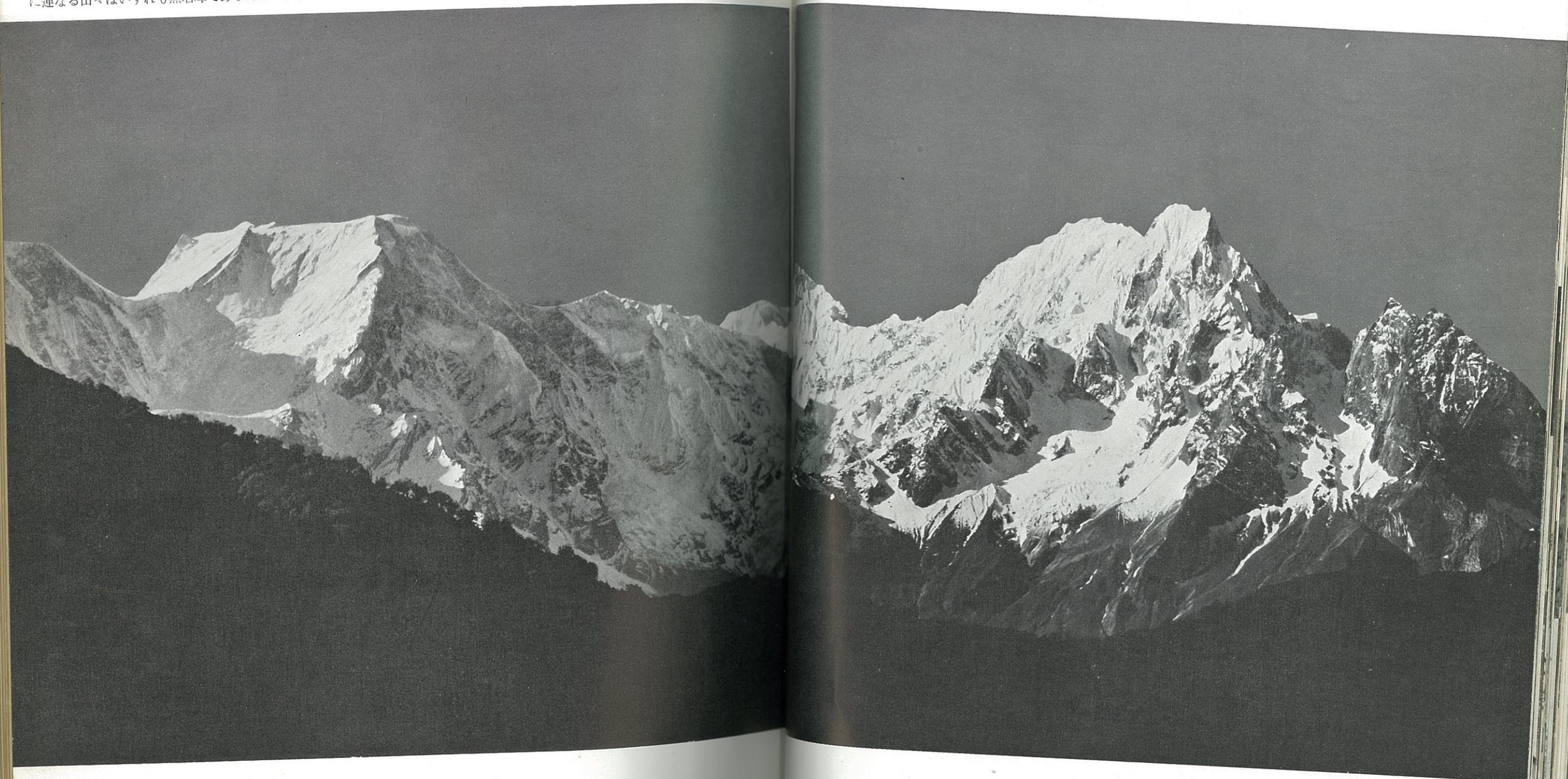
95



96

6月8日 ベース・キャンプを撤収した登山隊一行は 帰路をマルシャンディ溪谷にとるため 5230メートルのラルキヤの峠を越えた

ラルキヤ峠を下ったビムタコーチから見たマナスルの西面 左端のノース・コルに続き 広い台地のやや左よりに頂上が突き出して見える 台地左端のピナクルやプラトーのかっこうを ラルキヤ側から見たマナスルの北面と比較して見ると この山の様相がよくわかる 右に連なる山々はいずれも無名峰であったが われわれは 『マナスルの三本槍』と命名した

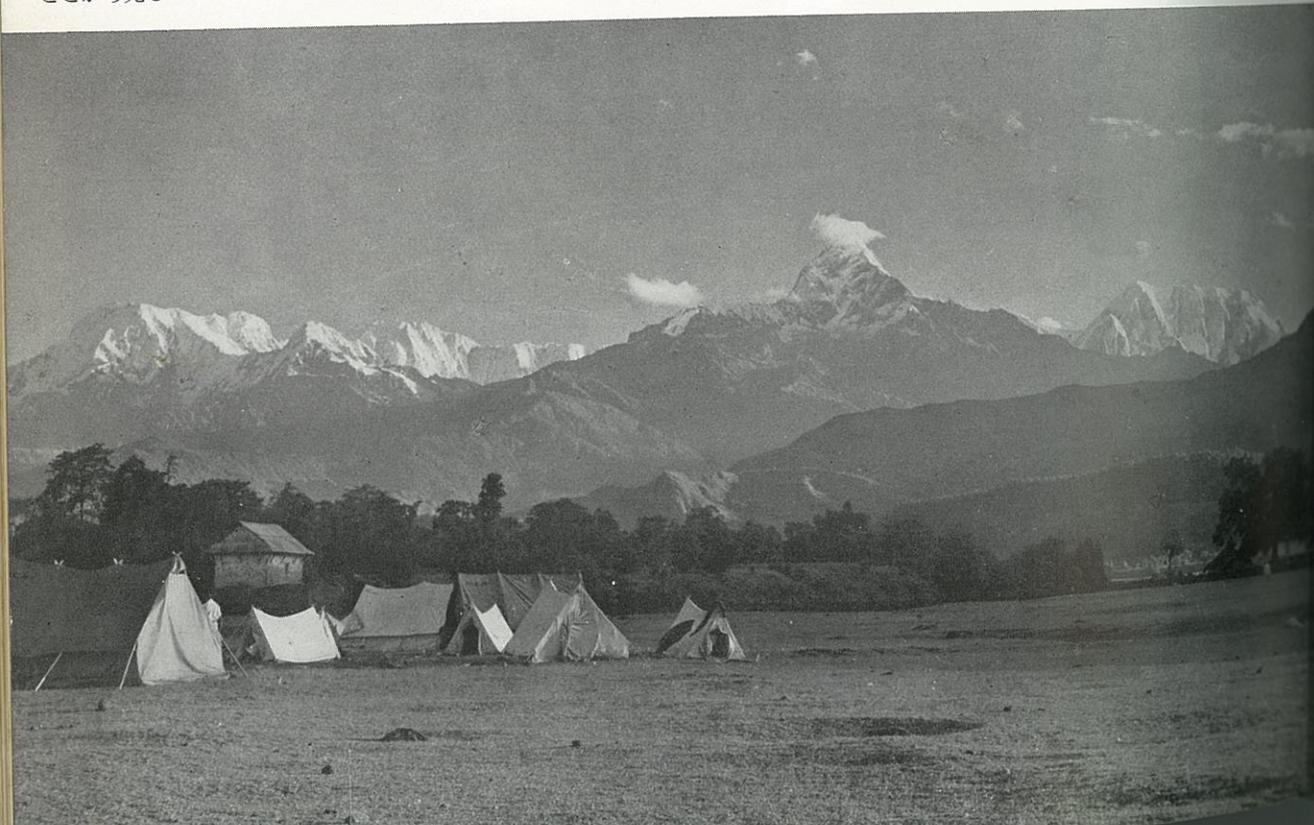




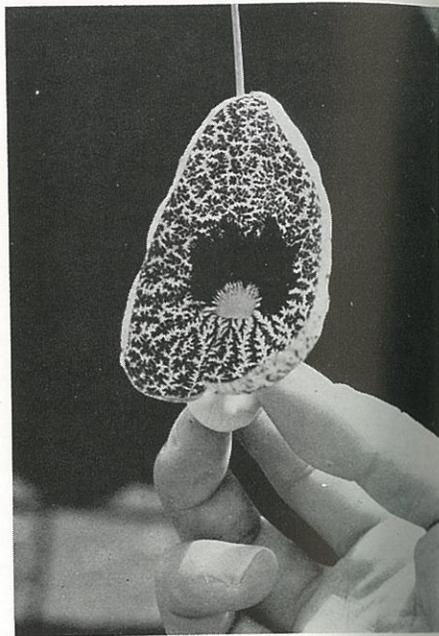
タールのキャンプで スイスのハーゲン博士と
会い 歓談に花を咲かせる三田隊長と高木隊員

103

ポカラで2週間あまり飛行機を待つ日が続いた
ここから見るアンナブルナの連峰はすばらしい



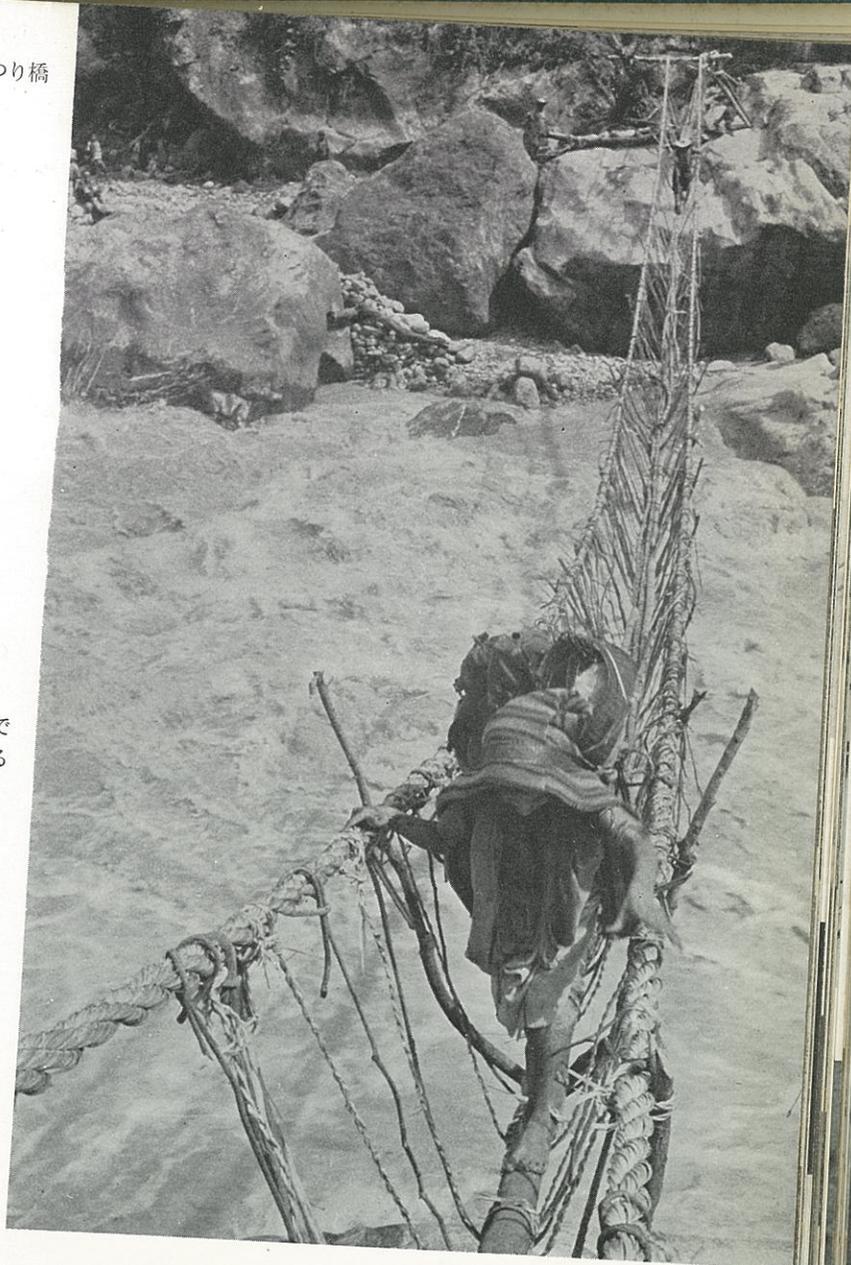
102



ポカラ付近で見た アリスト
ロキアで 日本名は馬の鈴草

104

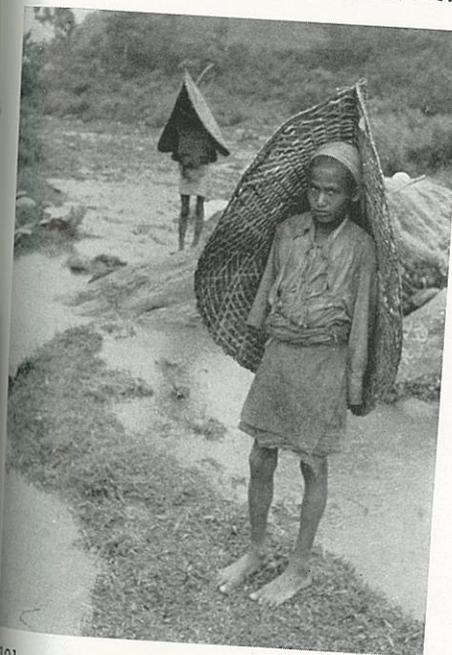
マルシャンディ溪谷にかかる竹縄のつり橋



大きな編みがさは 晴雨兼用になるもので
竹編みの中にはシラカバの皮が張ってある

100

99



101

モンスーン期にはいつてきたので 雨に明
けくれるキャラバンは なかなか大仕事だ

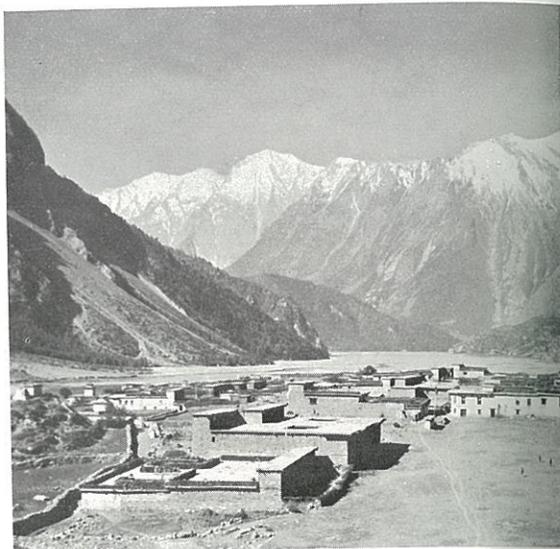




ケハ・ルムバ上流最奥のキャンプ 昨日の吹雪は晴れたが河水はすっかり凍っていた まきはなく ヤクの食糧もほとんどない この旅でいちばん西のキャンプだ 5月8日

ツクチャ村の風景 前の広場にフランス隊も われわれもキャンプした 住民はタカリ族だが生活はすっかりチベットふうになっている 残雪の連峰はダウラギリの東南尾根

110



ケハ・ルムバ上流のチイゼ・ラ この峠の向こうへ流れる水は もうガンダキにはいらず カルナリー河になる ここは二つの流域の境だ はるか向こうはムクト・ヒマール

デオラリー峠付近から見たダウラギリ (8172メートル) の姿 右はツクチャ・ピーク このハダカムギの畑の下を1000メートルぐらい下ると カリ・ガンダキが流れているのだ



112



113

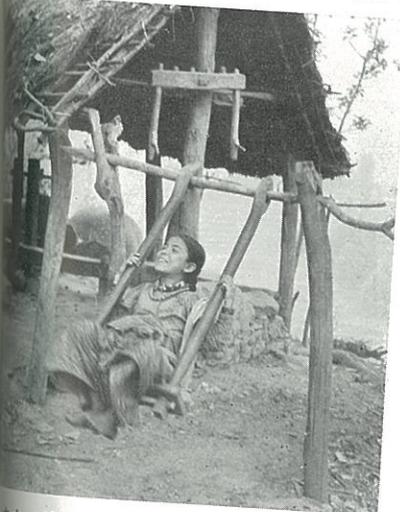
科学班の旅 1953年

中尾 川喜田両隊員らの科学班は 首都カトマンズをはなれてすぐに登山隊と別れ 140日にわたる長い旅行にのぼった アンナプルナ山群からマナスル山塊と ひとめぐり約1500キロを踏破—この成果もまた 登山隊とともに大きな収穫であった



107

春のヒマラヤ山麓は沙羅双樹の花盛りとなる 付近にはむせるようなおいがただよっている アルガート・バザール付近で



108

カカニ峠の下り道で見た街道の子供 ネパール人はブランコが大好きで 秋祭りには四人乗りもできるが こんなブランコもある



109

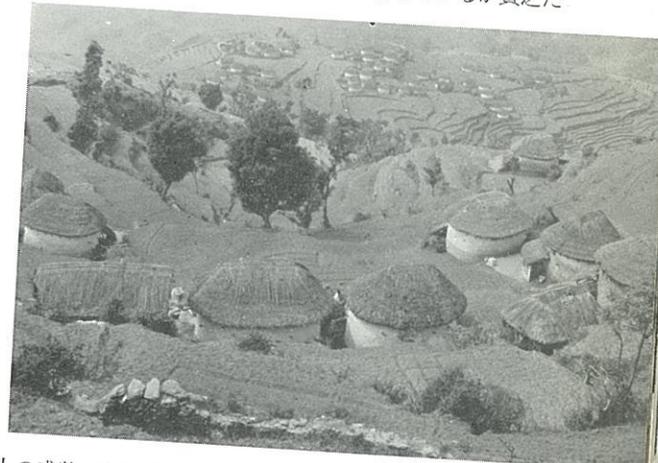
祭りに行くグルン族婦人の盛装 かれらの男性はグルカ兵として世界に聞えている トリズリ・バザール付近で



105

神に供える花を運ぶ かごの中には一まっかなシャクナゲと白花のランがぎっしりつまっていた カトマンズ郊外で

丸屋根の人家 ボカラ西方から見たブラーマンの村 僧職の身でも農耕にいそしみ 清潔に暮しているが貧乏だ



106



118

7月1日 4900メートルのタブレ・バンジャンに立つこの峠の石塚がネパールとチベットの境になっているゾーパの群れは米をチベットに運び塩を持ち帰ってくる



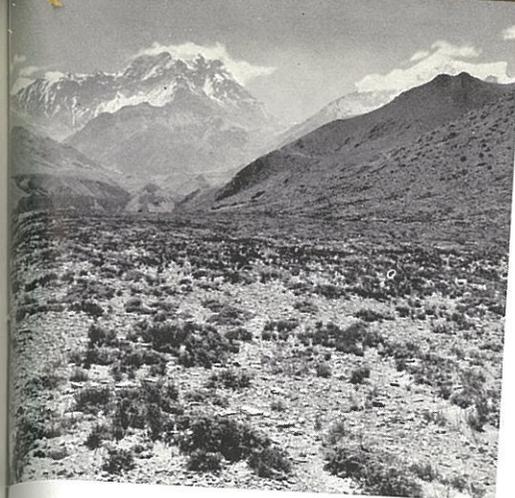
119

チベット人の夏の移動牧場カルカ このテントを数日ごとに移動して 牛乳からバターや チーズを作っている

黄色いメコノプシス 高さは2メートルにもなる 茎は生で食べられてサラダになる シェルバの大好物だ 121



青い小型のメコノプシス 4500メートル以上の場所にある これをひとつ採るのには非常な努力が払われた



115

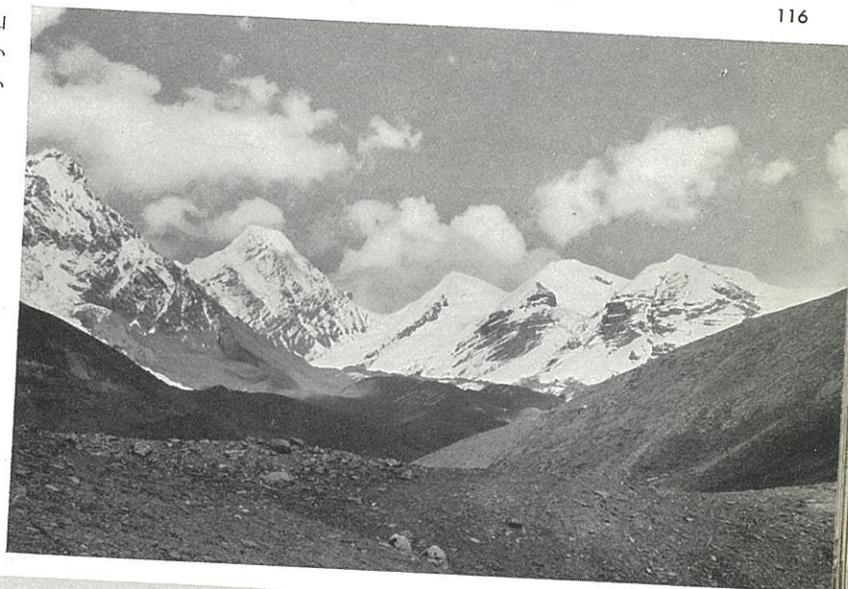
マリ・ガンダキの荒原 マオウ (エフェドラ) がまばらにはえているだけでほかに草はない 峠はニサンゴ

ヤルゲン・コーラ源流から見た東方の山 山 6000メートル級の峰がならんでいるがこの山々を見た人は今までに少ない



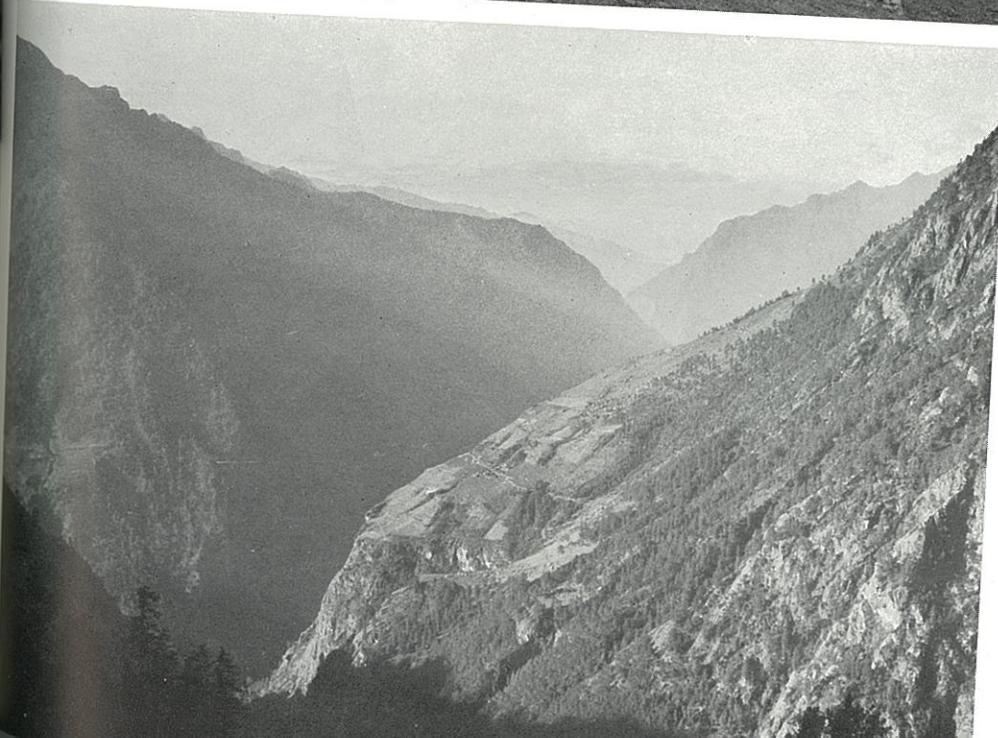
114

ムクチナートを出て ニサンゴ・バンジャンにかかる 科学班 この高さになるとヤクが強くなり具合がよい



116

マリ・ガンダキの難所ニヤック部落を スリング・ヒマールから見ると がけの上にあるのがよくわかる 谷間のはるか向こうにはアルガート・バザールがあるはずだ



117



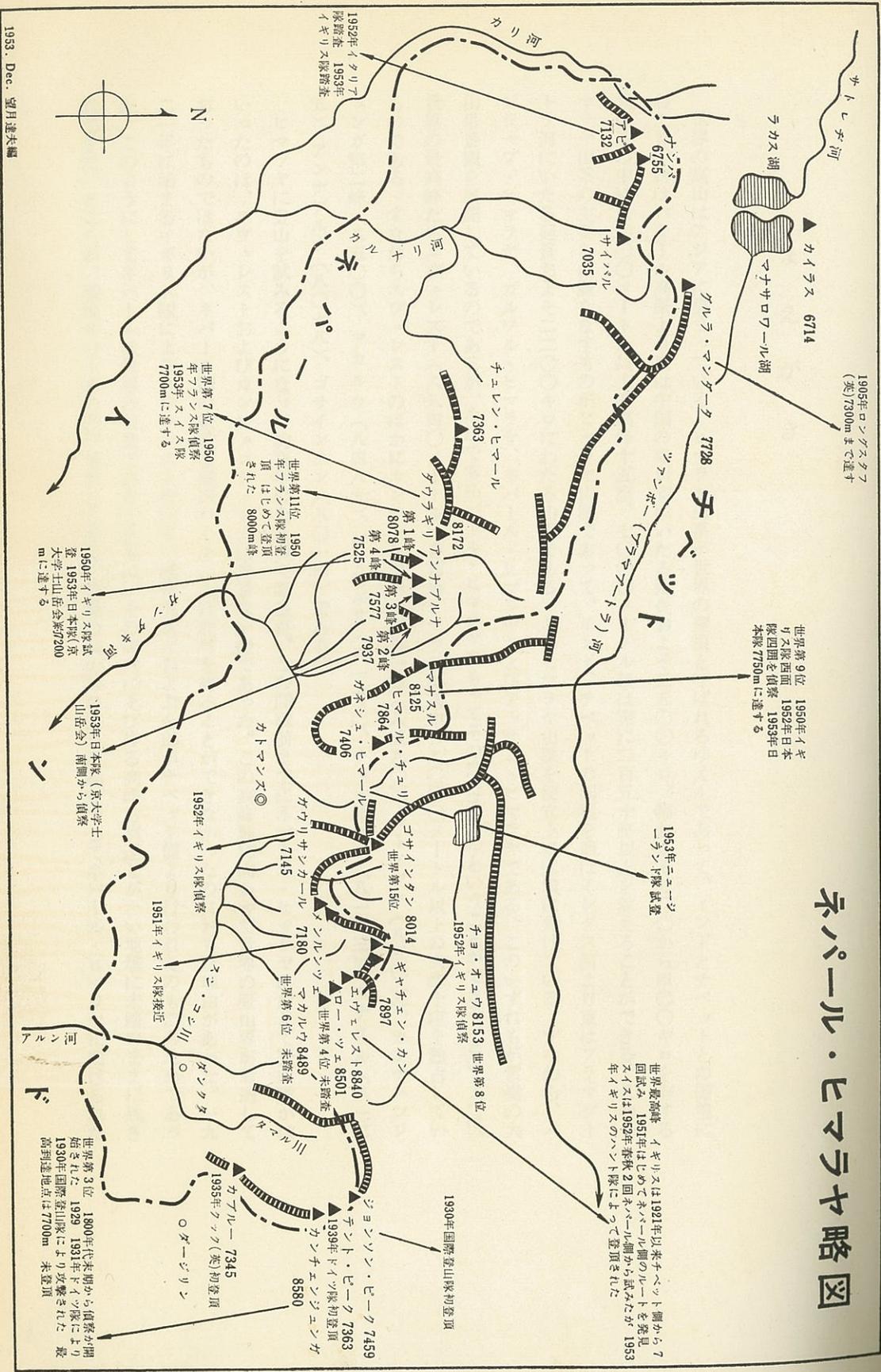
122 ムラ・ダゼンの峠から東に望むチベットの山々 正面の谷はロンツェ ヒマラヤ山脈もチベットにはいればゆるやかになってくる



123 チベット人のチーズ作り 日がさしてくるとかれらは急いで乾燥を始める 両手の間から細長くしほり出して 乾ウドンのような型に作りあげる きたない毛布や着物の上に織りなしていく チベット・チーズの模様はごみだらけだ



124 トロ・ゴンバ・コーラの最奥の山々 ガネシュ・ヒマールの主峰の南にあたるこの谷は 大きな氷河が流れている 南岸は絶壁続きで 絶えず雪崩が落ちている



ネパール・ヒマラヤ略図

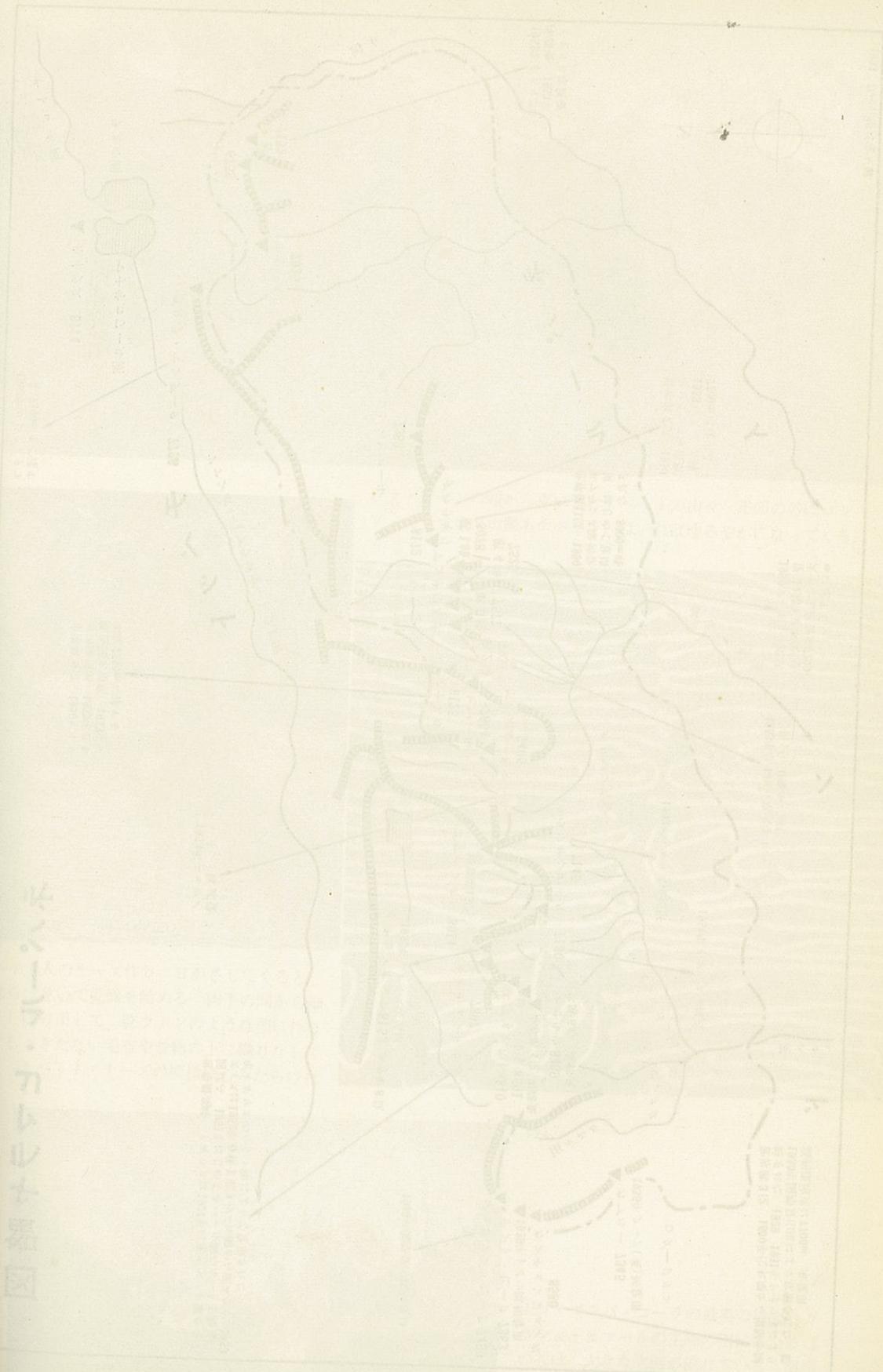
1953. Dec. 望月達夫編

ま え が き

世界の高山はアジアに集まっている。ヒマラヤ山系が世界の屋根と呼ばれるゆえんであって、インドとチベットとの国境にわたり、西はパミール高原より東は中国の四川省にいたる延長およそ三五〇〇キロ、幅およそ三〇〇から四〇〇キロを有する大山系の中に八〇〇メートル以上の高峰十五座、七〇〇メートル級は実に二百五十座以上を数えることができる。このヒマラヤ山系の主要な山脈をなすものがヒマラヤ山脈であって、インド、チベットの国境を西はインダス河より東はブラマプートラ河にいたる延長およそ二二〇〇キロにわたる山脈である。このヒマラヤ山脈を便宜上四区域に分けていく。すなわち、パシヤブ・ヒマラヤ、ガルワル・ヒマラヤ、ネパール・ヒマラヤおよびアッサム・ヒマラヤである。このいずれもが雪嶺の大山岳景観を展開しているのであるが、なかでもネパール・ヒマラヤをもってその最たるものといえることができる。というのは、世界の最高峰たるエヴェレスト（八八四〇メートル）を初めヒマラヤ山系中、八〇〇〇メートル以上の高峰十座を独占しているのである。すなわちエヴェレストのほかにカンチェンジュンガ第一峰（八五八〇）、ロー・ツェ（八五〇一）、カンチェンジュンガ第二峰（八五〇〇）、マカルウ（八四八九）、タウラギリ（八一七二）、チョ・オユウ（八一五三）、マナスル（八一二五）、アンナプルナ（八〇七八）、ゴサインタナ（八〇一四）である。

ヒマラヤに登山を試みるようになって約百年になるのであるが、この間戦前までにネパール・ヒマラヤに対して登山隊がはいったのは、エヴェレストおよびカンチェンジュンガに過ぎないのであった。この高峰群に向かって世界の登山界が看過しておいたものではないが、ネパール国の嚴重な鎖国のために入国許可を得ることができなかったのにもな理由があった。一九二二年に始まるイギリス隊によるエヴェレスト登山も、戦前七回におよぶ全部がチベット側より行われたのもこのためであった。このようにしてネパールは世界の秘境であるとともに、その国内にそびゆる高峰も到達しがたい地域に未踏のままに残されてきた。ところが、戦後ネパールの門戸解放とともに、世界の登山界の注目が期せずしてネパール・ヒマラヤに向けられた

ヒマラヤ・カトマンズ地図



のは当然である。一九五〇年フランス隊によるアンナブルナの登頂は、まことに特色ある登山であったのみならず、初めての八〇〇メートル級高峰の登頂として貴重な記録といえよう。一九五一年イギリス隊によるエヴェレストのネパール側探索および五二年春のスイス隊による同峰八六〇〇メートルの地点までへの到達など、いまやネパール・ヒマラヤに向かっての時代にわかに開かれたような感がある。

一九五三年こそはヒマラヤ登山史上画期的な年である。それはイギリス隊によって、ついにエヴェレストの頂上がきわめられたということである。いまより三十余年前初めてエヴェレスト登山を試みたころは、人間の体力をもってしては八八四〇メートルの山頂に達することは不可能であるといわれたことを思い出せば、この多年にわたる不屈不撓の努力は不滅の功績を残したものである。また今年、アメリカ隊はK₂に対し、スイス隊はダウラギリに対してそれぞれ登山を試みた。ドイツ隊が一九三二年以来、四回におよび、かつ多数人命の犠牲さえ払ったナンガ・バルバット（八二五メートル）を第五回目に登頂したのも今年である。このイギリス、アメリカ、ドイツ、スイス各国に伍して、わが国からはマナスル登山隊を派遣したのであった。このように一登山期に世界各国の登山隊がヒマラヤに向かったということは戦前にも例を見ないところであって、今後はさらにこの傾向が著しくなるのではないかと考えられる。

登山はいずれも競争意識のもとに行われているものでないことはいままでもないが、自分たちの能力を八〇〇メートル級の未踏の山に試みようとする念願は登山者として当然の志向であると思う。八〇〇メートル級十五座のうち、三座はすでに登頂されたのである。おそらく今後しばらくは残りの高峰が各国登山隊の目標となることも推察される。それはあたかも十九世紀の中葉、アルプスで初登頂の黄金時代を画したころにも似た時代を迎えるかもしれない。ただヒマラヤ高峰の登山は、その位置、高度、天候などの自然的条件ならびに運輸、交通の困難と装備の大きかりなことなどのために、また大きな基盤の上で計画されなければならない必要のために、個人的な小規模の計画をもってしては行うことができないことである。これはいまでもなくヒマラヤの大きさのいたすところなのである。であるからいづれの国の登山隊にしても広範囲な知識と経験とを基礎として、十分なる準備と周密な行動のもとに実行するものであって、その準備する食糧や装備について一國の科学や産業の水準の高さを示すものといわれるほどである。今年のイギリス登山隊に示されたイギリス科学者、産業界および軍、官の熱

意は驚くべきものであって、探検とか登山に対する同國の社会的理解とか、深い伝統とかを改めて認識するとともにかかる環境の大きな基礎の上に立つ業績なることを知るものである。このようにヒマラヤ八〇〇〇メートル級の登山ともなれば関与する科学と産業の範囲も広く、また強力な支援のもとに始めて可能となるものである。

それでは今回わが國のマナスル登山隊は——詳しくいえば日本山岳会によるマナスル登山隊であるが、あたかもイギリス隊がイギリス山岳会とイギリス地学協会の隊に対して呼ばれるように——いかなる経過をもって派遣されたであろうか。

わが國の近代的な登山は明治の中葉に始まるといえよう。もっとも登山に対するわが國人の好尚は千年以上も古い伝統の上につちかわれてきておいたのであるが、日本アルプスへの新しい興味の発見などによって急速な進歩をたどることになった。その進歩はたとえ、多様な素質を受け継いでおるとはいえ、世界の山岳への視野を拡大したと、それに伴う技術の発達であった。そしてその目的への過程として、まず最初に取りあげられたものは積雪期の登山であった。氷河を欠くわが國の山岳では、氷雪に対する訓練としてこの季節を選ぶよりほかに道はないのである。すべての装備も食糧も隊の編成行動も全くの初歩から始められたのであったが、今日では深雪、強風、酷寒、吹雪のうちにあるいはテントを張り、あるいは雪洞を掘って、目的の行動を行うほどに高度の発達を見るにいたっている。積雪期の登山が開始されて以来三十年はたっているのである。この間、幾多の有為の生命が雪の山に失われたことであろうか。しかし、これらの人達はいずれも、より高い山への熱意に燃えて困難に身をさらしてきているのである。

しかし、その最も強く念願するヒマラヤへの登山の機会、一つには、自分たちの力に対する正当ではあるが、時間を要した慎重さと、ほかには世の支援が未熟のために、実現の運びにいたらなかったことであつた。少数のすぐれたる僧侶、学者および旅行者による記録などがヒマラヤに関するわれわれの身近かな体験であつたに過ぎない。ただ一九三六年堀田彌一氏を隊長とする立教大学山岳部によるナンダ・コット（六八七メートル）の初登頂は、われわれにとって唯一の最も貴重なヒマラヤ登山の経験であつた。この隊のもたらした収穫は、はなばなしの登頂という記録とともに、ヒマラヤ登山とはいかなるものであるかという最大の問題について、解答の端緒を開いたものであつた。先進の國々の記録に比して、わずかに一回だけの経験に過ぎないのであつたが、この経験は第一に少壮有為の登山者に自信を強める栄養素となつた。次に訓練をさらに向上せし

むる刺激の一つともなった。かくして、われわれは戦後一九五二年より同五三年にいたる二カ年にわたりヒマラヤ八〇〇〇メートル級のマナスル登山を試みる機会に恵まれることになったのである。

本計画は、その成否のいかんにかかわらず日本山岳会のヒマラヤに対する多年の念願を傾注するものである。一九五二年、今西隊長の下に派遣された踏査隊によって、マナスルの登路を発見し、五三年三田隊長のもとに登山隊を派遣したのであった。遺憾ながら登山隊は七七五〇メートルの地点にまで達し得たが、登頂は不成功であった。いまやこの二度の経験を基礎として、その装備、食糧、行程などに批判を加え、五三年の登山に際してわれわれの不十分であった、弱点などを充足して五四年に再挙を計ることになっている。多岐多面にわたる仕事を処理するのに、会にはヒマラヤ委員会および登山実行委員会を設けている。

この二カ年にわたるマナスル登山はその規模、内容ともに自負するに足ると思うものであるが、この登山を可能ならしめた最大の力は世の理解ある支援である。まずネパール国の入国許可ならびに同国官民の好意ある支援に感謝いたしたい。またこの計画実現のためものは、毎日新聞社を中心とするわが国朝野の強力なる後援であった。戦後疲弊した現状で、このような企図に対し十分の醸出を惜しまなかった各位に対し深甚の謝意を表したい。さらに外務省、農林省、文部省および東京地学協会から寄せられた後援に対しても感謝の言葉を申し述べたい。

ここに収録するところは一九五二年の踏査隊および本年の登山隊の登山記録を中心とするものである。植物学および人類学に関する記録は目下採集品の整理途上でもあり、後日それぞれの学界、または適當の方法によって展示あるいは報告することにしたしたい。

一九五三年十二月

日本山岳会会長 楨 有 恒

目 次

まえがき
 計画実施にいたるまで
 一九五二年の踏査隊

横 有 恒
 松 方 三 郎
 今 西 錦 司

カトマンズを後に
 マルシャンディ入り
 アンナプルナ第四峰への試登
 チュルールの登頂
 西側からのマナスル偵察
 東側からのマナスル偵察
 踏査隊遠征日誌(一九五二年)
 一九五三年の登山隊

八
 一一
 一五
 二一
 二二
 二四
 二九
 三四

カトマンズまで
 プリ・ガンダキを登る
 前進基地の建設
 ノース・コルの奪取
 山頂にいとむ
 サポートと撤収
 ラルキヤの峠を越えて
 科学班の旅

三 田 幸 夫 四〇
 竹 節 作 太 四七
 田 口 二 郎 六七
 田 口 二 郎 七七
 加 藤 喜 一 郎 八七
 村 山 雅 美 九五
 村 山 雅 美 一〇〇
 中 尾 佐 助 一〇〇

ボカラ目ざして
 ガンダキ・ヒマールを巡る
 アンナプルナ北側を進む

一〇八
 一〇九
 一一〇

ツムジエを根拠に
 ガネシュ・ヒマールを探る
 プリ・ガンダキを下る

登山隊遠征日誌(一九五三年)
 運行表

一一四
 一一七
 一一九
 一二一
 一二九

付 録

1 隊 員
 2 シェルパ
 3 装 備
 4 食 糧
 5 気 象
 6 植物と動物
 7 人文地誌
 8 医学的考察
 9 写 真
 10 経 費
 11 ネパール関係文献目録

松 方 三 郎 一三九
 竹 節 作 太 一四一
 加 藤 喜 一 郎 一五一
 村 木 潤 次 郎 一六二
 山 田 二 郎 一七一
 山 田 二 郎 一七六
 山 田 二 郎 一八一
 中 尾 佐 助 一九〇
 川 喜 田 二 郎 一九四
 林 一 彦 二〇一
 辰 沼 広 吉 二〇三
 依 田 孝 喜 二〇七
 望 月 達 夫 二一一
 二二五

英 文

卷 末 一

写真

天然色写真

巨峰マナスルを見上げる朝のベース・キャン
ラルキヤ峠の中腹から見たマナスル北面

竹節作太 撮影

一九五二年の踏査隊

依田孝喜 撮影

一九五三年の登山隊

竹節、田口、中尾、林 撮影

科学班の旅(一九五三年)

依田孝喜 撮影

挿入地図

中尾佐助 撮影

ネパール・ヒマラヤ略図

中央ネパール・ヒマラヤ概念図

一九五三年登山隊登路説明図

表紙題字 横 有 恒

マナスル

一九五二—三年

計画実施にいたるまで

松 方 三 郎

外国からの探検隊や登山隊にネパールが門戸を開放したのはきわめて新しいことだ。一九四九年のスイス隊ならびにアメリカ隊の入国がこの種類のものの最初なのだから、ヒマラヤ登山の上でのネパールの歴史は、わずかに五年を数えるに過ぎない。しかもエヴェレストから数えて世界の高峰二十を並べてみると、その約半数はネパールの領域にはいるのだから、過去五年の間に記録されたヒマラヤ登山の大半が、この地域に集中したことは当然のことなのである。こうした事情が了解されるならば、最近十二カ月の間に、日本から三つの隊がネパールにはいったという理由も理解されるのであるが、同時にまた、今から二年前には、われわれの頭の中では、マナスルはおろかネパールそのものが、はなはだ模糊たる存在であったということも了解されると思うのである。現に、日本からはじめてのマナスル踏査隊が一九五二年にネパールに向かったころ——つまり、いまから一年前には、わずかに『アルバイン・ジャーナル』にのったティルマンの報告と彼のとった写真にたよるのがほとんど唯一の記録であった。ティルマンのネパール旅行は一九五〇年のことで、フランス隊の『最初の八〇〇〇メートル峰』アンナプルナ（第一峰）登頂と同じ年のことであり、報告は翌年の五月号に出たのである。

こうした事情のほかにはまた別の特殊な事情があった。日本は一九五二年五月にようやく独立国たるの立場を回復したのであるから、戦後における国際的な正常な関係はすべてこの時から始まっているのである。日本とネパールとの国家間の直接の関係は、実は現在にいたるもまだ開かれていない。このことがネパールにはいる場合、問題を複雑にすることはいうまでもない。今日では問題の大半は事実上は解決され、踏査隊、登山隊と二回にわたってマナスル隊が出ているのみならず、さらにアンナプルナに一隊がはいったのであるが、ここまで道を開くには、当然のことながら、相当な曲折はまぬがれなかった。

マナスル遠征計画の端緒をなすものは京都大学生物誌研究会の学術調査計画であった。そして、この計画は日印両国の学界の共同の企てとして立案されたものであった。一九五二年一月のインド学術会議に出席した木原均博士はその計画を携えてインドの各

界ことに学界と懇談する機会を得たのであるが、日本がまだ独立以前であったということもあるいは多少の関連があったかと思うが、この日印合作案は実を結ぶにいたらなかった。インド側としては日本側がネパールに重点をおく意味も十分には理解できなかったように見える。ネパール入りの計画はここで一つの転機にたったのであるが、これ以上それを具体化するためには是非ともネパール側との直接交渉が必要であった。そこで木原博士に同行した西堀栄三郎博士はネパールの首都カトマンズにおもむき第二段の工作にはいった。もちろん戦後初めての日本人のネパール入りであった。当時としてはきわめて変則的な——少なくともわれわれにはそう考えられた——便法によって、西堀君が入国し得たことには、クリシナ・バハドール・ヴェルマ氏の奔走が大いにあずかって力があつたのであるが、事ここに至るまでの西堀君の努力と忍耐とは、ネパール国内のいろいろの事情、ネパールとインドとの微妙な関係、さらにまたインド国内における複雑な事情、これらのものを知るものにして初めて理解されるのである。クリシナ君と日本との友情が一九五一年のニュー・デリーのアジア大会に端を発するものであることも、この計画が最初からスポーツによる共感に支持されたものであることを物語る意味で、ここにしるしておく価値がある。

カトマンズでの折衝にも相当な経緯があつた。各国の登山界がこぞってネパールの山々をねらって入国の申請を出している中に、正常な国交関係を持たぬ日本が、後から割り込むのであるから、そのむずかしさは当然のことだ。この困難にもかかわらず、マナスルの登山ならびにその地方の学術調査を目的とする日本の隊を一九五三年に派遣すること、そしてそのための踏査隊として一九五二年に数人の隊を出すことの了解が与えられたことは、われわれとしてはまことにありがたいことであつたが、これはネパール側各界の日本に対する一通りならぬ好意によるものであることは銘記されなければならない。

木原、西堀両博士の帰国後、京大生物誌研究会は計画をあげて日本山岳会に移すことを提案した。日本山岳会がこの計画遂行の全責任を負うことを正式に決定したのは一九五二年四月十六日であつた。当初の計画からすれば重点が相当移ってきたことからこゝうしたなりゆきとなつたのではあるが、本来、ネパールのヒマラヤについては見たいということから出た京都の計画だったので、この変化は事実上は大きな変化ともいわれないのである。

日本山岳会はこの計画を推進し実行するための中心の機関としてヒマラヤ委員会を組織した。会としては会の恒常的な仕事は従来どおり続けて行かなければならないので、これは当然のことであつた。イギリスでアルパイン・クラブとイギリス地学協会とが『合同ヒマラヤ委員会』——前には『エヴェレスト委員会』と称していた——を作っている故智にならつた点もあるが、日本の場合イギリスの地学協会に相当するものがないので委員は実際には日本山岳会の会員のみの間から選ばれた。委員長には横有恒、

委員九名は藤島敏男、日高信六郎、今西錦司、伊集院虎一、堀田彌一、木原均、松方三郎、三田幸夫、西堀栄三郎で、後に早川種三を加えた。隊長や隊員の選定、渉外的な仕事、財政経理、弘報関係などがこの委員会の仕事であつた。準備を実際に進めるためには数人の会員が中心となつて日々の具体的な事務をとつた。

一九五三年の登山隊、ならびに一九五二年の踏査隊に対する正式の入国許可の通達があつたのは一九五二年五月中旬のことだつた。航空郵便で送られたのだが、宛名の食い違いから日本に来てから方まごつて、ようやく到達したこの公式の通牒は、手にとって見れば紙一枚の簡単なものだったが、ほとんど後光がさしているように見えた。日本のこれからのヒマラヤ遠征がこの一枚の紙片から開かれてゆくかのように思われたのである。

ヒマラヤ委員会はこの正式の通牒を受けとるのと同後して仕事を開始したが、まず第一に、マナスル一帯の事情を調査し登路を発見する目的をもって踏査隊を八月に派遣すること、踏査隊はおそくとも一九五二年中に日本に帰ること、踏査隊は同地方の学術調査をもすることなどを決定し、隊長として今西錦司博士を選び、隊員として田口二郎、高木正孝、中尾佐助の三名を決定した。その後隊員にはドクターとして林一彦が加えられ、一行がカトマンズに到着した後に、報道のため毎日新聞社から竹節作太がこれに加わつた。

踏査隊が羽田飛行場をたつたのは八月二十五日の朝であつた。踏査隊とはいっても三ヶ月間にすべての準備を完了することは容易なことではなかつた。ことに隊長や中尾、林両名が京都在住者であり、本部が東京にあることから来る不便も少なくなかつた。

本部は東京呉服橋の会員辰沼博士の病院の一室に決め、ここが事実上の作戦本部となり、兵站基地となり、また隊が出たあとではいつも連絡本部となつた。このことはヒマラヤ委員会が組織された一九五二年五月から、本隊が帰国して委員会が解散した五三年の九月まで続いた。今日、山の仲間では、呉服橋付近で辰沼病院を知らない者はいない。遠征に参加した者にとっては何れも断言してはばからないが、病院の側からすれば、七〇〇メートルの高さにして、なお米の飯を夢みるような人種に、いかに親しまれたところで、大した意味のあることではないに相違ない。いわゆる貧乏くじというやつである。

今西隊を送り出すと同時に、本隊のための準備が始まつた。しかし踏査隊が帰って見て初めてはつきりする点多々あるのであつた。十一月の下旬に田口二郎が用事のため隊と分れて先きに帰つて来た。ここで準備は本格的の段階にはいったが、なんといっても最後の仕上げは今西隊長以下が帰つてからのことであつた。

本隊の隊員の選考にはいったのも五三年一月にはいつてからのことであつた。しかし踏査隊によって可能なルートの見当も一応はついたわけだから、踏査隊が出かける前のような模稜たる状態ではなかつた。ただ戦争から戦後へかけての十数年間、われわれが海外の山から絶縁して来たことはなんとしても大きな痛手ではあつた。氷河の山で育てられ、しかも中堅として現役陣営に有力に参加し得るものは数えるほどしか持合せないのである。が、しかし、日本の登山界は万事が不自由であり困難であつた時代にとともに積み重ねられてきていた。その上に国民体育大会のような全国的な行事を通して、山の仲間が広く結ばれ、その結果人材の所在をかなりの確に知ることもできるのであつた。

本隊はなによりもまず登頂を目指すものであるから、山の上で動く有力な実動部隊を中心に隊の構成を考えなければならぬ。年齢的に見てこの実力派は山の修練や人生の経験からして三十歳を中心に考えるべきだということにも異論はなかつた。その結果選ばれた隊員は村山雅美、山田二郎、加藤喜一郎、村木潤次郎、山崎英雄、石坂昭二郎の六名であり、三十四歳から二十四歳までの世代であつた。これに対して田口、高木兩名が山にはいつてからのリーダーとして参加することは兩名の欧州アルプスでの経験や踏査隊員としての経験からして当然のことだつた。兵站と輸送の責任者として加藤泰安が選ばれたのは先発隊以来の台所係を現地に延長した形であつた。辰沼広吉は隊のドクター、これに前年来の調査を続けるために中尾、人文方面の調査のために川喜田二郎が加わり、報道の責任者として前年からの竹節作太が参加し、さらにカメラマンとして、毎日新聞の依田孝喜が加わり、これに十四人の隊員がそろつた。そして隊長として三田幸夫が選ばれたのである。

一見して了解されるように踏査隊も本隊も、程度の差はあつても、一つのグループとか一つの学校の山岳部関係者とかいうものを土台として組織されたものではない。この遠征が日本山岳会の仕事である以上、これは当然といえば当然のことだが、ヒマラヤ登山のように隊がきわめて強い結集力をもつてことに当らなければならぬ場合に、こうした総合的な選方法の可否が問題とされ得ることも明らかなのである。しかし、われわれは広く日本登山界の将来を考えて、これがより好ましいやり方だと考えたと同時に、山の場数もふみ、それぞれに山の男として一人前に育つた人々であれば、こうしたやり方からくる弱味を十分補うであろうと確信していた。ことに、出身した学校が違い、育つた環境は必ずしも同じでなくても、山岳会の仕事や、会の行事ではいつも力をあわせていた仲間であるのだから心配はいらないと思つていたのだが、実際の結果から見てもこの見当は狂つていなかった。登山隊の出発は三月十八日であつたが、これに先立って三月四日に田口ら三名がインドに向かつた。もっとも装具、食糧の類は

荷造りして先きに船便で一月中に出さねばならなかつた。この方面の担当者は昼夜兼行、目の回る思いであつた。遠征といつた仕事には、いつも、表に出ないこうした多くの同志の協力があるのだが、マナスルの場合には仕事の規模からしても、いろいろ初めての試みがそこに盛り込まれていたことからしても、この整備員の苦心はなみだつていたものではなかつた。遠征隊のあげ得た成果の少なからぬものが、この整備班の諸君の献身的な努力に負うものであることは説明を要しない。(日本山岳会評議員)

一九五二年の踏査隊

今 西 錦 司

カトマンズを後に

九月十四日 カトマンズ出発。王様の離宮のある、樹木のよく茂った丘のすそまで、ダルシャン君やクリシュナ君が送ってくれた。それから一キロも行かぬうちに、もう渡渉が始まる。雨が降ってきた。山麓のジッブルフェディという村で泊まることになった。

七十四名のポーター(人夫)に、ひとりの若いポーター頭がついている。彼はこうもり傘を片手にさげているだけで、荷物をかっついていない。

朝、どこにも便所がない。どこへ行ってもたれ流してある。村のまん中にある水くみ場のまわりに、いくつも石のほこらがならんでいて、手水をつかいにきた連中が、いちいち礼拝していく。子供がほこらに刻んである偶像の顔をなで、その手で自分の顔をなでている。

カカニはなかなか遠い。いつまで登っても、ふりかえるとカトマンズの町が見えている。二〇〇〇メートルあたりから、シャクナゲが多くなった。

カカニへ来たが、霧がさまよっていて、ヒマラヤは見えない。昼食しているとまた雨。降路は登路以上にけわしく、溝のようにくぼんでいて、そこを雨水がじゃあじゃあ流れている。

その夜は道ばたにある、れんがづくりの無料宿泊所にねた。戸のないはいり口から外をながめてみると、ほたるの光が、すうっと通っていく。

山が見える、という。急いで外に出ると、朝雲のただよう上に、白雪の山が出ている。正面にひとかたまりと、ずっと西の方

にもうひとかたまり、その方は恐ろしくとがっている。正面がガネシュ・ヒマール(七四〇六メートル)で、西の方のとがった山はヒマルチュリ(七八六四メートル)だ。ヒマルチュリの右に一段と奥まって、さむざむとした白い山が顔を出している。これがマナスル(八二五メートル)であった。

山をおりきって、川沿いの平地へ出た。どこもかも青々とした稲田である。ところどころで、田に入れる水が道を横切ったり、道にあふれたりしている。はだして歩いているポーターたちには、いっこう差しつかえないが、くつをはいたわれわれにとって、ネパールのたんぼ道は苦手である。

たんぼをつききって、ナワコットへ、赤土の道を登っていった。のどがかわくけれども、なま水は飲まないことにした。村のはずれまでくると、道の両側にぎっしりと家の並んだトリズリ・バザールが、目の下に見えた。あす越えようという峠の上には、黒い夕立雲があつまり、その下から夕日が斜めにさしこんで、丘の斜面にはえた松の木(三葉松)を照らしている。

最後の勇をふるって、トリズリ・ガンダキ(河)のほとりまで降りた。チベットから流れてくる川だけあって、たいした水量であり、また水勢である。ヒマラヤの川なるかなと思つた。橋を渡ったところで、インド兵から直立不動の姿勢で敬礼された。むこうの森の中にテントが見えた。日は暮れようとして、セミがひとしきり鳴いた。

食欲減退で、むやみに水がのみたい。水分のとり方がたらぬのだ、ということがわかったので、翌日から、途中で茶店のあるところに、お茶や牛乳をのむことにした。

それから日中、ときどき川の中につかちかちか、からだを冷やすようにした。これを『水牛遊び』と名づけたが、田口のごときは、歩いているかと思うと、すぐまた水につかちかちか、かれのシャツやパンツは、いつもずくずくのままであった。

トリズリ・バザールから、サムリ・バンジャンで一泊、カトマンジュで一泊と、山の上でばかり泊まるようになった。山の上はマラリヤをうつす蚊がすくなく、健康地であるため、部落はかえって、山の高いところに発達する傾向があるらしい。

耕地もまた、ずいぶん高いところまで登っている。山の斜面はたいいてい、谷底から八合目ぐらゐまで、階段状に並んだ水田にうずめつくされていて、実にみごとなものであった。

カトマンズを後に

カトマンジュの村はずれで、ガネシュの水河が雲のあいだからちらりと見えた。ほとんど山を降りて、午後はアंक・コーラの右岸沿いに歩いた。氷河から出てくる水をたたえて、アंक・コーラもトリズリ・ガンダキのように、白く濁って冷たい。

水牛やヤギの放牧された、きれいな草地をすぎて、樹林の間を登ってゆくと、ぱっと眼界がひらけて、草でおおわれた高台の上

にでた。キャンプには絶好の場所、ここはサレンタールの一角であった。

昨日は、珍しく雨が降らなかったと思っていたら、いつごろから降りだしたのか、さかんにテントをたたく雨の音がする。ちょうど六日間行軍を続けたことだし、一日休養するのもよからう。ただし、休養日に休養できぬのは、お医者さんの林である。患者が続々とつめかけてくるから。

アルガート・バザールは、プリ・ガンダキのつり橋を渡った右岸の崖の上にあつて、れんがづくりでわら屋根の家が立ちならび、トリズリ・バザールのにぎやかさはないが、古びておちついた感じを与えた。プリ・ガンダキの水もやはり灰色に濁り、水面を波立たせながら流れている。マナスルを一周して、いつの日か、再びここに帰ってくるであろう。

バザールを出はすれたところで休んでいると、頭の上の菩提樹ぼだいじゆの枝に、大きなサルが三頭もいるのだ。対岸の岩壁をみると、そこにもいる。岩壁から降りてきて、しまいに川原の上まで出てきた。二、三十頭の群れである。人がそばを通っても、ちっとも逃げようとしなない。

カトマンズ出発以来の四、五日というものは、ひんぱんに通行人とすれちがったが、カトマンズを遠ざかるにしたがい、次第に通行人がへってきた。それとともに道もたしかに悪くなった。アルガート・バザールからカンチョーへの登りや、カンチョーからダロンディ・コーラへの下りは、谷沿いの道だが、終始、渡渉の連続であった。

ダロンディ・コーラについて、下っていった。対岸の茂みには、タコノキがたくさんはえている。白い穂をつけた背の高い草が、一面にはえたところを通る。サトウキビの一種である。激流が川岸をどんどん浸蝕するので、この間まであった道が、もうなくなってしまうている。ジャングルの中に新たに切った切りあけをたどる。雨は降っている。コブランまでは遠かった。

翌日も雨、道はどろんこ。レントル・パンジャンで、うまいパイアを食べた。この辺で青物といえは、お化けのように大きなキウリがあるだけだったが、バナナ、パイア、ライムなどと、果物の方は豊富にあった。

雨に曇ってよくわからないが、丘のようなところばかり歩いて、マルシャンディまでの間には、もう山らしい山はなさそうである。道の両側はシャポテンによく似た、とげとげのあるユーホルビアの垣根、それは水牛が作物を荒さぬためにつくったものであろう。けれどもそのため、水牛の通る道も人の通る道もいっしょになってしまつて、ぬかるみはいよいよ、はなはだしい。

タルクガート・バザールまでと思っていたが、行程はかどらず、バハラ・フィルケという、ちっぽけな村で泊まることになった。一九五〇年に、マルシャンディをさかのぼつて、マナスルの西面をいさつした、イギリスのティルマンと同じ日程で前進できな

いことが、いささか不満である。

サーダーのガルツェンにいわせると、ティルマンのときは、リエゾン・オフィサー（通訳）のマラア大佐のほかに、カトマンズから大佐についできた五人のネパール兵がいて、彼らが始終ポーターのしりをたいたから、行程がはかどつたのであるという。

なおその他に、三人の巡査がいて、ポーターの徴集や物資の補給に當つていた、というのである。

だから、ガルツェンと通訳のディリー君とが相談して、これからさきは、われわれにも巡査が必要だといひだした。そこでディリーの書いた手紙を持って、ポーター頭が、明早朝ここをたつて、クンチャに走り、巡査を三名つれてくることになった。荷物をもたないポーター頭でも、役に立つことがあるものだ。

顔を洗いに出ていったら、行手にまっ白な山が見える。マルシャンディの向こうだから、アンナプルナの続きであるにちがいない。出発してしばらく行くと、こんどは右手に、ものすごくりっぱな山がでた。どう見ても手の出しようがない山だ。これはヒマルチュリだった。雲が動いてきて、見ているうちに山々をかくしてしまつた。

タルクガート・バザールは、トリズリ・バザールやアルガート・バザールとは、比較にならぬぐらいいなかじみていた。マルシャンディにかかったつり橋を渡つたところで、道が二つにわかれる。上にあがつて行くのが、クンチャを経てポカラへ行く道、川に沿つたのが、マルシャンディの上流へ行く道。われわれも明日は、いよいよ街道をはなれて、あの道にのるかと思つたうれしい。マルシャンディ入りを祝つて、ヤギを一頭買った。

マルシャンディ入り

マルシャンディ入り

せっかくマルシャンディにはいったのに、やっぱりたんぼの中を歩くことが多い。ウディフでは、村のまん中にテントを張つたから、たいへんな人ばかりである。甲状腺腫にかかっているものが多い。チベットからくる塩にはヨードがないため、おこる病気であるというが、真偽のほどはわからない。

五時半、マナスル三山がすっかり出ている。カカニの下りに見たときとちがつて、マナスルはヒマルチュリの左になり、その間にP二九（七八三五メートル）がはさまれている。マナスルの頂上から、まず日がさしはじめる。瞬間まっかに染まる。マナスルもP二九も、すぐとがっている。ヒマルチュリの方が、ここから見ると幅ができて、かえつてとがっていない。P二九とヒマル

チュリの稜線から、雪煙がたなびいている。

明日からお祭りというので、どこの村でも太鼓をどんどこたたいている。女、子供は、額に米つぶを七つも八つもくっつけている。お祭りの御馳走に、水牛の肉を売買しているところもある。牛を食ってはならないヒンズー教徒も、水牛やヤクの肉ならかわないのであろう。

日暮れどきに、やっとクディ・コーラのつり橋まで来た。キャンプは対岸の川原の、巨石のあいだに設けてあった。また六日間歩いたことでもあり、これからいよいよマルシャンディの峡谷入りになるので、明日は滞在して休養しよう。それにポーターたちにとっても、明日は祭日であるから。

しかし、カトマンズのポーターたち、なんだかおだやかでない。もうここから帰りたい、というのであるらしい。クディのヘッドマン(村長)にも相談してみたが、なにしろ祭りのことだから、ポーターに出ようというものが無い。やっとふたり約束ができたので、足をいためているふたりだけを、ここからかえすことにした。

マルシャンディの峡谷部へはいった。秋風らしいものが吹いている。右岸ばかりをつたい、最後に、ひた登りにのぼって、一四〇〇メートルでキャンプ。こんな高いところに案内村がある。水田はこの辺でも、一五〇〇メートルまではつくっている。

カトマンズのポーターたちは、着のみ着のままだから、朝夕の寒さがこたえるらしい。また帰りたいと、レジスタンスをはじめた。しかし、テグリンまで行けば、先行したふたりの巡査が、ポーターの用意をしているというので、もう一日辛抱してもらおうことにする。

川のそばへ降りると、マルシャンディの白く濁った水は、巨岩の間を、ものすごい勢いで流れている。水温も正午で摂氏一二度だから、この流れだけは、ヒマラヤの水河のおもかげを宿しているけれども、川の岸にはまだ、木生シダがはえている。バビリオ(アゲハチョウの類)が、るり色のはでな紋をつけて飛んでいる。

巨岩の下でキャンプしていたら、テグリンのポーターたちが、黒綿のはいた手製の毛布を頭からかぶって、続々と現われはじめた。これで、もうポーターのことを心配せずに、ベース・キャンプまで行けるようになった。

峡谷部へはいって三日目の昼まえ、ジャガート通過。レモンやミカンももうここが最後だろうと思って買いこむ。ここまではと、もうほとんど水田をつくっていない。それかわるものはシコクビエである。

四日目になってはじめて、竹製のつり橋を渡って左岸へ移った。兩岸の岩壁が、見あげるばかり高くなってきた。下から見たと

ころでは、この谷のせばまったあたりに、滝でもありそうだったが、近づいてみると、巨岩が累々と積み重なっているだけで、水はその下にもぐってしまっていた。

その部分を乗りこすと、川の様子が一変して、マルシャンディはひろい川原を、ゆるやかに蛇行しながら流れている。梓川(上高地)の川原のようだ、といったものもあった。川べりに家が軒あって、まっかに実のつたトウモロコシが干してあった。家のまわりの畑には、アマランサスが、葉鶏頭のように美しかった。

トンジェへもう一、二時間というところまで行ってキャンプ。五〇メートルほどへだたった岩の上に、ひと群れのラングールがいる。顔は漆黒で、頭も顔のまわりも、ふさふさとまっ白な毛でおおわれた大きなサルである。しっぽがたいへん長くて、そのさきがちょっとライオンのしっぽのようにふくれている。

朝食に、初めてバターがたかくなっていた。右岸にわたる。もう水量も少なくなっているのに、つり橋でなくてかけ橋である。異様な動物が草を食っている。それが牛とヤクとの雑種、ゾーであった。プチアの女が、毛糸をつむぎつつ通って行く。もうここはチベット人の住む地域である。

そのすぐそばに、数軒の家がかたまっていた。そこをダラバニといって、物資の集散地で、にぎやかである。米、鶏、鶏卵などを買いこんだ。テグリンのポーターたちは帰途に、ここで塩を仕入れて帰るつもりらしい。

トンジェは左岸にあるので、中尾とディリーとガルツェンの三人だけが、ヘッドマンに会いにいった。この辺までくると、コイン(硬貨)でなくては通用しなくなったので、われわれのもっている紙幣を、コインに換えてもらえないものか、相談にいったのである。しかし、この交渉は、思いどおりにはいかなかった。

松(五葉松)林の間を通りぬけて、怪しげな石門をくぐると、荒涼としたチベットふうの村が現われた。石を積み重ねて、壁がわりにした四角な家、平らな屋根、その屋根の上に旗ざおをたてて、大名行列に出てくるような、縦に長い白い旗がつけてある。

背景に雪のついた尾根が、雲の間からすし出していたが、暗れていたから、アンナプルナ第二峰(七九三七メートル)が望めるはずである。村の名前はバガルチャップ。ここで久しぶりに馬を見た。蒙古馬に劣らず小さいチベタン・ポニーであった。

それから山道にさしかかったところで、はじめて森林らしい森林にぶつかった。カシが多く、針葉樹もまじっている。蘚苔が木の幹にも葉にもくっついている。なんだか南九州の山を歩いているような気がする。

登りつめて、ツグディカダカという草地に出た。小屋が軒たっている。牛が草をはんでいる。きれいな小川。うしろの山には

森林続きにカールらしいものが見える。マルシャンディをへだてて前にそびえる山は、岩山で草つきが多く、高いところはすでに紅葉している。下流の方をみると谷いっぱい、マナスルからP二九へ続く水の峰が、空の色のようによく浮び出ている。夜明けにバラバラと雨の音。山の上はうっすらと新雪がついたが、日がさしたらすぐ消えてしまった。また石の門をくぐってタシザにはいる。ソバの畑。屋根にたてた白い旗が風にはためいている。屋根の上にはカボチャがいくつも干してある。

ナウル・コーラの出合には、びよぶのような大岩壁がたっていた。ほんとうにまっすぐ立っているのだから、かなわない。左岸の岩壁の下を谷沿いに進んで、道ばたのせまくるしいところにテントを張った。近くによい水が得られたからである。ティルマンの見たテント場だということで、われわれはここを『ティルマンのキャンプ』と名づけた。

谷がひと曲りすると前方左岸に、尾根から谷底までぶっとおして、てらてらにみぎきをかけたような、みごとな圍谷状の地形が現われた。これこそヒマラヤの水蝕地形にちがいないと思った。

右岸を二〇〇メートルばかり登って台地の上に出た。もう十月で、花らしい花はどこにも咲いていないのに、リンドウの花だけが咲き残っていた。

台地の上は松の疎林で、すてきに気持のよいところだった。そこを過ぎると景色がすっかり一変した。兩岸の山が後退して、その間に広々とした谷がひらけている。マルシャンディはもはや峡谷でなくて、高原を刻んで流れる川といった方がよい。松とビャクシンの疎林、点々とちらばった池、そのまわりの草原には牛、馬、羊、ヤギといった家畜が放牧されて、ゆうゆうと草を食っていた。

しかし、一般に草のはえ方がわるく、地表面が出てくる。周囲の山も、茶色い地はだの出ているところが多くなった。峡谷部を歩いている間は、しめっぽくて困っていたのに、ここまですると歩いていてほこりがたつ。ティルマンがセミ・デザートと形容したのは、まさしく当てている。

右手に見える山は、地図に出ている六一三メートルにちがいない。この山は帽子をかぶせたように、頂上だけしか氷雪におおわれていない。ヒマラヤの主脈を越えると、その北側では降水量が少なく、乾燥しているせいであろう。

六一三メートル峰のふもとに、ピサンという村がある。村はずれの、アンナプルナ第二峰を、鼻さきに仰ぎみるところでキャンプ。ピサンのさきにもっとした峠があって、それを越えるとまた、平坦な高原状のところ、ずっと奥まで続いている。もういちばん奥に、カリ・ガンタキとの分水嶺の山が見えてきた。山すそにバッドランド地形が現われて、景色は一段と荒涼さを増した。

昼まえに何気なく、アンナプルナ側から出てくる谷を一つ渡った。すこし行くと、田口と高木が望遠鏡を出して、その谷の奥を見ている。なにを熱心に見ているのか。『アルバイン・ジャーナル』の写真で見覚えのある、アンナプルナ第四峰（七五二五メートル）の頂上が、そこから見えていたのだ。さあ、ベース・キャンプを張るべき場所に到着した。

ベース・キャンプは、松の疎林の間に張られた。かたわらに池があって、きれいな水がこんこんと湧きだしていた。十月五日、カトマンズ出発から二十二日目である。われわれには、ティルマンといっしょに歩いたガルツェンがついていたから、彼の案内するにまかせて、至極気楽にここまでやってこることができた。そして、これからさきもおティルマンの足跡をひろって、アンナプルナ第四峰に登ろうというのである。

アンナプルナ第四峰への試登

ベース・キャンプの横を流れる谷を、ティルマンにしたがってサブジと呼ぶことにする。ほとんどまっすぐな谷で、そのつきあたりにアンナプルナ第三峰（七五七六メートル）とアンナプルナ第四峰の最低鞍部——五五〇〇メートルぐらい——が見える。望遠鏡で見ると、その鞍部に続くクロアールに、小さな氷河がかかっている。

十月七日 高木、ガルツェン、アンツェリン、ダーコの四名が、二十五名のポーターをしたがえて先発。午後になって、もうすこし高いところから山を観察しようと思ひ、サブジ左岸のバッドランドに登る。アンナプルナ第三峰から出ている尾根のはしっこである。朝は晴れていたのに曇ってきた。

ティルマン・ルートがガスの晴れまによく見えた。それは、アンナプルナの主稜にとりつく急なせまい尾根の上にあるが、その尾根の末端には大きな岩壁が出ている。岩壁から上はずっと雪稜になっていて、主稜のドームまでの間に三カ所悪場がある。

下から数えて第一の悪場は、大きな氷壁がバンドになって横に走っているところを、細くなった尾根がころうじて切れずに、はじが上がっているように見える。ティルマンが六〇メートルの固定ロープをつかかって、二日がかりでようやく乗り越えたという氷壁にちがいない。三カ所の悪場のうちいちばん悪そうであり、また回り道のきかない悪場である。

第二の悪場は、第一の悪場のようにやせ尾根になっていないが、やはり氷壁と尾根とがぶつかっている場所で、ステップを切ら

すには通れそうにない。第三の悪場というのは、ドームの直下に、それを取りまいて鉢巻ぎのように走っている線がそれであるが、やはり氷壁が出ているように見える。

朝起きると、山の上には新雪がつもっている。先発隊はどうしているだろうか。田口、林が出発する。

田口のつれていったシュルバのアンノが連絡にきた。それでわかったが、高木隊は最初の日はベース・キャンプから二時間半ほど前進したところに、キャンプ——このキャンプを中間キャンプと名づけた——している。そして、その翌日は第一キャンプまで行けるつもりでいたところ、第一キャンプまでの間でもう一つキャンプ——このキャンプをスペシャル・キャンプと名づけた——を張らねばならないことを発見したらしい。

最も、ここで第一キャンプというのは、ティルマンの第一キャンプを意味しているのであって、順序からいえば、ベース・キャンプのつぎのキャンプ、すなわち中間キャンプが第一キャンプでなければならぬであろう。しかるに、ティルマンの『アルパイ・ジャーナル』の記事をみると、ベース・キャンプのつぎに、いきなり第一キャンプが出てきて、中間キャンプのこともスペシャル・キャンプのことも、なんにも書いてない。ガルツェンの英語は半分も通じないのだから、いきおいティルマンの記事を、唯一のたよりとするしかほかのいれわれれにとつて、この連算の生じたことはむしろ当然であつたらう。

スペシャル・キャンプについた高木は、ティルマン・ルート^ルの根もとにわだかまっている岩壁を見て、ロック・ハーケンの必要を感じた。アンノはベース・キャンプへ、それを取りにきたのである。

みんな出てしまつて、ひっそりかんとしたベース・キャンプへ、また伝令がやつてきた。スペシャル・キャンプの田口からである。通信文の中に、

「前進パーティならびにガルツェンの意見では、十一人用の荷物を、第三キャンプまで運びあげる原案は、現在のこの不利なポスト・モンスーンの状況下において、遅滞なく再検討を要する。」

と前置きして、ティルマン・パーティは、サーブ四名、シュルバ四名で、スペシャル・キャンプから第一キャンプまで、全荷物を運びあげるのに、わずか二日間ですませるほどの軽装備であつたが、それにくらべると、われわれの方はあまりにも荷物が多すぎる。これでは荷物のリレーだけで、へたばつてしまつておそれがある。

だから、スペシャル・キャンプから上は、隊の編成を、アタック・パーティと、サポート・パーティの二本立てにすることにしよう。第三キャンプまであげる荷物の量を、軽減するようにでもしたらどうか。いずれにせよ、隊長に、一刻も早くここまであつてきてもらいたい。そして明後日の午後には、ここで、山を前にして、計画の再検討が行われることを希望する、というようなことが書いてあつた。

十月十日 今西、中尾出発。パンシーと伝令にきたダーコがしたがう。ダーコは、ヤギを一頭ひっぱっている。道は、毎日マナポットの連中が、草刈りにいくので、よく踏まれている。五キロばかり行ったところで、橋をわたつて、サブジの右岸にうつる。カンバがきれいに黄葉している。黄葉したヤナギの林をぬけるところもあつた。樹木がだんだんまばらになって、灌木原のようなところを通る。左から、小谷のはいるところに、目じるしの、かば色をした三角旗が立ててあつて、中間キャンプはすぐ見つけた。

ベース・キャンプについては、聞えないけれども、ここまでくると、さかんに雪崩の音がする。アンナプルナ第三峰の胸壁にかかった氷河がくずれおちているのである。夜ねてからも何回となく、雪崩の音をきいた。

久しぶりの大快晴に気をよくして、二子山の登りにかかる。二子山というのは、中間キャンプのうしろを仕切つた大きなモレーンの丘で、その上にこぶが二つあるから、二子山と名づけたが、道はこの二つのこぶの鞍部を、通りぬけている。

二子山をこえると、モレーンの中を流れる浅い沢に出る。その沢を登っていったら、大きな岩のあるところに、サルキ、アンツェリン、アンノの三人がいた。昨日まで、ここがスペシャル・キャンプのあつたところだが、キャンプの水が切れたので、きょうはもう一段高いところへ、移転したという。彼らは、この転宅の荷運びにきているところだつた。新しいスペシャル・キャンプについてみると、先発隊はすでに、第一キャンプまでの道つくりを完了し、荷あげも、半分ぐらいできていた。

さっそく、計画の再検討をやつた結果、田口、高木、林、ガルツェン、サルキ、アンツェリンの六人を、アタック隊として、ドームの上の第三キャンプに送りこむこと、あとのものは第三キャンプまでの間で、アタック隊を、サポートすることにきめた。アタック隊自身も、第三キャンプ以上では、登頂隊と、これをサポートするものにと、わかれる必要がある。

明くればよいよ、アタック隊を第一キャンプに送りだす日である。全員十一名が出動。しばらく歩くと、アンナプルナの主稜と並行に走つた氷河の上に出る。一キロぐらいの幅はあるが、表面は全部岩屑に、おおわれている。氷河を横切り、第一キャンプ下の岩壁めがけてスクリーを登る。半分ほどから上は、新雪がスクリーをおおっていた。

岩壁の根もとまであがつて、少し右にトラバースし、浅いクロアールにはいった。ちょっとした氷の滝があつて、そこには、ステップが刻んであつた。もう一つ上の滝には、固定ロープがおろしてあつた。この滝の上で、クロアールをはなれて、左から落ち

てくる溝のようなくぼみについていくと、第一キャンプに出られる。しかし、クロアルからのとっつきは、やはり滝になっていて、ここにも固定ロープがおろしてあったが、ここはアンザイレンして、滝の左手の岩場を登ってもよい。

昨日におとらぬ大快晴で、遠くの山までよく見える。ベース・キャンプからは見えない山が、たくさん出ている。とくに、ナブルナ第四峰のあとで試みた、六九〇〇メートル峰なのであるが、おそらく彼も、こちらから見て、ねらいをつけたのにちがいない。

午後一時半というのに、もう日がかげろうとしている。ポスト・モンズーンの北斜面に行動するものの悲哀である。第一キャンプの付近は、新雪が意外に深い。主稜の上の吹きだまりで、難渉するのではないだろうか。二時半になったので、これからさきの全権を田口にゆだね、お茶を一杯よばれて、サポート隊は山を降りる。固定ロープを利用して、二時間でスペシャル・キャンプにもどった。スペシャル・キャンプの高さ四八〇〇メートル、第一キャンプの高さは五四〇〇メートル。

十三日も快晴に明けた。アンナブルナ第三峰の稜線に雪煙が少したっているけれど、春山のようなのどけさである。この日の予定、第一キャンプのアタック隊は、第二キャンプへの道つくり、スペシャル・キャンプのサポート隊は、シェルバ三名で、第一キャンプへ最後の荷あげ。第一キャンプの人影が、肉眼ではっきりと見える。呼ぶ声も聞える。

九時、アンザイレンした三名が、動きだした。三人とも、大きなリュックサックを背負っているから、アタック隊のシェルバであらう。少ししてから、また三名動きだした。これがサブ隊であらう。どうも元気がない。稜線に出て、シェルバの休んでいるところまで追いついた。それから、しばらく登っていくのが見えていたが、あとは雪稜の影になって見えない。ドームからさきで、新雪をこがねばならない場合を考えると、ティリチ・ミール（七七〇〇メートル）に登ったノールウェー隊のように、スキー・ストックが、あった方がよいだろう。ポーターを走らせて、ベース・キャンプから取りよせることにした。

朝の調子では、いよいよモンズーンも明けたのかと思わせたが、午後になって、雲が次第に濃くなってきた。やがて、バラバラとあらが降ってきた。第一キャンプへ出かけたバンシーたちが帰ってきた。第一キャンプで、上から降りてきたアタック隊に出会ったという、つぎのような、田口の手紙を渡した。

「われわれ三名とも、昨夜テント内で、完全に山よいかかり、酸素を、もっと酸素を、と呼ぶばかりで、ほとんど眠れなかった。本日の偵察の結果、斜面の堅雪の上に新雪がつもっている、キックだけでは不安なので、ステップを切らねばならない

ところが、すくなくない。こういう状況下では、第一キャンプと第二キャンプとの間隔が、長すぎるように思われるから、ティルマンの第二キャンプ下の、氷壁に続いたナイフ・エッジの手前に、第二キャンプを設けることにした。このため、ティルマンの場合よりも、キャンプの数が一つふえる。あす、第一キャンプをサポート隊にゆずって、われわれの第二キャンプに進する。」

そもそも、われわれの計画というのは、ティルマンのやったとおり、キャンプを前進させて、それで、われわれの力なら、どこまで行けるかを、ためそうというのであった。しかるに、雪の状態が悪くて、まだ、ティルマンの第二キャンプまで行っていないうちに、はやくも、計画のつまずきをきたした。いまからこれでは、ティルマンの第二キャンプと第三キャンプの間にも、またもう一つキャンプをつくる必要が、おこってくるのではないだろうか。主稜へ出てからも、そうした状態が続くとしたら、アンナブルナ第四峰の登頂は、予期していたよりも、だいぶむずかしくなるのでないか。

いずれにしても、ティルマンどおりには、前進できないということが明らかになった以上、われわれのアンナブルナ計画を、もう一度、考え直してみる必要がある。アンナブルナ第四峰だけで、全力を使いつくすわけにはいかない。あとにまだ、マナスルの偵察があるから、それに天気も、どうやらまた下り坂らしい。夜になっても、テントの上にポツポツと、雪の降りかかる音がする。せっかく切ったステップも、かき消されてしまうであらう。

翌朝起きると、一面に雪が積っていた。雲がひくくたれている。予定どおり、中尾とシェルバ三人が、第一キャンプへ移動するため出発した。晴れ間に見あげたところでは、第一キャンプの連中、きょうは休むつもりであるらしい。中尾らが出発したあとへベース・キャンプへ出した使いが帰ってきた。リングのついていないストックと、輪かんとを持ってきた。画をかいってやったのだが、スキーを知らないディリーは、ストックのリングと輪かんとを、とりちがえたのである。

キャンプの付近の雪は、午後には、もうほとんど消えてしまった。第一キャンプの上には、アタック隊のつけたシュプールが、雪におおわれて、かすかに残っている。

十月十五日 北の空に、わずかばかりすいたところがあるきりで、空は重々しく曇り、山も濃い雲に包まれている。第一キャンプの連中、依然として動きそうにない。そのうち、三人おりてくる姿が見えてきた。うちふたりは、相当な荷を負っている。から身のひとりは滝の上まできて、あとのふたりと別れ、またひとりで、上へ引きかえして行く。降りるふたりを確保しに来たものであろう。

昼すぎになると、また、あらがバラバラ降ってきた。そこへ、アンノとダーコとが帰ってきた。田口の手紙が、つぎのようなことを告げている。

「毎日雪が降って、第二キャンプへ行くとき通らねばならない斜面に、雪崩の危険が刻々増加しつつある。われわれの高度馴化は、まだ十分だとはいえない。環境的条件も主体的条件もよくないから、ひとまず攻撃を中止して、スペシャル・キャンプへ退却することに決定した。きょうじゅうに降りるか、あすにするかは、午後の天気具合をみたうえできめたい。」

そここうするうちに、第一キャンプの連中が降り始めたといつて、シェルバやポーターが騒ぎだした。望遠鏡をとってみると、なるほど人影が見える。もう例のクロアールのところまで降りているものもある。あわせて八名、全員退却ということであるらしい。

ティルマンのときに比べて、雪のコンディションがよくないばかりでなく、天候もまたよくないのである。それにこのルートは北斜面で、日当たりが悪いから、降りつもった雪が、容易に落ちつかないかもしれない。無理をしない方がよい。われわれは、アンナプルナ第四峰を思い切ることにしよう。

気持が軽くなったせいもあるう、となりのアタック隊のテントでは、いつまでも話し声がしている。話し声のとだえたころにはテントをたたくあられの音が、ようやく頻繁になりだした。夜中に、小便に起きたときは、テントの外が、もうまっ白になっていた。きょうの総退却の判断が、適切であったことを、確認さすかのよう。

あくる日も相かわらずの天気、主稜は重苦しく雲に包まれている。雪が降っていることであろう。田口、中尾は、アンノをつれて山を下る。シェルバ四人が、中間キャンプまで荷物をおろす。高木、林は休養。今西は、キャンプから見えている万年雪を調べに行く。

スペシャル・キャンプの最後の朝。新雪がまた、うすく地表をおおうている。ポーターが二名、撤収の手伝いに来た。残った四つのテントをたたんで、山を降りる。四五〇〇メートルぐらいからは、雪が雨にかわった。降っているのか、いないのかわからぬ、ぬかのように細かい雨であった。

森林限界付近のタケカンバは、もうすっかり葉をおとしていた。しかし、メギヤタマリスカの紅葉は、いまがさかりで、もえるように赤かった。二時ごろ、ベース・キャンプへ帰った。

チュルールの登頂

さて、これからどうするか。会社の用事がひかえている田口とは、これで、お別れしなければならない。竹節が来るかこないかは、まだ明らかになっていない。今西は、ベース・キャンプをこのままにしておいて、こんどは、アンナプルナと反対側の山を試みようといった。ピサンの六一三メートル峰から続いて、ちょうど、キャンプから正面に当るところに、二つの顕著なピークが認められるのである。あれなら一週間で、十分やれるだろう。あれなら登頂できるにちがいない。

つぎの日は休み。洗濯屋と散髪屋が忙しい。昼まえ、四人づれの芸人がキャンプを訪れた。夫婦ものふた組で、チベットからきたそうだ。チベット人ならきたないはずだが、この芸人の女は、ふたりともきれいな着物をきて、ござっぱりしていた。女ふたりが打つ太鼓にあわせて、男ふたりが舞をまわした。

天気はまだよろしくない。曇りがちで、うすら寒く、サブジの谷の奥は暗い。夜になって小雨が降りだした。

また出発の準備。荷物の仕わけがはじまる。天気はまだ、ほんものではないけれども、どうやら風の様子が変わってきた。なんとなく大陸風とでもいいたいような、少し寒さを帯びた風で、松のこずえにあたって、しょうしょうと音をたてた。やがて、田口が帰って帰るといふ、チベット馬がひかれてきた。首につけた鈴が、チリンチリンとなった。田口は、馬の上で手を振りながら帰っていった。従者を四名したがえて。

田口と入れちがいに、ポストマンがあがってきた。故郷からの通信といっしょに、竹節の通信がはいついて、ひとり後を追っていることがわかった。十八日にトンジュに着くという、ジャガートからのたよりであった。

十月二十日 九時半出発。サーブ四名(今西、高木、中尾、林)、シェルバ六名、ポーター八名。ベース・キャンプから、一キロほど上流で橋をわたって、マルシャンディの左岸を、パッドランドのすそに沿って引きかえすと、ちょうどサブジとむかい合わせになるところに、一つの谷がはいっている。ベース・キャンプからは見えないが、そこに、四、五軒の家が点在した、小さな部落があった。

チュルールの登頂
村の名前を聞くと、チュールといった。谷の名前もチュールである。谷の奥にそびえる、われわれの目標の山もまた、チュールというのだそうである。日本なら、チュールの頭とでもいうところだろう。しかし、ほとんど同じぐらいの高さのピークが、二つ

ならんでいるのだから、東の方のピークを『東チュール』、西のを『西チュール』と呼ぶことにした。西チュールの方が、とがっていて、見たところきれいだ。

左岸つたいに谷を登っていった。谷沿いには、やはり松の木が多いけれども、斜面を濃緑色に染めているのは、ビヤクシンである。一時間あまり登ったところで、谷がふたまたにわかれる。その間の段丘状になったところをしばらく行くと、ビヤクシンの大木の間に、テントがはってあった。高さは四二〇〇メートル。豪勢なキャンプ・ファイヤーを楽しむことができた。どこもすっかり暗くなっても、アンナプルナ第四峰の頂上だけは、残照でほのあかかった。

右またにはいって、その左岸の斜面を、道沿いに登った。森林限界はすぐ越えた。四五〇〇メートルだった。森林限界以上を占める草つきは、放牧地として利用するものとみえ、いたるところに、家畜の踏み跡や、ふんが残っている。けれども、もうシーズンがおそいから、どこにも、家畜の姿は認められない。夏だったら、この辺は百花が咲き乱れていて、その間をヤクや羊の群れがうろついていることだろう。

草つきは、五〇〇〇メートルぐらいでおわって、それから、がらがらした岩屑地帯がはじまる。先頭はこの岩屑地帯を、右またの上端にかかった、氷河のツングゲ目がけてトラバースをはじめた。水を求めているらしい。ティルマンも、この辺からナウル・コーラへ越しているのだが、そのときは六月だったので、雪どけの水が、どこでも豊富に得られたそう。

とどき立ちどまって、呼吸を調節しながら、アンナプルナの方をふりかえると、下からは見えないアンナプルナ第三峰の頂上顔を出している。これで、アンナプルナ連峰の大物が、全部顔をそろえたというわけだ。まさに大観である。

トラバースに三時間もかかって、やっとツングゲの下についていたが、水は流れていなかった。雪でしんぼうすることにして、ここでキャンプ（五三〇〇メートル）。アンナプルナ第四峰の第一キャンプに、ほほびしい高さである。南向きの山のありがたさに、こはまた目があたっている。しかし、もうすぐ暮れるというので、ふたりだけ強いのを残して、あとのポーターをかえした。彼らはまるで脱兎のごとく、一目散に山を駆けおりていった。

翌日も大快晴に明けた。ツングゲの横をまいて、五五〇〇メートルでアイゼンをつけ、氷河の上に出た。しばらく急なところがあって、そこを登りきると、あたりが広々としてきた。一面に雪をかぶっているから、氷河の上のような気がしない。午後一時、雲がたちこめてきたので、五八五〇メートルでキャンプ。

その夜は、ずいぶん風が荒れたけれども、寒くはなかった。寒暖計は、最低摂氏零下二〇度を示していた。きのうのように午後になると、雲が出てくる心配があるから、早く出発したいと思ったが、日があたるまでは、行動しにくいものである。

アンツェリンをキャンプ・キーパーに残して、九時まえ出発。

下からみて、見当をつけておいた西チュールの南尾根は、どこから取りつくかというだけで、尾根そのものには、どこにも悪場らしいものがない。キャンプから二キロほど登ったところに、一段のアイス・フォールがあって、それを越えればまた、広々としたカール状の地形が、東チュールと西チュールの鞍部まで続いている。

先頭にたった高木が、クレバスの間にうまくルートを見つけて行く。アイス・フォールは、案外簡単に乗り越えて、南尾根へは、雪のついていない黄色っぽい色のガレを登ることにした。

尾根へ出てからは、また雪ばかり踏んで、十二時に頂上、バロメーターは六二〇〇メートルを示した。頂上に立ってながめるとチュール級の、頭だけ氷雪をかぶった山が、チベット境を北から西にかけて、数えきれぬぐらい並んでいる。そしてそのすべてがやがて一度は、初登山の対象になる山だということを考えたとき、おのずから心のひろまる思いがした。

下りは慎重に、頂上からアンザイレンした。高木、中尾、ガルツェンは、東チュールの偵察をかねて、鞍部の方へ回った。ガレの下で待ちあわせて、ランチを食べた。アイゼンがよくきくので、アイス・フォールも心配なくとおり、午後三時キャンプ着、案のじょう、雲がまき始めた。

翌日は東チュールに登る予定だったが、だれも登ろうとしないので、東チュールを放棄して、今西、高木、ガルツェンは、尾根つたいに、その他はツングゲのキャンプによって、一日で、ふたまたのビヤクシンの森まで下り、そこで落ち合うことにした。

ひろい雪原を左の方にとって、ナウル・コーラとの分水嶺へ出た。ナウル・コーラにおりる谷は、ひろいゆるやかな谷であった。右手に、ピサンの六一三メートル峰が、はげしい形相をしてそびえ、左手には、ナウル・コーラの本谷をへだてて、ティルマンの六九〇〇メートル峰がそびえている。そして、この二つのピークの間から、ちょうどよい具合に、マナスル、P二九、ヒマ

ルチュリの三山が、おそろいで顔を見せていた。

登りところが、下りは、アンナプルナを真正面に見ながら行くのだから、すばらしい。天気もまた、すばらしくよく晴れている。それに風がちっとも吹かないから、暑いくらい。ここだけでなくて、アンナプルナも——第二、第三、第四は——雪煙をあげ

ていない。

しかるに、アンナプルナ第一峰だけは、ものすごく雪煙をあげている。これはどうしたことだろう。アンナプルナの大陸壁の右に見えるピラミッド型の山が、これまた、ものすごく雪煙をあげている。あれは多分グウラギリ（八一七二メートル）であろう。八〇〇メートルを越えない山と、八〇〇メートルを越した山とで、こうもちがうものだろうか。

森のキャンプで、ひと晩ぐっすり寝て、帰りは谷を下らずに、バッドランドの上の台地へ出る道をとった。その道は、ほとんど登り下りのないトラバース道で、山をながめながら、のんきな気持で歩くことができた。一頭の白い大きな羊が、高みから、われわれの通るのをながめていた。逃亡したものの、仲間が一頭もいなくなつては、やはりさびしいであろう。見えつかくれつ、しばらくわれわれのあとを追っていた。

台地には、ヨモギが一面に散生していて、踏むとよいにおいがした。片すみに、ラマ寺の廃虚のようなものがあった。石をつんだチベット人の家が数軒たつているところもあったが、人はいなかった。

ベース・キャンプに帰ると、ディリーが、竹節がきている。しかし、いまはシカ狩りに行っているという。シカは、この辺にたくさんいるらしいのである。おそらくジャコウシカであろう。この日もたくさん出たそうだが、獲物はなかった。竹節はひとり旅の苦勞を話してくれた。

西側からのマナスル偵察

十月二十九日 ベース・キャンプを引きはらって、いよいよ、マナスルへの行軍が始まる。さわやかな秋風が、高原の上を吹きながれている。太陽はさんさんと降りそそいでいる。しかしもう、畑に出て働いている人間も、草をはんでいる家畜も、ほとんど見あたらない。

ピサン湖畔にかかるところで、ポーターたちに追いついた。ブラガやナンボットの連中で、四十二人という中には女もかなりまじっていた。だいたい、農業関係の仕事が一段落ついたので、連中にすれば、これから冬にかけては、出かせぎの時期である。なかには、このままカトマンズまで出るといふものもあり、また一度帰って出直すが、そのときは、ビルマまで行くのだ、といっているものもあった。

翌日、あてられてらに磨かれた岩壁の下を通過して、もう一度観察してみたが、目が肥えたせいも、もはや氷蝕地形であるようには見えなかった。氷蝕でなければ、上にのっていた岩盤が、すべり落ちた跡であろう。ティルマンの『ネパール・ヒマラヤ』には、地すべりだと書いてある。

ティルマン・キャンプを素通りして、チャメの岩壁の下で、川を右岸へ渡ったところの、ソバを刈ったあとの畑にテントを張った。ポーターたちの中には、テントのそばで自炊して、夜もそのままそこで、ごろ寝しているものが何人かいた。カトマンズのポーターでは、ちょっとまねのできぬ芸当である。自炊といっても、彼らは湯をわかすだけであつて、その湯でツァンパをこねればそれでもう食事の用意ができたことになるのだから、まことに簡便である。湯がなければ、水でもことたりらしい。行軍中に、腹のへつたようなときには、水でこねて食っているところを何度も見かけた。

テグリンのポーターたちも、キャンプ・ファイヤーのそばで、よく踊ったが、チベット人もよく踊る。しかし、踊りの歌も踊りそのものも、両者の間では、まるでちがう。言葉も宗教も、衣、食、住もちがうのだから、歌や踊りだってちがって不思議ではない。

キャンプを出てすこし行くと、正面にマナスルが見えている。頂上をとりまいて一段低いところに、たくさん針峰が並んでいるが、まだその続き具合がよくわからない。ナウル・コーラの合合まできたら、トウヒの森にセミが鳴き、草の葉がまだ青いのに見えなかつた。

タンザをすぎて、中腹のトラバース道になる。はるか下流にトンジェのうしろの草山が見えてきた。ツグディカダカの牧場には、もう牛は一頭もいなかった。まわりの森のツタが、もえるように紅葉していた。このまえば見えなかつたが、カールのうしろや右よりのところに、一つ二つ針峰の頭のさきだけのぞいている。

ここで二隊にわかれて、今西、高木、竹節は、ここからカールのある山に登り、マルシャンディをへだてて、マナスルの西南面を観察する。中尾、林はこのままトンジェへ出て、ゾード・コーラへはいり、ピムタコーチに先行して、その辺の適当なところから、マナスルの西北面を観察する。リエソンのディリーは、中尾たちといっしょにトンジェへ行って、今西隊の到着までに、ラルキヤ越えに必要なポーターと物資とをととのえておく、という計画をたてた。

そこで今西隊の方へは、ガルツェン、アンツェリン、ダーコの三シエルバと五名のポーターを残して、その他のものは、トンジェに向かった。牧場に残つて、草の上にグラウンド・シートをしき、寝そべて空をながめていたら、アマツバメがたくさん空を

飛んでいった。

われわれは、地図にナムン・バンジャンと記されている峠道を、つたうつもりであった。さいわいポーターのひとり、たった一回ではあるが、この峠を越えて、ボカラまで行ったことがあるというので、峠の上ぐらゐまでは行って見たいと思った。ツグデイカダカは二五〇〇メートル、ナムン・バンジャンが五四〇〇メートルとすれば、峠までに二回キャンプしなければならぬであろう。

小屋の横で道が別れている。割合よく踏まれた道だ。山は、五合目ぐらゐから上の木は、もうすっかり葉をおとしているが、それから下になると、針葉樹の間に黄葉した木がまじって美しい。みちみちシヤクナゲの多いのが目をひく。

雨が、しょぼしょぼ降ってきた。道ばたの岩の下にもぐりこんで、一時間ばかり雨宿りした。やがて雨があられに変わった。小やみになったところで出かけると、あられがつもって、もう道が白くなっている。三五〇〇メートルで森林限界を越えた。水が出たのをさいわい、三六五〇メートルでキャンプした。

夜の間に降った雪は、朝になったらやんで、山が出てくる。ツード・コーラの奥に七二四五メートルの無名峰、それから国境のチエオ・ヒマール(六八一二メートル)やヒムルン・ヒマール(七二二六メートル)、近くはティルマンの六九〇〇メートル峰などが出てくる。しかし、この雪では、装備の悪いポーターをつれて、キャンプを前進させすわけにいかない。ここから、軽装で行けるところまで行ってみることにしよう。

道は、カールのへりのいちばん低いところに通じている。そこは四〇〇〇メートルぐらい。そこまで行かぬうちに、もう雲が動き始めて、マナスルは出たり消えたりしている。右の方にとがっているのが、下から見えていた針峰らしい。その続ぎに、万年雪も見えている。

昼すぎ、また雨が降ってきた。上を見ると雲に包まれて、もうなにも見えない。四五五〇メートルだった。まだ時間は早い、引き返すことにした。

ふと目をさますと、テントが明るいので、もう朝になったのかと思って外へ出たら、中天に、満月が、こうこうとささえていた。ひるまは天気が悪いが、夜になると晴れるのである。そうだとすれば、朝早く、雲がまだ出ないうちをねらわないことには、偵察の目的が達せられないであろう。

翌朝は七時に出発、カールを横切って、その東端の一角に登った。せつかく意気込んできたのに、頂についたときは、はや雲が

動き始めている。マルシャンディの下流、ネパール南部の丘陵地帯からインド平原にかけては、一面の雲の海。

そのうち、まことに幸運なことには、マナスルにかかった雲が、少しずつ消え始めた。P二九も出てきた。ヒマルチュリも出てきた。この好機逸すべからずと、写真をとったり、スケッチをしたりした。マナスル西南面の輪郭は、これでだいたい頭にはいった。ただ、マナスルとP二九の間のコルが、ここからは見えないし、また、このコルから出ている谷が、はたしてムシ・コーラの原流に当たっているかどうかを、確かめることができなかった。それは、こちらのいる場所が低いのだからしかたがない。四〇〇〇メートルを少し出たぐらいでは、まだマナスルの頂上までゆうに四〇〇〇メートルの開きがある。

キャンプまで下らぬうちに、もうまた、雲に包まれてしまった。急げば、これからでもトンジェまで行けるのだが、もうひと晩ツグデイカダカで泊まることにして、ゆうゆうと秋の色彩を楽しみながら、山を下り、翌日の昼すぎトンジェにはいった。

中尾、林は、パンシーとサルキをつれて、予定どおりビムタコーチへ先行していた。ディリーが待っていた。たまたま、インディアン・アーミーが、ブリ・ガンダキからラルキヤを越えて、トンジェにおりてきたそう。そこでさっそく、われわれのリエゾン・オフィサーは、彼らに事情を説明して、彼らのもっていたコインと、われわれの紙幣とを交換することに成功した。その上、砂糖までふんだんにせしめることができたから、これで心配なくラルキヤが越えられるという。「サンキュー、ディリー」では、あすただちに、中尾隊のあとを追って出発することにしよう。

ツード・コーラの水も、マルシャンディの本流におとらず濁っている。出発してすぐ左岸に移った。日を受けて歩いてみると、低いだけに、やっぱり暑い。道ばたにソリダゴの黄色い花が咲きみだれていた。チルジェは右岸にあった。すっかりチベットづくりで、なかに、ゾーバのたくさん泊まっている家があった。蒙古旅行の馬宿を思い出した。

上から、かわいい女の子がふたりおりてきた。中尾隊のつれていったポーターで、持ってきた通信の中に、

「ビムタコーチの上、三九〇〇メートルの森林限界付近にキャンプしている。ラルキヤ峠には、目下三〇センチの雪が、約三キロにわたって積っているのみ、恐るるにたらず。キャラバンが毎日通っている。」

と書いてあった。チルジェから一時間ほど登った川ぶちでキャンプ。しばらく行くと、出作りの小屋の立った広い畑地に出た。トンジェのうしろに、万年雪をつけた山が見える。ナムン・バンジャンの山に違いない。ここからだといふぶん高く見える。ゾーバの群れや羊の群れが、山からおりてくるの出あう。みな塩の袋を背負っている。

畑地に続いて、左から出た高い尾根を越えるところがある。そこは、ちょっとした峠になっていた。峠を降りたところにも畑があり、家が一軒あって、女が機を織っていた。ここは二五〇〇メートルだったが、この峠を境にして、上流にはもう常緑広葉樹林は見られず、松、ツガ、イチイ、モミといった針葉樹の、黒々とした森林にかわった。その中であって黄色くみえるのは、カエデであろう。黒木におおわれた前山の向こうには、雲一つない青空を背にして、白い山がのぞいていた。

北からはいる支流とわかれて、谷が右折するあたりから、七二四五メートルの無名峰が見えたが、マナスルはまだ見えない。チルジエ以来ずっと右岸ばかりつたっている。常緑広葉樹の蘚苔林はなくても、ツガの枝から長くたれ下がったサルオガセが、この谷の湿潤さを物語っている。四時ごろ、マナスルの前衛で、われわれが三本槍と仮称した、みごとな岩峰の下を通過。それから三十分も歩いたころ、モミの大木の間から、紫色の煙が上がるのが見えた。この森の中のキャンプ、高さは二九五〇メートル。マナスルがよいよ出てきた。三本槍から続いた西尾根、北峰へ続く北尾根、北峰、七二四五メートルの無名峰と、一大パノラマが展開した。やがて谷が左折する。まだモミの森林。一軒、家があった。塩をつんだゾーバや羊が相かわらず降りてくる。登りが急になってきたと思ったら、知らぬうちにモレーンの上に登っていた。

モレーンの丘をつききると、山すその間にメドウが開けてきて、ビムタコーチの家はモレーン寄りにかたまっていた。ビムタコーチから一時間半ほどで、中尾隊のキャンプについた。

中尾隊は、ティルマンの観察したとおり、北峰の北側のコルにとりついて、それから北峰越えで、その南側のコルへ出る以外には、西北側からのマナスルの登路はない。しかし、北峰越えは相当な困難が予想される。しかるに、北峰の南のコルをおして見えるサマ側の斜面は、ティルマンの『アルバイン・ジャーナル』にのせた写真からもわかるように、雪のついた斜面である。だから、東北面からこの雪の斜面を登って、直接頂上のプラトリーにとりつく登路が求められるとすれば、その方をとるべきであろう、という結論を用意していた。同感である。われわれもツード・コーラを登りながらそう考えていたのである。

しかし、ラルキヤ越えには、燃料がないから早出して、向こう側の燃料のあるところまで一気に越してしまわねばならないという話、それなら、あすは一日休養して、英気を養うことにしよう。

朝起きるなり、モレーンの丘に登ってみた。低く見えているが、それでも一〇〇メートルや一五〇メートルはあるだろう。上にあがると、ヒムルン・ヒマールからチェオ・ヒマールに続く国境の山々が、ひと目に見わたせた。ヒムルン・ヒマールの左に、高さは低いながらもすこくつ立った山がある。ラルキヤ峠そのものは見えないが、それとおぼしきあたりが低くなっている、そこへへん明るい感じをうける。

ヒムルン・ヒマールの両側から一本ずつ、ラルキヤ側から一本、合計三本の巨大な氷河が、目の前に横たわっている。これらの氷河も岩層で、一面におおわれていて、流れているというよりは、横たわっているのである。氷河の表面は、モレーンの丘の上にくらべると、四、五十メートルは低いであろう。とれだけの時間がかかったものかわからぬが、氷河が生きて、動いて、さかんにこのモレーンを運んでいたときからいままでの間に、すでに、この高さに相当するだけの氷が、とけてしまったことを示している。

東側からのマナスル偵察

十一月九日 ラルキヤ越え、八時まえに出発。この辺のかつてを知ったポーターたちは、もうずっと先きの方を歩いている。モレーンの丘に沿って進み、だいぶ登ってから一度谷を渡って、反対側のモレーンの上に出た。谷の水には氷がはっていた。

ナムン・バンジャンの万年雪のついた山が、いよいよ高く見える。登りそこなったことが、いまごろになって残念だ。遠くピサンの六一三メートル峰も出ている。こちらからだとして、裏側を見ているので、あの特徴のあるアイス・キャップがわからない。頂上まで岩で黒い。ティルマンの六九〇〇メートル峰ももちろん見えている。

峠の近くになって、落石の危険のある山腹をへつった。そこを越すとまたモレーンを伝って、一度も氷河らしいものの上を踏まずに、五二〇〇メートルのラルキヤ・バンジャンまで登ってしまった。

峠の上は風が吹いて寒いので、少し降りたところの岩陰に休んだ。チベット人たちは要領を心得ていて、こういう寒いところは、小走りに通りすぎたが、ネパール人のポーターがひとり、ところもあろうに、寒い峠の上で倒れていた。たまたま林が通りかかったので、介抱してつれてきた。驚いたことに、この雪のつもった峠を、六名のネパール人は、はだして越えたのであって、倒れていたというのも、このはだし組のひとりであった。

休んでいると、下から、羊のキャラバンが上がって来た。上からは、二十頭ばかりのヤクのキャラバンが降りて来た。シェルパたちは、ヤクに荷を負わせて、から身で歩いている。今朝、ビムタコーチをたってきたキャラバンであって、このヤクともに、荷

物をおわせる予定であったが、なかなかやって来ないので、待ちきれずに、出発したのである。しかし、結局ヤクの方が、人間よりも早い。彼らはちっとも休まないから。

峠から東の方を見ると、これでも同じ山脈の続きかと疑われるほど、ちがった風景が展開している。やはり、チベット境の山だといったような山もない。どれもこれも地はだの出した山であり、すその方に、枯れ草のはえているのが、せいぜいである。その地はだというのがまた、黄色っぽかったり、黒ずんだり、ブルーがかったりしていて、どこがおもしろいのかよくわからないが、いくから見てもあきないものである。氷河の山よりも、もっとなにか異郷的なものを感じていたのだ。あるいは、内陸アジアに対する郷愁を感じていたのかもしれない。

新雪が積っていたのは、中尾の通信にあったように、峠の上ほんのしばらくの間だけであった。モレーンの上か、岩屑でおおわれた氷河の上かはっきりしないが、相当でこぼのあるところを、どんどん下っていった。次第に左の方の、草山のすそに近づいていって、道はいつしか、山すそと氷河との間のくぼみを通るようになる。そこに一カ所、かわいらしい氷河湖があったが、その水にももう氷が張っていた。

モレーンに沿って歩いた距離からいうと、こちら側の氷河も、ずいぶん大きいということがわかる。やっと氷河の末端まで来た。そこから下は川原が開けて、もはや飛石つたいには、渡れぬぐらいの水が流れている。対岸の草原にキャンプ、四一〇メートルで、まだラルキヤ・マーケットまでは来ていないが、それでも一日のうちに、一三〇〇メートル登って、一一〇〇メートル下ったことになる。

キャンプにおちついて、なに気なく、後にあるモレーンの丘に登ってみた。モレーンの丘といっても、キャンプの側からでは、土手に登るぐらいの高さしかない。しかし、反対側は深くおちこんでいて、数十メートル下を川が流れていた。その川は、一キロほど下流で、右岸から出ている氷河につきあたっている。氷河の奥に、左辺が急で、右辺のゆるい不等辺三角形をした、大きな白い山が出ている。夕闇のせまる中に、いくぶん鮮明さを欠いて出ている。

あれはなんだ。マナスル以外に、こんなところに、こんな山があるはずがない。しかし、いままで見てきたマナスルとはあまりにもちがうではないか。マナスルという山が、こんな温かな山であってよいのだろうか。翌日は、サマまでくだる予定だったけれども、マナスルの登路発見ということは、われわれとして、第一に考えねばならない課題であり、しかもその課題が、いまやまさに解決されようとしているのである。それをうつつちやっておけるかというので、パンシ

ーに、森林限界までいったら、そこでキャンプして待っているようにいつけておいて、高木、林、竹節、ガルツェン、サルキの五名は、マナスルよりの右岸の山へ、今西、中尾は反対側の左岸の山へ、それぞれ偵察に出かけることにした。

出かける前に、うしろのモレーンの土手の上にあがっていたのだが、ワイルド・シープ(野生の羊)がいるという。望遠鏡をとって見にいいたら、ちょうど高木たちの登ろうという山の中腹あたりの草つきに、大小とりまぜて十五、六頭もいる。向こうでも気がついたのか、ぼつぼつ動きだして、とうとうみな姿を消してしまった。シェルパかチベット人のポーターが見つけたのであるが、枯草色をした動物が、枯草の中にいるのである。それをちらと見ただけで、すぐ発見する彼らの能力には、舌をまかざるを得ない。

マナスルの登路は、まず北峰とナイケ——北峰からブリ・ガンダキに出ている尾根上の顕著なピーク——との間のコルに取りつき、そこからさきは、北峰の東側をまいて、氷河の上をマナスルと北峰との間のコルに出る。このコルからもう一度東側へもどって、さきの氷河に続いた斜面を登り、最後にちょっと急なところをぬけると、そこはもうティルマンのいわゆるプラトリーである。

あとは尾根とおしに頂上。だれが見たって、ここから見たかぎり、これ以外の登路は考えられぬであろう。ラルキヤ・マーケットには、だれもいなかった。正面に、ブリ・ガンダキ左岸の氷河をつけた山が、とげとげしく立ちふさがっている。これも登れるようには作られていない山の一つであろう。ギア・ラの方を見ても、尾根の上に一カ所万年雪が見えるだけで、荒涼としていたが、下流の方には、続々と氷雪におおわれた山が現われた。ヒマルチュリの続きが見えているのである。その夜は秘蔵のウィスキーで登路発見祝いをやった。

このキャンプ地からサマまでは、もう半日の道のりであった。カンバがばかにたくさんはえていて、川ぶちにまで茂っている。サマの近くまできたら、いままでもどこにも見あたらなかったカラマツが出てきた。カンバの枝に、サルオガセのさがっていないところを見ると、この方がツード・コーラよりも湿潤でないであろう。しかし、ブリ・ガンダキの上流には、ついにマルシャンディ上流のあのセミ・デサートといわれるような、さわやかな高原地帯は出てこなかった。

マナスルが出た。東尾根の上端にあるピナクルが、ここからでは大きく見えすぎて、マナスルはちょうど鹿島槍のような、双頭の山であるかのごとき印象を与える。東尾根というのは、上半分が、おそろしく険しい岩尾根で、あれでは手のつけようがないであろう。やがてマナスルから押し下した大きな氷河の下を通った。その上に林立したセラックスのものは、みるものの胆を

寒からしめずにはおかなかった。

この氷河を過ぎたところに、ちょっとりっぱなゴムバ（ラマ寺）があった。われわれは、その境内のなかにキャンプした。これがサマのベース・キャンプである。そして二十三名のポーターのうち、ネパール人四名、チベット人二名を残して、あとの者は解雇した。

もしもマナスルを、サマ側から初めて見たのであるならば、われわれはきっと、不安と焦躁とを感じていたにちがいない。われわれの発見した登路は、ここからではよく見えないからである。しかし、この場合のわれわれは、いわばもう、かぎを預けられていたようなものだ。こちら側に出ている大きな氷河を抜けていっても、北峰とナイケとの間のコルに出られる、という見とおしはついていた。

そこで、このルートを確認しておくために、高木、竹節、ガルツェン、サルキが、四日分の食糧をもって、偵察に出かけることになった。二日目の午後、ナイケ・コルを、目のまえに望むところまで進んで、もうぼちぼち、キャンプの場所を捜そうというとき、ラストを歩いていた高木が、突然アッと叫んだ。ふりかえると、姿が見えない。表面の雪を踏みぬいて、クレバスに落ちたのである。のぞいても中はまっくらでなにも見えない。

竹節は、さっそくロープのさきでラテルネをくりつけて、そのロープをクレバスにたらし、早くロープをにぎれと叫んだ。下から高木の声が聞えてくるけれども、なにしろ暗中摸索だから、うまく高木のいるところにいきあたらない。竹節のけんめいな努力が続く。やっと高木はロープを握った。引きあげてみると、顔じゅう血みどろ。これはいけないと、竹節は林の救援を求めるため、サルキをベース・キャンプに走らせた。

サルキが、ベース・キャンプに現われたときは、もうあたりが暗くなりかけていた。林はまだ、往診から帰っていなかった。この夏以来、サマではチフスが流行して、いままなお、何人か重症の患者がおり、医者として捨てておくわけにはいかなかったのである。救援隊は、林とシュルバ、ポーターあわせて六名、ラテルネをつけて出ていった。

翌日の昼ごろ、林は山を降りてくる高木たちに出あい、十分な手あてをした。傷は心配ないらしいが、当分の間、治療をうける高木と、治療にあたる林とは、動けないであろう。主峰と北峰の間のノース・コルまでと思っていたプランも、これで空しくなってしまった。

その後、今西、竹節、中尾は、ベース・キャンプの裏から、東尾根の一角にとりついて、マナスルの東南面を偵察した。東南面

そのものは、四〇〇〇メートルもあるかという、断崖絶壁で、全然問題にならないし、東側からマナスルとP二九の間のコルに出ることさえ、可能性がないように思われた。

マナスルの登路は、やはりナイケ・コルを経由する以外にないことが、いよいよ確実となった。また、われわれのアンナプルナ以来の経験は、来年のマナスルのアタックが、ポスト・モンズンよりも、プレ・モンズンに行われた方が有利である、という結論をもたらした。

十一月二十九日 サマのベース・キャンプを引きはらって帰途についた。久しぶりにモミの森林を通った。森の向こうにマナスルとならんでP二九が見える。マナスルの頂上にはきょうも一日、煙をはいているかのような雲が、はりついてはなれない。

二日下ったガブで、保菌者の疑いある、サマのポーターをかえして、さっぱりした気持になった。中尾は一晚泊まりで、ヒマルチュリの下にあるカル・タールという湖を見にいった。毎日雲一つないポスト・モンズンの好天気が続く。

シアル・コーラの出合に近づき、ブリ・ガンダキはおそろしく深いV字峡谷となる。その右岸を高まきしてニヤックに出た。今夏（五三年）ニュージラランド隊が登頂したスリンギ・ヒマール（七一七六メートル）の白い頂が、谷の奥にのぞまれた。ジャガートからさきは冬道をつたって、川沿いに歩くところが多くなった。ゆきとちがって、いまはどこでも乾燥している。たんぼや畑の刈りあとで、自由にキャンプすることができた。

バナナやカボックのはえた地帯まで出てきた。またセミが鳴きだし、チョウやトンボが飛んでいる。シャツを一枚ぬいだ。半ズボンにかえたものもある。水牛がいる。ボダイ樹も現われた。いつのまにかスリンギ・ヒマールのかわりに、ガネシュ・ヒマールが見えるようになった。

向こうの方にアルガート・バザールの、緑のこいマンゴの茂みが見えてきた。その木影を行くのは楽しかった。もうまったく夏のように暑いだから。ブーゲンビリアの紫紅の花が咲きほこっていた。つり橋がみえた。対岸の日当りにキャンプが小さくくわらんんでいる。サマを出てから九日目、マナスル一周の旅が終ろうとしている。

踏査隊遠征日誌

一九五二年

八月

- 二五日 早朝羽田からBOAC機で五名飛び出す。途中沖繩に着陸小休、夕刻ホンコンに到着し、ホテル・ベニンズラに一泊。
- 二六日 ホンコン出発、バンコックでザボンとチキン・サンドウィッチを食べる。ラングーンを経て、日が暮れてからカルカタ到着、ホテル・スベンセスにはいる。
- 二七日 プレトリア・ストリートの移民局でインド滞在の許可を受ける。ネパール総領事館に行き、ラナ総領事に面会、即座にネパール入国の許可証エアー・パーミットを得る。
- 二八日 午前中にネパール領事館よりホテルに電話で、エアー・パーミットの取消しの通告を受ける。万事休す。しかし計画どおりに遂行のほかはない。夜、西山総領事公館でパーティー。ラナ総領事予約を取り消して欠席、植物園長のビスワス博士、博物館のグーハ博士ら出席。
- 二九日 ネパール入国許可は有効となる。ホッと胸をなでおろす。カルカタでのすべての準備は一応完了した。無税通関も首尾よくできた。
- 三〇日 全員カルカタより飛行機でバグドグラに飛び、それより自動車にてダーズリンにゆく、五時間の自動車旅行、三時にホテル・ウインダメアに到着。

九月

- 三―三日 ヘンダーソン夫人と交渉、シエルバ四名を約束、彼らは汽車でカトマンズへ行くことになった。
- 四日 ダージリンよりバトナへ行く。バグドグラ、バトナ間は飛行機バトナ一泊。名前だけは堂々たるグラント・ホテルに泊まったが、昼食はできず、汽車の駅の食堂でやっとカレーにありつく。夜は映画見物。
- 五日 カトマンズへ飛行機で飛びこむ。クリシュナ氏の出迎えを受け、市外の準備された別荘に楽隊入りで乗りこむ。
- 六―三日 カトマンズ滞在。王様、皇太子に謁見した。田口は最上級の敬語の英語に大汗で奮闘。ゼネラル・カイザーより旅中の飲み物の寄贈を受ける。九月八日にはシエルバが到着した。約束より二名多く、登録外の者を連れてきているが、それも雇うことにする。
- 一四日 カトマンズ出発、雨が降ったりやんだり、カカニの丘のふもと、ジップルフェディの民家泊まり。
- 一五日 カカニの峠越し、リクイー・コーラの下りの途中のバンガロー泊まり。
- 一六日 暑い一日、リクイー・コーラ河床に下り、水田道を通り、ナワコットに登り、トリズリ・バザールに下り、マンゴー林にキャンプ。
- 一七日 サムリ・パンジャンの峠まで行進、峠の上の民家泊まり。

- 一八日 谷底バラン・フランに下り、再び尾根へ上がり、カトンジエのバンガロー泊まり。
- 一九日 サレンタールの台地まで前進、気持のよいキャンプ。
- 二〇日 朝雨のため、休養、林ドクターは村の子供の手術を木陰でやる。
- 二一日 プリ・ガンダキ河畔のアルガート・バザールを過ぎ、カンチョーのバンガロー泊まり。
- 二二日 グロンディ・コーラの橋を渡り、コプラン泊まり。
- 二三日 朝から雨、バレービルケの民家泊まり。
- 二四日 朝早く、ポーター頭を使者にして、クンチャへ捜査を求めにやる。本隊はマルシャンディ河畔のタルクガート・バザールの畑の中にキャンプ。
- 二五日 マルシャンディ河の上流へ歩き始める。クンチャの捜査と途上で会って同行することになる。ウディブでキャンプ。
- 二六日 長い前進、クディに到着、川原にキャンプ。
- 二七日 ネパールの秋祭りの始まり、一日滞在。
- 二八日 カトマンズのポーターは前進をきらって、半ストライキ、一時間おくれで出発、部落から離れた麦畑にキャンプ。
- 二九日 付近の徴集人夫が集まってきた。川原のキャンプに全員が勢ぞろいした。
- 三〇日 新ポーターによる行進、道は高く上ったり、下ったりする、シコクビエの畑にキャンプ。

一〇月

- 一日 左岸へ移る、マルシャンディが石の下をくぐる所を過ぎ、ダラパニの近くの山腹まで行進、もう雨は全く降らず、泊まりはテントになった。
- 二日 トンジエ通過、ツグディカダガの牧場まで前進。

- 三日 川沿いに前進、テイルマンのキャンプしたところまで前進。
- 四日 ビサン対岸まで前進。
- 五日 アンナプルナ第四峰攻撃のベース・キャンプ設置。
- 六日 ベース・キャンプ滞在、アンナプルナ第四峰攻撃準備。
- 七日 高木、ガルツェン、アンツェリン、ダーゴはポーター二十五名を連れてアンナプルナ第四峰攻撃の荷運び開始、中間キャンプまで前進。
- 八日 田口、林隊ベース・キャンプ出発、サルキ、アンノ同行、高木隊はスペシャル・キャンプまで前進。
- 九日 高木隊は岩壁に道づくりに登り、田口隊スペシャル・キャンプ到着。
- 一〇日 スペシャル・キャンプよりの伝令ダーゴはベース・キャンプに來り、今西隊長の出勤をうながす。今西、中尾、パンシーら午後出発、田口、高木隊は第一キャンプまで荷上げ。
- 一一日 スペシャル・キャンプ位置変更、今西隊も到着、アンナプルナ攻撃態勢完成。
- 一二日 全員第一キャンプまで登る。田口、高木、林、シエルバはそこに泊まり、今西、中尾、パンシーはスペシャル・キャンプまで下る。
- 一三日 第一キャンプより、第二キャンプへの道づくり、第二キャンプ予定地に、荷物をデポする。スペシャル・キャンプより、パンシー、アンノ、ダーゴは荷上げに第一キャンプまで往復。
- 一四日 中尾はパンシー、アンノ、ダーゴを連れて第一キャンプへ前進。今西はスペシャル・キャンプへ残る。
- 一五日 朝から吹雪、アンナプルナ第四峰を断念、午後第一キャンプより全員スペシャル・キャンプまで撤収。
- 一六日 田口、中尾はベース・キャンプへ下る。シエルバは荷を中間キャンプまでおろす。今西は万年雪の調査。
- 一七日 全員ベース・キャンプ帰還。

- 一八日 休養。
- 一九日 田口帰還の途につく、随行はネパール人ばかり。
- 二〇日 チュルイ登攀に出発、森林限界に近いネズノ森にキャンプ。
- 二一日 チュルイ氷河のツングゲの下まで前進、午後おそくまで行動。
- 二二日 ツングゲ下のキャンプをサポート・キャンプとし、パンジーが残り、他は氷河の上のキャンプへ移動。
- 二三日 アンツェリンをキャンプ・キーパーとし、今西、高木、中尾、林は、ガルツェン、サルキを連れてチュルイ(六二〇〇メートル)に登頂して、帰還。
- 二四日 今西、高木、ガルツェンは雪中湖をまわって、ネズの森のキャンプ地へ下る。中尾、林はテントを撤収して、サポート・キャンプに下り、そこを撤収して、森林キャンプまで下る。
- 二五日 ベース・キャンプへ帰還、竹節は昨日到着していた。久しぶりの対面。
- 二六―八日 ベース・キャンプ滞在。
- 二九日 マナスルへ向かって行進開始、ピサン泊まり。
- 三〇日 温泉地チャメまで前進。
- 三一日 牧場ツグディカダカに今西、高木、竹節はガルツェン、アンツェリン、ダーコとともに泊まり、ナムン・バンジャンからマナスル西面を偵察予定。中尾、林はポーターを連れ、トンジエまで下る。

《二月》

- 一日 今西隊は峠道を登りはじめ、三六五〇メートルにキャンプ、中尾隊はラルキヤを越してきたインド軍に会った後、ラルキヤへ向かって前進、カルチェ近くのツード・コーラ河畔まで進む、ディリーは荷物とともにトンジエに止まって、今西隊を待つ。
- 二日 今西隊は軽装して偵察に出たが、悪天候のため引きかえす。中

- 三日 尾隊はビムタコーチ下のハングブウまで前進。
- 三日 今西隊は峠の一角まで登って、マナスル西面の偵察成功。午後テントを撤収して、牧場まで下る。中尾隊はビムタコーチを過ぎ、森林限界付近にラルキヤ・バンジャン越しの準備キャンプを設定。
- 四日 今西隊はトンジエまで下る。中尾隊はパンジーを残し、中尾、林はサルキを連れてラルキヤ・バンジャンの南の山の尾根の上へテント一つを持って移動。
- 五日 今西隊はディリーやポーターとともにトンジエ出発、チルジエの上まで前進。中尾隊は尾根の上からマナスル西北面を偵察。
- 六日 今西隊はハングブウの下森林まで前進、中尾隊は前進テントを撤収して、パンジーの残っている峠道のテントへ帰る。
- 七日 全員峠道のテントに集結。
- 八日 峠越えにそなえて一日休養。
- 九日 四時起床、夜明けとともに出発し、ラルキヤ・バンジャン(五二三〇メートル)を越し、夕刻サマ側のラルキヤ・マーケットの上に着。
- 一〇日 朝食前にマナスル登路の目安がつく。朝食後、高木、林、竹節はガルツェン、サルキとともに、南の山稜からマナスル登路偵察、中尾、ダーコは北の山腹から同様偵察、今西はキシナを連れて、同様な山腹へ上がる。パンジーはキャラバンを連れて、ラルキヤ・マーケット下まで行きキャンプ。マナスル登路発見の祝杯。
- 一日 サマにベース・キャンプ設定。
- 二日 ベース・キャンプ滞在。
- 三日 モレーンの丘の上に、記念テョルテンを立てる。
- 四日 高木、竹節は、ガルツェン、サルキと、四名のポーターを連れ、マナスル氷河の偵察に出発。
- 五日 高木氷河のクレバスで遭難、伝令のサルキ四時ベース・キャンプに到着。

- 一六日 竹節、ガルツェンは氷河のテントから、高木を連れて下って行く。林はそれと途上に会い、ともに石小屋まで下って手術し、同地に泊まる。
- 一七日 高木その他ベース・キャンプ帰着。
- 一八―二〇日 ベース・キャンプ滞在。
- 二一日 東尾根偵察に、今西、中尾、竹節はシエルバを連れて出発。森林限界の上まで進む。
- 二二日 東尾根の雪のゴルまで偵察、キャンプをその途中のモレーンの下まで移動する。
- 二三日 竹節かぜのためベース・キャンプへ下降。今西、中尾はテントを昨日のゴルまで進める。午後中尾はガルツェン、サルキとともに、尾根の上をピーク二つ越して偵察。
- 二四日 今西隊は東尾根ゴルに滞在。
- 二五日 コルのキャンプ撤収、東尾根の下の氷河を西に向かって進んだが、新雪のため引きかえし、モレーンまで出てキャンプ。
- 二六日 今西隊は、氷河上を二隊になってアンザイレンして進み、東尾根のクローアルを三分の一登って引きかえし、さらに上部の枝尾根の上に出て、ナイケ・コルを偵察して、モレーンのキャンプに引きかえす。
- 二七日 今西隊ベース・キャンプ帰還。
- 二八日 ベース・キャンプ滞在。中尾、高山植物の根付きを採集。
- 二九日 カトマンズ帰還の途につく、リダンダまで下る。
- 三〇日 プリ・ガンダキに沿い下降、ガブ泊まり。

《二月》

- 一日 中尾はサルキ、アンツェリンと二名のチベット・ポーターを連れてヒマルチュリに近い、カル・タール湖畔まで行って同地にキャンプ、本隊はガブ滞在。
- 二日 本隊ピーまで前進、中尾カル・タールより下り、本隊に合流。
- 三日 山腹を登って、ニヤック到着。
- 四日 ニヤックの断崖の道を下り、パンシンを過ぎ、セティバスの近くの川原にキャンプ。
- 五日 ジャガートへ午前到着、税関吏の歓迎を受ける。フブスドバンにキャンプ。
- 六日 マチャ・コーラまで前進。
- 七日 ビルクナより下った水田の刈り跡でキャンプ。
- 八日 アルガート・バザール到着。
- 九日 アルガート・バザール滞在。
- 一〇日 サレンタールを過ぎ、アング・コーラを渡り、カトンジエへ登る坂の下まで前進。
- 一一日 尾根上のカトンジエを過ぎ、谷間のバラン・プランまで前進。
- 一二日 トリズリ・バザール到着。
- 一三日 カカニの峠の登り始まる。ダン・フェディまで前進、シエルバと村人とが大げんかした。
- 一四日 カカニの峠を登り、頂上のパンガローに泊まる。
- 一五日 早朝エヴェレスト、その他ネパール・ヒマラヤはほとんど見えぬ。カトマンズまで帰還、カマル・ホテルにはいる。
- 一六―二〇日 カマル・ホテルに滞在、遠征の後始末、シエルバの支払いも二十日にすませる。来年の遠征のために政府筋の了解を得ることに努力。スイスのポスト・モンスーン隊のカトマンズ帰着を祝う。
- 二一日 カトマンズよりカルカッタに到着。再びスペンセス・ホテルにはいる。
- 二二―二五日 カルカッタ滞在、領事館で様々の世話を受ける。クリス

- 二六日 カルカッタ午後二時出発、BOAC機でラングーンのレストラン・ホテルにはいる。
- 二七日 ホンコン到着。ホテル・ベニスラにはいる。しかし、夕食は支那料理を食べに出る。
- 二八日 東京到着、盛大な出迎えを受けて、無事帰還。

(中尾 佐助)

▽竹節の行動△

《九月》

- 一〇日 SAS機で羽田発。ラングーンでINA機に乗換え十一日夕方カルカッタ着。
- 一二日 カトマンズの今西隊長に電信で連絡すれど返事なし。日本およびネパール総領事館に行き、ネパール入国の手続きを頼む。
- 一三日 今西隊長より左の電報あり。ネパール政府は君の入国を拒否した。君はクリシュナ君と連絡をとって入国の機を待てる。われわれは十四日に出発する。在留邦人の小川氏をわずらわし、再びネパール総領事館へ行く。書記官は十六日に来いという。カトマンズのクリシュナに、入国懇請の電報を打つ。
- 一六日 川並領事(在カルカッタ総領事館)とネパール総領事館へ行きラナ総領事に会う。親切にいろいろと手配をしてくれた。クリシュナにまた電報する。
- 二一日 夜クリシュナより電報来た。「お手紙拝見、二十五日にカルカッタへ行く。待て、うれしかった。これで道が開ける。」
- 二三日 クリシュナより、「旅券許可になった。二十五日には行くから待

- 二五日 夕方クリシュナ到着。彼はこの十一月に日本へ留学するため日本総領事館へビザをもらいかたがた私を連れに来たのだ。ふたりに日本総領事館とネパール総領事館へ行きわたがいのビザをもらった。
- 二八日 クリシュナは一足先にカトマンズへ帰った。
- 三〇日 朝七時カルカッタ発のINA機でカトマンズに飛び九時半着。クリシュナを迎えられてヒマラヤ・ホテルに投宿。早速シャーマンその他の要人に会う。

《一〇月》

- 一―三日 カトマンズでの祭りのため人夫集まらず、旅行の準備をする。
- 四日 少年サッカー大会を見物、皇太子にお目にかかる。
- 五日 クリシュナ、ダルシヤンに送られ、人夫五名を連れて第一歩を踏出す。ジップルフェディで巡査に旅券を検査される。英語は読めぬからネパール語の旅券をもって来い」とせめられて大弱り。これから先しばしばあることだろう。いっそのことカトマンズに帰ってネパール語の旅券をもらって来ようと思つたが、まよよとそのまま進む。カカニのバンガローに泊まる。
- 六日 東はエヴェレスト、西はグワラギリまでヒマラヤの巨峰を一目で見渡せるカカニの丘の大観はすばらしかった。タディ・コーラを丸舟で渡り、対岸の民家に泊まる。
- 七日 トリスリ・バザールでも巡査にネパール語の旅券を求められて困惑したが、おりに通るかかったグルカ兵あがりの老人の助言でことなきをえた。こうなると巡査の姿を見るのが恐ろしくなった。サムリ・バシジャンの下のカクニの木賃宿泊まり。
- 八日 夜八時近くまで強行してカトマンズの民家に泊まる。
- 九日 水稲は穂が出揃ったところ、道はかんがい水あふれてすこぶる

- 難儀。ブリ・ガンダキの右岸に到着、キャンプ。
- 一〇日 アルガート・バザールには巡査不在でほっと一息。水田のあぜを伝わって進み、カンチョーの下でキャンプ。
- 一一日 ダロンディ・コーラの竹ナワのつり橋を渡らずに徒渉、コブランの民家泊まり。ひとりのポーターがマラリヤ熱で苦しむ。葉を一服も持たない自分がかげんとした。
- 一二日 相変らず水田のあぜをバランスをとって歩き、正午にチュベ・コーラを渡り、午後三時マルシヤンディ河畔のタルクガート・バザールに着きキャンプ。
- 一三日 快晴の早朝、ヒマルチュリ、マナスル、アンナプルナの連峰の大観を楽しむ。午後二時ナルワル部落に着いた瞬間大雷雨となり、民家の軒下に泊まる。
- 一四日 クデイに正午に着き、疲労の濃いカトマンズ人夫を解雇、土地の人夫を雇うことにした。
- 一五日 マルシヤンディに沿って登る。新しい人夫は快足で気持よい。シグルン部落のはずれでキャンプ。その夜半に三〇〇メートルほど離れた所でトラのほえる声を聞いてふるえ上がった。家畜をとりきたらしい。

(竹節 作太)

- 一六日 道は峻しくなり人夫も背息吐息、ジャガート泊まり。今西隊より鶏調弁のため下ってきた人夫に会う。隊長に手紙を託す。
- 一七日 マルシヤンディの大溪谷をさかのぼって夕方トシジェに着く。小雨降り続く。
- 一八日 一日休養。私をカモと思つてか、ここのスッパ(村長)はやたらに物を売りつけたがる。
- 一九日 マルシヤンディに沿って登り、バガルチャップ、牧場キャンプを過ぎてタンザのスッパの家に泊まる。夕方強い雨。
- 二〇日 チャマを過ぎてしばらく登った十一時ごろに山を下ってくる田口に会う。そこでまたチャマに引返してキャンプ。アンナプルナ第四峰は失敗と聞く。
- 二一日 下山する田口と別れて登る。ピサンの手前でキャンプ。夜はふるえあがるほどの寒さで人夫はブツブツこぼす。
- 二三日 午後二時、アンナプルナのふもとのベース・キャンプに着く。隊長たちは対岸の山チュール登山に行っていると、留守番の通訳デリー君がいう。長いひとり旅はやっと解消した。

一九五三年の登山隊

カトマンズまで

三田幸夫

本年度マナスル遠征隊長に一応決定していた日本山岳会の松方三郎君が、急に行けないことになって、そのおはちが私に回ってきた。その重責はいろいろな意味で、私の柄ではないと思われたので、再三固辞したが、先輩、仲間などからの、がんじがらめの推薦で、いやむしろ命令で、この重任を負わされることとなった。山男として、ことに年来ヒマラヤに夢を抱き続けてきた私にとって、この上もない荣誉であり喜びではあったが、その責任の重大さと自分の浅い経験、力量の貧弱さを思うと、内心恥じ入らざるを得ないと同時に、心に見えぬ不安感もつづいてこないわけにはいかなかった。

しかしながら、その時分には、日本山岳会ヒマラヤ委員会は、活発な活動を続け、十四名のりっぱな隊員が選抜されていた。その中には、去年の踏査隊に参加した竹節、高木、田口の三名が再び参加できたことは、ことに私に取って力強いきわみであった。竹節は一九三六年の立教のナンダ・コット遠征にも加わっており、ヒマラヤに経験の少ない日本での、唯一のベテランである。年輩も私を除いての最年長者であり、私にとって最もよい相談相手になってもらえることと思った。毎日新聞の特派員というより、すでに私たちの真のロープ・メイトたるべき隊員である。高木、田口が持つスイス・アルプスでの長い経験は、いまだ氷河を知らぬ他の隊員のために、またとない指導者となり、一番心配なアイス・フォール地帯では、中心的存在となって活躍してもらおうことを期待した。若い隊員は、それぞれ、いろいろな意味でのりっぱな経験者のみであり、まず現在の日本山岳界では、最高水準をゆく連中である。科学班の中尾、川喜田は、その仕事の性質上、登攀隊とは別の行動をとることになったが、中尾は去年（五二年）の踏査隊の一員でもあり、万事安心して任せられる隊を、編成することができた。その後には、これら隊員に劣らぬ優秀な会員たちが、夜に日をついで、遠征隊の出發に間に合わせるため、あらゆる装備、食糧などの準備について、涙ぐましい努力を続けてくれた。各人が力を合わせ、自分を犠牲にして、隊を無事にさせるための、緑の下の力持的な存在となってくれた。

最終段階にはいった遠征隊準備の、第一線となった辰沼病院の二室は、隊員とこれをバックする準備委員の出入りで、毎日戦場のような激しい忙しさと、興奮のつぼと化した。山岳会に占領された病院の電話のベルは、朝から晩まで鳴り続けて、外部との多忙な連絡の役目を果たした。

壁に張られた隊の日程表は、いろいろな予定でどしどし空欄がうずめられていく。隊員自身の自由な時間は、日が進むにつれて制約されていく。

隊全体の、また個人的な歓送会のようなものが後から後へ割り込んでくる。それが、わずかに残された貴重な時間に遠慮なく食い込んでくる。出かける前に参ってしまいそうな情ない気持ちにさえる。隊員全体としての、ゆっくりした打ち合わせなどは、やっっている暇がない。しかし、二月二十一日無理をして、やっと、箱根底倉の梅屋で、一晩ゆっくり湯に浸って、隊員だけでのんびりと語り明かすことができた。その晩から雪が降りもって、私たちの首途を祝うかのように、箱根全山はすっかり見違えるように、美しく雪化粧された。一同大風呂につき、その雪景色をながめながら、恥ずかしくない登攀をやって、またここで全員落ち合おうじゃないかと語り合った。

三月四日はまたたく間にやってきた。先発隊田口、加藤（泰）、村山、加藤（喜）の四名が、まずBOAC機で羽田を飛び立つた。彼らの任務は、カルカッタで船便による荷物の通関、これを飛行機でカトマンズへ発送、日本およびネパール総領事館との打ち合わせ、ダーズリンでのヒマラヤン・クラブとの折衝、シエルパの雇用、ヒマラヤン・クラブから若干の装備品借用など、相当やっかいな仕事山積している。

先発隊を送り出すと本隊はまた、多忙な日の連続で、先発隊からのいろいろな電信の打ち合わせに、てんてこまいを演じているうちに、とうとう三月十八日を迎えた。出發はやはり羽田から、先発隊と同じ午後十一時十分のBOAC機。

毎日新聞、日本山岳会、各隊員出身校の山岳部関係の人たちなどのごったかえす見送人にもまれて、だれしも見送りの家族とゆっくり言葉をかわす暇もなかった。いつもの定石どおり、隊員がタラップにもたれ写真班のフラッシュの光を浴びせられて、やっくと機上の人となる。手を振る見送りの人々も、だれがだれだかわからぬままに、機は美しい東京のともしびを下に、暗い空に飛び立ってしまった。

カトマンズまで
飛行機に乗ってしまえば、少しはゆっくり休養できると楽しみにしていたが、さっぱり休まらないままカルカッタのダムダム飛行場へ着いてしまふ。昔、船でよたよた四週間近くもかかってやってきたことを思えば、夢のようだが、東京でのあの忙しさがま

た、違った形で早速カルカタで、到着早々始まるのかと思うとたまらない。夜も十一時を回っているのに、総領事館の児玉氏、毎日の小川特派員、同じくインド人のダス毎日通信員、日印産業の山田、鈴木、敷地屋氏らが、わざわざ出迎えてくれた。

タラップで早速、新聞社のフラッシュの攻撃を受けて、飛行場の税関に連れて行かれる。皆ごったかえしている間じゅう、私は新聞社の連中つかまって、何だかんだと質問を受ける。高木、ダス氏らの奮闘で、やっかいな通関も小一時間で大半片づいて、車を運んでスペンセス・ホテルに向かう。二十年前の数年間、バラックポーア・ゴルフ・クラブへの通いなれた道でなつかしい。運転手に聞いてみると、もうコースは無いという。話をしているうちに、忘れていたヒンドスタニー語が、糸を手繰るように出てくる。

スペンセス・ホテルは創立一八三〇年、カルカタで最も古いホテルの一つで、旧式だが、ホテル全体が冷房されているので、まず助かった。

時間外だったが、ボーイを動員して、冷たいビールとつまみ物で、カルカタ安着の乾杯をした。十一名の部屋割りを済ませて寝たのが、夜中の二時をだいぶ回ったころ。

三月十九日から数日間の同地滞在は、想像していたとおり、きわめて忙しい日の連続であった。各隊員はそれぞれ分担を決めて飛び回った。

日本およびネパールの総領事館、銀行、船会社、航空会社、税関、気象台への訪問、打ち合わせ。その間、各方面からのレセプション。各新聞記者との会見。ダーズリンからカトマンズへすでに向かっていた先発隊との連絡、そのカルカタでの未解決の残務整理。睡眠不足からの疲労困窮とたたかいながらも、三田、高木、村木の三名を残して他の八名は、一応カトマンズへ飛ばせることができた。

気象台のマル博士は実に温厚な学者で、われわれの隊への気象通報を快く引き受けてくれた。そして、われわれもまた、博士の希望する観測のデータをできるだけ詳細に、山の中から送ることを約した。

事務所の二階が住居になっていて、数名の隊員と柏谷総領事夫妻がそこで、美しい夫人令嬢たちのお茶によばれた。オーソドックスの菜食主義である同家のお茶は、なかなか変わったおいしい菓子と茶である。特に、バラの花からとったという何ともいえぬかんばしいかおりのある飲物がすばらしかった。

柏谷総領事官邸の招宴には、マル博士夫妻、ヒマラヤン・クラブ正副会長のクロフォード、オウデン両氏、隊員、総領事夫妻お

よび館員、その夫人連が集まってなかなかにぎやかであった。

クロフォード氏が、ディナー・ジャケットを着て来たのには恐縮したが、初めて山らしい山の話ができたのはうれしかった。こゝに私の旧知のゴウレー氏が、いまだイギリスで健在とのこと、また、キャプテン・ベノン氏も、クルのマナリに依然永住して元氣とこのことを聞いて、はなはだなつかしかった。

ゴウレー氏はシッキムのローナ峰を初めて登った人で、当時私は同氏から、ヒマラヤン・クラブのゴルフ・マッドレスやワイン・ド・ヤッケなどを借りたことがある。

キャプテン・ベノンは、私がクルのロータン峠へ行ったとき、ふもとのマナリ村の同氏のバンガローでたいへん長く世話になった人。同家には、私たちが一九二五年カナダ、ロッキーのアルバータをいっしょに初登攀したスイスのハインリッヒ・フライが、後年最初のエヴェレス登山隊長となったジェネラル・ブルースとともに滞在したという因縁もあった。

ヒマラヤン・クラブもインド独立後、イギリス人がだいぶ少なくなったので、寂しくなってきたようだ。そのかわり、インド人のメンバーがふえてきたが、名ばかりの人が多く、本当のクライマーは少ないという。しかしながら、ヒマラヤの遠征、登山に対しては、いろいろな意味で、少なからぬ貢献をしてきたクラブである。よい意味での発展を祈ってやまない。日本人では、西堀栄三郎と伊藤憲の両氏が会氏になっているといっていた。クラブの年報は、毎年各国登山隊の記録を掲載して、依然その権威を保っている。

マル博士のお茶によばれた日の午前中、オール・インデアン・ラジオから、何か所感を述べてもらいたいと申し込んできた。時間は午後二時から五分ぐらいでよいとのこと。A・I・Rには、今後毎日、気象通報を送ってもらう義理があるので、逃げるわけにはいかない。迎いのステーション・ワーゴンに乗せられて放送局に行く。放送室に通されたが、扇風機の横にいてもたいへんな暑さだ。婦人の職員がていねいに応対してくれて、インド独立後の民族意識といったような問題について話ができる。やがて、放送の時間が近づいてから、実は都合で十分間ほど話してもらいたいという。五分でも、英語の放送は初めてなので、大いにくさっていたおれから、すっかりあわててしまった。しかし、どうもしかたがないので、腹をすえてしまふ。

「私は御国に対して全くの他人ではなく、むしろ、私はあなた方の古い友だちです。というのは、一九二七年来、約五年間、この土地のある商社の社員として、住んでいたことがあるのです。ダムダムの飛行場を降りると、とたんに、私は自分の故郷へ帰ってきたように感じ始めました。そして二十年間も忘れていたようなヒンドスタニー語が、後から後から、口について出

てくるのに驚きました。

今度、私がここへ参りましたのは、ネパール・ヒマラヤにある高い山に登るためでありまして、その目的とする山は、世界で八番目の高さで、八二五メートルあるマナスルという山です。そして未だだれも登ったことはなく、まただれもその近くまで行ったこともありません。が、去年（五二年）の日本の踏査隊が、この山に可能性のある登路を発見したので、

今年の初め、東京の毎日新聞社後援のもとに、日本山岳会は十五名の優秀な登山家を選んで、登山隊を組織したのであります。現在そのうちの二名が、すでにカトマンズで、私たちを待っています。

かれらはダーズリンから、十五名のシェルパを雇い、同時に三百名近くの人夫を用意しています。そして、八千キロ余の食糧と装備を持って、マナスルのふもとに根拠地に向かい、この大きなキャラバンを進めることになるのです。二十日近くかかる険悪な谷の行進は、最初の段階で克服せねばならない困難な仕事であります。

その高度、氷河の危険な割れ目、通過せねばならぬたくさんの巨大なアイス・フォール、恐るべき雪崩などのために、その山はきわめてむずかしいでしょう。が、かかる危険に対して、十分な備えを持っています。すべての必要な装備品は、なが年の経験に基いて、日本で十分注意のうえ用意してきました。

登攀は四月の終りごろから始めて、五月の末には終りたいと思います。というのは、モンスーンは六月の初めにやって来るでしょうから。

もちろん、成功の可能性については、今ここでは確言できません。それは、根拠地と頂上との間の各テントに必要な装備、食糧と同時に、最も好条件にある隊員が配置されたときの、最後の登攀の段階にかかっているでしょう。同時に最も重要なファクターは、最後のかぎを握るべき天候にかかっています。

繰り返して申しますが、巨峰マナスルの登攀は、容易なことではないでしょう。が、われわれは最善を尽くつもりです。アジアの一国民として、アジアに存在するヒマラヤの高峰に登ることは、われわれの最も熱烈な願いなのであります。

終りに、御国の政府、ならびに皆さんから寄せられた、あらゆる御親切な御協力に対し、心からの感謝の辞を捧げます。

この話の途中、時間を延ばすため、各隊員の経歴を簡単に述べた。

最後まで片づかなかった飛行場の荷物の通関も、高木と村木が、総領事館のインド人書記ダイアスを連れて、暑い中を何度か往復した奮闘の結果、三月二十四日の早朝、カトマンズに向けてカルカタを飛び立つことができた。飛行機の中で、東京以来の疲

れが一度に出てきたせいか、一同ぐったりとする。

途中バトナとムザファプールに寄って、期待していたヒマラヤの雪嶺も見えぬまに、午前十時には、カトマンズに着いてしまつた。

飛行場では、隊員の大半とシェルバの代表ガルツェン、パンシーほか数名、土地の顔役シャーハ、ダルシャン氏らの出迎えを受ける。ダルシャンの最初の言葉が、「あなたは日本人には見えない。むしろインドの人だ」にはまことに恐れ入った。宿舎に向かう前もうまもなく、インドに飛ぶ前首相コイララ氏が到着するから、会って行った方がよいとの話で、しばらく待つことにする。

飛行場はきわめて粗末なもので、わずかに草ぶきの待合室、税関などが三棟ばかりあるだけ。ダルシャンのおかげで、通関も形式だけで済み、小一時間も待つ間にコイララ氏が到着。ダルシャンの紹介であいさつする。日本人によく似たたくましい容姿で、ネパール服がよく似合う。また帰ったらゆっくり会おうといつて別れる。登攀の終るころ、私たちはベース・キャンプで、カトマンズ放送により新しい内閣ができ、コイララ氏が首相になったことを知った。そしてあのと、飛行場で会っておいてよかったと思つた。

宿舎は、王様の親類筋にあたるシャーハ邸で、町の中心にあり、万事便利なので、氏の好意にあまえここを選んだわけである。石造りの三階建てで、その大きな客間の一隅に、折畳式ベッドを少し並べ、あとは床にマットレスを敷いただけ。

宿舎に着いたらまずひと眠りと、楽しみにしていたが、とてもそれどころではない。後から後から訪問客が絶えず、応接の暇もない。その間をダルシャンが駆け回ってあっせんの労をとる。

百坪近い庭には、十五名のシェルパがテントを張って、食糧、装備品が山と積まれ、その計量荷造りが始まっている。シェルパを全部集めてあいさつをする。私の英語が通訳のデイリーにより、ネパール語となって伝えられ、ひとりひとりと握手をかわす。

これから長い間の旅に苦楽をともし、高所では、あるいは生死をともしべき仲間と思えば、この日初めて会うような気がしない。暖かな親しさを感じないわけにはいかない。特にその顔だちやからだつきが、われわれとあまり変らないシェルパたちは、昔、大町や芦時から山へはいつたとき、荷造りの準備をしている信州や越中の人夫たちを思い出させる。サーダーのガルツェン、料理人のパンシーなどは、去年の顔なじみだし、他の連中もすでに若い隊員とは、前々からの知り合いのような親しさである。

短い限られた日時の間に、われわれはそれぞれ分担して、各方面の高官要人へのあいさつ回りに多忙をきわめた。特に、元老院の長老たるカイサー將軍には、全隊員そろって伺候した。かつての霞関離宮を思わせる豪壮な邸宅で、その庭のりっぱなと、そ

の豊富な蔵書は有名なもので、イギリスのハンプトン・コートにも比すべきものといわれている。そして、かつてネパール第一のスポーツマンであり、トラ、サイなどの猛獣狩りにおいて、ならぶ者もなかったという。日本について最も深い認識を持つひとりであり、前のイギリス王戴冠式には、ネパールを代表して列席し、秩父宮および妃殿下にも会われており、今年殿下のなくなられたことを非常に惜しんでいた。

インド大使は、肩のこらないカクテル・パーティによんでくれた。ネパールへ遠征隊を送るためには、インド大使館の協力が、絶対に必要なのである。この意味で、大使初め館員たちの示してくれた好意は、この上もない心強いものであった。現ネパール軍総司令官キラン將軍も、私邸に招いてくれた。

キラン將軍は、武人の典型といった人で、猛獣狩りから帰ったばかりとのこと、そのみやげ話はことのほかおもしろかった。タライ・ジャングルの猛獣狩りの規模の大きなことは驚くばかりで、七十五頭の象を連れて、一週間でトラ十七頭、サイ、ヒョウ、ワニなどを、うんとしとめたという。それは皆、現場で写真にとられ、特にトラは、その身長何メートルと、いちいち記録され、その大きさが自慢になるらしい。日本のつり師が、魚の大きさを記録するのと、スケールが違ふ。

一部の隊員が、かかる要路の人々へのあいさつ回りに忙殺されている間に、他の隊員たちは、シエルバを指揮して、複雑な荷物の点検、これを二百七十名のポーターに振り分けるために、一人分約三〇キロまでに荷造りするといった仕事に没頭した。そんな目の回るような忙しさの中にも、新聞記者を初め、各層の人々の訪問は引きも切らず、皆珍しいためか、われわれのそばにすわり込んで、帰ろうともしないのに閉口した。いずれも非常な好意をもっているのに、一概にも断れないのだが、これではとうてい仕事も落ち着いてできないので、途中からは、扉にネパール語で、特別の用事のない方ははいらぬでいたが、やはり紙まですなくてはならなかった。

最後に、不足分の食糧やマッチなどを買い入れて、二カ月にあまる旅への準備が完了した。全員三百名が同時に、キャラバンを続けるのは、途中の混乱が予想されるので、隊を二分することにした。

三月二十六日 高木を隊長とする先発隊は、サーブ七名(高木、加藤(泰)、村山、加藤(喜)、山田、山崎、石坂)シエルバ八名、ポーター百九十名、通訳一名、総勢二百六名の大部隊となって、カトマンズのシャーハ邸を出発した。

先発隊を送り出して、ほっとしたのもつかぬま、カイザー將軍から、スコッチ・ウィスキーとラムを一ダースずつ届けてくれた。われわれの酒不足を知って、当地では、なかなか手にはいらぬ貴重な酒を、わざわざ贈ってくれたのだ。残った隊員の中に飲

声があがる。第二隊の出発は明日なので、手落ちのないよう、最後の準備と跡片づけをするのに、またたいへんな忙しさである。

その最中に、今度は、王宮から正式の使者がやって来た。今夕五時、国王がわれわれを、王宮で謁見するという手紙だ。この国の高位の人々との会見の時間は、きわめて正確なので、よほど注意して、準備をする必要がある。五時きっかりに、国王に拝謁することができた。隊員ひとりひとりと握手をして、約二十分間話をかわした。私は、昨年以来ネパールの官民が、われわれに示した好意と協力に感謝を表し、今後とも、日本の遠征隊を援助していただきたいとのあいさつに対し、物静かな態度で、喜んで御希望に添いまして、流暢な英語で答えられた。かたわらの花瓶に生けられた、日本から移植したという満開の八重桜は、目にしみるように、あざやかに印象的であった。

三月二十七日 本隊は隊長以下隊員六名(三田、田口、辰沼、村木、竹節、依田)通訳一名、シエルバ七名、ポーター六十二名。他に科学班は中尾、川喜田、通訳の三名とポーター十八名を配して、総勢九十七名の部隊となる。町はずれで、見送りのシャーハ、ダルシャン氏らにしばらくの別れを告げた。ほこりっぽい風の強いボカラ街道に降りたったわれわれは、最後の文明の町を離れたわけである。

ブリ・ガンダキを登る

竹節 作 太

この日は、朝から風が強く、砂じんはもうもうと上がって、四圍の山々が見えないほどである。少し歩くともう汗がにじみ出るほどの暑さ。畑には麦が穂を出し、ソラ豆が実り、ジャガイモの葉が三〇センチものびて、緑の一角となっているが、長い間雨がないので、道や山はだはすっかり乾燥している。歩いているうちに、山西省南部の山岳地帯にでもいるような、錯覚にとらわれた。した。

一時間もすると、カカニの丘への登りにかかる。山から下ってくる百姓の背の竹かごには、堆肥にする枯葉がどっさりつまっているが、その上に、大輪の真紅のシャクナゲ、純白のラン花がたくさんさしてある。

中尾植物学者は、「あの白いランの花は、セロジネクリスタタという種で、日本ではとても珍重されているのだ」と、教えてくれた。

第一夜は、カトマンズ市のともしびをすぐ下に見おろすジップルフェディ泊まり。先発隊からのレポートが、村人に託されていた。

1. 二十六日午後二時着、全員無事。
2. 人夫は思ったより質がよく、調子がそろっているが、これから先のブリ・ガンダキをうまく通れるだけの力があるかどうかうたがわしい。
3. ハンディ・トーキーでの、連絡約束の正午は、行進中だったのでだめ。午後六時から十五分間試みたが、ネパール語、英語、東京などはいってだめ。明日からは午後五時と六時にする。
4. 携行のアタ(粉)は、アルガート・バザールまで使わないように。

着いてしばらくは、人夫たちもガヤガヤしていたが、ひとり去りふたり去って、やがて姿がなくなった。彼らはこれから、民家の軒下か大木の下で、ごろ寝をするのである。

シェルパたちは、初めて日本製のテントを張るので、まごまごした。

鶏、卵などの副食物、あるいはまきなどの調達は、料理人のバンシーの責任になっているが、放任しておけばルーズになるし、不正も起きやすいので、あてがいぶちに見ようということになり、隊員とシェルバひとりニルビー(一三〇円ほど)でやらせてみることにした。この付近では、鶏一羽三―四ルビー、まき一束一―二ルビーだから、なかなか苦しかろう。

この日の最高温度三一・五度。しかし、夜はセーターをほしいほどに冷えこんだ。

三月二十八日 八時半にバンチ・マナという小さな峠に着いた。ここで科学班と別れることになった。

彼らは、これからカカニの丘へ登って、しばらく滞在して、森林調査をしてから、ボカラ街道を西へ進み、ムクチナートからマナンポットに出て、そこから、今年の踏査隊のつたコースをマナスルへとり、六月五日ごろに、ベース・キャンプで本隊と合する予定である。

科学班は、上の道をカカニへ、本隊は下の道を、たがいにヤッホーを連呼しながら遠ざかった。

カカニの峠(一八八〇メートル)に立って、ヒマラヤの大観をながめるのを楽しみに、だれもが息を切らせて登ってみれば、雲が深くたれこめて、目的のマナスルはもちろん、いちばん近くにそびえているはずのガネシュ・ヒマールさえ、かいま見ることもしなかつたので、がっかりしてしまった。

昨年(五二年)この峠からの大観を、深く印象づけられている私は、「東はエウレストから西のダウラギリまで、すばらしい銀びょうぶを立て回したようだ。」と、皆に吹きこんでおいただけに、なんだかうそをついたようでつらかった。

峠からタディ・コーラへの下りは、急な悪路で、初めての人たちは、口をきわめてのしりながら、ひざをかくくさせて下った。

坂の途中、チャトラリ部落に着いたのが四時、この政府宿泊所(ダラムサラ)に泊まることになった。宿泊所を囲んで十戸ほどが、ひと握りにかたまった小部落である。宿泊所といってもひどく荒れ果て、屋根に大穴があいている。そして、天井にコウモリがわんさとたれ下がっていて、これが夜中しきりになすにふんをたれるので、ゆっくりと眠れなかった。

昨夜ここに泊まった先発隊よりの連絡に、「村に病人あり。母親乳ぶさをはらして苦しんでいるので、ダイヤジンをやった。辰沼ドクターに後を頼む」とあった。そこへ、やせ衰えた三歳ぐらいの娘を抱いた父親がやってきた。辰沼ドクター、早速と診察にかかる。病人次々とやってくる。

三月二十九日 ネパールの山中にきて、何よりも不便なことは、家々に便所がないことだ。村人たちは、薄暗いうちから、小さな水ばちをたずさえて、村はずれの畑へ出て行く。そこで、大の方の用を足すと、水ばちの水を左手で汲み出して、尻を洗うのだが、水ばちを持った者はほんのまれで、大部分は左手でぬぐってしまう。紙など全然使わない。それはいいとして、われわれも畑へ出て行くのだが、村人から姿を隠すためには、できるだけ早く、しかも、できるだけ遠くへ出向かなければならない。その苦勞は並たいていではない。

けさは割合によく晴れて、ガネシュ・ヒマールとヒマルチュリの雪峰がよく見えた。ヒマルチュリの右隣にあるはずの、マナスルが見えなかったのは、何よりも残念だった。七時ごろザツと通り雨がいった、「これはいい。乾いたほこり道がしめって涼しくなるわい」と、喜んでいると、五分もたたぬうちにやんでしまった。

タディ・コーラを徒渉した。川幅二五メートル、水深三〇センチほどだった。昨年(五二年)十月、私ひとりで通ったときは、八〇メートルの幅で、一メートル以上の水深、しかも、激流のために、五人乗りの丸木船で渡してもらったものだ。それから十二月に帰えるときの幅は、三〇メートル、深さ四〇センチになっていた。これから五月まで、まだ減水するはずである。

ブリ・ガンダキを登る
きょうはめちやくちやに暑かった。午後二時ごろの最高温度三二・二度。頭がくらくらして、歩いたものではなかった。われわれは、路傍に広々と枝を広げたボダイ樹の下で、この炎熱をさけた。このときになって、初めてボダイ樹のありがたさがわかった。

た。ネパール街道には、いたるところの路傍に、ボダイ樹とヨウ樹の大木が一對ずつ、こんもりと枝を張っている。その木をとり巻いて、石垣がつんである。高さは、人が荷を負ったまま、尻をおとせる程度である。これが村の中、あるいは村と村の中ほどなどに必ずある。

ここで旅人は、腰をおろして一息つくのである。

トリズリの手前で、サルと犬の大げんかを見た。サルは、もちろん野生である。暑さにあえぎながら歩いていると、突如後方から、ワンワン、キーキーと、ただならぬ動物の鳴き声が近づいて来る。ぎょっとしてふり向くと、今しも、シェバードに似た一頭の黒犬が、道ばたの畑の中を、十数頭の大サル小サルを追ってくる。土ぼこりがもうもうと上がる。サルたちは、やっと木に近づいて、たちまちよじ登ったが、逃げおくれた小サルが、あわや、犬の足に押さえられそうになった。すると、その横を走っていた大サルが、いきなり大口を開き、すうい形相で、犬にとびかかった。さすがの犬も、びっくりして、キャンと悲鳴をあげて、二、三步横とびに逃げた。そのすきに、サルは木の上ののがれた。犬は、口惜しがって、再び攻勢に出た。今度は、小さな木にとりついている小サルに向かって、ほえたてると、小サルはキーキー悲鳴をあげつつ、木のてっぺんの方まで逃げ上がる。すると、こずえが曲って、小サルは落ちかけた。イヌはここぞとほえたてる。先刻の大サルは、木からかけ下やる、歯をむき出して、犬に向かって行く。犬は、小サルをほって逃げ出す。そのあいだに小サルは、大木にとりついてしまった。こんな騒ぎがしばらくつづいた。

トリズリ・バザールのマンゴー林に張られたテントに着いたのが三時半。先発隊からの連絡によると、マラリヤで三九度の熱を出した人夫がふたり、マラリヤらしいのが十七名も出たという。ここもマラリヤ蚊の棲息地だから、隊員は、辰沼ドクターからキニネ錠をきょうも飲まされた。

まんまるな月が、花ざかりのマンゴーの大木にかかるころは、少しは涼風も出たが、テントの中は、ムーンとして長くはいつておれないほどだった。

三月三十日 シェルパたちは、けさ寝坊をしたために、簡単なおかゆしか作ってくれなかったので、まことに味気ない朝食で、皆口数すくなく淋しそうに、水気の多いおかゆをすすった。日本人の口に合うようにと、いろいろ教えるのだが、まだまだびったりとこない。何よりつらいのは、つけ物がないことだ。ネパール人は、野菜を少ししか食わない。旅をしていて、路傍の畑に野菜をつくっているのを見ることは、はなはだまれである。種類もきわめて限定され、コショウが大半で、そのほかにはニンニク

とカラシ菜が少々。ヒマラヤ山中に来て、まず第一に、つけ物から郷愁をおぼえ出したとは、皆のいつわらざる告白である。

トリズリ・バザールを出ると、すぐに川原の中の一本道となる。まだ九時というのに、川原石に南国の陽光がかかると照り、その照り返しで、むんむんと蒸されるような暑さ。早くも全身しぼるような汗だ。出るときに満たしてきた、二リットル入りの水筒は、もう底が見えてきた。田口などは、早くもパンツ一つになって、川にとび込んで、水牛をきめこむ。人夫たちの足並みもくずれ出す。三時間近くの川原の行進が終って、やれやれと思ったのもつかのま、今度はサムリ・バンジャンまで、すうい鉄砲登りだ。この付近に来て初めて、松林が現われた。山腹の雑木林の中に、山桜が二本ほど、うす闇の中に満開であったのが、印象的だった。

三月三十一日 この付近にはジャングルがない。せいせい十五、六年ぐらいの雑木林が、斜面をおおっているのみだ。大きくなる前に、どんどんまきや建築材として切られてしまう。

サル・トリと呼ぶ木が、実に珍妙な形で立っている。この木の葉は、食物を包んだり、ネパール人にとって、実に大切なチベットの岩塩を包むために使われる。葉が大きくなれば、そばからつみとられるので、枝は全くなく、ひよろひよろと、電信柱のように幹がのびる。サル・トリは、日本で沙羅双樹と呼ばれる木で、ネパール家屋の建設材として使用されるという。特に古風な民家の窓に使ってあって、盲窓や孔雀窓の装飾は、実に芸術のおりが高いものがある。

直射光線は焼くように暑くて、真夏のようにうだるものの、さすがにまだ春浅しと感じられるのは、草がまだのびてはいないことだ。牛やヤギは、草をあさって歩き回っているが、歯にやっとかかる程度の長さなので、さすがにのんびりした牛でもえんこして、反芻をするほどの余裕がなく、せわしように歩き回っている。毛並みも悪く、骨が見えるほどのやせかたである。

カトンジュの稜線に出ると、北の空遠くヒマルチュリとガネシュ・ヒマールの白峰が、春かすみにはげぼかされながら現われた。ヒマルチュリは実に雄大だ。その奥には、われわれの目ざすマナスルが、それより高い空にそびえているはずである。あふもとまで行き着くまでには、まだ二週間はかかるのだ。

街道は尾根筋を通っているが、所々ボダイ樹の枝をひろげた下には、土地の女たちが、ロキシシーとよぶ地酒や清涼剤、乾飯などを売っている。

ロキシシーは、モロコシ、ヒエ、アワなどから作った酒で、原始的な蒸溜をするショウチュウのようなものだ。ぱっと火がつくほど強いものもあるが、たいしては、日本酒よりも弱い。ショウチュウに似た臭みがあるが、安いので、人夫たちにはもてはやされ

る。一合十円といった安値だ。それよりも、ドロブクはもっと安く愛好される。ネパール人は、お祭りでもなければ酔った姿を見せないのだが、時おり険しい山道を、ちどりで足で通る旅人を見受けることがある。

ここ三夜ほど、キツネ火のような怪火をつづけて見て、だれもが不思議がっていた。日が落ちて薄暗くなると、きまって山の腹から上にかけて、二カ所か三カ所に火がつくのだ。それがちようちん行列のように、一カ所に三十も四十も丸く、あるいは細長く列をつくって燃えるのだ。最初の夜は、お祭りの行列だろうということになった。次の夜は、そんなにお祭りが、あっちでもこっちでも同時にあるもんじゃない、キツネ火だろう。山焼きだろう。いや山火事だと、意見がまちまちになった。

ところがきょう、初めてその怪火の正体が判明した。なんということはない。畑に肥料をやるためのつけ火だったのだ。ネパールの民家には、便所がない。人々は路傍ややぶの中にたれ流しするので、日本のように、人糞肥料を全然使用しない。牛や水牛、ヤギのくそなどから、少々の堆肥を作るが、それだけではとても間に合うものではない。そこで、畑の周囲に、広い葉をたくさんつける木を植えて、春になると、この葉を刈って畑に散らして枯らす。山から闊葉樹の枯葉を集めてくる。これに火をつけて灰にするのだ。また一方では、太い枯木を焼いて灰にする。これがキツネ火の正体だったのだ。

カトンジエの山腹で初めてシャクナゲの花を見た。ヒマラヤのシャクナゲは、世界的に有名である。海拔一五〇〇メートル辺から現われて、上は雪線(五二〇〇メートル)の近くまで茂り、巨木は三人がかえ二〇メートルにもおよぶものがあるし、雪線近くのは二〇センチにも足りない。花も色とりどりといわれる。開花期が三―五月までなので、登山家たちから非常に愛好される花である。私たちも大いに楽しみにしてきた。しかし、今見る花はあまりに貧弱なものだったのでがっかりした。

その夜、カトンジエの峠を下ったアング・コーラの岸近くの、チャウラン・フェデエに泊まった。このキャンプ地は、川岸に島のように高まった芝生の丘の上で、ティルマンが、ここを通るたびにキャンプ地とするという、いわくつきの場所である。そして、この日は三田隊長の誕生日だったので、ネパールの前軍司令官カイザー將軍から贈られた、トラの子のウィスキーで祝盃をあげた。先発隊より連絡があった。

1. 昨夜喜一(加藤) 小魚二十を刺す。朝塩焼にする。
2. 人夫すばらしく出足よく七時に出発。キャンプ地に四時半着、ヒマルチュリとガネシュをながめつつ、涼風に助けらる。全員好調。
3. 人夫の診療に来る者三十名。足の傷多く、山崎、人夫の蹄鉄なおし多忙。目ぐすり十名、下痢三名、頭痛二名。

4. 泰安(加藤) 経理部長は、日々の経理が予定どおりにいっているので、大満悦。なお彼は、明日アング・コーラのつり橋の下で、大コイをつつて、浜焼にして食わせると力んでいる。

右の報告を見ていた三田隊長、人夫の蹄鉄直しは傑作だと大笑い。生れたとき以来、はだしの人夫たちの足裏は、全く馬のひずめにも似た堅さで、はさみの刃がたないほどの堅さだ。

山崎は動物解剖が専門、つまり獣医のようなものだから、人夫の足直しにはうってつけというところ。四月一日 アング・コーラの、つり橋の下のふちに群れる大魚の壮観を、楽しみに急いだところ、昨年十二月通ったときより、水がにごっていて、魚の姿よく見えずがっかりした。五〇センチから八〇センチぐらいの大魚が、無数に泳いでいることは事実なのだが、すっきりと見えないのだ。

そこへ部落の老人がやって来て、「きのう日本人が、こんな大きな奴をとった。」と、両手を五〇センチ以上に広げてみせた。「たいしたもんじゃないか。だれだろう。泰安かな、それとも喜一か。」などと話し合った。その夕方、アルガート・バザールで皆と会った話によると、浜焼をこちそうすると、自慢していた泰安のはりには一匹もかからずに、フォークを改造した喜一のもりに、五〇センチの大魚が刺されたのだという。

午後四時、アルガート・バザールの、王室マングー園の中にある先発隊のキャンプにたどりついて、六日ぶりで互の無事を祝し合った。先発隊の若い連中は、はち切れるばかりの元気、いずれも出発時よりも肥えていた。その夜は、隊長を中心に、道中の珍談、失敗談に花が咲き、夜のふけるのも忘れるほどだった。

先発隊の人夫は非常に質がよく、従来速征隊に見られない秩序をもって行動しているのは、なんともありがたいことだ。それでも、ここからカトマンズに帰る希望を申し出る者など二十名ほどあり、後発隊の交代は八名である。

四月二日 アルガート・バザールで、それぞれ一日の休養をとった先発隊、後発隊は、二日と三日にわかれて、いよいよ難関のブリ・ガンダキの大渓谷をさかのぼることになった。

この川は、チベット国内に源を発してくる川と、ネパール、チベット西国境のギア・ラに発して、マナスルのふもとを洗って、川が合流して、初めて東流し、ガネシュ・ヒマールのふもとから南下する。われわれの進む道、アルガート・バザールからサマまでは約一二〇キロあり、これが徹頭徹尾、ブリ・ガンダキに沿って、ヒマラヤでも屈指の悪路として知られている。この約一二〇キロを十二日間で突破しようという予定であるが、はたして順調にたどれるかどうか、はなはだ疑わしい。というわけは、

迫った谷、大絶壁、急流に架せられたあぶなっかしい木橋や、竹ナワのつり橋、棧道など、次々と現われる難場を、カトマンズ周辺で集められた人夫たちが、通れるかどうか、はなはだ心配なのだ。彼らが若し難場におじけて、荷物を捨てて帰るといい出したらそれこそたいへんなのである。この人跡まれな山中で、二百名の人夫を集めることは、不可能なのだ。先発隊は、二日七時を少し回ったころ、二百余名の大部隊で出発した。人夫の足どりは快的に見えるので、ほっと胸をなでおろした。

四月三日 本隊は八十名ほどの少人数でありながら、もたもたして八時の出発となった。涼風にほおをなでながら進む路傍には、タンポポや春リンドウが咲き乱れ、ススキの穂がなびいているし、赤トンボがたわむれているなど、春と秋をこちゃませにしたような、奇異の感にうたれる。

一時四十分、サムランという、三段歩ほどの稲田のある所で泊まりとなった。二十頭ほどの牛を追って、草を求めてきた牛飼いのアンペラ小屋が、一戸あったのみ。コウロギがぎやかなコーラスを始める夕闇の中を、ホタルがとびかっていた。

昨夜ここに泊まった先発隊が、残っていたレポートを、牛飼いが渡してくれた。

1. 休日後であり、ポーターの移動後である朝は、いつもこたごたしがちであるが、今朝もそうだったので、隊員は一足先きに出発、一時間とばし、ここでポーターを待って荷物を点検した。すべてO・K。
2. 昨日解雇を申し出た連中、今朝いつのまにか荷を負って、隊列に加わっていた。結局、アルガート・バザールで交換した人夫は、十二名であった。

3. きょうのコースは長くはないというので、皆でワラビ狩りをしながら進んだ。晩飯に舌つつみを打つ。

4. キャンプ地の対岸の大岩の上に、ローレライならぬ黒髪ネパールおとめが三人いて、一行に盛んに恋の歌を送る。若い連中これに答えて、日本の恋歌をうたう。

5. 泰安早速糸をたれる。目の下五〇センチのコイ、ウグイなど三尾をつる。

6. テントにチベット人雲集し、診察を請う。目薬をさすのに山崎大忙。

7. 血便下痢患者をひとり見いだす。赤痢の疑いあり。飲水に注意を要す。

四月四日 付近に民家がないので、人夫たちは、テントのかたわらの大岩の下に三々五々と寝床をつくって、たき火を囲んで夜を明かした。出発直後悪場にかかった。二〇〇メートル右直下に、奔騰する激流を見おろす絶壁に、六〇センチ足らずの細道が通じ、その途中に棧橋がかかり、木のはしごがある。まるで障害物競走のような難路に、人夫の中には、がたがたふるえ出す者もあり、荷を仲間に負ってもらう者さえ現われた。

カトマンズ人夫について来た赤犬は、ここですっかりしり込み、地面にはいつくばってしまった。下から押し上げ、やっと第一の関門を突破したが、次のはしごでもどうにも進まず、ロープでつり上げる騒ぎとなってしまった。犬でさえ、このように恐ろしがるのだから、人夫たちの恐ろしがるのも無理はあるまい。今夜は帰るといい出す者が、相当多かろうと話し合った。

こうした絶壁も、ときには切れてゆるい斜面となる。そこにはきまって、田畑があるか、牛の群れがいる草地があった。アルボックという四、五戸が、ひと握りにかたまった部落が、稲田のある最後であり、水牛もこれからはいない。この付近、畑にはモロコシが六センチほどのびていた。興味深いことは、稲田のある部落、アルボックまでの家の屋根が、皆わらぶきであるのに、これからは、板ぶきかアンペラとなり、さらにチベット人の住む国境に近づくと、石造り、土の屋根となることだ。ここにも先発隊のレポートあり。

1. 六時半出発、ポーターは元気よし。しかし、途中から始まった棧道に恐れをなし、シェルパに荷を負ってもらう者二、三あり、キャンプ地に着くや、解約を申し出る者二十四名もあった。通訳のディリーは、後任を見つけてくるまでは、解約を許さず。ただし、かわりの人夫を見つけた者には、賞金として一ルピーを与えると宣言したので、人夫たちは二、三時間行程もある村へ、人夫捜しに走る。結果は明朝でないかわらぬ。

2. 隊員はしんがりから、ワラビ狩りをしながら進み、十一時に滝の下の川原で中食、泰安はついに目の下八〇センチのウグイをつり上げる。喜一は、石の中に含まれている宝石を見つけたので、皆はついにゴールド・ラッシュに早がわり、二時間半にわたって、川原をはい回った。

3. 紅茶をきらしたので、緑茶に砂糖を入れて飲む。食料係と相談して、一六ポンドの紅茶、粉ミルクをディリーの弟に買わせて、飛脚に携行させるよう手配した。

このレポートを見て、後発隊の連中うらやましがること。いったい、泰安はそんなにつりがうまいのか。この川の魚はばかなんだらう。とか、なかば岡やき気味で、悪口をたたいた。

宝石なんてあるものかい。あれはただの石さ、という者がある。ところで、ものの書を見ると、ネパールのガンダキから出る菊石を、インド教の正統ヴィシュヌ派が、神の象徴として、神だなにそなえて礼拝したり、結婚式にも用いると、書いてあるが、その石ではないだろうか、という者がある。村木探鉱冶金先生の申されるには、きょう歩いた地は、金の出そうな所である。石英、

雲母がとても多いから。そんならあすから、川原を捜してみようと、先発隊同様ゴールド・ラッシュに早変わりだ。

四月五日 谷の中の一軒家で、昨年(五二年)はカラシ菜を買ったので、今度もあるかと寄ってみると、なんにも作っていないのでがっかりした。そういえば、この谷にはいってから、野菜は全然手にはいらない。民家ではなんにも作っていない。かれらはほとんど野菜を食わない。グンツルと称する干したカラシ菜に、コショウをまぜたのを少量とるのみ。たまりかねて、持参の乾燥野菜を出して食うことにした。

途中で、サマから塩を運んで来る数十人の一隊に会う。サマに雪がまだあるかと聞くと、「ないけれど、チベットとの峠ギア・ラはまだ開かない」との答だった。したがって、今運んで来る塩は、昨年(五二年)チベットから運んで来たものなのだ。彼らはサマへ登るときには、米、アワ、ヒエなどの穀物を負って行き、帰りに塩を運ぶのだ。これら塩運びの連中は、たいがいグルンと呼ばれる中肉中背、色浅黒く、ちょうど日本人そっくりの種族である。彼らの中から有名なグルカ兵が出るのである。女もたくさんまじっていた。

塩運び人夫もカトマンズ人夫も、皆はだしである。彼らのほとんどが扁平足である。そして、足指が一、二本はかならず奇形である。かかどにあかぎれのできた奴が多い。そのあかぎれの割れ目に、石がつまっていたり、休みときには棒切れでとっている。自分でとれなくなると、ドクターへやって来る。「それまた、蹄鉄直しだ」と、はさみとピンセットで荒療治をする。四日付先発隊より連絡あり。

1. 今朝ポーターの集まり悪し。しかし七時には先頭動き出す。昨夜出た人夫捜しの者、三コース(六マイル)歩いてやっと人夫を捜した。チベット人で、冬のあいだ、南方に出かせぎに出て、今北の国へ帰って行く連中の中に、人夫を買って出る者もあって、やっと補充できた。
2. 悪場にもかかわらず、ポーターよく進んだ。
3. キャンプ地の対岸に、大きなハチの巣あり、シェルパのサルキ襲われ、皆テントに逃げこんだ。刺されたら死ぬから警戒されたし。

ハチの巣はすぐわかった。岩壁の中腹に、直径八〇センチほどの丸い巣があり、これに無数のハチがたかっている。クマンバチよりも大形であるから、こ奴に刺されたらひとたまりもあるまい。

四月六日 大きなガレの下を通過して一時間ほど登るとブリ・ガンダキが大きな滝となっている所に出る。今まで五〇メートルほ

どの川幅であったブリ・ガンダキが、ここで幅五メートルにも足らぬ狭さにおしちぢめられ、しかも、大岩が兩岸から落ちて河面をおおっているの、水がほとんど見えない。日本でサル飛とかシカ飛というほどに狭められている。滝の右手のガレをへずって行く人夫たちは、足下に怒号する滝の恐ろしさに、ふるえ上がっていた。この難場を三十分ほどで、やっと突破すると、そこは広い川原となっている。サマからアルガートまで約一二〇キロの間、ほとんど休む暇もなく、急な川床を走り下るブリ・ガンダキも、ここだけは、ひっそりとして、さざ波も立てないで蛇行している。

のんびりと、人夫たちも川原の草に腰をおろして、とっておきのタバコに火をつけた。このタバコは、昨夜ひとりに三本ずつにつけに与えたものである。人夫たちから、文句の出そうな悪場にかかる日には、キャンプ地に着くと、ひとりタバコ三本やるぞ。と宣言して、かれらの不平を、未然に防いできたものである。巻タバコは彼らに、大きな魅力であることは驚くばかりだ。ジャガートで、ネパールの税関吏に、心からの歓待を受けた。

ここの税関は、チベットからはいつて来る毛布、塩などに、関税をかけるのである。兵隊が二十名ほどいた。不思議なことに、インドの兵隊と思われる服装の者が、数名いたことだ。昨年(五二年)からの、私の顔見知りも数名いて、ここにこ顔で迎えてくれた。お茶の接待にあずかったが、こちらからの手みやげが、何もないのに恐縮した。

冬の間、インドやネパールの暖地で、商売をしたり、こじきをしったりしていたチベット人たちは、国境の峠の開くのを待ちかねて、ぞくぞくと登って来る。

暖地で生れた赤坊を、竹かごに負っている母親、羊の赤坊をいだく娘、一家の世帯道具を山のように負う主人、幾十の家族が次々と登って来る。

ジャガートの少し上の畑の中にキャンプした。

この部落で初めてチオルテンが現われた。石を高く積み上げて、三重の塔にする。石には、ラマ教の経文が刻んである。このチオルテンが、道のまん中に立っている。旅人は、チオルテンの左側を必ず通ることになっているし、牛や羊でさえ、左側を通ることを知っている。もうラマ教の勢力圏にはいつて来たのだ。チベットはもう近い。午後風が強く吹き出したと思ったら、夕方から雷鳴をともなつて、夕立がやってきた。それが降ったりやんだり、十二時ごろまで続いた。

大石の下や岩かげで寝ていた人夫たちは、畑の中の一軒家の軒下にとびこんでしまったので、押しあいへしあいのていたらくであつた。先発隊より連絡(五日付)

1. 今朝ポーターはなんのトラブルもなく七時に出発。
2. ガネシユから流れる川との出合点で、泰安糸をたれたが魚にとられ、おまけに予備の針まで紛失してしまい、なげくことなげくこと。

四月七日 雨上がりで、ぶるっとふるえるほどの寒さだったが、ちりが落ちて実にはすがすがしい空で、ガネシユ・ヒマールの一角が、新雪をかむって神々しくそびえていた。三三〇〇メートル辺まで雪が下がってきたが、日がさすとじきに消えてしまった。昨年（五二年）帰りに泊まった川岸のドバトの大岩の下に、三十人ほどのチベット人が泊まっていた。サマの人たちで、私を見ると、わっとばかり寄って来た。「サマにはもう腸チフス患者はいないか」「すっかり終息した。日本のお医者さんのおかげで」「今年も日本隊が行くことを知っているか」「皆待っている。日本のお医者さんがいれば、病気なんてちっとも恐ろしくない」「そうか、それは結構なことだ」と満悦そうな顔をしたとたんに、ぞろりと手が出て、「シガレット、ボクセス！」これだから、チベット人はいけすかない。異邦人さえ見ればボクセスをねだる。それがしつこくて、くれるまではねばる。

タバコねだり組と離れて、岩の下で車座になって、丁半の掛声も勇ましく、ばくちを打っている組があった。日本のすごろくと同じさいを二つ、アルミの食器に入れて、ガラガラふっては、ぱっと毛布の上に伏せる。豆粒と、短くて細い棒が、金のかわりにやりとりされる。皆真剣な顔である。二十二、三の青年は、大部いかれていらく、顔色が変わり、目が血走っている。彼は一勝負ごとに大声でわめいていたが、たまらなくなつたか、急に大声で立ち上がるや、懐中から、一ルビー銀貨を何枚かつかみ出して、ござの上に投げ捨て、荒々しく立ち去つた。せつかく冬のあいだ暖地でかせいでためた金を、すっからかんにしてしまったのだ。残った連中は、投げ散らされた銀貨を、黙って拾い集めて、黙々と勝負を続けた。

川原からバンシンまでは、相当急な登り。この斜面を開いて、帯状の段々畑にしている。大麦がすでに黄色に実りかけ、あと一カ月もすれば、刈り取られるばかりになっていた。ところが、対岸の日当りの悪い斜面の麦は、まだ三〇センチほどしか伸びていない。麦の後には、ソバがまかれるようになっていく。ガネシユ・ヒマールの一角とクータン・ヒマールの雪山が、ま近かに見えってきた。いよいよ山深くはいった感が深くなる。きょうは早々と、十一時半にテント地に着いたので、中食後は、昼寝としゃれこみ、久方ぶりでのんびりしたのはよかつたが、雲行が怪しくなり、ぼつり、ぼつりと雨が、降ってきた。それが夕方から、雷鳴とともに本降りとなり、実にしつこく三時間も続いた。

この豪雨の最中に飛脚が着いた。三日にカトマンズを出発したふたりづれである。約一四五キロほどを、五日で踏破した。その早さにはあきれ返つた。夜も歩いたといつた。三月二十七日付東京内版が、このチベット国境に近いヒマラヤ山中で見られるとは想像もしていなかつた。皆は、大形テントに集まって、ほのかなランプの光で、内地のかおり高い新聞を、うばいあうようにむさぼり読んだ。手紙を受取つたのは、隊長と高木のふたり、他は指をくわえて口惜しがつた。六日付先発隊よりの連絡あり。

1. 三人の人夫を交代、チベット人の旅人で通りあわせたのが代つてくれた。
2. 夜中、雨の音にとび起きて、荷物の箱におおいをかけたしたりしたが、たいした降りでなくやんだ。
3. 泊まり場のバンシン村に着いて、シエルバのガルツェンやサルキと、キャンプ地を捜したが適地なし。しかたなく、モロコシの芽が二センチほど伸びた畑に張ることに決めた。
4. 荒した畑の代償を支払うために、村長を連れに、昨年もついで来たラッカロ・バックルというあだなの人夫を村へやる。彼は、ラウド・スピーカーを持って村に入り、村長を呼ぶ。その大きな音に、村人は恐れおののき、われ先にと家を捨てて四散す。通訳のディリーが行って村長と交渉、二ルビーを払ってO・Kとなる。

以上の報告のうち、第四項を見て、皆腹をかかえて笑つた。ラッカロ・バックルという人夫は、隊の人気者になっている。彼は昨年（五二年）の踏査隊について歩いて、そのとつぴな愛すべき性質をもって、皆からかわいがられた奴だ。生れは、チベット国境に近いゴサイタン山のもと、少年のころ家をとび出して、ネパール国じゅうを放浪している、完全なヴァガボンドなのである。調子はずれながら、ネパールじゅうの民謡を知っていて、キャンプ・ファイヤーを囲んだ夜などは、人気を中心になる。大福もちのように丸々と、太っていて、実に気のよい奴であると同時に、とつぴな奴で、することすべて、人を笑わせる結果になるので、奴といっしょにいると、一日じゅう腹を押さえていなければならない。こ奴が、ラウド・スピーカーを持って、得意げに、村にはいって行く姿、何をどなたかわからないが、あわてふためて逃げ去る村人の姿、これを意外そうに、ぼかんと口を開けて見ているそのラッカロ・バックルの姿が、目に見えるようだ。

昨年（五二年）も、これに似た話題をでっち上げた。サマから帰路についているとき、ある村に近づくと、村人があわてふためいて、裏山に走り上がったたり、川下へ一目散に走って行く。何事が起きたのかと、いぶかりながら村にはいって行くと、ある家の戸口にすわりこんだ老婆が、われわれに、合掌しながら何事か哀願している。通訳のディリーは、くすくす笑いながら「家の息子を兵隊にとらないでくれ」とたのんでいるんです。「だれかいたずららしい」という。「兵隊？ おかしいじゃないか、今ごろ」と皆、小首をかしげている所へ、例のラッカロ・バックルが、すつとんきような顔をして現われた。ディリーは早速彼をつかまえ

て、「お前だろう、いたずらした奴は。」ときめつけると、彼はにやりと笑った。

一足先に、村にはいったラッカロ・バックルは「今から政府のだんなが、徴兵検査をするから、若い男は皆出て来い」とどなって歩いたのだそうだ。「すいぶん罪なことをする奴だ」と口ではいってしたが、そのとんちには感心した。このラッカロ・バックル、これから先どんな珍事をひき起すか、ちよいと楽しみである。

四月八日 昨夜三時間も続いた雨で、道は少々すべっこい。これからニヤックまでの登りが、ブリ・ガンダキきつての難場である。ヒマルチュリ山から引いてくる尾根の中腹に、わずかにしるされた細道を登るのである。右、約一〇〇メートル直下には、ブリ・ガンダキの激流が、ゴウゴウと岩をかんでいる。昨年（五二年）は、通いなれたチベット人夫たちも、必死になって、お経を唱えながら下ったのである。カトマンズ人夫で、こんな険路を歩いた経験者は、まことに少ないのだから、恐れおののくことだろうと、内心心配してきたのであるが、いま、彼らの登るありさまを見てみると、一部を除いては恐ろしがりもせず、中には、鼻歌まじりの奴さえある。「おやおや、奴らは案外強い。」と、一面安心し、一面拍子抜けもした。しかし考えてみると、もっともなこともある。昨年（五二年）は重い荷を負って下ったが、いまは登りである。下りは、いやでも谷底が目にはいつてくるから、おへそがむずがゆくなるものだが、今は谷底を見ないで登っているので、鼻歌の一つも出るといふもの。案じていた故障もなく、全員無事に難場を乗り切ってくれたので、ほっと胸をなでおろした。その直後に聞いた話であるが、この日十時ごろ、サマから塩を負って、この難場を下ってきたひとりが、足をすべらせて、一〇〇メートル直下の川底へ落ちたそうだった。いっしょにいた仲間が、アッという叫び声を聞いてふり返ったところ、その友だちは、まりのように、空中を落下していったという。この話を、人夫たちにして聞かせると、急にだまりこんでしまった。

正午に、ニヤックのキャンプ地に着いた。先発隊は、この日休養日で、本隊の到着を待っていた。だれもかれも真黒に焼け、ひげだるまとなっていた。「今夜はたんまり御馳走を」と、カンサマ（料理人）のパンシーとサルキが、腕によりをかけて御馳走をつくってくれる。泰安と私は、ワラビを摘んで、三ばいずを作ろうというわけ。ふたりで、たんまり摘んできたワラビを見たディリーとパンシーは、「これは食べられない草だ」という。「日本では食べるよ」というと、「食べる」と口がこうなる。と、パンシーが口をゆがめてみせる。彼らは、灰汁であくを抜くことを知らないらしい。シェルパたちがとめるのもきかずに、三ばいずにして食卓に出したところ大好評で、大きなどんぶりの山盛りが、たちまちに終ってしまった。パンシーたちは心配そうにワラビの食べっぷりをながめていた。夕食後はキャンプ・ファイヤーを囲んで、山の歌から流行歌まで、持ちあわせをさらけ出して大はしゃぎ。

四月九日 七時二十分に、先発隊が、サマでの再会を約しつつ出発した。きょうは本隊の休養日なので、見送ってからまた寝袋にもぐりこんだ。シェルパたちも、テントや炊事場で、イモムシのようにごろごろしていたし、人夫たちは、村で地酒のロキシシーを飲んででもいるのか、だれも姿を現わさない。午後二時ごろから、谷の上空に、黒雲がひしめきあい、ついに雷鳴とともに、強い足の雨が落ちてきた。それがひどくしぶとい奴で、頭の真上にでんと腰をすえて、絶えまなしに、ゴロゴロガラガラとやり、雨も足並みをそろえて、八時ごろまで続いた。

四月十日 今朝は三二〇メートル以上は、まっ白になっていた。「これじゃサマは雪ツラ」なんて、安曇語でしゃれる者もあったほど、寒い朝であった。テントは雨にぬれて重い。道はすべっこくなっている。人夫の出足が、にぶりはしまいかと、心配したが、七時半には全部出発した。

ニヤックから、一気に三〇〇メートルほど垂直に、ブリ・ガンダキの川底近くまで下る岩壁道は、まことに恐ろしかった。昨夜の雨で、岩はぬれていたため、底がゴムのバレーボールのくつは適当でなかった。

ここから約二キロほど、草つき斜面をへずる道は、変化に富んでとてもよかった。おとめの足にも似て、すんなりとのびたワラビ、ブルー、紫、桃と、色とりどりの草花。一〇メートルもある大木に、真紅の花をどっさりつけたシャクナゲなど、斜面をうずめていて、花園を散歩しているような気分であった。

午後二時キャンプ地に着くや、三十分も離れたピーの村から、老若男女が続々と集まってきた。病人もいたが、薬をほしい連中が多い。ドクターが、血液の検査の材料として、村人の耳から、血をとることを申し出ると、われもわれもと応ずる。耳から血をとる代償として、エビオス一錠をやると喜んでる。耳に血をとる器具をつけられ、パチンと音がすると、なにかの薬を注射してもらったと、思いこんでいるらしい。

病人はみてもらうのに、卵を二つ以上持って来る。これが、いままで通って来た、ネパール人部落では、かつてなかったことである。ネパール人は、いずれも無料と心得ている。つまり政府なり、金持なりの、慈善事業とも思いこんでいるらしい。農奴根性になりきっているのだ。ところが、チベット人の多く住む地方へ来ると、ギブ・アンド・テイク、——代償を求めるかわりに、私わなければならぬ——ということを知っているのだ。悪くいえば、人ずれしているのだ。九日付けでピー村に先発隊の連絡あり。

1. すばらしくすんなりと伸びたワラビを摘みつつ進む。小さないろいろの花が、目立って美しく咲いていた。白いランの花

を胸にさして、天空のかけ橋のような道をたどる。川原に下った所で、ひとりの人夫がけいれんをおこした。山崎は鎮静剤を注射し、シエルバが代って荷を負う。幸いにキャンプ地に着いたところにすっかりなおる。二時にキャンプ地に着いたところは雨、午後三時半の気温一四度。

2. 昨年(五二年)の顔なじみの連中多数に会う。昨年サマのキャンプに来た、あばたの美少年に再会。驚くなかれ、彼はシエルバのアンツェリン・五号の妹の子で、何年ぶりの再会だという。

3. 先発隊は、積極的にカトマンズ人夫を、地元人夫に代えようとしている。地元人夫は服装、健康の点で、カトマンズ人夫よりすぐれているから。

4. サマのベース・キャンプで使用する人夫五人を、デイリー通訳がすでに、目ぼしをつけている。本隊の人夫に適当な者ありや。

5. デイリーのかぜは快調となったが、石坂の調子悪し。山崎は、彼にかぜを引かせまいとけんめいである。

四月十一日 今朝は寒かった。三〇〇〇メートルへんまで新雪がさがっていた。人夫たちは、寒くて寝ていられないとみえ、朝早くからテントの周囲に集まって、荷物のうばいあい始める。すでに二週間を越える旅で、お互の負う荷物はわかつているはずなのに、毎朝のようにうばいあいをする。こすい奴は、早く来て軽い荷に手早く自分の負い綱をかけて、涼しい顔をしている。これはおれの荷物だ」などといってみても始まらない。のろまな奴は結局、重い荷を負うことになる。

ピー村を出てしばらく登ると、急に針葉樹林帯にはいる。松、トウヒ、イチイなどの巨木が多くなる。これらの巨木の根本近くが、むざんにも、おのでしんが出るまでに切られているのが多い。伐採するのかもしれない、そうではなくて、この木のしん近くには、油が非常に多いので、ここから小さな板切れをとるのだという。この板切れが、住民のたいまつともなり、ランプの代用ともなるのだという。そういえば、この辺でランプなど見られない。

チベットからはるばる流れて、ヒマラヤ山系を横断してくる川が、ここでブリ・ガンダキにそそいでいる。この川の谷が、あまりに迫っていて、どこで本流に流れこむのか、かなり注意していないとわからないほどである。前方の林の中から、カランコロンの鈴の音が近づいてくる。ヤクとインド・コブ牛の雑種ゾーバが、塩の袋を負って現われた。その後から現われたチベット人は、昨年(五二年)サマからカトマンズまで、荷を負ってくれた若者だった。彼はなつかしそうに私に話しかけた。また雇って下さい「そういえば、きのうあたりから、昨年(五二年)の顔なじみのチベット人とちよいちよい出会うようになった。

二時にバルチャンのキャンプ地に着く。広々とした芝生で、キャンプ地には絶好であるが、おりから吹き出した寒風に、テントの中でもはだ寒かった。四時ごろである。人夫たちが、大声でわめき出した。と、何かゴーツと遠くの方から潮ざいのようになりが聞えてきた。テントをとび出して見ると、対岸にそびえる六〇〇〇メートルの山の中腹辺に、まっ白な雲がわき上がっている。おやっと、その白雲を見つめると、それは雪崩のための雪煙であったのだ。次の瞬間、ゴーツと大音響とともに、その白雲の下をくぐって、あわ立つ激流のように、大量の雪が、岩の割れ目をすい早さで流れ下ってきて、キャンプ地から、約五〇〇メートルほど上流の河中へ落ちこんでいる。雪崩の音を聞いてから、三田隊長が、時計を見たが、それから十分以上も続いていると語る。日本で、十分も続く大雪崩があったとは聞いたことがない。十日付け先発隊からの連絡あり。

1. 昨夜の最低温度九度。今朝新雪がひどく下の方まで降っていた。牛の首につけた鈴の音によって目がさめた。カランコロンのどかに鳴るその響は、スイス・アルプス山中にあるを思わせる。

2. アルガート・バザールより連れて来た、人夫用食糧運搬のポーター五人は、食糧を食いつくしたので、不用となり解雇。なお十一人の人夫をチベット人夫と交代させる。中には昨年の顔なじみ多し。

3. 七時出発。中食ころより天候悪化、雨となる。行程意外に長く、二時バルチャンのキャンプ地に着く。デイリーと石坂のかげたいしたことなし。

4. 泰安、ワラビ狩りにおおわらわ。本隊も多くとってこられたし。サマで野菜の補充として大いに役立つと思う。

四月十二日 七時半出発。バルチャンの平地は案外に広く、麦がすでに穂を出しかけ、豊かな緑の波を打っている。昨年、この人家の垣根に、ラングール・サルが百頭ほど群れていて、私はカメラを向けて夢中になったのであるが、今は一頭も見えない。そういえば、尻の赤い日本サルも、ラングール・サルも、今度の旅でほとんど姿を見せてくれない。今は山の奥深くにはいつているのか、あるいは岩場に隠れているのか。いずれにしても、ヒマラヤの旅に、あいきょう者のサルが、姿を見せないことは寂しいかぎりである。サルは、インド教のラーマ王の危機を救ったことで、神格化され、ハヌマーンという神に祭られているだけに、インド教徒は絶対にいじめない。ところがラマ教、仏教両徒はそうでもない。ブリ・ガンダキの上流で、サルの落し穴を見たことがあった。

バルチャンからちょっとした坂を登ると、リダングの部落である。昨年(五二年)ここで一泊して、二十人ほどの村人を、アルガート・バザールまで、人夫として使ったので、顔なじみが多い。皆、なつかしように寄って来たのはよいが、すぐに手を出して

「シガレット・ボクセス」とやるのは興ざめた。部落の上方にラマ寺があり、きょうは祭りなのか、のぼりが数本風にはためいて赤衣をまとったラマ僧の姿が、多く見えるので、私はひとり登って行った。昨年(五二年)知りあった住職もいる。彼はあいさつの印に赤い舌をべろりと出した。失礼なところだが、これがチベット人が目上の人に対するあいさつなのである。一ルビ銀貨を出して見せると、すぐに本堂に案内してくれた。おりから、二十人ほどのラマ僧が、ひどく暗い本堂の両側にすわって、読経の最中であつた。おさい銭をあげると、ラマ僧のひとり、正面に鎮座する仏像を説明してくれるのだが、言葉が全然わからない。正面には、如來さまに似た像、その左右には、総本山ラッサの活仏、その他の像らしいが見えた。壁には、古いや新しいマンダラが多くかけてある。うちわ太鼓の大きな奴を、ドンドコと打ちならすし、にょうはち(寺院で用いる楽器)、鐘が、耳のいたくなるほど鳴り出したので、本堂から逃げ出そうとすると、彼は引き止めて、今から聖靈踊りをみせるといふ。しかし私はたったひとりであるし、だいたい時間もたつたので、たつて帰ることにした。

きょうは、ブリ・ガンダキの谷にはいって、初めてのすばらしい天気で、一点の雲もない。その上、きょうこそ、待望のマンスルに、初見参する日だといふので、皆の足はおのずと早まり、まだか、まだかと、催促するありさまである。

ショウウ村のはずれにかかると、マナスルの双峰が、西の天空高くこつぜんと現われた。「おお、マナスル！」皆が、今まで忙しく運んでいた足をびたりと止めて、はるかかのを仰いだ。「すごい！ まったくすごい」だれもの口から、驚嘆の声がほとばしった。十一月の末、この山にわかれを告げたときよりも、雪がうんと多く、しかも四〇〇〇メートル辺まで下がっていた。あのときは、四八〇〇メートルまでは、雪がなかったのに。あれだけ雪が深くは、ひどく困難な登攀となるだろうと、気が重くなった。後から来たシェルバたちも、立ち止まって、マナスルを指さして、声高に話している。

ロー村のキャンプ地に、一時半に着いてみると、もう村人が二十人ほど集まって、石垣の上から見物している。中に数人の患者がドクターを待っていた。

昨日、ここに泊まった先発隊よりの報告によると、村に腸チフスのうたがいある病人がふたりいるから、注意するようにのとこと。皆が急に緊張した。

ロー村には、サマ僧院の僧正の娘婿がいて、彼が昨年腸チフスとなり、林ドクターが、二度も往診してなおしてやったことがある。おそらく、彼の菌が、村に散らばつたのであろう。ロー村に十一日付け先発隊よりの連絡あり。

1. 昨夜の最低温度四度、今朝六時七度。

2. 八時半リダング村に着き、ラマ僧院を訪ねる。本堂に招き入れ、ロキシという地酒を御馳走してくれた上に、おかげらのようなラマ踊りを見せてくれた。五ルビをおさい銭としてあげる。

3. マナスルの見える所に来たが、雲に隠れて見えず、小雨ばらつく。十二時半、ロー村に着きキャンプ。

4. 加藤喜一、望遠鏡をもって高台にのぼる。「マナスルが見えるぞ」と叫ぶ。それとばかり、駆け上がる。頂上と東尾根の肩が雲から出たりはいったり、ひどい雪煙だ。

5. 帰りに病人をみる。昨年(五二年)林が往診して助けたラマ僧正の親戚の人も来た。

6. サマに昨夜一〇センチほど雪が降つたと、塩運び人夫の話。
ベース・キャンプが、雪中となる可能性あり、第一キャンプ、前進ベース・キャンプの登路も問題となろう。ベース・キャンプ地が、あまり雪深い場合には、サマに近く張りたい。

辰沼ドクターへ。ロー村へ登って行く右の丘の、とつき一番右から二番目の、はしごの家に、十五、六歳の男の子が四、五日前から発熱して、舌がまっ白。下痢なし。便普通。食欲なく流動物をとる。熱三七度八分。昨年(五二年)林に助けられた患者、五歳になる息子、一週間前から発熱、以上のほかには、村に病人なし。前者にオーレオマイシン錠を与えたが、後者を見ることできなかった。山崎とともに、チフスと診断。帰ってから、隊員とシェルバに、食前にリゾール水で手を洗うこと、生水を飲まぬことを申しわたす。村中を洗って、チフス患者の有無を確かめてほしい。

7. サマにはまだ、チフス患者あると、予想される。

四月十三日 いよいよサマに到着の日だ。人夫たちも、見違えるような元気で、早朝から、彼らの岩小屋をはい出してきて、荷物運びの奮闘を始めた。七時半出発。ロー村のはずれの高台に来たが、マナスルは頂上を、雲に隠して皆をがっかりさせた。しかし、肩から下、氷河、ナイケ山などがよく見えるので、双眼鏡をとりだし、腰をどっかとおろして、長いあいだその登路を研究する。昨年(五二年)十一月の雪の状態と、今を比較してみた。現在、雪は少なくとも五〇〇メートルほど下がっている。そのため、山はひどく穏やかに見える。マナスル氷河のクレバスが、雪のために多く隠れているので、少しもすこみがない。

サマ村への登りにかかるころ、先発隊の使用した人夫たちが、十人、二十人と、グループをつくって下って来る。十八日間、世話をした荷物から解放されて、足どりも軽い。そして懐中がぶしりと重いものだから、鼻歌の一つも出ようというもの。昨夜はほとんど眠った」と聞くと「キャンプの近くの羊小屋で寝た」との答え。「寒かったらう」「寒さよりも夜中、とてつもない大音が響い

て、ちょっと眠れなかった。恐ろしい所だ」と、皆異口同音である。ほとんど三十分おきぐらゐの間隔で、雪崩が落下するのだから、雪になれない人たちにとっては、縮みあがるほどの恐ろしさであったろう。

サマ村を見おろす牧場に來ると、ヤク、ゾーバ、ゾーモなど、平地では見れない牛の変種が、数百頭、やっと出した草の芽を求めて、さまよっている。サクラソウが、牧場の芝草の中に点々と、かれんな花を開いている。サクラソウは非常に種類が多く、大型のクリンソウに似たものから、非常に小型のものまであるそうだが、今見るサクラソウは、小型で花の色は紫、紅、桃色などである。そのそばに、これはまた珍しいアヤマの群落があった。緑の葉がわずかに一〇センチ、花は濃いブルーである。アヤマは、こんなに早く咲くとは思わなかった。

サマの部落にはいると、多勢の村人が、戸外にかけ出して來た。いずれも、長い冬を彩光の悪い戸内で、たき火にいぶされたような、すすだらけの顔で、目は充血している。昨年(五二年)チフスから助けもらった感謝の念があるものか、好意のある目で迎えてくれた。まだ、チフス患者が残っているのかと思うと、彼らに近寄りにくい。ベース・キャンプ(三八五〇メートル)に着いたのが二時半。人夫たちは、すでに全部到着して十八日間、幾山川の難路を、やっと払いにしてきた重い荷から解放され、その代償を、早くもらいたそうに、ひしめき合っていた。各自に、チップ二ルビーと、払い残りの賃金を与えると、うれしそうに両手を合掌して、「ナマステ・サーブ」と、うやうやしくあいさつして帰って行く。十八日の長きにもわたってよく重い荷に耐えて、ここまで来てくれた。私たちの第一難関は、君らの努力によって、無事に突破できたのだ。ありがとうよ。今まで、人の顔さえ見れば「シガレット・ボクセス」と、こづらにくい言葉をはいていたチベット人夫にさえ、ぐっとこみあげてくる近親感を感じたほどである。

人夫たちが帰ったあと、急にひっそりした。また氷雨が降りだした。久々で、皆がいっしょになったうれしさに話が夕食後おそくまで続いた。かたわらのマナスル氷河が、ひっきりなしに崩れる大音響も耳にはいらぬほどであった。三田隊長は「あすは休養日、ゆっくり休もう。お休み」と、あいさつして、テントに引きあげた。つづいて皆が、それぞれのテントに引きとった。雲が低くて湿っぽい夜だ。いよいよ、マナスルに正面きって対するのだ。口にこそ出さないが、皆、その夜は緊張して床にはいった。雪崩の音響は、夜を徹して続いた。

前進基地の建設

田 口 二 郎

ベース・キャンプは、プリ・ガンダキ峡谷に激しい傾斜で落ちこんだマナスル氷河が、どろや石くずを乗せて縦横に裂けつつ、扇型にひろがっているのを見おろせる小さな台地の上にあった。そこにはハイネズやシロカンバ、シャクナゲの灌木が茂っていて、夏になるとサマの村人が、ヤクや羊を囲う、いくつかの石造りの家畜小屋のひとつに、シート用のキャンバスが幾枚もかけられ、内部にはラジオがすえられ、さらに壁続きの隣の石室には地炉がいくつもならべて作られた。これからの暮しの中心である食堂と炊事場である。これを囲んで十いくつかのテントが張りめぐらされ、気象測量器具をならべた一角もできると、もうりっぱな遠征隊の基地である。食糧のカートン・ボックスは、高地への運搬順序に見合わせて、いくつかの山に積みあげられた。高地用テント、ナイロンのロープ、空気マットレス、プリムスとケロジン燃料、それに隊員とシェルバに手渡されるはずの羽毛服、ウィンド・ヤッケ、毛のカッター・シャツやジャケツ、ラクダの下着類、ビムラム底の登山靴、オーバー・シューズ、その他おびただしい数の個人装備品が、野天にひろげられると、立木を切って広くとったはずの敷地も狭いほどになった。基地の工事は一兩日のうちにさらに進んで石室には、豪勢ないろりが積み上げられ、片側の壁にはセロファンを張っての窓のあかり取りも抜かれ、ハイネズの葉が分厚に敷かれてカーペットがわりとなると、地酒ロキシーにちなんで、食堂につけられた「籠酒亭」という呼び名も野趣に富んでふさわしく見えるのだった。食堂が完備するのと並行して、テント村の一角には、キャンバス囲いのトルコぶろさえ建てられた。あたりに無数にころがっているスレート石を野天で焼き、小屋の中に持ち込んで水をかけ、蒸気にむされて、『東京温泉』気分を満喫しようという仕組である。スレート石はなかなか便利で、ヤクの肉の料理で、私たちのいちばん気に入った御狩場焼きをするときにも、やはり台石の役目を努めた。

ヒマラヤ遠征ともなれば、文明から隔たって暮さねばならぬ期間が、長いのが普通である。長いだけに、少しでもコンフォタブルな生活条件をもちたいという欲求が、日増しに強くなってくる。

この厚生施設はすべて器用貧乏という失敬な異名をもつ、加藤泰安の仕事であったが、いまひとりの器用貧乏人——ファスナーのつくりからラジオやテープ・レコーダーの修理までやってのけた——村木の名をあげ、移動生活集団である遠征隊に、地味

な面でも、かけがえのない仕事をした人たちとして、特記したいと思う。

ネパールもブリ・ガンダキ峡谷をつめると、風俗習慣ともにチベットの文化圏内にはいる。ベース・キャンプから、一時間の距離にあるサマ村のゴンパ（ラマ教僧院）は、近郷での名寺だけに、いくつもの山門をめぐるせ、公園のようにこぎれいに手入れした庭園と、二百人ものラマ僧を擁しているが、家畜同然の暮しをしているサマ村や、峡谷の他の部落の住民には、その権勢はまばゆいほどにちがいない。その権勢のいわれは、この僧院が、チベットから来る岩塩の専売権を、大昔から持っているためだと聞いたが、しっかりした中央集権制度をもたぬ現在のネパールでは、この山奥の坊さんたちが持っているのは、岩塩ばかりでなく、少大げさにいえば、峡谷の住民にたいする、生殺与奪の権でもある。われわれのマナスル攻撃は、サマ村を根城として行われるとあってよい。これからの生活に必要な、食糧の大きな部分を、サマに求めねばならないからだ。また帰路の人夫も、サマ村のやっかいにならないのだ。

ベース・キャンプに着いてからの大切な仕事のひとつは、隊長がこの谷の君臨者であるゴンパを、儀礼的に訪問することであった。遠来の客をむかえて、ラマ僧が発した言葉は、いかにも権勢者らしい次のようなものだった。昨秋（五二年）この村にチフスが流行したのは、日本隊が来たためだった。ラマ先生、昨秋の踏査隊の林医師が、チフス流行のサマ村に飛びこんで、人命救助に懸命な努力をしたことを、すっかり忘れたようなとばけ方である。通訳のディリーの若い頭には、すっかり血が逆上して、「日本隊のおかげで、僧正の息子の一命をとりとめてやったではないか」と、きめつけるのだが、相手は泰然として「カンブンゲン（マナスルのチベット名で氷の肩の意）の頂上には、ダイヤモンドがあるが、あれを盗んでは困るよ」ときた。またこの一帯は聖地だから、殺生はしないでくれとのこと。なんとなくこっけいで、一同は笑いを殺すのにひと苦労した。

旅で続いた好天気も、ベース・キャンプに着いてからすっかりくずれ、朝に青空がのぞくことはあっても、午後の三時ごろにはきまって、白いものが降り出す。視界のきかない灰一色にぬりつぶされた風景のなかで、氷雪崩のゴウゴウと、貨物列車が通過するような響音を聞くことは、気持のよいものではなかった。それはたいの場合、つい鼻の先にあるマナスル氷河の最下端のアイス・フォールから、セラックスがもんどり打ってころげ落ちる音であった。とくに、雪が氷雨に転じたり、はだが急にぞくぞくしてくるような気温の変り目には、しきりに雷音はとどろいた。

雪崩が、だれにも陰惨にひびいたのは、この大自然が、われわれに未知である、いやわれわれにばかりでない、この上の領域に はかって、人間が足を踏み入れたことがないのだ、という未知にたいする潜在意識的な恐怖が、大いに手伝っていたにちがいない。

実際、ベース・キャンプに着いてからは、多忙な整理に追われている間でも、いったいマナスルには登れるのか、途中で絶望的な

障害が出てきはしまいか、という気がかりが、片時でもわれわれから離れることはなかった。

好天気には、ベース・キャンプからマナスルの東尾根が、空いっばいに、真正面に仰がれた。しかし、登路と目されたマナスル氷河から北峰への遠回り道は、目の前に、ナイケ山からの端尾根に立つ黒々とした岩峰が立ちはだかつて、背のびをしても見る術がなかった。ベース・キャンプのわれわれは、そこからは視野のきかないナイケ・コルへの氷河の道を、あれやこれやと想像すること、頭はいっばいだった。

一日も早く、ナイケ・コルに達したいものだ。そこまで行けば、予定登路が一望のうちに収められるはずである。そして、そこそこは、攻撃にあたっての前進基地となるべきである。しかし、ナイケ・コルは、果して容易に到達できるであろうか。遠征隊にナイケ・コルへの道は、全く未知であったわけではない。ルート半ばは、すでに昨秋（五二年）、踏査隊の高木、竹節によって踏まれており、それによると、登路が氷河に移ってまもなく、踏査隊がアクシデントでやむなく引き返した地点までは、モレーン歩きの連続であって、技術的には困難がないことはわかってきた。しかし、問題はそのさきである。コルまでの距離は、気がかりな氷河やクレバスの状況は、クレバスの迷路を進むうちに、渡り切れない幅広の裂け目がありはしまいか。兩岸からの雪崩の危険は、雪の深さは、スキーの使用度は、数えあげるとナイケ・コルまでにも疑問符の数は多かった。

ベース・キャンプに着いてから四日目の四月十七日、まず高木をはじめ六名の若い隊員と五名のシェルバが、翌十八日には、隊長を除く、残りの全隊員と九名のシェルバと三名の人夫が、上のモレーンの台地まで、合計一トンばかりの荷をかつき上げて、その日のうちにベース・キャンプに帰った。出てしばらくは森林に小道があるが、森林限界が終る四〇〇〇メートルあたりから、羊飼いの踏みあと程度になり、まもなくひざまで没する深さのくされ雪にうずもれてしまう。上の台地に達するコースとして、高木隊はアイス・フォール寄りの尾根筋を選んだが、十八日のバーティは、近道であるナイケ側をからんで一本の雪崩道を横切った。

この通路には、数日後の大降雪の直後に雪崩が出て、ずっと下方に架線された電話線をぶち切ったことがある。それ以来、アイス・フォール寄りのルートが、正規の輸送ルートとして、使用されることになった。台地に近づくと、かなりの急傾斜で、小さな灌木やコケモモ類が、所々つき出た岩石に根をはり、一帯は腐った重たい雪でおおわれていた。十七、八の両日は雪降りがちであったが、見通しのきかない大斜面で休んでいるとき、「富士山の太沢に似ているな」と田口がいうと、皆の共感を呼んだようだった。

ベース・キャンプから台地までは八〇〇メートルの高差なので、小さい斜面とはいえない。第一キャンプ予定地は四六〇〇メートルの高さで、台地までほとんど登りきった所にあるが、その背後にモレーンの大尾根を控えているので、付近に水場があるのは上乘であるが、異例のばか雪が降る場合には、雪崩にたいして必ずしも一〇〇パーセント安全でないような気がした。雪崩がモレーン尾根沿いの緩傾斜の小峡谷を押し出してくれば、テントもろとも、マナスル氷河のアイス・フォールめがけて、空中を数回転宙返りするにきまっている。が、ヒマラヤでこの季節に、果してそのような大雪——たとえば日本の越後のような——があらうるだろうか。まれであるとは、少なくともいえるように思えた。しかし、それがありえないとだが、断言できようか。第一キャンプの位置についてわれわれの確信は、右のように必ずしも明確なものでなかったが、現実にはベース・キャンプから日帰り往復できる高度と距離を、それ以上延ばすことは不可能であった。より低い地点にも安全地帯はなかったので、そこが第一キャンプの唯一の張り場所であったといっても、うそではない。

さて、第一キャンプ予定地への行動によって、隊員のうっせきしたエネルギーは放出され、数日來の焦躁感も吹き飛んで、皆の気持はぱっと明るくなった。

海拔四六〇〇メートルは、隊員の大部分にとって、それまでの生涯で達した最高の高さであった。あらためて書くまでもなく、ヒマラヤ登山の基本原則の一つは、酸素の薄い高度に、漸次からだを馴化させて行くことである。四六〇〇メートルに達した第一回の行動で、息切れを経験した者は多かったが、悪質に山酔いするものは出なかった。十七日の夕、キャンプ・ファイヤーの赤々したかがり火に照らされた隊員の表情は、いかにも生氣に満ちていた。竹節が身ぶりよろしく音頭をとると、シュルバたちも「アンマリー、エントツガ……」と、蕃声を上げてこれに和した。ついでのことながら、シュルバたちが炭坑節が好きなのは、妙なほどである。

四月十九日 午前三田隊長は、高木、加藤(泰)、田口を食堂に集めて、マナスル攻略の基本案を協議した。マナスルのような大きな、しかも従来世界の登山者に全く未知の山にたいして、日程づくめの極地法で、しゃくし定規に自分をしぼることは無意味であり、柔軟な計画で対処すべきだというのが、三田隊長の意見であった。われわれの予定登路の線はきまっていたので、これからの行動の重点が、ナイケ・コル、ノース・コル、プラトーへ、頂上への、四つにわかたるべきであるという点では、だれも異論は持たなかった。しかし、さらに一歩進んで、ヒマラヤ攻略で最も重要である、行動の結節点ともいべきキャンプの位置や数という問題については、われわれの知識は空白が大部分を占めていた。

ナイケ・コルまでにいくつのキャンプを。ノース・コルへの雪崩の危険にさらされたアイス・フォールに、いったいテントが張りうるものか。ノース・コルからは。キャンプについてのわれわれの議論は、上下の高差を平均五〇〇メートルに置いて、積み上げて行くという、東京出発前のデスク・プランを、さらに修正できない限界にとどまっていた。しかし、この会議では「人」について、最も重要なことが決定された。東京での決定に基き、高木が登攀隊長として、これからの登山行動の指揮をとる。高木と同様、欧州アルプスで氷河の経験を積んだ田口が、登路の選択その他で高木に協力する。加藤(泰)は辰沼医師とともに隊長付きとして動く。最後の攻撃隊員の選出をなるべく早くという、要望があったが、全員の士気を考えてもまだ時期に非ずという意見もあり、若い隊員は当面のところ、村山と加藤(喜)をそれぞれの責任者とする二隊に編成された。編成内容は、ナイケ・コル攻略にあたって、次に述べるとおりである。ヒマラヤ遠征三回の経験をもつ竹節が、主力から分離して考えられたのは、依田とともに新聞報道に特別な任務を持っていたからである。

柔軟な行動案といっても登頂目標日の目やすがなければならぬ。高度馴化には、少なくとも四週間必要だ、という辰沼医師の意見が参考とされたが、何を置いてもモンスーンの到来以前に、雌雄を決せねばならぬという、至上命令があった。これについて、長年の気象統計は、中央ネパールへのモンスーンの到来は、平均的に六月初旬であり、したがって五月の第四週は、もはやきわめて不安定な時期であることを教えていた。そうであるなら、登頂の目標日は遅くとも五月の第三週のうちでなければならぬ。田口、村木が勘案したナイケ・コルから上方への出発を五月一日に、ノース・コルからプラトーへの出発を五月十五日に、登頂日を五月十八日にするスケジュールが検討されたが、まだ、それが最終的に決定される段階でなかったことはもちろんである。十九日の会議では、右に述べたような作戦のアウト・ラインが話されたものの、やはり、あすの問題であるナイケ・コルの到達が、関心の最大部分を占めていた。そしてきわめて具体的な次の行動案がその場で決定され、昼食時に全員に到達された。

第一隊 高木登攀隊長、田口、竹節、シュルバ頭のガルトゥン、サルキ、アン・ダワの六名は、明二十日第一キャンプに登り、翌二十一日には、ナイケ・コルまで進み、前進基地の可能性を探る。できればナイケ・コルに泊まって二十二日ベース・キャンプに下山する。

第二隊 加藤(喜)、山田、村木は、三名のシュルバをつれ、第一隊とともに第一キャンプに登り、二十一日にナイケ・コルに向かう第一隊のために、荷はこびその他のサポートをして、同日は第一に帰り、二十二日ベース・キャンプに帰る。

第三隊 村山、山崎、石坂は、残りのシュルバと若干のポーターをつれて、第一キャンプを往復、荷はこびとともに有線電

話の架設に努める。

出発予定の二十日は、ひどい降り雪となりとなったが、明けて二十一日の朝、ネパール、チベット国境の空は、それまで毎日続いた雪降りも、まるでうそだったかのようには晴れわたった。プリ・ガンダキをはさんで立ち並ぶ巨峰群、スリンギ・ヒマール、ガネシュ・ヒマールは新雪を浴びて、見る目もまばゆいばかり。九名の隊員と十七名のシェルパとポーターは、ハイネズの小枝から肩に降りかかる粉雪を払いながら、三田隊長に別れを告げた。行手にはマナスルの氷雪の城郭が、天を摩してそびえている。口にも語れず、もとよりつたない筆には乗るすべもない、目もくらむ図体の大きさと高さである。それは確かに壮大な美を誇示していた。しかし、壮図の第一歩を山路に踏み出したわれわれが、マナスルを臨んで切に胸にこたえたのは、その妥協のないきびしさであった。この山を登ろう、といった大望を持たぬ者には、マナスルは仰ぎ見て近寄りたがいが、あるいは愛着に値する巨人であるかもしれない。しかし、この巨人と格闘すべく、運命づけられたわれわれにとっては、マナスルは、人間の親愛感など受けられないすきは、一分だにない冷酷無情のつら構えに思われた。山を愛する、また愛する山などという言葉があるが、こういう言葉は、マナスルには縁もゆかりもない、それは、人間の息吹きをまだ知らない、登山史以前の、月世界のように、人間とはかわりのない、冷徹な純粋な自然そのままの姿に見受けられた。

朝の晴天も、予定地到着の昼ころには崩れて、われわれは降雪の中に第一キャンプを張った。村木とともに架線に従事した村山隊は、ベース・キャンプと第一キャンプ間の架線を終えて下山した。三時半には、ふたり組でもぐり込んだテントに、シェルパが早くも簡単な夕食をもって来た。それをすますと明朝までなすこともなくいくつ千万である。ベース・キャンプから電話がかかって来て、下ではたいへんな御馳走だ、とからかわれる。ここは海拔四六〇〇メートルだからベース・キャンプとは七五〇メートルの高差。窮屈な寝袋にもぐり込んで、サラサラとテントのナイロン地をたたく雪音を聞いていると、炉辺にまきをくべて、ぬくぬくとからだを暖めることができるベース・キャンプが、天国に思われる。

四月二十二日 また晴れ渡ったこの日は、当初の計画だと、第一キャンプからナイケ・コルまで突破し、できればそこに、第二キャンプをすらすら設けて一泊するという、望みの大きな予定であったが、いざ動き出して一時間もたたぬうちに、実行不可能を知った。第一キャンプからの登路は、モレーン沿いの細長い溝を上へつめて行くのだが、一帯がガレ続きであった昨秋(五二年)とは打って違って、ひざまで没する深雪で、意外に時間がかかる。そればかりでなく、この深雪はわれわれに、第一キャンプの安全性を再考させることになった。昨夜泊まったキャンプは、なるべく荷を置く中継場として考え、続けていく夜も泊まるのは控えた方

がよさそうだった。右の配慮からして、二十二日は、第一キャンプから約三時間行程の上部、海拔約五〇〇〇メートルの地点にまで進み、第二キャンプを張ることにした。それまでマナスル氷河を避けて、氷河沿いの左岸のモレーン地形を登って来たのだが、やがて、そのモレーンもつきて、さきは一面の氷河のひろがりになる。境目より、少し手前に、第二キャンプは置かれることになった。

尾根の上であり、雪崩には絶対に安全で、マナスルの東北面をえぐる半円径の大園谷のふところにいだかれた場所であった。高木隊の三名は、第二キャンプを建てるため、シェルパとならんで、シャベルで雪掘りを始めた加藤(喜)や山田を残して、スキーでさらに上部の偵察に出発した。ロープで結び合せて小一時間登ると、マナスル氷河上部の雪原の下端に出た。高木と竹節の両名にはまことに感慨深い場所である。昨秋(五二年)の踏査隊は、高木がこの付近のクレバスに転落して、そのために引き返した。あれからまだ半年も経過していないので記憶はきわめて生々しい。そのせいであろうが、ふたりとも極度に神経質になって、長いスキーをはきながら、まるで薄氷に乗ったような顔つきだった。正午を過ぎたころになると、その日も定例の白いものが降り始めて、雪原はねっとりとした灰色のものやおわれ、視野がきかない。時おり、右寄りの遠い所に、黒い岩がおぼろ気な輪郭を幻影のように現わした。それはあまりに遠く、しかも高い所にあるので驚いた。この黒い岩こそは、プリ・ガンダキ峡谷のはるか下からも、はっきりと指摘できる、ナイケ・コルのまがいもない指標であった。遠景からは、一点の小黒点に過ぎないこの黒岩は、不思議なことに、かねてからわれわれの頭の中では、その下でキャンプもできようし、あるいは岩小屋の一つ二つを隠し持っている。そうなの、いかにも暖かい存在のように、描かれていた。なぜ、黒岩がそのように甘く描かれていたのか、だれも知らない。しかし高木も竹節も田口も三人が三人とも、黒岩に人なつかしい望みを託していたのは不可思議だった。ところが、灰色のものをとおし、その正体なのだ。ずいぶんみくびつたものである。そこまでの距離も、一、二時間のものではなく、高さも高い。マナスルの氷河は、考えていたよりも、よほど奥行きが深そうであるし、ナイケ・コルの高度も、六〇〇〇メートルに近いものかもしれない。

前進基地の建設

雪原の一角に立ち、もやのかかった上方に目をやると、われわれは複雑な気持ちに包まれた。きょう一日の短い旅は、われわれにヒマラヤのスケールにたいしてのカンが、まったく欠如していることを、遠慮会釈もなく教えてくれた。周囲があまりに大きいの、ごく近距離だと見えた所へ、なかなか行きついてくれない。目に映る距離と、歩いて見ての距離とのたいへんなずれ。いかにも足が地についでいないこの不安定感、まったくやりきれないものである。だが、焦躁を感じつつも、何か一歩前進のためのかぎをつかんだという、淡い満足感があった。問題の黒岩が思いのほかに遠く高い所に望見された事実は、長い間、疑問視していた

ナイケ・コルの高度に、かなりはっきりした解答をあたえるものだし、ひいては、さらに上方の、ノース・コルへの高差と距離とを示唆するものでもあった。昨秋(五二年)踏査隊の写真測量に基いて、作製されたマナスルの地図は、ナイケ・コルを六〇〇〇メートルの等高線にしているが、事実望見した黒岩は、相当な高さに見えるし、もし地図上の高さが事実にあうなら、ノース・コルまでの高差は、一〇〇〇メートルぐらいになる。もっともノース・コルが果して海拔七〇〇〇メートルに達するものか、あるいはそれ以上の高さをもつものか、その高さ次第で頂上攻撃の作戦が、変化を受けるのであるが、確認はされていなかった。しかし、かつて、西北側からマナスルを望んだティルマンの記述を参照しても、だいたい七〇〇〇メートル前後ということは、想像されていたので、疑点はむしろ、北峰のつけ根であるナイケ・コルの高さにあった。その高さがつかめれば、巨人マナスルのプロフィールの正確なプローションも、だいたい頭の中にはいつてくる。ヒマラヤの巨人ともなれば、近くに見た場合、いかに背のびしたとて、山の立体がゆがめられて、目に映るのを避け得ない。目立ったコルや尾根筋の高度や幅を、数字で知り、山の正しい立体図を頭に描く必要があるのは、そのためである。

第二キャンプに帰りつくと、加藤(喜)隊の三名は、すでに下山したあとで、ガルツェン、サルキ、アン・ダワの三名が暖かいお茶を沸かしてしてくれた。夕刻、晴れ渡って赤々と輝くマナスル東尾根の壁を、粉雪雪崩が幾本もすべり落ちて、もうもうたる雪煙をあげた。夜は零下一六度の寒さ。その夜、高木と田口と二人用テントに寝たが、早朝二時、ふたりとも、同時に激しい呼吸困難に見舞われて、羽毛服の胸ボタンをはずし、テントの前後の入口を開いて空気を入れたところ、すぐさま呼吸は平常化した。

四月二十三日 朝八時半、元気者の加藤(喜)が、単身第一キャンプから上がって来た。昨夜試みたが、第二キャンプと第一キャンプ間のハンディ・トーカー(無電器)が、さっぱり通じないので、連絡のため登って来たのだ。九時半、ガルツェン、サルキ、アン・ダワを先に出し、高木、田口、竹節は、昨日の登路を再びスキーで出発した。氷河は新雪におおわれて、クレバスが少ない。が、注意深く見ると、水平斜面には、左右縦横に走るやや黄ばんだ溝状の走りが認められて、クレバスのあり所を示し油断がならない。しかし、秋とは大違いだという竹節、高木の話である。雪原はナイケ山寄りが起伏もほとんどなく、おとなしいので、北寄りに二時間ほどごとと、突然、クレバスとセラックスの波と谷とが相重なり、ぶつかって、前途の難行を予想させる地点に達した。ナイケ山の南壁がぐっとせまって、そこから押し出るナイケ氷河の、数十段の段状のセラックスが、マナスル氷河の本流に、横なぐりに合流する地点で、一帯の氷河の荒れ方は、相当はげしい。ここまで来ても、ナイケ・コルまでの道はまだはるかである。

正午なので、この地点を、第三キャンプの予定地とした。海拔五三〇〇メートル。一瞬のうちに、雪がしきりに降り始めた。三人のシェルパは、この悪天候では、とても前へは進めないといっている。それももったもな言葉で、われわれの前には、大きなセラックスが縦横に大波のように起伏している。波と波との間は、クレバスの深い谷間である。ともかく、行きつまるまで行こうと、ロープで互につながった三人は、高木、田口、竹節の順序で、それまでと同じくスキーをはいて進み始めた。約一〇メートルの間隔をおいて歩いて行く。氷河を歩くさいの鉄則である。十分ぐらい歩いては立ち止まって、進むべきかを思案した。降りしきる雪で、さがが見えない地形はますます複雑になってくるので、なるべく低地や溝は避けて堤やセラックスの高い背筋をジグザクに縫って道を求める。いつしか、降りしきる雪をつんざいて、真黄色の陽光があたりを押し、降雪とどぎつい反射光で、時おりわれわれは、めくらにされてしまう。

下りになるとともに、陽光はますます強くなって、むしろ入れられた苦しきになった。右往左往すること一時間、やがて前方には大きなでこぼこも障害もない、広いフィルン(氷河の源をなす万年雪の雪原)に出た。マナスル氷河の平らな源に達したわけだ。陽光はますます強くなって、むしろどこかではない。あたかも、ルッペで背筋に、日の光の焦点を合わされ、火傷でもしそうな暑さである。この暑さは、日本や欧州の山では、経験できないすさまじいものである。平地用の色眼鏡をポケットに収めて、色の濃い高地用をとり出した。黙々と前に進めるスキーの上に、一匹のチョウが、ひらりと空中から舞い下りて、死んだ姿を横たえた。低地から、上昇気流で吹き上げられたものとみえる。われわれは今、マナスルの東北面を、ぐるりと半円径にけずりとった、大圏谷の底に在る。

登路に予定されている、北峰のバットレスは、前方に、ついでのように立っている。氷河の底部からまっすぐ、直接にこのバットレスにとりかかる登路は、どう見ても見当らない。というのは、北峰バットレスの基部は、隣接してならぶマナスル北面の基部と同じく崩壊しているからである。予定のとおり、北峰バットレスへの挑戦は、この雪原の行きつく所、すなわちナイケ・コルから行われねばならぬ。気がかりにしていたナイケ・コル直下のベルグシュルンドが、部分的にしか発達していなかったのは、幸いであった。午後三時半近く、ついにナイケ・コルに立った。後で二〇〇メートル低く訂正されたが、バロメーターは五八〇〇メートルを示していた。この氷河の峠は、幅広くにかかわらず、危険なクレバスもなく、雪崩にも安全で、理想的な前進基地を提供していた。ノース・コルへの高差が確実に一〇〇〇メートルを越すという発見は、登山の手強さをひとしお再認識させるものだった。

このコルからノース・コルの攻略を開始したのは、それから十日おいての五月三日であった。ナイケ・コルへの道はひらかれたが、その勢いをもって直ちに、上方へ前進するラッシュ・タクティックは、われわれのとるところではなかった。上に足を延ばす前に、十二分の足場がためがでなければならぬ。翌二十四日、加藤(喜)隊は、マナスル氷河のフィルンに前日の隊のシュパールをたどって、五〇メートルごとに、標識の赤旗を残して進み、ナイケ・コルに達した。村山隊の三名は、全シュエルバとともに、第三キャンプへの荷上げに従事した。天候がちょうど、本格的に落ち着き始めたやさきだったので、二十五日に行われたベイス・キャンプへの、シュエルバを含めての全員下山は、時間の空費だという印象を人に与えぬでもなかった。実際シュエルバまでをおろす必要はなかったように、今では思われる。しかし、慎重過ぎたわれわれの態度をそうきびしく難詰する者はあるまい。全員が高度にむらなく馴化していくためには、出だしに際して、のんびり過ぎるぐらいゆっくりやろう、というのがわれわれ年輩隊員の態度であった。

二十七日には、ベイス・キャンプから村山隊が、辰沼医師とともに送り出され、二十九日には、ベイス・キャンプと第三キャンプの電話を架線し、三十日には、ナイケ・コルのキャンプを打ちたてた。シュエルバの主力は、村山隊と行動をともにしている。その間、加藤(喜)隊は、中間キャンプの整備と荷はこびに従事した。三十日、ベイス・キャンプを出発した高木隊は、第一キャンプへの中途中で、電話線が、折からの雪崩に切られるのを目撃し、ポーターに託して、ベイス・キャンプにこの事実を知らせた。電話がきかなくなると、ベイス・キャンプとの荷上げの連絡がつかなくなる。荷上げの親方の、加藤(泰)との交渉が絶えることは、上部での荷さばきに、支障をきたすほか、物動計画の中心がいなくなることで、三田隊長に、加藤(泰)を一日も早く、上部に派遣するよう懇請した。

五月二日には、高木隊はナイケ・コルにはいった。最後のスロープを息を切らして登りつくと、待ちかまえていた辰沼医師と山崎隊員が、有無をいわさず、脈をとったり、呼吸を数えたり、腰もかけさせないじめかたである。しかし、ナイケ・コルには、テントのほか、札幌出の山崎のお国自慢のイグルーまでできあがって、あっぱれの前進基地に化している。いよいよ五月一日から毎夕六時五分に、オール・インデアン・ラジオが、エヴェレストのイギリス隊、ダウラギリのスイス隊、マナスルの日本隊のために、それぞれ別々の気象予報を開始するというラジオ・ニュースが伝わって、一行はたいへんな喜び方だった。

ノース・コルの奪取

田口二郎

マナスル北峰のナイケ・コルに面した、高さ二五〇〇—六〇〇メートルの胸腹は、海拔約六三〇〇メートルの線を境にして、上半分はノース・コルに走り上がる広い雪原と、複雑なアイス・フォール地形からなる下半分とできあがっている。ナイケ・コルから仰いだ目には、下半分のアイス・フォール地形が、ぐっと前景に押し出されているので、上の雪原の状況も、またアイス・フォールと雪原との段になったつなぎ目の様子も、かくされて見えない。ノース・コルへの登路は、左にとれば、それだけ近くなるわけだが、マナスル氷河の源である雪原の底部からは、直接とりつけないので、どうしてもナイケ・コルから出発してアイス・フォール地形に乗り込むよりほかはない。

上部の雪原に出るためには、二つの可能性があるように思えた。アイス・フォールを思い切って左へ大横断し、雪崩がひんばんに落ちる危険をはらんだ崩壊地形の基部を、さらに横切って、大きな雪の斜面の下にたどりつく。この雪の斜面は、舌のようにたれ下がった、二段のブロックできあがっていた。見るからに急で、雪崩そうな斜面を見せているが、ルートをブロックの左寄りに詰めて登るなら、相当の水切りは避けられないにしても、さほど困難には見えない。技術的な問題は、それより上にある。ブロックを登り切ると、棚に似た小さな氷壁が、水平に一線を引いていて、行手をはばんでいる。二〇メートルぐらいの高さであろうか。いかにもむずかしそうだ。しかし、これさえ登り切れば、すぐ上部は一路ノース・コルに走り登る大雪原である。

二つめの登路は、アイス・フォールを左にトラバースせず、アイス・フォール地形の幹線ともいうべき大クローアルをつき上げる道だ。クローアルは何段もの滝状の落下面を積み重ねた地形に見受けられるが、いかにも雪崩の通路らしいこの登路で、われわれにいちばん気に食わぬことは、上部の地形が後方に引込んでいて、よく様子がわからないことだった。引込んだ部分は、マナスル北峰の頂上直下に当り、遠目からも、クレバスやセラックスにひどく荒らされているように見えた。クローアルは登りつめたが、ノース・コルへ続く雪原に転出できないというはめに陥りはしまいか。第二のルートの最大の疑点はそこにあった。

五月三日 アイス・フォール突破の最初の偵察隊がくり出された。高木、田口、竹節、山崎、石坂、それにガルツェンを含めた三名のシュエルバ。すぐ目の先に見える黒岩がばかに遠い。岩場は小さいが急なので、荷上げ隊のために、固定ロープをつける必要

がある。黒岩は、長い尾根のみさきになっていて、パロメーターでは、ナイケ・コルとの高差が二五〇メートルもあった。見おろすと、豊かに盛り上がったナイケ・コルから、マナスル氷河の雪原の上を、点々とじゅずのようにつながった線が指摘された。道標の赤旗である。はるか下方に、四つ五つの黒点が見える。荷運びをする加藤(喜)、山田、村木の連中に違いない。目をさらに東方にやると、ブリ・ガンダキの黒い深い峡谷の上に、スリンギ・ヒマールとガネシュ・ヒマールの巨峰群がかさなり、相たたかうように空に浮んでいた。

アイス・フォールから派出する長い雪尾根は、両側に雪庇せびをもっているので油断がならない。尾根がアイス・フォール地形に接続するあたりは、クレバスが縦横に裂けて、しかもひざままで没する深雪にかくれていたもので、起伏した地形の隆起した部分に、右や左へと行路を求めるのに一苦労した。われわれのマナスル登山は、一言にしていえば、ひざままで、いやときには腰までもぐる深雪に全精力をかけて一步步と高さを求めるラッセルの登山であったが、この本格的な苦勞は、五月三日のその日に始まったといってもよかった。ラッセルの勞働は山崎、石坂の若い隊員が惜しみなくその肉体を提供した。正午ごろ、われわれはクロアールの基部に達した。

今まで頭の中だけでうずまいていた問題を、いやが応でも現実には解釈せねばならぬときが来た。まっすぐクロアールを登るか、崩壊地形の下を横切って、ブロックにとりつくかの、二者撰一を強制されたわけである。左へのトラバースの道は、予想したよりもはるかに長く見えた。崩壊地形は、ナイケ・コルで想像していたように、その下を走って通れるような小さなものではなかった。ひんばんに雪崩が通ったであろう、青く光った幅広い氷面に、足場をきざむことは決して愉快なことではない。加えて、二段の雪のブロックの傾斜も、横から見ると、たいへんなものだ。左へのトラバース・ルートは、近づいて見て相当な難物であることがわかった。年輩隊員とガルトツェンの間に、簡単な言葉がかわされると、その後は皆口をつぐんだ。事態は明らかになったようである。クロアールにルートを求めるより方法はない。

石坂、田口、ガルトツェンの順序に、ロープにつながった第一隊が、小雪の降り始めたクロアールを登り始めると、高木、竹節、山崎、それにシュルバラの二隊がこれに続いた。前に書いたように、クロアールの上部は、地形的に奥深く引き込んでいて、下部からはよく見えない。しかしその後方に、マナスル北峰の頂が、われわれの帽子のひさしの先端をならむばかりの仰角でそびえていた。みごとなヒマラヤ筋が幾本も走り落ちていて、その一角でも崩れると、垂直線下にあるクロアールに、地響きをたてて落ちてくる無気味さであった。それを避けるために、一行はクロアールをいつも右寄りに登るように努めた。ところで、クレバスが

多いので、深い雪をただしやにむにはい登るといわけにはいかない。一步ごとに、雪をかき抱くようにして、ビッケルを力いっぱいさしこみ、クレバスの有無を確かめねばならぬ難儀さである。

われわれはだいたい六〇〇メートルの高度に達していた。そのときである。アッ、と叫び声をあげて、先頭の石坂がころんころんだというより飛び上がった、といった方が適切である。その飛び上がった後に、すっぱりと黒い穴があいた。クレバスにあぶなく落ちかかって、はねたのだ。ところが、飛びはねて足をおろした瞬間に、またもや足をすくわれて、すっぱりからだはまりそうになり、再転して二番を受けもつ田口に抱きついた。瞬間のうちに、二度もクレバスに落ちそこねたことになる。はつしと抱き合った先頭のふたりを、下の竹節や高木、山崎は、無遠慮に高笑いした。クロアールの中段に滝がある。雪降りの中に、ルートを、溝谷のまん中にとるのは、気がすまないので、滝につながる小さな氷壁に向かって、右寄りに最後の力をしぼってたどりついた。午後二時。氷壁の上は小さな段になっているので、キャンプ場としてよさそうである。しかし荷上げのためには、この氷壁になわばしごを下げる必要があるであろう。

五月四日 新聞報道のため、竹節はベース・キャンプに下山し、かぜ気味で、第三キャンプに休養していた村山が、これと代ってナイケ・コルにはいった。すでに加藤(喜)隊もナイケ・コルにあり、全員が行動を待っていた。五日、三隊に編成されて、八名の隊員とガルトツェンは、前記の第五キャンプ予定地までを日帰りし、上の氷壁になわばしごを下げ、(このはしごは氷壁がオーバ―・ハングであったので、荷が重い場合は使用不能、したがって滝直登のルートが使用されることになった)黒岩に一〇〇メートルの固定綱をつけた。この日の行動の目的のひとつが、隊員の高度馴化にあったことは申すまでもない。六日には、休養をとる隊員をナイケ・コルに残して、シュルバ十一名の大部隊が、クロアール滝の上のキャンプ地まで、荷運びに日帰りした。夕方、隊員もシュルバもスキーに打ち興じた。夕刻、野天に食糧のカートン・ボックスを並べて腰かけ、全員顔つき合わせ座談会をひらいた。出た意見で特記すべきは、当面の各自の目標を、(一)北峰バットレスを十二分に熟知すること、(二)スケールのセンスの体得に努めること、(三)ヒマラヤン・スノー・クラフトをつかむように努めること、(四)悔いのない充実した山登りをするよう努めることであったように記憶する。最後に、高木登攀隊長から、七日から一週間の期間をかけて、ノース・コルを奪取する計画が発表された。

五月七日 朝から重たいみぞれ雪の大降り、午後にはマナスル全山が砲撃戦に包まれたように、雷音が、とどろいた。それでも夕方になると晴れ上がり、寒気はきびしく、気温は零下一六度まで下がった。あれほどみぞれで湿気を帯びていた雪は、夕方に

なっても一向クラストせず、粉雪のようにサラサラと流れる姿に立ちかえるのは、われわれには納得できぬ現象であった。ヒマラヤの雪の流動性こそは、無気味なものである。昨秋(五二年) マナスル踏査隊が、アンナプルナ連山の北斜面において遭遇したのも、同じ質の雪であった。八日、高木、田口、加藤(喜) 山田、村木は、ガルツェン、ラクバ、アン・タワを伴い、滝の上にテントを張るために出発した。それに、一九五〇年のフランス隊アンナプルナ遠征に参加したサルキが、八名のシェルバを引率して荷上げのため、日帰りの予定で、主力と行動をとりにした。ところが、この日も出発してまもなくみぞれ雪が降り始め、大クロアールにかかる手前で、文字どおり一寸先も見えない大降りとなり、そのさなかに、クロアールの基部をささえる大氷壁が、われわれの目の前で大崩壊して、あまりにも明白な赤信号をふり出した。この状況のもとには、いかなる前進も許されない。しかし、ナイケ・コルまでは引き返したくない。もうわれわれは、このルートを三度も踏んでいるのだから。かくして黒岩に通じる尾根の上に、第五キャンプ(五九〇〇メートル)が張られることになった。

予期しなかったブレ・モンスーンの、しかも好天気続きであるはずの、五月にはいつてからの、この連日の降雪は、アイス・フオールを突破するに当って、われわれに新しい問題を提示した。それは、クロアールに逃げ道があるのか、という問題である。とくに上部で雪ごもりを余儀なくされた場合に、われわれには、クロアールしか降路はないのか、大雪のさいは、まことに危険きわまることだ。大クロアールに平行した北寄りの、乱脈なクレバスとセラックスの起伏斜面に、一つの逃げ道を探っておく必要がないか。やむなく張った第五キャンプは、このルートへの出発点に位している。その翌日は、状況が許せば、逃げ道の探索に力がそがれるはずであった。しかし、それができなかったのは、探索だけにエネルギーを費すのを惜しまれるばかりに、珍しく晴れ渡ったためと、ナイケに下ったシェルバがなまけて時間通りに登って来ず、みすみす半日を無為に過ごした結果である。シェルバの部隊には、必ず責任ある隊員をつけねばならぬというのは、そのときに得た貴重な経験であった。しかし、滝上のテント(第六キャンプ)に向かって先発した加藤(喜) 隊の三名は、その日の午後、クロアールをさらに登りつめ、上部がクレバスに満ちていることや、村木が腰まで、クレバスに落ちたことなどを、夕刻第六キャンプに着いた高木、田口に話した。

第六キャンプからの景色は特異であった。北の空には、はるけくチベットの大高原が所々に白のまだらを見せながら、黒一色にひろがっており、トランス・ヒマラヤの白い山脈もはるかかなたに見える。それは寒々としたうらさびれた大自然の姿であった。東の空には、数え切れないほどの高い白い山々が浮んでいた。ことに夕方の四囲の風景は、いかに山好きの人でも、じっと目をこらすと、ひたすら人が恋しくなるような荒涼の姿であった。しかし、第六キャンプでいちばんいやだったのは、それがいかにも不安定

な地位におかれていることであった。小さい台地に乗っているものの、それは大クロアールの内部にあったので、いつ雪崩にさらわれるかしれぬという恐怖に、その夜のわれわれはろくに眠れなかった。ナイフを胸において寝た隊員もある。雪崩にうずもれたテントから布地を切って出るための用意である。十日は雪降りて動けなかったので、高木と田口は、若い元氣なミンマ・シターをつれて第六キャンプの安全性を確かめるために、上部に向かった。幸いなことに、上部からの観察では、第六キャンプは見かけよりもはるかに安全であることがわかった。万一雪崩が出ても、そのすぐ上にある氷塊が、それを左右にふり分けてくれるだろうから。しかし、その氷塊が崩れては、ひとたまりもない。本当に安全な場所というのは、ヒマラヤでは捜すに困難なことだろう。

五月十一日 ノース・コルへつながる上部雪原へ、アイス・フオールから、突破する日だ。回顧的にいえば、この日は遠征にとつてたいへん重要な日であったといえる。晴れ渡ったその朝、われわれは、きょうこそはしゃにむにでも、ノース・コルへの突破口を開かねばならぬと、決意していた。四隊の編成で、ラッセルを受けもつ田口組が先に出た。すぐ上の急斜面にさしかかると加藤(喜) が板状雪崩をおこし、次順の田口がアツといううちに、腰までうずもれ、しんがりの村木は要領よく逃げて見物するとう、劇中劇もあったが、その早朝に強風が吹きまくったので、クロアールは板状雪崩の巣になっていたわけだ。この日、いつものように、われわれの後を追って、荷上げのために健闘するであろう村山、山崎、石坂と他のシェルバたちのことが、しきりに憂慮された。深雪を一時半登りつめると、大クロアールはその溝状の形を失って、北峰の頂上直下から来る波浪のように荒れた氷谷が顔を出す。この奥は北峰バットレスでいちばんものすごい所である。われわれの唯一最大の希望は、この荒れた氷谷に足を踏み入れることなしに、ノース・コルへ続く雪原に転出できるコースを発見できまいか、ということだった。その氷谷入口の左手には、大入道のような氷塊がぬっと玄関番のように立ちはだかっている。どうしても氷谷に足を踏み込まねばならぬ場合は、この大入道の高手に回って、そこから上部の雪原まで乗り越そうというのが、われわれの腹であった。しかし前に書いたように、地獄のような谷だけは御免こうむりたい。しかし、これを避けるなら、大入道の下をまかねばならぬ、という算段になる。まっすぐに奥深く進むか、あるいは左にトラバースするか、われわれは岐路に立った。その高度は六三〇〇メートル。まさに登路の見地から見ると、ノース・コルへの結び目にあたる。今まで直登して来たのを、鋭く左に曲折するか否かに立っているからだ。

高さ一〇〇メートルを下るまいと思われ氷塊の大入道は、小気味悪いが、よく見るとその基部にはお盆に似た台地があつて、少し遠回りしてコースをとれば、危険はなさそうである。しかし、その台地に達するまでクレバスの多いのは、一体どうしたもの

だろう。幅五〇メートルばかりの巨大なクレバスに、おそらく大入道からくずれ落ちたに違いない大氷塊がはさまって、あぶなっかしいスノー・ブリッジをつくっている。いったいこのスノー・ブリッジは、われわれの体重を持ちこたえる厚さであろうか。これが渡れるならノース・コルはわれわれのものだ。さもない場合、北峰直下の氷谷に、上段のルートを見いだす自信は少なくともわれわれにはない。氷谷を捨てて、いやがおうでもこのスノー・ブリッジに活路を見いだすことは、われわれにたいする至上命令のように感じられてきた。

スノー・ブリッジの厚さを、下回りで探ってみよう。加藤(喜)が、田口と村木にアンカーされて、まるでガラスの板を踏む心組みよろしく、じわりじわりと雪面を下方にはい下りた。加藤(喜)のからだには、さらに一本、あぶみのついた補助ロープがむすばれている。クレバスに宙にぶら下がった際に、足場として使用するためである。高木も山田もシェルバも、じっと加藤の動きを見ていた。一五メートルもはい下ったが、さらに下はまっ黒なクレバスでもういけない。が、からだを横に乗り出し亀の子のように首を伸ばして、うかがい、「大丈夫、大丈夫」と叫んだ。

スノー・ブリッジの上に描かれたジグザクのルートに、高木が丹念に何本もの赤旗をつきさした。大入道の下をまき、さらに上部の雪の台地まで懸命に雪をこぐと、ついにわれわれの前には、ノース・コルに続く大雪原が、陽光に輝く姿を現わした。正午ごろである。しかし、われわれのいる場所からノース・コルは、何と遠いことであろう。第七キャンプは、一メートルでもノース・コルに近い所に建てられねばならない。加藤(喜)と村木が交互にひざまで没する深雪を懸命にラッセルした。われわれは、一樣に高度を感じ始めた。雪原を水平に切って一本の氷のひだが見える。大きなクレバスの上段の壁である。海拔六六〇〇メートル。その下に第七キャンプが設置された。午後一時半。小一時間もすると、下方で呼び声がする。おどろいたことには、今朝第五キャンプを出発した村山隊の山崎、石坂が、三名の若いシェルバと、ここまでのして来たのだ。その力は大したものだが、高木からその超張り切りをいましめられたようであった。荷上げ計画を考慮して、その夜第七キャンプには、高木、田口、山田、ガルツェン、サルキ、ラクバの六名だけ泊まることになり、あとの全員は第六と第五キャンプに下山した。

見上げると、強烈な北西風がノース・コルを吹き通って、マナスルのプラトリーの端をなめるように、うずまきが走り来り、走り去る。その余波を受けて、ひっきりなしに、堅い雪粒が、つぶてのようにわれわれのテントをたたく。

五月十二日 もう五月も中旬に近づいたので、われわれは先を急いだ。昨日の快晴も一日だけで、早朝からくずれ模様であったが、ノース・コルの偵察に出かけることにした。高木、田口、山田、ガルツェンの四人で、交互に深雪をラッセルして登るのだ

が、一枚の敷布をおろしたように巨大な斜面は、全く根気負けする長さに思えた。それに、あぶり出されるような暑さである。時おり陽がさしこむと、一〇〇度をこす気違いじみた高温を示す。皆は一樣にへばってきて、一步ごとに二つも三つも呼吸しない、深い雪と戦えない。深く息を吸って空気とはかくもうまいものであるか、と生れて初めてのように味わった、といっても誇張ではない。やがて雪が降りしきり傾斜も胸をつくようになってきた。休みなしに三時間も登ったらう。この高さを、名も知らぬ小鳥が七、八羽舞っている。しばし不思議な感にうたれた。下るとなるとばかに早く、一時間で第七キャンプに降りついた。下のキャンプから加藤、村木と三人のシェルバが登ってきた。

きょうの偵察で、ノース・コルは海拔七〇〇〇メートルより高いことが想像された。実際にそうであるならば、頂上攻撃のための本格的なたまり場として、ノース・コルを長く活用できるかはなほ疑問になってくる。人間が高度に馴化できる最高の限度は、せいぜい六五〇〇から六六〇〇メートル(第七キャンプの高度)であって、七〇〇〇メートル以上の高度では、いれはいるだけへばる一方である。これがわれわれの予備知識であった。高過ぎるノース・コルに代って、しかも第七キャンプよりも高い所に前進基地を設けることができるだろうか。この雪原で、北峰寄りのくぼみに設置された第七キャンプを除けば、マナスル頂頭の巨大な壁から発生する、雪崩の危険にさらされていない場所は、どう捜しても見つからない。しかし、ただ高過ぎる、という考え方からして、ノース・コルを捨てることは許されてよいのか。前進基地こそは、一メートルでも高い所に設けらるべきではないのか。第七キャンプをもってこれに代えることは、容易な妥協ではなからうか。この選択が、マナスル攻略に実に第一級の問題であることがわかったのは、正直なところ、後のことであって、当時のわれわれには、せいぜい漠然とした形での問題の重要さは感じられても、断乎としてノース・コルに確固たる基地を設けなかったことが、登頂を阻む原因のひとつになろうとは、とうてい予知もできないことであった。地形に関しても、行く先々が全く未知であった当時のわれわれには、この誤りはあるいは許さるべきものであったかもしれない。しかし、実のところ、この選択は、十二分に検討される以前に、次に述べるように、突如、地からわき起った他の問題によって押し流されるように、決定されてしまった。

五月十三日 ノース・コル奪取のために、第七キャンプには、高木、田口、加藤(喜)、山田、村木それにシェルバでは、ガルツェン、サルキ、ラクバ、アン・テンバ、ミンマ・シター、アン・ダワが勢ぞろいした。村山、山崎、石坂は、他のシェルバとともに下方キャンプ間の荷上げに専念していた。加藤(泰)、辰沼医師に伴われてナイケ・コルに上がった三田隊長から、われわれの所に激励のメッセージがとどいた。その日は雪降りて休養となり、疲れを感じ始めたわれわれにもつけの幸であった。

晴れ渡った十四日の朝のことである。食糧担当の山田が、遠征隊の高地食糧が、一週間分しか残っていないと、報告して、皆を驚かせた。一週間という数字には疑点があった。が、ナイケ・コルまでの入夫の増員と日程のずれのため、食糧が大きく食いつぶされたことは事実だ。しかし深刻な問題は、前進部隊の位置と現在の食糧配置状況のアンバランスだ。これを立ち直すには時間がある。時間をかければそれだけ食糧が減る。撤退の際の食糧も計算されねばならぬ。アンバランスの矯正は悪循環を呼ぶことになる。しかも時期はすでに五月第三週にはいるうとしていている。ここで手間どることは遠征隊の武装解除に等しい。かくてこの日、最も宿命的な決定がなされた。登頂を投げたに等しいこの決定の前に、われわれはあんとしたが、他の選択があるようには思えなかった。その決定とは、あすからラッシュ・タクトックに移ることだ。ノース・コルに確固たる前進基地を設ける余裕はもう無い。現在の偵察隊をそのまま攻撃隊に代える。最後の攻撃メンバーは加藤(喜)山田、村木の中から選ぶ。その日も重い荷を背負って、シェルバとともにキャンプに着いた石坂は、悲しい顔付きでおりて行った。われわれの決定にたいして、ナイケ・コルの加藤(泰)から手紙が届いた。三田隊長はからだの具合でベース・キャンプに下山していない。食糧の二週間や三週間分は、自分が現地徴発のものを高地食に仕立てる。計算の基礎もおかしいではないか。食糧節約のために、ナイケ・コルの人間はベースにおりるとは何事だ、という憤怒に満ちた手紙だった。しかし、この手紙を受けとったのは、攻撃隊が一敗地にまみれ、困憊して第七キャンプにたどり着いたときであった。トランス・ポート・オフィサーである加藤(泰)と、前進部隊のわれわれの連絡がうまく保たれなかったことは、隊の組織的な弱さであったことを、われわれは今知っている。

五月十五日 快晴のこの日、高木、田口、加藤(喜)、村木は、六名のシェルバと上方に向かった。連絡のために下に残った山田は、翌日シェルバを連れて攻撃隊に合流し、田口と交代する。シェルバは元氣いっぱい、腰までもぐる深雪を、先に立ってどんどんラッセルして行く。昨秋(五二年)のアクシデントでつくった額の古傷が痛み、数日来不眠に悩んだ高木は、調子が悪くて、第七キャンプに下りることになった。三時間も登ると、いよいよ雪原のどんづまりに近づいてくる。十三日に、案外高い所まで登ったことがわかったが、こちら辺で、ノース・コルに寄らず、あわよくば、雪原からプラトリーに直登できまいかという、虫のよい考えがしきりに頭をもたげた。テントの数からも日数からも、相当な節約になるはずである。しかも仰ぐと、プラトリーの北壁の下の三分の一どころに、棚のような水平なふくらみがあって、テントが張れるように思えるのだ。ラッセルをシェルバに取って代ったわれわれのパーティは、いつとはなしに、壁に向かって雪をこいでいた。しかし近づけば、おおいかさがるような途方もない大きな急斜面である。そして十歩ごとに深いクレバスが入りまじっている。いつのまにか雪降りになって、ガスもかかっていた。シェルバは疲れきって腰をおろして、われわれの動きをききげんに見ている。急な斜面を少しは上がろうとすれば、板状雪崩の臭いがする。そればかりでなく、足もとにいつぱりクリクレバスの穴があくかわからぬ不安さである。

われわれは、マナスルのプラトリーを支える氷の壁にぶつかったわけだ。そして、まさに壁にぶつかるといふ言葉どおりに、そこから引き返さざるを得なくなり、ノース・コルへのトラバースを開始した。この高度は約七〇〇〇メートル、ノース・コルとはほぼ同じ。午後の二時を回ったばかりなのに、ガスのせいだろうか、たそがれのようなうす暗さである。その暗い雪の斜面を、力限りに前へと泳いだ。やがて氷粒の散弾をつめた猛風が、前方からオオカミのようにわれわれに襲いかかった。「テントはここにしましゅうね」とガルツェンが、疲労にゆがんだ顔をむけた。すでにノース・コルに来ていることは、われわれも知っていた。シェルバはビッケルをふるって斜面の雪をかき、側壁をつくってようやく三つのテントを張った。四人のシェルバは逃げるように、下山した。高度は七一〇〇メートル。

われわれは激しい疲労で、いざなく寝ていたが、数時間後に、からだをつぶされるような圧力で目が覚めた。テント半分が雪にうずもれている。からだの自由がきかない。テントは猛吹雪にはげしく鳴っている。一同はびっくりした。テントは、ノース・コルからプラトリーに続く急斜面のつけ根にあるはずだが、この大雪では、いつ雪崩にさらわれるかもしれない。何よりもテントの雪を除かねばと、勇をふるって外に出ると、驚いたことには、満天凍りつくような星空である。立っていると吹き飛ばされそうだった。吹雪と思ったのは、風で運ばれてくる雪の粒であったわけだ。夜の暗闇に、ひとり立ってゴウゴウと鳴る猛風に包まれていると、背筋が凍る思いである。ビッケルでかくくらくくは、何の役にも立たないので、テントの入口にもぐり込んでひざ小僧をかかえているうちに、ついに恐怖の一夜は明けた。

五月十六日 日はんかん照り始め、風もないのに、隣のシェルバは死んだように物音さえたてない。八時、九時、寝ているのかと思えば、そうでなく、声をかけるとけだるそうに返事はする。紅茶を頼むと、サルキが情ない顔で動き出した。ガルツェンは動けないでじっとしている。われわれは出発することにした。ここにいでもしかたがない。われわれはノース・コルの地形を調べねばならぬ。そして攻撃隊のために、プラトリーへの登路を偵察しなければならぬ。三人でロープにつながったが、どうしても動けぬという村木を残して、田口と加藤(喜)で出かけることになった。疲れを知らぬ加藤が、先頭に立ってまた定例のラッセルが始まった。まもなくノース・コルの全体を見渡し見下せる地点に来たが、ノース・コルがかくもやっかいなものであるとは、来て見て初めてわかることであった。つまりよいテント場がどこにもなし。どこもプラトリー側からの雪崩の危険にさらされている

し、われわれが泊まった東側斜面を、少しでも上部に出ると、強烈な北西の通し風にさらされることになる。

唯一の、雪崩に安全な場所といえば、コルの一ばん低い場所で、西に向いた小さなテラスであろう。しかし、そこに行くには、高度にして五〇から一〇〇メートル近くも下って行かねばならない。下ることは、再び登ることもある。しかも七〇〇メートルの高度での、この損失は少なくはない。第二次攻撃のときも、ここにテントは張られたが、正直に言って、ノース・コルのキャンプ地の問題は、未解決のまま残っている。風圧のせいも、雪面が突然堅くなったので、ジュラルミンのアイゼンをつけることにした。ついに深雪から解放された喜びは、瞬時のものだったが、非常に印象的であった。

プラトールへの突破口は、二つの登路があるように思われた。舌のようにたれ下がった左手の懸垂氷河にとりつくか、右手の岩場を登るかである。われわれが、ヒマラヤ登山で何よりも頭においた雪崩の危険という観点からすれば、氷河の方が相対的には安全であろう、(しかし、これは立証されているわけではない)と思われたので氷河のベロの下をめぐって一心に直登した。美しいヒマラヤ筋で飾られたマナスル北峰も、低く見える地点に来たころ、白いものを降らせ始めた。テントを出てから三時間登ったわけだが、われわれは大あわてで下り始めた。というのは、きょうわれわれは道標の赤旗を立ててこなかったからだ。道標なしで、この複雑な地形で吹雪やガスにやられては、たまらない。まもなく、一寸の先も見えないほどの濃霧になって、事態は悪化した。風でおむね消えてしまったアイゼンの爪跡を、目を皿にして見つけながらはうように下るのだが、かくれたクレバスが多く、その走り方も乱雑なので、油断がならない。やがて道を失って、オーイ、オーイと必死に助船を呼んだ。するとわれわれの動いて行く方向の下で、オーイと鈍い声あり、それから盛んに呼声がするのだった。ガスのうすれまに二つの人影が小さく見えた。それよりもさらに下方に六、七人の黒い人だまりが見えた。テントに向かって、上からはわれわれが、下からはその人だまりが叫んでいるのだった。その日第七キャンプから高木、山田と登って来たシルバが、吹きだまりの雪にすっかりへばって腰をおろしてしまい、ノース・コル・キャンプに人手を求めている姿だった。その夜、第八キャンプには、あすのプラトール攻撃のために、高木、加藤(喜)、山田の三人とサルキ、ラクバ、ミンマ・シター、アン・テンバが泊まり、田口、村木、ガルツェン、アン・タワはたそがれの雪原を第七キャンプに下山した。

ノース・コルはかくして奪取されたが、翌十七日のプラトール攻撃は挫折して、五月二十二日には、各キャンプに配置された全員は、再起のために休養を目的として、いったんナイケ・コルに下山することになった。五月二十五日、マナスルを目ざして加藤(喜)隊が再びナイケ・コルを後にすることになる。

紙数の関係で、詳しく書けないのは残念であるが、第二回攻撃の前提となった第一回攻撃の跡始末の記述も必要であろう。高木登攀隊長が、日本隊の実力とプラトールのクレバス地形を考慮して、第二回攻撃隊の構成を三名にしたことや、食糧問題がどう解決されたかなど記述すべきことは多い。五月も後半期になると、モンソンがあらゆる行動と切り離して考えられない最大問題として、登場してくる。第一回攻撃では、まだそれほど考慮されなくてよい問題であった、がたがたのラジオを、第七キャンプまで運び上げたことや、インドの気象放送の用語に迷ったことや、これを語らずして第二回の攻撃の報告は、完全ではなからう。これまでの記述に、ひんぱんに登場しなかった隊員の動きをばくわけにはいかない。これらの隊員のおおかたは、登路発見のために先頭に立った部隊をサポートして、連日キャンプからキャンプへ荷はこびするシルバを監督し、また自ら荷を背負った。第二回攻撃では、山崎、石坂の若い両隊員は、ノース・コルより上で活躍している。村山は、全輸送の結節点みたいな役割を果たした。加藤(泰)の組織的能力なくして、第二回攻撃は食糧の面からも不可能であったらう。医師である辰沼がいなかったら、われわれはどんなに不安を覚えたことだろう。新聞報道任務を持った竹節、依田は、五月下旬にノース・コルに達している。ことに年輩者でありヴェテランである竹節のアドヴァイスは、傾聴をもって受け入れられた。ヒマラヤ登山が集団の力の成果である以上、個々の行動を述べないでは、本当のところは理解されないのであろう。

山頂にいどむ

加藤喜一郎

五月十七日 快晴であるが強い西風。昨夜来の吹雪で、テントは八分どおりうずめられている。シルバのサルキほか三名は、相当に疲労しているらしく、炊事に非常に時間がかかり、出発は九時。シルバを先頭にして、高木登攀隊長、加藤(喜)、山田が続く。前日の偵察時よりも、もぐる。先頭はひざを完全に没している。今日じゅうに、なんとかしてプラトール上に出て、第九キャンプを建設、明日第一回の攻撃を執行することになっている。このプラトールへのルートは、昨年(五二年)の十一月の踏査隊の写真では、積雪がなく、まっ黒に岩が出ている所である。第八キャンプの左上方よりアイス・フォールが、プラトール上につながっており、ルートをその右側の雪の斜面にとった。第八キャンプがおわんの底にあたり、プラトールがおわんの縁にあたるように、最後の方に行くにしたがって非常に急斜面になってくる。われわれは、最初は直登とはいうものの、やや右にまきながら登る。左の上

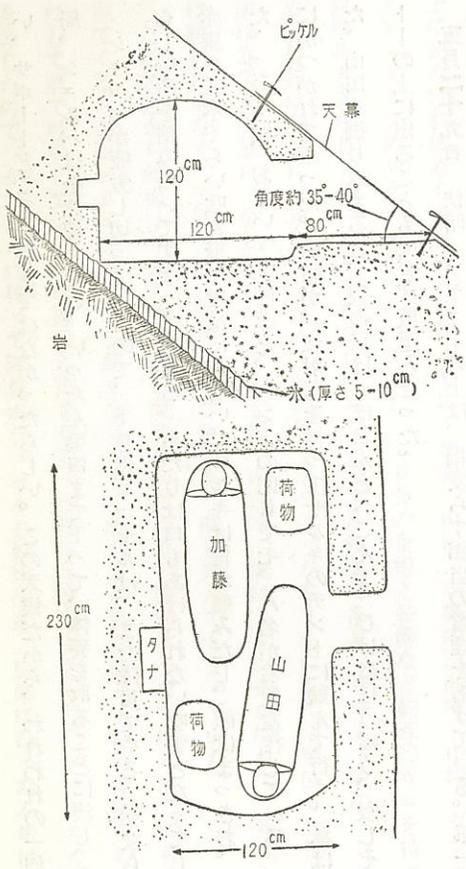
の方からは厚さ数十メートルのお氷が、今にもくずれ落ちんばかりに、ぶらさがっている。高度はなかなか取れない。正午になってやっと、昨日の偵察地点付近まで登った。今日じゅうにプラトリーの上に出たいと思ったので、サルキたちに、今日烈猛にがんばった者には、たんまりとチップを出すことを約束する。フランス隊のアンナプルナ登山でがんばったサルキは、猛烈に張り切った。ラクバも同様だったが、それもあまり長続きしない。右ほおは西風にたたかれて、針をさされるように感じる。休む度に急激に冷えこむ足をたたく。天候は例のように、積乱雲がわいて来たり、もう雪がばらついてくる。午後三時になったのに、腰までのラッセルで、プラトリーまでの半分ほどしか登れない。だめだ。結局、高木登攀隊長と相談して、雪面上に最初に顔を出している岩の下に雪洞を掘り、私と山田が一泊、明日、高木の第八キャンプ出発を認めてから、プラトリーへ出発、サポート隊はでき得れば、われわれの荷物とテントをプラトリー上にあげる手はずをきめる。

私は第八キャンプ出発時、万一プラトリー上に出られなかった場合は、雪洞を掘ることを考慮して、スコップを用意した。途中では、テントを張ることは全く不可能であると考えていた。雪洞付近から上は斜面が急になり、岩がたくさん出てくるので、雪崩の大きいのはほとんど出ない。雪洞はスコップ一本で、一時間二十分ぐらいで掘りおえた。積雪の厚さ約二メートル、この雪は岩表の上に薄い氷がはってあり、そこから二メートルの厚さだが、同じ雪質であるのには驚いた。雪質は粉雪の軽くしまった程度である。入口は特別の物を持参しなかったで、テントをかぶせて代用した。ピッケル二本と、長さ三〇センチのV字形のジュラルミン製ベッグを支えとした。風でテントを飛ばされるのを考慮して、内側から細紐でテントをひっぱった。サポート隊と別れて、雪洞の中にもぐりこむ。ヒマラヤに来て雪洞を掘るとは、夢にも思っていなかった。はいってみると、外の強風もかんじないし、呼吸も苦しくなく、なんとなく家に帰ったような気になる。雪洞を、学生時代にこなしていたのが、こんな所で役にたつとはと、山田と話し合う。この地点の高度を確かめるべく、高度計を捜したが、残念なことに、高木隊長が持って降りてしまったので、正確にはわからない。ふたりは約七三五〇メートル付近と断定した。炊事も久しぶりに自分たちの手でやるので、同じ献立でもなんとなくおいしい。あすは七時出発と決めて、寝袋にもぐり込む。

五月十八日 ふと目をさます。夜光時計は五時をさしている。ローソクに火をつけようと思うが、ジュロップと消えてしまふ。入口がうずもれている。ふたりは静かにあたりを整理して、身仕度する。呼吸はたいして苦しくない。入口が雪で埋まってしまったので、スコップをつき出すと、急にぽかんと穴があいてあかるくなる。山田は夜中二回、入口を除雪したそうだが、私は非常によく寝ていたので、少しも知らなかった。七時の出発を目ざして、直ちに炊事にかかる。よく寝られたせいか、からだは思ったより快調、オバルティン、ビスケット、オートミールで腹をこしらえる。炊事の火で暖められたはずの雪洞の中でも、アイゼンを素手でつかんだら、ビタリとくっついた。山田が先にはいつくばって外に出た。いよいよ出発だ。外で山田がなにかどなっている。私に聞えないかと思ってか、しゃがんで首をつっ込んで来た。彼の頭の毛も、ぼうぼうのひげも、雪でまっ白。「青空だがすごい風だ。これではとても登れたもんじゃない」私も外にはい出て驚いた。ひどい強風だ。上のプラトリーを見ると、空との境は雪煙で、全然見えない。左上方からおおいおぶさるようなたれ下がっている数十メートルの厚さのお氷が、怪物のように見える。あたりを見ると、斜面全体が大きくゆれ動いている感じ。風速約四〇メートル以上はあろう。下を見ると、小さくかすかに第八のテントが見えるが、人影は全然見えない。第八は相変らず猛烈にたたかれていますのであろう。天気もそう長くはもちそうでない。突然、山田が「出たーッ」と叫んだ。雪洞の左下から表面雪崩が音もなくすべり出して行った。これではとても登れたものではない。一度、第八へ引き返すことにして、テント一張だけ、雪洞に残して直ちに出發する。

ジッヘルをやるために前にかがむと、吹きつける雪で、顔が猛烈に痛い。足はちんちんと冷えこむ。そのころからあたりすっかりガスがかかり、吹雪となってしまった。道標の赤旗をたどって下って行くと、斜面の角度が急に変わった。板状雪崩の危険を感じて、「しっかりジッヘルしろ」と、山田に向かってどなったの同時だった。腰までの深さの雪が、「ビーン」と腹にしみ渡するような音をたて、弓のように弧を描いて、幅約二〇メートルの長さで滑落した。私はピッケルを、雪中深くつつ刺してしがみついたのと、ザイルがビーンと張ったのと同時だった。幸いに雪崩はすぐに止まった。下りのラッセルも非常につらい。最後の赤旗の向こうに、第八のテントがぼんやりと見えてきた。人影は全然ない。大声でどなると、高木隊長の返事が聞えてきた。早速上の状態を報告する。高木隊長の話によると、第八の四人のシェルパは、ラクバがやや元気のみで、後は完全にのびてしま

山頂にいどむ



7350メートルに掘った雪洞

いたのと、ザイルがビーンと張ったのと同時だった。幸いに雪崩はすぐに止まった。下りのラッセルも非常につらい。最後の赤旗の向こうに、第八のテントがぼんやりと見えてきた。人影は全然ない。大声でどなると、高木隊長の返事が聞えてきた。早速上の状態を報告する。高木隊長の話によると、第八の四人のシェルパは、ラクバがやや元気のみで、後は完全にのびてしま

い、サポートどころの騒ぎではなかったらしい。この天候だから、われわれの一刻も早い下降を祈っていたとのことだった。結局、シェルバは全然使えない。いったん第四まで下って、休養を取ることに決し、全員個人装備のみを持って、早速下りはじめた。シェルバが疲労し切っている、下りのラッセルは、また隊員でやる。相変らず腰までもぐるラッセル。時々、クレバスの上らしい所を踏みぬいてずぼりと落ちる。あたりは口もあけられない吹雪となってしまう。第七キャンプの上は大きな雪崩が出て赤旗が五本ぐらい吹き飛んでないもない。サルキは胃が痛みだし、顔はまっさお。第七のすぐ上の、大クレバスの上にやっと出た。「おーい、おーい」と呼ぶと、テントの回りで七、八名が右往左往している。三名ばかりやって来る。数分後、サルキは隊員にかつがれて下った。山崎が、注射器を持ってサルキのテントに飛んで行く。私は荷物を投げ出して、その上にどっかりとすわった。山田を振り返ると、彼の目は、ぼこんとへこんで、ひげはぼうぼう、寂しそうな顔をしている。ついに第一回攻撃は、プラトーの上に出ることもできず敗退となった。

五月二十九日 快晴。プラトーの上は、相変らず相当の雪煙をあげている。第一回の攻撃時と異なって、からだは非常に調子がよい。食糧、燃料は極度に欠乏し、特に燃料はいくら切りつめても、十日分そこそこの状態。水が飲みたいときは、昼は日射を利用し、夜はローソクを利用して、わずかの水を作り、湯をいやしたほどであった。こんな状態となつては、人員を極度に減らして最少の人数でアタックしなければならぬ。ラジオは、モンスーンの接近を報じている。竹節、依田は、第八まで登り、その日のうちに第四に下ることを申し出てくれる。われわれは、その申し出を喜んで受けた。サポートの人たちの奮闘と、竹節らの犠牲的精神がなかったら、登攀隊は第八まで上がれなかったであろう。高木、竹節、依田、加藤（喜）、村木、山田、山崎、石坂の八隊員と、シェルバ九名は、八時半、第七を出発した。前回とちがいが、雪は割合にしまつて、ほとんどラッセルはない。シェルバも隊員も十分に高度馴化したらしく、皆快調。十一時十五分、第一回攻撃の半分の時間で、旧第八キャンプ跡に到着。第一回時、強風のためテントを埋められてしまったので、テントの回りにできるだけ壁を作ってみる。ここまで来ると風は相変らず強い。竹節、依田は直ちに、周囲の景色を写真におさめて、村木とサポートのシェルバを連れて下る。いよいよあすは、待望のプラトーの上に出るのかと思うと、大いに闘志がわいてくる。夕方からまた風が吹き出し、テントが猛烈にあふられる。あすの出発を七時と決めて、シェルバにその準備を厳命する。

五月三十日 午前一時ごろ、高木の声でふと目をさます。テントをうずめられたらしい。われわれのテントも、風上側は完全にうずもれている。石坂は外に出て、自分のテントと高木のテントを除雪している。シェルバの誑聲の声で目をさます。外は強風なから快晴。朝食前に山田と出発準備に取りかかる。突然、隣のテントの高木が私に、「昨夜、テントは完全にうずもれ、その上昨年（五二年）の傷が痛んで全然寝られなかった。おれはこれ以上ここには止まっておれなくなった」という。瞬間、どきんとした。せつかくここまで登って来て、しかも他の者は非常に快調なのに、プラトーの上までも出られずに帰るのかと思うと、がっかりした。いろいろ相談した後、われわれだけで登れるところまでがんばることにした。十一時、高木と、高山病の再発したサーダのガルトゥエンふたりは、力ない足取りで下って行った。時間は容赦なくたってしまい、結局、きょうは滞在と決める。こんな状態で頂上を攻撃するか否かの問題で、私と山田の意見は異なった。来年のために、よりよいルートを捜すという彼の意見と、あくまでも頂上を攻撃する使命があるというのが、私の意見だ。学生時代からいっしょに山に登りながら、ふたりの意見はよく異なつた。しかし、いったん、ふたりの間で、どちらかの意見が決定されれば、互に全力をつくし合うことができた。「山田行こう」「うん、行こう」後はより安全に、より高い所に達するためにがんばるだけだ。心の中は晴ればれとした。強風ながら空いっぱい日の焼けは、あすの好天を約束している。

五月三十一日 六時半起床。温度零下二〇度だった。一昨夜来キャンプを悩ましていた強風は、ほとんどおさまり、ただノース・コルの地形的影響と思われる風（風速約一〇メートル）が吹いているだけ。問題のプラトー上も、時々雪煙をあげている程度である。早速出発準備にかかれど、九名分の朝食がなかなかできないので、いらいらする。今日じゅうに、どうしてもプラトーの上に出なければならぬ。八時四十分、加藤、山田、石坂の三名は、山崎、グンディ、ラクバ、アン・テンバ、ミンマ・シター、アン・ノルブの六名のサポートのもとに、二日分の食糧と装備など約五〇キロを持って、第八キャンプを後にした。雪質は第一回攻撃時と異なり、ラッセルもわずかにくつを没する程度であり、サポート隊のメンバーも攻撃隊員も、高度馴化が十分であったため、行程は非常にはかどり、ぐんぐん高度をかせぐ。たちまちにして、前回の雪洞の地点、約七三五〇メートルに達した。一週間前に立てた赤旗は、強風のため、旗竿を残すのみで、旗はミシン糸が切れて、第八から上は、全部吹き飛んでしまっていた。雪洞は跡かたもなく、前回入口に使用したテントも、吹き飛んでしまっていた。

この付近から斜面はぐんと急に四〇度ぐらいになり、逆層スラブでぼろぼろの赤っぽい岩も、所々に出てくる。積雪はぐっとへたってくる。アン・ノルブの調子が悪くなりだす。テント一張を負っているだけに、五歩いってはピッケルにすがって、顔を下にして肩で呼吸している。早速強心剤をやる。プラトーまであと一〇〇メートルぐらいの所から、平均傾斜約五〇度となり、危険を感じたので、シェルバに代って隊員がラッセルを担当する。先頭にたった石坂は、ステップを切りながら、ぐんぐん高度をあげ

て行く。後を振り返って見ると、高度差四〇〇メートルの急斜面が続いているので、あまりよい気持はしない。左側からのしかか
るように、プラトリーからぶらさがっていた厚さ数十メートルのお氷も、もう少しでわれわれと同じ高さになってしまふ。そのあ
お氷と右の逆層スラブの間の、雪のつまっている幅の狭いガレにはいるようにと、先頭に注意した。そこからあと三〇メートルぐ
らゐで、待望のプラトリーだ。雪質は急に氷に近いほどの堅さとなる。ガレを半分くらい登ったとき、急に私の前を登っていた山田
の歩度が早くなって、ステップがなくなった。私は危険を感じて、先頭に、フィックスをつけるようになったが、それは強風に
かき消されてしまったらしく、返事がない。シェルバのためにステップを切りとうと思つて、すぐ後からついて来たアン・テンバを
振り返ると、アン・テンバがスリップしたのが、ほとんど同時だった。私は「止めろッ」とどなった。彼はそのまま滑落し、
最後の岩から見えなくなってしまった。二番目のグンディをも、ザイルで引き倒した。グンディは、一生懸命止めようとしてい
るが、ぐんぐんスピードをます。「グンディ止めろ」とどなったのと、彼のアイゼンが、ガレの最後の岩にガチンとかみ合ったのと
ほとんど同時だった。恐怖の瞬間は終わった。ずいぶん長いようであったが、それは瞬間のできごとであった。私より上の三人はだ
れも見えていなかったらしい。グンディのアイゼンが、岩にかみ合わなかったら、あの急斜面を四〇〇メートル落下、その上、もし
左側の方に落ちてしまえば、ほとんど垂直に近い斜面数千メートルをマルシャンディの溪谷に落ちてしまふ。早速フィックスを上
からつけさせて、恐怖におびえて、動かなくなってしまったシェルバを、ひとりひとり収容した。最後から登つて来た、アン・テ
ンバの顔は、恐怖にゆがんでいた。「ホシャルル、ホシャルル」といつて彼の肩をどんとたたいてやった。

このとき、ビールの泡のようにわき上がってきた雲に、包まれてしまった。私は、いちばん最後から、ゆっくりとプラトリーの上
に第一歩を印した。なんの感激も起らなかった。ただ、いかにサポート隊を安全に下らせるかということ、あすの頂上攻撃のこ
とでいっばいだった。早速キャンプ地を捜す。プラトリーの先端の方は、強風のために雪がほとんどついてない。岩がゴロゴロして
おり、われわれが登りつめた所は、内地では一度もお目にかかったことのないようなお氷。結局、お氷のいちばん薄くなっ
て、平地になっている所に大急ぎで、二人用ミッド型テント一張を張る。ベッグはアイス・ピトンを使用する。風は相当に強い。
山崎はプラトリーの上に着いたとき、高山病のために酔っぱらったような症状を訴えるので、しばらく休ませる。時間は四時を回ろ
うとしてゐる。早くサポート隊を降ろさねばならぬ。このとき私は、先程のアクシデントで、シェルバが非常に動揺しているの
で、山崎ひとりだけでは危険であると思つた。アタック隊三人のうち、だれかひとりを降ろそうかと思つた。しかしせっかく、頂
上を攻撃するために登つて来て、張り切っている連中を降ろすことは、情においてしのびないので、ためらつてしまった。そのう

ちに山崎も元気を回復したし、グンディが非常にしつかりとしているので、情勢に妥協してしまつた。プラトリーの下りは山崎のザ
イル・パーティとグンディとにわけたが、約二〇〇メートル降りたとき、ラクバとアン・ノルフがスリップして滑落、山崎もまき
込まれたが、山崎の奮闘により一〇〇メートル滑落しただけのことなきを得た。これはあきらかに私の責任であり、情にとらわれ
ずに、隊員をもうひとり降ろすべきだった。いかなる山においても、危険をさけるために、正しいと思つたことをやり通す勇気だ
けは、忘れてはならない。山崎とは、あすわれわれは頂上攻撃、明後日、早朝第九キャンプ撤収。できるだけ上までサポートに
来るように打ち合わせる。

下りの最初の悪場は、私と山田とで四〇メートルのフィックスをつけて、サポート隊を送った。彼らは元気に、ひとりひとりガ
レの最後の岩の所から消えていった。テントに返ると、中では石坂が炊事にかかっていた。一息ついて頂上をみる。雲の中らち
らちらと、頂上らしいが見える。まだまだ相当に距離がある。このころから天候は、例のように積乱雲がわき、これに伴い風速
一〇メートルぐらいの西風と若干の降霰と雷鳴があり、気温も午後六時には零下二五度に下がった。夜にはいつてから、天候は幸
いにも静穏となり、夜間の最低気温は零下三二度まで下降したが、絶好の攻撃前夜であった。山田の高度計は七五一〇メートルを
さしている。(地図との誤差一〇メートル)夕食はアルファ米のみを雑炊をたらふく食べた。石坂はちょっと吐き気を催したよう
であった。あすは六時出発と決めて、寝袋にもぐりこむ。サポート隊が無事に第八へたどりつけたかどうか。無事を祈つて寝に
いた。

六月一日 二人用テントにぎこのように、おり重なつた三人は、窮屈でよく眠れなかった。隣の石坂の寝返りで目をさます。夜
光時計は四時半をさしている。すぐに起床、気にかかる空をのぞく。こぼれるような星空で風もない。オバルティン、アルファ
米の雑炊を腹に流しこむ。まだ食べ足りぬ感じなので、オートミールを作る。石坂は吐き気のために食べない。完全武装——着た
ものは綿下着、ラクダ・シャツ、厚手フラノ布地Yシャツ、厚手スウェーター、羽毛服、防風衣、足には薄手靴下二枚、シーブスキ
ン靴下、厚手靴下二枚、皮靴、オーバー・シューズ。——するまでに相当の時間がかかる。

午前七時、山田、石坂、加藤の順にアンザイレンして、頂上攻撃の第一歩を踏み出した。テントからすぐに完全に近いお氷の
斜面が続ぎ、われわれのビッケルの石突きは、全く物の役にたたず、わずかに新品のアイゼンの爪だけが頼りといった状態で、初
めて出くわすヒマラヤのお氷に、目をみはる。携行した標識用赤旗も、立てる所なく、所々にある氷の裂け目にわずかに差しこ
んだ。初めて見るプラトリーは、予想外に広大であり、頂上までだいたい三つの段階に分れ、各ステップの間は、お氷ないしはあ

お氷上をわずかにおったスカブラの原となっている。プラトリーのクレバスは、最大の幅が三〇センチぐらいで、これが縦横に口をあけているのは奇観である。午前九時半、第二のステップの直下に達する。ここは第八キャンプの左上のアイス・フォールの斜面を登っても達せられる所であり、雪崩、アイス・フォール上の技術、シェルバの荷上げなどのことを考慮して登れば、プラトリー上への距離を、かなり短縮できると思われる。まだまだ問題は相当に残されている。登りはスカブラと粉雪の混じった斜面で、ラッセルに苦しむ。下がお氷でその上に三〇センチぐらいのスカブラがついており、われわれの重みがかかると、半分ぐらいのスカブラが斜面を滑落する。

歩行速度は正確には測らないが、二ないし三呼吸に一步程度で、第一回攻撃時の第七キャンプまでの登りと同じぐらいであった。私の脈は、平地で起床したときが五十六、普通が六十であるが活動中の今は、百二十ぐらいになっており、十分ぐらいの休息では、百十くらいまでにしか下がらなかった。私は高度の影響として、四五〇メートルと六七〇メートルで、相当にひどい頭痛にみまわれた。これは葉でなるとし、第二回目の攻撃では、一度も頭痛はなかった。しかし、七六〇メートルのこの付近から、からだは非常にだるくなった。呼吸はさほど苦しいとは思わなかったが、ただ熱病の後のようにだるい。ここらあたりから、人間の高度に対する限界が始まるように考えられた。このころより西方に、例のように積乱雲、チベット方面には、この変化したものと思われる巻雲が流れ、プラトリー西南端リッジに、雪煙が上がり始めてきた。頂上は依然として、なかなか近づく様子もなく、われわれを無慈悲に眺め下している。

私は第九キャンプを出発するとき、アンナプルナ、ダウラギリなど、目にうつる山々を、しっかりと見ておく心算だったが、結局アンナプルナをちらりと見たのを覚えているが、ダウラギリのダの字も思い出さなかった。私の頭は、頂上に行くこと、安全に帰ること、サポート隊のこと、それだけでいっぱいであった。ひんばんに休んだ。三人はどかかと氷の上に腰を落す。石坂はそのまま寝ころんで、一言もしゃべらない。私と山田は、ぼつりぼつりとなにか話す。昼飯はビスケットを数枚、紅茶を腹の中に流しこんだだけだった。正午、第二のステップを越し、頂上へ続く第三の最後のステップにかかる少し手前、高度七七五〇メートルに達し休息した。

私は迷った、行けば行ける。私の判断では、これから頂上まで斜面も急になるし、どうしても五時間か六時間かかる。帰りは、頂上から第九キャンプまで五時間とすると、どうしても、夜十一時を過ぎなければ帰りつけない。しかし、せつかく、ここまで来たんだ。行ってしまえ、という気持がわいてくる。山田に意見を聞く。彼ももう少し先まで行くことに賛成する。ふと石坂の方

を見ると、あおむけにぶっ倒れて寝ている。それを見たたん、私は決心した。そうだ、絶対に安全な方法をとろう。行こうと思えば頂上へ行きつくことはできるだろう。しかし、私は一九五〇年のアンナプルナに初登攀したときのフランス隊の惨事を思い出した。もし登れたとしても、ひとりでも倒れたら、われわれはその者を助けるだけの余力は残らない。より安全に、より確実に頂上に登ってこそ、本当の山登りだ。われわれはがんばった。だが、ここが限度だと思った。正しい登り方をすべきだと思ったときに、非常に余裕が出てきた。石坂に、「帰るぞ」というと、負けぬ気の彼は「行きましよう、先へ」という。

私の決心は変らなかつた。天候はこのところ毎日三時ごろまでしかもたない。それまでには帰れたかった。早速、私は頂上にかけるために大切に持ってきた折目正しい国旗を、ピトンで氷にうちつける。山田が写真を写す。三人は、頂上を見あげ、国旗に頭を下げた。なんとはなしに、鼻柱がじいんとした。ここにもう一つテントが張れたらと思うと、寂しかった。帰路、三人は一語もしゃべらない。歩きながらいろいろと考える。通訳のディリーも村木も、一晩寝た翌朝に、ひどい高山病にやられたことがあつた。もし、もう一晩第九へ、あの疲労している石坂が泊まったら、しかも、この高度に経験のないわれわれも翌朝の健康に自信がない。もしもひとり倒れたら、とてもあの急斜面のプラトリー下の壁は下がれない。サポート隊も上がって来るだけで、せいりっぱいだろう。がんばって第八キャンプに降りることにした。二時半、ぼつんと一つ取り残された第九へ帰って来た。石坂はそのままテントの中におられたおられるように寝てしまふ。私と山田は、外でココアをわかず。三時にテントと食料を残し、重い荷物を背負って第九キャンプを後にした。途中の急斜面は、死の苦しみであった。悪場を通り越したとき、下のサポート隊が上がって来るのを認めた。私はほっとした。からだは綿のようにつかききっている。しかし、できるだけやったんだ。だれひとり指一本凍傷にもならず、初めてのヒマラヤへ日本の装備で、と思うとなにかしら、ほのぼのとした気持だった。数十分後、われわれはサポート隊に抱きかかえられるようにして、第八キャンプへ下がって行った。

サポートと撤収

村山雅美

予想したモンズン直前の、比較的静穏の天候に幸いされて、なお今後五日間の行動をあたえる食糧、燃料をもって、最後の攻撃に移るために、ナイケ・コルの第四キャンプから登攀隊が、第七キャンプ、第八キャンプに展開し終った五月二十九日の夜は、

雪に暮れていった。

アングマン諸島に進出したと報ぜられた、モンスーンの影響であろうか、さしもの烈しさを示した輻射熱も、おとろえを見せ、気温も八度程度を越えない快晴の三十日、ナイケの基地から望見すれば、朝からの烈風は、第八キャンプのあたりからプラトリーにかけて、雪煙をまきあげてすさまじい。この烈風に釘づけになったものか、期待した第八キャンプからプラトリーに向かう人影は、ついに認められず、貴重な一日はむなしく過ぎてしまった。この日、第七キャンプからは、「登頂はおるか第九キャンプの建設も絶望視され、プラトリー進出が、最後の希望であろう。六月一日を、撤収開始日とする」と報ぜられた。

朝から、ピナクルにあがる雪煙も認められない平穏快晴に恵まれた三十日、第八キャンプを出発した登攀隊と、山崎に率いられた五人のシェルバからなるサポート隊は、快調な登攀をプラトリーに向けて、続けられていた。午後二時半ごろ、最後の悪場と思われるスラブをのりきって、ひとり、ふたりとプラトリーに消えたとき、先ほどから勢力をもどした西の強風は、再び雲をプラトリーに運び、登攀隊の消息は全く絶たれてしまった。毎日午後三時ころからきまって、雪を伴う烈風にたたかれるプラトリーは、きょうばかりは、雲こそかかっているが、さして猛烈な雪煙もあがらないのは幸いだ、プラトリーに進出した九人の行動を気がかりに、重苦しい時間が続く。四時をわずかに回ったとき、雪の晴れまに、プラトリーを出て、岩場をまさに下り切ろうとしている六人のサポート隊を、望遠鏡に捕えたが、一瞬の後は、再び雲に包まれてしまった。太陽はすでに西に傾き、ノース・コルから第七キャンプ上の広い雪原には、北峰の影が長く、プラトリーからピナクルにかけても、時おり一筋二筋の雪煙が舞い上がるほどの静かな夕景に変わった五時過ぎ、順調な足取りで、雪の斜面に赤旗で示されたジグザグの登路を、順次にその速度をあげて、第八キャンプへ下って来るのを確認して、ホッとする一方、第九キャンプにはいった攻撃隊の消息が、気がかりでならない。

六月一日 幸いにもまれに見る快晴平穏に恵まれた。第四キャンプからは、サルキに率いられた三人のシェルバとラッカロ・バツカル以下の三人組ポーターが、第六キャンプ撤収に向かう。第七キャンプをたった田口、加藤(泰)は、第六キャンプで合流したシェルバ隊とともに、撤収準備のため、第四キャンプに下って来た。

早朝第九キャンプを出発したと思われる攻撃隊の行動は、全く視界の外にあるために、全隊員は神経質に、プラトリーの稜線を望遠鏡で追っている。順調な登高を推測させる、静穏にすぎた午前中の空模様も、正午を過ぎるころから、にわかには怪しげな雲行きと変っていった。時計と望遠鏡を交互に見て、気が気でない。攻撃隊は十二時には、十分の余裕を残して、引き返しを決意したことを確信してはいたが、プラトリーをトってくる姿を見るまでは安心できない。刻一刻と時が過ぎ、隊員の心も重く、かつ暗くな

ていく。

望遠鏡には、シェルバを交代につけて、見張らせておいた。午後二時、突如、プラトリーの稜線に、頭を並べた三人の攻撃隊を認めて、歓声があがる。スラブにかかる前の小休止だろう。一点に重なった影は、しばらく動かない。岩場の下降にはいった十五分後、よほどの悪場と見えて、遅々として進まぬ足取りが気がかりだ。「凍傷にやられているぞ」と思わず叫んだほど、難渋の動きが続けられているらしく、一向に距離ははかどらない。下りにかかっただけで、一時間半、第八キャンプからサポート隊が出ないのかと、気ばかりあせる。とっぷりかかってしまった四時半過ぎ、夕陽をかすかにうけて輝く雪面を、第八キャンプから、猛烈なスピードで迎え登る山崎隊の四人が、視界にはいった。思わず「山崎やった」と叫んだように、エキスピディション大づめの、ドラマチックの場面が、壮大な氷雪の断崖を背景に、展開されようとしている。さらに一時間を経て、全く暮色に閉ざされた雪の斜面を、ようやく歩調をあげて降りて来た攻撃隊の三人が、迎え上がった山崎隊の四人に、肩を抱きかえられた場面を、つきなみの言葉で劇的瞬間というより、ごく自然な感じで、全隊員、全シェルバが見守っていたのだった。

予想以上に、みごとな攻撃を確認し得たこの日のキャンプの夜は、折よくポスト・ランナーにもたらされた、故国からの便り、新聞をローソクのともしびで、むさぼり読んで、時のたつのを忘れた。ベース・キャンプからの、「エヴェレスト攻撃失敗か」との、ラジオのニュースを入手するにつけても、今日の攻撃は、七八〇〇メートルぐらいはやっただろうと、久し振りに晴々しい気持ちで、語りあうのだった。

六月二日 第八キャンプに山崎、グンディ以下五人のシェルバ、第七キャンプに高木、辰沼、加藤(喜)、村木、山田、石坂、ガルトゥエン以下四人のシェルバ、第四キャンプに田口、加藤(泰)、村山、サルキ以下五人のシェルバ、ポーターの配置から、第四キャンプ集結の目標で、撤収作戦が始められた。八時すぎ、すでに第七キャンプを出発して、第六キャンプ上のセラックスの間を、下降を続ける隊を望見しながら、田口、村山は、ベース・キャンプへ、撤収ポーターの手当のため、第四キャンプの撤収を加藤(泰)に託し、スキーをはいて下る。マナスル氷河の上、登路を示す赤旗を縫っては、ふりかえり見上げれば、濃紺の空を突き破るようなピナクルを中心に、北峰のヒマラヤ筋が朝の直射光に青く輝く。いま、快適なスキーを楽しんでいるこの斜面に続くとも思われぬアイス・フォール。その右手には、すっかり雪をおとして、けずり立ったような岩壁をめぐらすナイケ山が、まゆを圧して迫っている。ちょうど日本の四月の山で、スキーを楽しむような気分、マナスル氷河を、ザイルをのばし、あるいは縮めては、クレバスに気をくばりながら、シテムボーゲンで、くるりくるりと回転を続けて下って行った。

すっかり雪は消えて、清流に洗われている第一キャンプ上で、スキーをぬぎすてる。四十日ぶりで大地に降り立った感触は、不思議にもやわらかく、暖かかった。紫の花をつけたアストラガルス、コリダリスの青い花が咲きこぼれた草原に寝ころんで、眼下をながめやる。青白い、土砂におおわれ、サメの歯を思わせる無気味なセラックスが乱立するマナスル氷河の下に、サマ僧院の緑の芝地が、庭園のように美しい。われわれの前をベックマン人夫のぶあいそな顔が通りすぎた。彼らはベース・キャンプから第二キャンプまで毎日のように二六キロほどの食糧を背負い上げたポーターで、この労苦には、同じく第四キャンプと第二キャンプの間をいやな顔一つせず「サラーム、サラーム」と愛嬌を振りまいて往復した、ラッカロ・バックル、セメント、ヘイボンとあだ名で呼ばれた屈強のカトマンズ人夫の陰の力にも頭が下がる。

ベース・キャンプの広場には、隊長、竹節、依田のまっ黒なきたない顔にまじって、思いがけない科学班の中尾、川喜田の色白の顔が見えた。三十日の第七キャンプからの報告でプラトール攻略も絶望と思いでいた隊長は、一足先に到着した科学班からもたらされた、一昨日のビムタコーチ、きのうのラルキヤ峠から望見した、プラトール上を登る人影についての報告を、いまだに信じ兼ねていたので、今着いたふたりに、やつぎばやに上の様子を聞いた後、「よかった、よかった」と満足の色。その直後、突然「ただいま」と叫ぶ黄色い声とともに、現われた加藤(喜)、山田によって、七五〇メートル到達が確認されたのだった。久しぶりのにぎやかな、そして、おいしかった夕食後の歓談に沸き立っていたその席に、思いがけずも「エヴェレストの登頂成功」をラジオが報じた。瞬間だれもが愕然とした。この同じネパール・ヒマラヤの約二四〇キロ東のエヴェレストで、現在われわれと同じような生活をしているイギリスの山仲間の成功を祝う気持と、われわれの理想の目標、エヴェレストの頂上をうばわれた底知れぬ落胆とが交錯して、複雑なふんいきのうちに、麓酒亭の夜はふけていくのだった。

六月三日 エヴェレストは成功し、マナスルに敗退したという事実の前に複雑な気持でベース・キャンプの第一夜を、麓酒亭のジュニバーの床に明かせば、早くもまばゆい朝の陽光がこの石室にさし込んでいた。淡雪が毎日のように訪れた四月の寒々としたこの周辺の風物も一変して、今はすっかり青草と緑したたる木立にうずまわっている。二ヶ月の間、荒々しいながめに馴れたわれわれの目には、手入れの行きとどいた庭のように映るのだった。思い思いに、朝食とも中食ともつかない卵焼き、うどんに飽食しては、芝生に寝転んで大地の暖かさを楽んでいる。三時すぎ上手の草むらに威勢のよい叫び声とともに、つわものどもの名がびたりするシェルパたちがまっ黒な顔を現わした。とはいえ、ガルツェン、アンツェリン、ラクバの痛々しいまでにやせおとろえた顔には、長い苦闘の跡が刻まれていた。ミンマ・シター、ニマ・テンバは一際元気に相変らず屈託のない顔を並べていた。第一キャ

ンプから下の増水に苦勞をしているのか、だんな衆はいっこうに姿を見せない。うどん、オムレツを着くやおそしと食べさせようと腕によりをかけて作り上げたバンシー親父が、しびれを切らして麓酒亭の前で待ちうけていたとき、ようやく現わした姿はだれかれの判別もむずかしいまっ黒なひげ面だ。ここにカトマンズの一別以来、科学班中尾、川喜田を交えて十五人が七十日ぶりに会したのだった。

ポーターが見覚えて用意したトルコ風呂にかわりあって汗を流した後は、にぎやかな夕食。そして、とっておきのラム、ウィスキーとシェルパがふんだんに運んで来るロキシの振る舞いで、麓酒亭は深更まで歓声の絶えなかったことはいままでもない。

六月四日 うららかな朝の日を浴びて頭髪を刈りあうシェルパたち。不断の無精者のわれわれも、キャンプ場至る所に咲き誇る草花の美しさにひかれて、摘み草をしたり、押し花を作るといふのどかな風景だ。夕食に再びヤクのジンギス汗焼きでたくましい食欲を示した隊員たちは、夜のふけるのも忘れて麓酒亭で話しこんでいる。

六月五日 荒々しくサメの歯のようなセラックスが乱立し、土砂をかぶって青白く無気味なマナスル氷河は春にも増して近づき難い。濃紺の空に輝く双峰へとプラトールの稜線をたどれば、最高到達点のあたり、ひととき青く氷が光り、さらにピナクルの向こう側へ傾きを加えて伸びるプラトールは未踏を誇示するもののようにだ。しかし、仰ぎ見れば、エヴェレストの登頂を引き合いに無念を嘆く気持などは微塵もなく、再挙の作戦を心に刻んでいたわれわれだ。

測量器具をポーターに背負わして出発しかけては、昼飯にありつけなくてはと心配している村木。裏山のお花畑の習作に余念のないでんぐ連。撤収準備の荷物の仕分けに忙殺されている隊員、シェルパ。あるいは長びいた攻撃に帰途の路賃に不足をきたしたと額を集めている勘定方など、ベース・キャンプは多彩だ。

六月六日 モンズーン来も一だるみだったのか、高所キャンプの撤収も順調に運び、名残りのベース・キャンプ生活を楽しみて得たここ数日の好天も、ようやく崩れて来た。南東の空からブリ・ガンダキをおおって沸き上がったのは、プラトール北峰の稜線に次々と重なりあって行く雲はモンズーンの歩みを知らせるようだ。さっとあたりをおおう濃霧は、ふと夏の軽井沢の高原をしのぶ郷愁を呼ぶのだった。夕方から降りだした雨の小やみに、たき火を囲んで踊るシェルパの歌声と、シャツ、シャツ、シャツの掛け声とともに地をうつつ足拍子が、ひとり離れてテントにこもり、ローソクのともしびの下に、旅費の送金を東京に依頼するタイプをたたいている私の耳には、今も残っている。

六月七日 隊員個人装備の木箱をモンズーン下の二週間の旅に備えて、キャンパス袋に格納して歩くシェルパ。テントの側に指

紋、頭型をとる道具を並べて、きょうは稼業にいそむ高木が、露天商人よろしく店びらきをしている。くれるものならなんでもと物欲し気なサマの村人がいつ来たかと思うほどの多勢、テントをのぞきこんだり、四月以来われわれが占拠していた石室の持ち主であるというばあさんが、その家賃を請求するのか盛んにディリーに訴えているなど撤収前日の騒々しさだ。

ラルキヤの峠を越えて

村山雅美

六月八日 住みなれたベース・キャンプを後に、帰路の第一歩を踏み出す。朝夕にながめ暮したマナスル氷河は、雨もよいの雲の中、時おり、対岸のバンブーチの岩壁が見えがくれする。久しぶりのサブリュックも軽く、長い苦闘の追憶にふけるのか隊員は、ひとりふたり黙々と歩いて行く。時々草むらのあたりから、ビュッピュツと、鳥のような鳴き声が聞える。芝地に穴を掘って群生している、ヒマラヤ・モルモットとかいうウサギほどの動物が、一目散に穴の入口まで走って、とんきょうな顔で、こちらを振り返っている。チベットから来たのだろうか、美しいカーベット(じゅうたん)を二、三枚、馬の背にした商人に行き会う。

ナイケの氷河に源を発した、白濁の奔流にかかる橋を渡って、道を対岸にとり、急崖をのぼれば、チベットへ通ずるギア・ラとの分れ道のラルキヤ・マーケットだ。五月末の雪どけとともに開いたこの峠をゾーバ、羊の背で越えて来た塩の袋がチベット人のテントの回りにうづ高く積まれてある。再び、ここから米を背に、追われ帰る羊が、無心に草をはんでいる。夏場の五ヶ月は、ネパール有数の物資の交易場なのだろう。ラルキヤ・バンジャンの向こう側、ビムタコーチで、米十六に対し、塩二十五の交換率は、ここでは、米十二対塩二十五が、相場だという。シュルバのバンシーのおいで、往路ビーあたりから隊に加わったドルジェと呼ばれるかわいらしいチベット少年——今は隊長付きとなってポカラへ行ってくつの半張りを直すのだといいながら、三田さんのリュックサックを背に、ヘルメットをかぶり、まめに働く、利巧者——の親がやっている茶屋をはじめ、二、三軒の家が旅人を相手にしている。小雨をさけて、われわれは、ドルジェの店にもぐりこみ、ジャン(ドブ酒)、チベット茶、乾肉、ミルクで腹ごしらえた。表で騒々しく、ポーターが立ち回っている。近づいて見れば、サマの人夫たちとシュルバの大乱闘だ。ピッケルを振り回すシュルバ、前歯を折られて大声でわめくチベット人、側で泣きさけぶラマ尼たち、ひどい騒ぎの中へ隊員がはいって仲裁する。頭を石でなぐられたサルキは、血だらけで倒れ、ヒクヒクとけいれんしている大げさぶりだ。これはやっと納まったものの、サマ

の人夫は動こうとしない。横なぐりの小雨の中に、険悪な気配を心配しながら、グルンの人夫たちと先を急ぐ。急を聞いて馬を駈って乗りこんだ、サマの僧院の頭目であり、この地域の裁判権をもつ大ラマ僧と交渉の末、四〇ルビーと負傷者の手当を条件に、ようやく解決した事件のおかげで、第一日の日程は、マーケット上の台地泊まりとなってしまった。四三〇〇メートルのテント地は、雪こそ消えているが、はだしのグルン人夫、ラマ尼の一隊など、ポーター用のテントの中に肩をすり寄せて、ふるえている。人夫たちははてんでにわびしいとき火を囲んで、笑い声さえて、いつもの平静にかえたので、やっと胸をなでおろした。

六月九日 五時半、テントの入口から首を出せば、バンブーチはモルゲンロートに輝いている。モンスーンきたるとはいえ、きょうのラルキヤ越えの一日だけは晴れて欲しいと、だれもが祈っているのだ。バンブーチにかかる氷河が、逆光線に輝き、キャンプ場も、朝の斜光に暖かみをとるもどすころ、早くもチベット人の一群は、前の急坂を、小さいからだにけなげにも、塩を振り分けて負う羊を口笛で追いあげて行った。あとを追うように百人に近い人夫たちも、重い荷を背に次々と出発した。きょうは書入れとばかり、カメラを両肩にした依田を先頭に、隊員は気の向くままに歩き出す。きのうの雨は、四五〇〇メートルくらいからは雪だったのか、右にゆるく果しなく続く斜面はまっ白だ。左の氷河越しに、ナイケ山がぐんぐん高度を増し、するどい岩壁が、北峰の切りそいだよな壁に対立し、その間に深く、ナイケ氷河が土砂におおわれ、ナイケ・コルへと突き上げている。プラトールからマナスル頂上へ連なる稜線は、北峰にさえぎられて見えない。シュルバのアンツェリン五号は、人夫として雇われている、彼の姉、めい、おいの一隊を、悪場になると、手を借しては、いたわっている。グルンの人夫は、残雪の道、凍った草付きを、はだして登って行く。背の荷をおろしては、無心に横笛を吹く、風流なチベット人の若者。すばらしい天気だけに、人夫の足並も至極順調だ。

残雪のアルプが右に開け、左深くナイケ氷河に切れ込んだ日だまりの平に、全員が休息をとる。双眼鏡をはなさず、プラトールから頂上へと見つめる隊員たち。喜一から双眼鏡を借りてながめ入っている、最強だったグンディの面持は、来年を期す同志のそれだ。第七キャンプからノース・コルにかけて、幾条かのデブリ、目を凝らせば、第六キャンプの前後にも、累々たるデブリだ。

長く目を楽しましたマナスルに別れをつけて、緩いアルプを登って行く。緩い残雪の山越しに、ラルキヤ・ヒマールが展開するあたりで、チベット人夫婦が野天で、ミルク、ヨーグルト、チーズを売っていた。むさぼりたべる隊員、シュルバ、つましく胴巻から何枚かの銅銭をとりだして、ヨーグルトをのむポーターで大繁昌。

ラルキヤ越えのながいこと、予想にたがわない。モレーン沿いの登路では、ヤク、ゾーバ、羊を追いおろす夫婦者のチベタン

に幾度かすれ違ふ。モレーンを登りきって、ほっとするのもつかのま。はるかに、氷河は延々とラルキヤ・バンジャンに続いてい
る。隊列からおちたポーター、高さに参ってしまった料理番のスサノウ——ポーターのひとりです。昨年も雇ったが、トサツ係をやる
のでスサノウの尊からこのアダナが出た——が、夢遊病者の態で立ちどまっているのを、追いたてるシェルバ。隊員もさすがに言
葉少なく、折からのみぞれの中を登って行く。三時半、氷の湖をわたり、 Cholten のあるモレーンを目ざして登れば、やっと五
二〇〇メートルのラルキヤ・バンジャンである。幸いに、小雪の峠越えにも落後したポーターもなく、あと三時間の下りを急ぐ。
雪の晴れ間、チエオ・ヒマールから発した大きな三つの氷河が、今夜の宿泊ビムタコーチの地上で、合流する壮大な氷河地形は壯
観だ。暮色が濃くハイネスの斜面に訪れるころガルトゥエンが馬を引いて、隊長を迎えにきた。一杯のジャンでは酔いのわれわれ
は、おくれたラマ尼、少年組のポーターと最後尾で、たき火にてらされたビムタコーチ(三八八九メートル)の泊まり場についた
のが七時すぎ。遅くついたポーターも、ボクシスの一本のタバコに相好を崩し、手早く、火を囲んでアタ(粉)をこねまわすとい
う元氣さだ。

六月十日 朝もやに包まれた芝原の向こうに屹立する、モルゲン・ロートのМанасルに、眠気をさまされる。東面からながめた
山容とは一変し、プラトリーがかつくそそり立ち、その中央部の奥ふかくに、乳房のように盛り上がった頂上を望見して、その距
離の長さにおどろかされる。鋭く刻まれたノース・コル、長いプラトリー、最後のピラミッドという、すさまじいМанасルの相貌が、
さしものティルマンを、「もし半分の高さなら」と嘆かせたのだ。朝もやがポーターの朝食をたく煙ととけ合うキャンプ地を、けさ
ばかりは早々に、隊員たちは、モレーンの上から、Манасルの眺望をたのしもうと、ふたり、三人と出発して行く。振り返れば、
ヒムルン・ヒマール(七一六メートル)から七〇〇九メートルの無名のすばらしいピナクルが、朝陽を正面にうけてまさに、峨
峨とそびえている。モレーンの日だまりには、早くも羊が草をつんでいる。モレーンに Cholten を積み、白旗を何本かたてたビ
ムタコーチの部落。白のスウェーターを着こんだ、この村のヘッドマン(村長)と、その住家である白の真新しいテントが、急に文
化の世界にはいりかけたような感じを与えた。日が南に回るにつれ、Манасルのノース・コルにかかる氷河の陰影は濃く、プラト
ーから分れる支稜の雄峰六三九八メートルの抱く氷河が、正面に輝いてきた。モレーンの末端、長い氷河の生活を終えんとする所
では、心なしか、隊長以下数名が、名残りおしそくにМанасルにながめいていた。

ここから森林帯へ下る。美しい針葉樹林のこすえ越しに、Манасルの一群を望む芝地の一軒家で、ジャンと乾肉をたんのうして、
ツード・コーラについて下るうちに、早くも暑さと湿気を身に感じ始める。ゴルジュとなった峡谷を離れ、数十頭のゾーバが、砂
けむりをあげて走り下る峠を、大汗で越えれば、はるか下に、今夜のテント地ゴーが見える。このあたりは、ネパールにはいって、
初めて見るほどの豊かな耕地で、トウモロコシ、ジャガイモ、豆が青々とテント場を囲んでいる。夜はラマ尼のたき火を囲んでシ
ェルバがはしゃぐ。バンシー老が美人で人目を引いているチベット少女をからかう騒ぎをよそに、無心に念仏をとるラマ僧も
ある。

六月十一日 長かった昨日までの行程に比べて、半日の旅という気分も手伝って、うきうきとし、いやがるラマ尼の写真をとっ
たりする者もある。トンジェまではちょっと高地にはいる島々谷を思わせる風景で飽きない。トンジェはマルシャンディの合流
点、岩壁にかまれてむしむしする。大部分のチベット人夫は、ここで交代となり、道をはさんで、支払をうけるために並んでい
る。十数戸の家もあるこの部落には小さな学校があり、白人のような顔つきの校長について、色も同じアリアン系の顔形の生徒
が、もの珍しげにテントをのぞきに来る。

久しぶりの水浴を、白く濁った冷たい川でやる。そして、半ズボン、半袖シャツの夏姿に変える。夜ふけて、シェルバの踊りに
誘われたのか、今日解雇されたラマ尼の一団が現われ、踊りに加わる。チベット調の単調な歌と踊りに始まるのは変りないが、突
然、ふたりが手を組み、あるいは後向きに円陣を作り、力強い足踏みにおわる、激しい踊りは、非常におもしろい。シェルバとラ
マ尼の乱舞は、深更二時におよんだ。

六月十二日 ボカラでの飛行機チャーターの要務を帯びた、田口、両加藤、村山は、五人のシェルバ、三十六人のポーターと、
本隊に別れて、出発する。マルシャンディを渡り、対岸を高まきして、一コース下ると、ダラバニという塩問屋のある部落につ
く。マルシャンディの谷は明るく、日本の風景に近い。棧道をへずり、草いきれの猛暑の道に悩みながらも、小人数のこととて、
おおいにとせば、突然、上高地を思わす平地タールに着く。滝から落ちる清流で水浴した後、川べりに竹であんだアンペラの上
で、チキン・ライスを食べる。

六月十三日 夜半から強くテントをたたく雨、モンズン来るを思わせる。久しぶりのチャパティ(小麦粉のせんべい)を、雨
のテント内で食べてから出発。うつつしい雲におおわれたマルシャンディは、白く濁った奔流が耳をつんざくばかり。岩をか
む濁流にかかるつり橋へ来る。竹皮を太い綱により、それをまた木で支える、あぶなっかしい橋は、上下左右に揺れる。さすがの
ロン(犬の名)も、何度か試みたが断念、あわれな声で助けを呼び、セメント(人夫のあだ名)に負われて渡る。果物に飢え、部
落を過ぎるたびに、「ケラ」と叫ぶが、金をもらえまいと思ふのか、きまって「ツァイナ」の答えた。暑さもひどいし、相変らず

行程は長い。今晚は、シレチョール・オダールとよぶ岩陰の泊まり場に野宿だ。久しぶりに、トマト、マンゴウ、カボチャの茎と葉、それにいつもの鶏の丸焼、チキン・ライスに満腹。

六月十四日 雨あがりの朝、ようやく流れもゆるやかなマルシャンディから少しはなれ、高巻きとなる。ムシ・コーラの向こうに望めるはずのヒマルチュリは雲の中。モンスーンの蒸し暑い沢通し、クディ目ざして、欲も得もなく歩きづめ、夕闇迫まった芝地に、ポーターが荷を置いて、火をたき始めたのは七時過ぎ。ベース・キャンプ以来連日の強行軍に、さすがに疲れが出たので、人夫交代も兼ね、あすは休みと決め、人夫に酒をふるまえば、チベタン、グルンと交じり合って、歌と踊りの競演が始まる。チベタンが、日本の追分に似た歌をやれば、グルンは、サルまわしのような踊りで笑わせ、これをながめる円陣の人夫たちは、そのまま舞台の人といった顔を並べていた。

六月十五日 暑さにテントを追われ、芝生に寝ていると、思いがけずも、スイスのドクター・ハーゲンが、ひどい破れくつをつっかけ、シエルバのアイラを連れて現われる。すでに三年間をネパールの地質調査に過ごした博士から、現地でも聞くヒマラヤの成因、地質の話は学のないわれわれにはもったいないようだ。テントを訪れた村の小娘、サンタマリヤの名のようにかわいい。

六月十六日 ハーゲンから四日で行けるとすめられたポカラへ峠越しの道を通り、マルシャンディに別れる。流れがあれば水浴しながら、ナザレ峠に正午登りつけば、ネパールの谷々に連なる山が暑気にうだつてかすむ。尾根をたどれば、村落があり、段畑はいたる所に刻まれている。尾根伝いに歩くうちには、わずかの風にくらかましたが、石畳の段々道を、マリンの部落にかかるころの暑さはひととおりではない。部落を通る旅の人に、請われるままに水をあたえるのが風習であるが、ひざまずいた人夫は、注ぎこまれる水を、のどを「カッカッ」と鳴らして飲んで行く。「カーティ・コース」と聞えば、午前中なら「ドウ・コース」午後だと「ティン・コース」といった、変な返事を聞きがち。これがまるでたらめで、いっさい信用しないことにはしてはいても、ワラでもつかみたい心理で聞いている、通りすぎる。朝から五コースも歩かされて、やっとたどりついたのはミナム・コーラの川べりのテント地だった。人夫も三名のチベタンの他は皆グルンに代ったので、動作も機敏、テントへついてもわれわれの回りにまといつき、タバコをねだることもなく、気持よい。

六月十七日 サレメン峠(約一五〇〇メートル)へたらたら、沢沿いに登りつめ、ポカラはどこ手をかざしても山また山。あす着けるものと思えない。尾根を下る途中、かすかに聞いた飛行機の爆音は、文明のしのび音で、かつ、これが苦勞の始めだった。部落で、タバコと交換したマンゴウは、まだすっぱくて食えない。近道だというが、険路と知ってか、人夫はバンシーの呼ぶ声に答えず、隊員他数人だけが峠を越え、逆落しの崖を下り、マディ・コーラの岸に出たのはもう夕暮。アンナプルナから流れ来たマディ・コーラ沿いに、西陽を正面にうけて、泊まり場モア・パティへの峠道は、暑さに悩む。きょうもとっぷり暮れて着いたテント場で、ポーターたちは、例日のとりのマリヤ錠と、特別ボクシスのタバコ五本をもらって大喜びだ。

六月十八日 夜来の大雨にけさは、九時までテントに閉じこめられ、ようやく小降りとなったなかを、川沿いにバクマティにく。橋のたもとのおぼしき家の土間に、雨やどりしながら、ジャン(濁酒)はゼトウモロコシをつめこむ。にわかに晴れた雨あがり、たちまち炎熱地獄と化した雨に洗われた美しい緑の峠には、数軒の反物、タバコ、野菜を売る店が立ち並び、大会ポカラ近きを思わせる。さらに、登り下りをつけ、最後の約一五〇〇メートルの峠に着くや、目の下には、湖が輝くポカラ平原が展開する。ふと気をつけると、ボダイ樹に緑色の鳥が、「ポカラ、ポカラ」と鳴いているのも不思議だ。おりから平地では、田植への最中。赤、青、黄のサリーをまとった早乙女が美しい。石を積んだ垣沿いの道は、芝が美しく、ボダイ樹の並木の間には、赤いれんがの家が、軒を並べ始める。練兵場のような広い芝地をテント場と決める。田口、村山は、ヒマラヤン航空会社の、あすの定期の座席をとり、町へ行く。隊員の愛唱した芸者ワルツではないが、「これが苦勞のはじめ」とは知らず、ちょうどこの日着いたスイスのダウラギリ隊とともに、あすはカトマンズでビールが飲めると、先着のポスト・ランナーのもたらした日本の便りに、大はしゃぎ。

ラルキヤの峠を越えて

六月十九日 夜半テントをつき破るような雷に目をさませば、マツトレスも浮き出し、テントの中を水が、音を立てて流れているほどだ。モンスーンの激しさに驚いたが、明くればすがすがしい朝だ。「ではカトマンズで」と、シエルバに荷を負わせて飛行場へ向かう。見物の村人が群がるボダイ樹の陰に、わらぶきの家が二軒、これがターミナルと税関、少し離れて茶屋が二軒あるだけで、何の手入れもしていない自然の芝原の飛行場だ。九時から二時の間に到着してすぐ出発という飛行機を、気ながに待つ見物人の仲間にはいって、スイス隊の連中とマナスル、ダウラギリの経過を交換しあう。アンドレ・ロック氏の長いヒマラヤの経験についてのしみじみとした話は、かれの人柄だけに楽しいものだった。待ちあぐんだ末、一時半ころ「カトマンズの革命のため来ない」といううわさがある、見物客は、さっさと帰って行く。われわれは、なんの通信手段をもたぬインド人のマネジャーを、相手にしても話にならず、あきらめるだけ。スイス隊の連中とともに、パウ・タールなる湖へ水泳の帰り道、空をつきぬくように並立するマチャ・プチャリ尻尾を中ほどに、アンナプルナ連峰がすばらしいスカイラインを夕空に現わす。テントへ帰れば、ラジオがカトマンズに戒厳令がしかれ、それが容易に解けまいと伝えたとして、一同悲観。

再び夜二時に雷を伴う大雨。月、火、水の三回の定期をまだまだ信用し、あすはとたのむ人情は、スイス隊も同じで、昼前からあすは来るかなと、ロック、ほかふたりの若い隊員が訪ねて来た。なけなしのスパゲティを御馳走しようとシェルバがもってきたものは、塩からと粉みその味つけとあっては、鼻もちならぬ生臭さだ。礼儀上から皿をきれいにしたスイス隊をよくまあ、食べた后感心したほどだ。この日の午後、本隊は口々に長い道中を嘆じながら到着。日本隊、スイス隊のテント村が、ポカラの町の文化の二大中心地と化したわけだ。ネパール第三という人口八千余のこの町は、三つのタール(湖)に囲まれ、南には、この国有数の米作地が開け、北はアンナプルナ連峰が、およそ五、六〇〇〇メートルの高度で並び立ち、町のほぼ中央を横断する深いゴルジュの兩岸は、すばらしい芝地におおわれた景勝の地だ。バザールとよぶ中心街は、石だたみの街道をはさんで富んだ反物屋、薬屋をはじめ、雑貨屋、青物屋が立ち並び、周辺は純農と半農半漁という構成だ。バザールのやや南に、百年を経るといふ赤いれんが造りの三、四層の家が、軒を並べる地主町は、緑の芝道にはえて特に美しい一画だ。

六月二十二日 再び半信半疑で、飛行場でスイス隊とともに、東の空を案じながら半日を無為に過ごす。この日課は、規則正しく火、金と続き、午後は水泳、夕暮にはスイス隊とフットボールにわずかにうさを晴らす。一週間の後、やっとポカラ知事邸から、カトマンズ王宮との間に、無線電話を利用する方法のあることを、知事自身が気がついたという浮世ばなれた世界だ。ネパール三不思議にもいろいろが、この電話が、たちまちカトマンズに通じ、ポカラ定期便は、インド航空会社の国有法のため中止したという情報をえる。精神決めたスイス隊は、インド通過ビザを持っているから、直ちに国境の町ノウタンワを目ざして南下してしまつた。とり残された日本隊は、改めてカトマンズまで十四日の旅をするにも、二トンを超す荷を運ぶ人夫は、おりからの田植えに出払ってしまった、集まってくれない。さりとてビザのないわれわれは、南下してインドに出ることができない。まさに進退はきわまった。知事は「二ヵ月待って、モンスーン明けに帰りなさい」と、のんびりしたことをいってくれたが、この親切はかえって私たちをいらだたせた。焼けつくような石だたみの町を、田口、村山は二キロもある知事邸まで毎日往復しては、カトマンズと電話で連絡する。世話すぎ、話すぎの、軍人あがりの知事は、仕事もないままに、よい相手とばかりに、なかなかはなさない。たいくつだろうと、ネパールのすぐろくのようなものを自ら作ってもくれた。一方、電話係の老人をなだめすかして一日じゅうカトマンズ・パレスの呼出符号「ジョージ・キング」を叫ぶのが一苦勞だが、これにはドクターの薬が妙薬となった。おりから、東京の外務大臣から「ポカラの日本隊救助のため飛行機を派遣せよ」との公電が、ニューデリーの日本大使、カルカッタ総領事にはいったということもわかった。

カトマンズからのニュースはきままって「ボホリ来る」と伝えたが、こちらはいつさいあてにはしない。顔なじみになった町角のヨギ(行者)も「飛行機は来ないよ」と予言する始末。無為無聊の生活の中でも、釣をするものスケッチに浮き身をやつすもの、あるいはゴム底の特殊テントで川を下ったり、芝生でゴルフを楽しんだり、夜は時々手に入る豚肉に飽食するなど、なかなか多彩だ。

テント場を飛行場に移して三日目。夜来の雨がまだ残ってはいるが、雲の切れ目からダウラギリが珍しく頭を出した七月七日。隊員は思い思いにテントに、木陰に寝ころんで、飛行機のことには全然頭になかった。その十一時ころ、聞きなれない音が、北の丘をかすめて聞えた。ボダイ樹の下で、わいわい騒いでいる村人の気配がおかしいので、テントを飛び出して見れば、何と、双発が一機すでに北から南へ着陸コースにはいつているところだ。隊員、シェルバの歓声のうちに着陸。飛行機からダルシャン君が降りて来た。長い無為をかこってきた遠征隊は、たちまち荷物の積み込みで目まぐるしい動きに変わった。パンシーと通訳サガおよび約一トンの荷物を残して、二十六人の隊員、シェルバ、約一トン、五十八個の荷物を満載した飛行機は、二十日目にポカラの地を離れて、一路カトマンズに向かった。この日の模様は、インドの各紙に「日本隊救助さる」と、三段抜きで報ぜられていた。初めて飛行機に乗ったシェルバたちは、物珍し気に窓に顔をおしつけてながめ入る。スイス隊から贈られたウィスキーを回し飲みする隊員たちは、さすがに喜色満面だ。白雲がちぎれ飛ぶカカニ峠の赤土の地はだを眼下に、わずか四十五分の後にはカトマンズの上空にかかる。四ヵ月ぶりにわれわれの目にうつるカトマンズはなつかしくも美しい大都会だ。ああやとカトマンズに帰ってきたと、ホッと胸なでおろしたものの、まだまだ前途には、帰国のための荷物の梱包、税関などの事務が山積しているのだ。

科学班の旅

中尾佐助

ポカラ目ざして

三月二十七日 登山隊の本隊とともに、カトマンズのシャーハ邸を出発した。昨年同行した少年キシナが昇格して、ポーター頭の姿で十七名のポーターを指揮した。科学班二名は通訳のヤチンドラ・ラル・シャルマ君(ネパール国在カルカッタ総領事館勤務)と三名で、カカニの丘のふもとジップルフェディに本隊とともにキャンプした。

科学班は本隊より長い期間ヒマラヤに滞在する予定なので、食糧などはほとんど現地補給にたよることになっていた。ただし少ばかりの嗜好品と非常用食として高地食一箱を持ったが、その量は期間に比べて問題にならなかった。しかし、科学用装備では、四人のポーターはまるまるそれにかかって出発したが、帰りにはさらに一名増していた。旅程が長いだけに、カトマンズ出発のときには、銀貨運びのポーターが二名も必要だった。

翌朝、そこから一時間ばかり登ったパンチマナ・パンジャンで、本隊と別れて、いよいよ独立行動になった。

われわれの第一目標は、カカニの森の森林調査であったので、カカニのバンガローに一日滞在した。カカニの丘は二二〇〇メートルあって、温帯に属しており、ちょうど喬木性のシヤクナゲ(ロードデンドロン・アルボレウム)の血のような赤い花が、いたるところに咲き、白花の洋蘭(セロジネ・クリスタタ)がその幹をかざっていた。バンガローには、政府の農業技師が来て、高地の蔬菜試験地を作っていた。話しをしてみると、昨年(五二年)の隊が、ネパールに贈った蔬菜種子も、ここに作られることになっていた。

カカニの丘からマンゴの茂る低地、トリズリ・バザールを経て、ポカラへ向けて、一路進んでいった。幾つかの低い峠、サムリ・パンジャン、カトンジエ、カンチョー、ルイテル・パンジャンなどの峠と、その間に流れる氷河から流れ出す川を渡った。溪

谷の低いところは、四月の初めはサルの木(シヨレア・ローバスタ)の満開の時期にあたっていた。平家物語の巻頭に『沙羅双樹の花の色は盛者必衰の理りをあらわす』といわれた花である。白い小さい花がこずえをうめて咲き、少し離れて見ると、白いベールをかぶせたような感じがする。花に顔を近づけても、ほとんどにおいを感じないのに、この木の近くへ行くと、なんとなくあたりの空気がかくわしくなるのも妙だ。そして、そのこずえの間から、ヒマラヤの白い峰々が春がすみを通して見えていた。

チョーター・ラに植えてあるボダイ樹(フィツカス・レグリオサ)とバンヤン(フィツカス・ベンガレンシス)の木陰が、唯一のいい場所になるような、暑い乾いた土地の旅をつづけて、四月十三日ポカラに到着した。

ポカラに到着してみると、スイスのダウラギリ遠征隊が、荷物未到着のためまだ滞在していた。われわれは一日彼らのキャンプを訪ねた。ポカラでは、ポーターの交換をした。カトマンズの十七人のポーターから、四人だけを選び出して、それを身近において、今後の用を足すことにした。そのうちナナ・ブラサドとキシナ・ブラサドの二名が全旅行をともにすることになった。

ガンダキ・ヒマールを巡る

四月十八日 ポカラからカリ・ガンダキへ向かって前進を始めた。ポカラ以後補充のできないタバコ、砂糖などを買いこんだので、荷物はなかなか重くて、ポーターの行程が容易にはかどらない。二日間を予定していた二〇四メートルのウレリーまで、まる三日もかかった。ここまで来ると、やっと、低地帯を離れて、山間にはいつてきたような感じになった。水牛は全くいなくなり、稲田も完全に消失していて、住民のグルン族は、麦の刈り入れのさいちゅうだった。驚いたことには、その麦の中に、エチオピア特産と思われていた大麦の品種が混っていた。ヒマラヤ山中の稲作をしていない、しかもチベット系でない民族の持っている文化は、容易に外からうかがい得ないものがあるようだ。ウレリーから峠を越すと、いよいよカリ・ガンダキになる。その峠デオラリーは、喬木性シヤクナゲの純林になっていて、真紅や桃色の花が咲き乱れていた。峠を越した地点のキャンプからは、ダウラギリが、カリ・ガンダキの峡谷の上につっ立って、恐ろしい姿を現わしていた。

カリ・ガンダキに下った所にはよい温泉(タト・パニタトは熱い、パニは水)があった。火山のないヒマラヤには温泉は少ないが、ここはもつとも上等な部類に属しているだろう。ここから上流のツクチャにかけては、タカリ族が多く、彼らの商業活動はカリの谷を通じて行われている。

ツクチャに近づくにつれて、一九五〇年アンナプルナに初登攀したフランス隊のいろいろの話を聞くようになった。彼らが進んだルートや、退却した様子、特に凍傷の隊長エルツォグのうわさはたくさんあった。

四月二十五日 外観は全くチベットふうだが、住民はタカリ族のツクチャに到着した。ツクチャは、このタカリ族の中心地で、同時にチベットからヤクの背に塩をつんで下ってくる末端でもある。われわれはタカリ族の世話になって、ここからポーターをミユール（ラバとロバの雑種）に切りかえた。

ツクチャから北へ向かって二日間のカグベニーまでの行進は、風物が目ざましく変わっていく日が続いた。いまやわれわれは、大ヒマラヤ山脈のアンナプルナ、ダウラギリの裏側へ出てきた。白い氷河におおわれた高い山々は、だんだん南に沈みはじめ、それにかわって北方には、薄茶色のなだらかな丘が展開しはじめた。このあたりまで来るとまだ春も早く、草は茶色に枯れ、わずかにとげのげしい灌木のカラガナがほとんど葉も見せずに、黄色の花を咲かせているだけであった。緑といえば大きなネズ（ジュニベルス）か、たけの低いマオウ（エフエドラ）くらいのもが見えるだけで、荒涼とした風景になってきた。人家もすべてチベット式になり、ヤクがめっきり多くなった。毎日午後になると、山風がはげしく吹きおろし、風なる音が中空にすどく響き、川原には砂が飛んで、交通も絶えるほどであった。部落の畑だけは、畑地灌漑のため青々としており、その間にはモモ、ヤナギなどが点々と立ち、畑のふちには黄色のノイバラが咲いていた。

カグベニーからこのチベットの地帯をさぐるために、さらに西に向かって、ケハ・ルムバの川に沿って十日間の旅行をした。荷物の大部分はカグベニーに残して、ヤク五頭を連れ、われわれは馬に乗って五月二日に出発した。

五月六日 ケハ・ルムバの支流チイゼ・ルムバの川岸に出た。もう草はほとんど無くなり、川の水も大部分が凍っていた。八日は今度の行程で、いちばん西に達した日である。ふたりはヤク使いのリンジンと連れて、キャンプの前のチイゼ・ラに登った。約五〇〇メートル登ると峠についた。ここでケハ・ルムバの源流と、カルナリー河の末端とが、ゆるやかな峠を境にして分れているのを眼下に見ることができた。われわれの行程は、細長く東西にわたっているが、結局ガンダキ河の上流の流域の範囲を出ることができず、いわばガンダキ・ヒマールを歩いてきたわけだ。

アンナプルナ北側を進む

十二日カグベニーに帰り、ここから本隊のベース・キャンプのあるサマへ向かって出発しようとする、いろいろの困難が待ちうけていた。どうしたことか約束のヤクが集まらない。契約主のリンジンも姿を見せない。そのうち村役人が、村の土地問題解決の村民大会のため、村民全部に禁足令を出したりして、しかもそれが、一日ではかたつかないでいる。なんとなく不安な気がしていると、ようやくマナンボットの戦争のニュースがはいってきて、村人がわれわれと同行するのを拒否する理由が明らかになった。

五月十七日 大もんちゃくの末、やっと午後になってヤク十一頭連れて出発となった。カリ・ガンダキの支流で、ムクチナートに向かう支流——しかしこの川が本来のカリ・ガンダキとよばれるべき川だという——南岸の台地の上を行進して、日暮れにやっとムクチナートの巡礼宿舎についた。この宿舎は巨大な家で、無料で部屋を貸してくれる。われわれのほかには、いまは三、四組の巡礼しかないが、その多くがブラマン（僧職のカースト）のお婆さん連中であることは、なんとなく日本の巡礼の群に似ている。翌日は一日、ムクチナート寺の見物に過ごした。寺の周囲一帯は荒れはてた茶色の世界だが、寺のまわりだけは新緑のドロノキ（ポプルス）がよく茂っている。寺院は三つあって、中央のヒンズー寺院に有名な百泉がある。百泉というのは、近くの湧水をひいて、たくさんさんのじゃぐちから小さい滝を落したものである。ついできた人夫たちは真っ裸になって、水ごりを取った。そして故郷のみやげに、その水をウィスキーの角瓶につめて持ち帰った。私はドロノキのオアシスの中に、湧水の出るあたりをまわって花の採集をした。暖かい湧水のまわりには、今まで見られなかった花がたくさんあった。純白のサクランソウや、非常に小さいアマドコロなどおもしろいものが、次から次へとあったので、その意味でムクチナートは、私にとっても期待を裏きらない場所であった。このムクチナート寺の盛名はインドまで有名で、カイラスなどに並ぶほど信仰上の権威がある。

五月十九日 ムクチナートから出発しようとする、ヤク使いが助手を残しただけで、代人が来るといって体よく逃亡してしまつた。あれやこれや長い論議の末、ヤク使いにムクチナートの村民をひとり連れ、午後になってやっと出発した。これから先はラルキヤ・パンジャンに匹敵する五二〇〇メートルのニサンゴ峠が待ちかまえているのだ。四七五〇メートルまで登って、モレインの間の小さな平地にキャンプした。

翌日の正午前、峠につき、マルシャンディ河の上流、ヤルゲン・コーラに向かって下降した。ヤルゲン・コーラの対岸には、六五〇メートル級の山が並び、意外にりっぱな氷河がかかっている。アンナプルナは、南方に壁を立てたように白い大きい姿を現わし、その西端に、アンナプルナ第二峰が見え、そこに昨年（五二年）の踏査隊が登攀したルートもよく見える。時刻ごろになつてやっと、全員ヤルゲン・コーラ河畔の四三〇〇メートルの一軒家のあるツクツムに集結した。

峠を越すと、次の問題はマナンボットの戦争だった。この戦争は、昨年踏査隊がアンナブルナに登ったときに、この村近くに来たところから始まっていたのだ。発端はその夏、マナンボットの隣村のブラガにいたチベット人が、ひとりの村人を殺してしまつた。殺された人の母は村人に向かつて、チベット人を罰するように頼んだが、村人はそれに応じなかつた。そこで母親は、隣村のマナンボットにうたてて出た。マナンボットはこの母親に同情して、ボカラ近くのクンチャに通報したので、クンチャからぶたりの巡査が犯人を捕えにきた。犯人はこの報を聞くと、いち早くチベットへ逃亡してしまつた。逃亡したチベット人は、今年(五三年)の初めにチベットから同志数人と、軽機関銃、機関短銃、小銃など合わせて十数丁持ち帰り、ブラガの村を従えて、マナンボットの村に挑戦した。マナンボットの村は急ぎ武装を始めた。手持ちの旧式小銃だけでは足りないのので、人が四方に派遣されて武器を集めにかかつた。

チベット人の戦闘は、夜間突然攻撃をかけるのが定石というので、われわれも緊張せざるを得なかつた。そのうえ、この戦争の性質が、われわれにとつても一つ疑問があつた。単なる人殺しからの対立ではおおげさすぎるし、あるいは犯人の土匪化なのか、あるいはまた世界にまたがる東西両勢力の対立の一部として、チベットからネパール国内へあげた観測気球なのかとの疑もある。しかし、事情がわからなくても、とにかくわれわれはここを通過していくほかはない。

五月二十二日 いよいよ問題の中心点を通ることになった。西からマナンボットに達したわれわれは、村の中を避けて、外側の麦畑の中をヤクを追って川岸まで下つて行つた。マナンボットとブラガの村の間は約二時間ばかりかかる、一群れ、また一群れと、平和な生活とちがう様子の人々が急ぎ足で通つていく。はるか下流の対岸に、白いテントが一つ見える。聞けばそのテントはトンジュのスツバ(村長)が仲裁に来ているということだ。両村の代表が、いまそこで会談しているという。われわれは、休まずどンドン歩いていく。突然数発の銃声がテントの方におこる。シャルマ君の意見で、会う人にもいっさい口をきかず、まぎぞえをくうきかけを避けることにしたが、そのため、中心地にはいって、かえつて情報が不明になつてしまつた。ブラガの村の下も、子供がなにやらわめいて寄つてきただけで、無事に過ぎ、昨年(五二年)のベース・キャンプまで出て、やっと一息ついて休んだ。なんとなく懐旧の情で、この地に一泊したかつたが、ぶつそなところだからあきらめて、さらに三時間ばかり進み、オングレという小さい村の近くの牧場の端にキャンプした。

「トウモロコシの育つところには、ヤクは育たない」ということわざがチベット人の中にある。峠越しの高いところでは、ヤクは具合がよいが、低くなつてちよつと暑くなると、たちまちヤクは使えものにならない。マルシャンディを下つていくにつれて暑くなり、ヤク使いも、下るのを拒否するので、翌日はピサンまで半日行程で、そこでヤクをポーターにきりかえることにした。カットマンズまで連れていったチベット人が、同士を集めて、ピサンで待っていた。

こんどのポーターの半分は女だった。三〇〇メートルから二〇〇メートル級の土地へ降りていくと、急に植物が豊富になつた。毎日の採集はドーラン二杯では足らず、ビニールの袋を動員して集めたものを運んだ。乾燥のため紙の取り替えがたいへんな仕事になり、毎日夜おそくまでかかるようになった。この仕事は風が吹くとやりにくいので、テントを一つ専用に使つた。

五月三十日 ビムタコーチに達し、人夫を再びヤクにかえた。マナスル登山隊に関しても、少しは情報が得られた。日本人隊が、ラルキヤ・バンジャンを越して、こちらに向かつているというわけには判断に迷つた。登っている姿が見えないかと、何度も双眼鏡をとおして、ノース・コルのあたりを見たが、なかなか見えなかつた。しかし三十一日の十時ごろ川喜田がまず最初にノース・コルから登つて行く人影を、双眼鏡で発見した。一同は大騒ぎになつて、一つの双眼鏡を奪いあつてのぞいて見た。見ていると首の痛くなるような高いところに、人影が点々とならんで、間隔をおいて見ると、少しずつ登っているのが見える。パンチマナ・バンジャンで別れて以来二カ月以上たつて、友だちを雲のきれまの雪の上に見るのは、目がしらのあつくような光景だった。

六月一日 十一時、ラルキヤ頂上を過ぎ、一時過ぎには昨年(五二年)キャンプした地点まで来た。途中何度も何度も双眼鏡で、マナスルの登路をみた。アイス・フォールの中段には、一時間以上も、横に長くならんだたくさんの人影が見えたが、しかし、ノース・コルの上にはなにも見えなかつた。ちょうど二時ごろ双眼鏡で見たとき、プラトリーの右端の岩壁の上に三人の人影が、浮き出てきた。下へ降りるらしい。ひとりずつ黒い岩の中に消えて見えなくなつた。十分もたない間に全くわからなくなつてしまつた。それは最後の攻撃をした加藤(喜)、山田、石坂の三隊員が姿をあらわしたのだ。しかし、そのときの私には、場所と時間と人影の意味がよくわからなかつたが、本隊はプラトリーの上までは確実に到達したことを知つて喜んだ。

六月二日 サマのベース・キャンプに到着した。久しぶりに会う人たち、ベース・キャンプでは、プラトリーまで登れていないと悲観して、きのう私が見たことを話しても半信半疑であつた。

ベース・キャンプ滞在中は、マナスル登路の中途までと、ナイケ方面に採集にでただけで、主に今までの採集品の整理に費して、本隊の帰還の際に一箱にまとめた標本を運んでもらつた。

六月八日 本隊がサマのベース・キャンプを離れる日に、科学班も出発して、ブリ・ガンダキを下降した。こんどは本隊から、

シエルバのラクバとアン・テンバをもらってつれていたので好都合だ。ネパール人の料理の単調さにあいたわれわれは、エクスペディションで来たえられたラクバの、いろいろ工夫した料理で、おおいに生活程度が向上した感があった。

サマからブリ・ガンダキを三日間下降したのち、ラナからスリンギ・ヒマールの山腹に上がって、大きく巻いてシアル・コーラのツムジェに向かった。スリンギ・ヒマールの南面のはだは全く乾ききっていて、水もほとんどない。まだモンスーンの雨をよくすっていない草は、茶色に枯れ、その中に点々と松がはえている。草つきの激しい登りの連続、どこまで登るのかと疑いたくなるような道だ。二日目には森林がなくなつて、高山帯のような場所に出た。もう季節も進んで、たくさん花が咲き出している。最高三六〇〇メートルの峠のような所を越すと、目の前にやつとスリンギ・ヒマールの白い尾根が見えはじめた。その夜十時、全員が寝てしまった時、突然大雷雨がやってきた。四、五日間雨が降らなかったたので、油断していたのが運のつき、テントにフライはなく、荷物のおおいも不完全だったので、たちまちテントの中に水がはいる。とうとう一晩中大騒ぎをしたあげく、大部分のものをぬらしてしまった。

ツムジェを根拠に

六月十四日 ガネシュ・ヒマールから流れ出るトロ・ゴンバ・コーラとシアル・コーラとの出あいにある、インド測量局の地図でいう「ツムジェ」が目的地だった。ところがポーターの道案内で、ツムジェという村に近づくと、全く場所が違っている。しかし、いろいろの事情で、ここに一ヶ月も滞在することになってしまった。われわれが地図で「ツムジェ」と呼んでいる場所は、この付近ではトムジェといい、ちょっとした発音のちがいがから、とうとう初めの目的から一日も離れたこの付近でツムジェということにおちつくことになった。

しかし、おちついてみると、この村もなかなかよい。三二〇〇メートルの東南に向いた高い山腹で、カラマツの林にかこまれ、下のシアル・コーラまで一〇〇〇メートルもある。眼前にはガネシュ・ヒマールの主峰や、ランブーがそびえ立っている。といつても、この村にいた日から本格的なモンスーンになって、雲が晴れることは一週間に二、三回しかなく、山の姿が見える日はまれになった。この村に一ヶ月以上も滞在の予定だから、よい所をと捜したあげく、ついに村長の家にはいりこんだ。この家はチベットの二階屋で、二階の物置の中に、テントを二つならべて張って寝室とし、ベランダの前にビニール・シートを張って、防風と

採光をとって、応接室兼食堂とした。この部屋は、川喜田が次々に村人をひき入れて、民族調査の大活躍をするところとなった。

モンスーンが始まったが、それがどんなものかと見当がつかなかった。それで私は十日間も付近の採集をしたり、今までの採集品の整理をしながら、天気をながめていた。ここでみるモンスーンは、毎日ほとんど曇りと霧雨の連続だった。雲は南方から果しなく押しよせてきて、下の溪谷の中を実に速く流れていく。それが山腹にはい上がると、ツムジェの村はたちまち雲の中にはいり、同時に小雨が降ってくる。しかし粒の大きい大雨になることはまれだった。高いところにもまた、いつも積雲が巻いていてそれが山にまといついているので、山の姿はほとんど見えない。しかし十日間もそれを見ていて、これなら日本の七月ごろの山に比べて、決して雨のため途方もなく苦しめられることはあるまい、という自信ができた。

六月二十五日に、シアル・コーラの最奥の地へ採集に出発した。川喜田とシャルマ君は、コックのラクバと村に残って、民族調査を続けることになり、私はシエルバのアン・テンバとキシナ・プラサドを連れ、五人のポーターに荷を運ばして出発した。最初の日にはトムジェ(二六〇〇メートル)まで山腹をぬって下降し、川岸にキャンプした。対岸にニュージールランド隊のテントが一つ見えたが、全員不在という話で訪ねてもみなかった。ところが夕刻突然、ニュージールランド隊のマックカラム隊員が、こちらのテントにやってきた。ニュージールランド隊がスリンギ・ヒマールの登頂に成功したこと、ガネシュ・ヒマールとランブーに挑戦して失敗したことなどを知った。

トムジェから上はたちまちひどい岩壁の道になる。その急なことはおそらく、下流のニヤック付近の道以上だろう。しかも雨期にもかかわらず、米と塩とを交換のため、下から登ってくる人は非常に多く、意外にぎやかな道である。それはこの先のチベットの境に、通過容易な二つの峠があり、次の村チヨガンの住民が、手びろく貿易をしているからである。

岸壁を登りきったところにあるチヨガンは、おそらくブリ・ガンダキ流域では、アルガート・バザール以後の最も有名な村になっているようだ。この村までヤクが下ってきて、そこで米と塩の交換が成立する。

シアル・コーラは、チヨガン(三一五〇メートル)から上流は急に地形が変わって、溪谷は広く、両側に岩壁が並び、典型的なU字谷になる。麦とソバが緑さやかに谷底をうめ、牧歌的な村々がそれにうかび上がって並んでいる。

シアル・コーラの右岸、ランブーの北に続く山々はなかなかりっぱな氷河がついている。ツム・ゴンパからはいるヒューゼン・ゴンバ・コーラの奥などには、長さ数キロもありそうな長い氷河もついている。シアル・コーラの奥の山々は決して高いものではない。最北ならぶタブレ・ヒマールなどは、いずれも六〇〇〇メートル以下で、頭にちょっと雪の帽子がついているくらいのも

のだが、それからやや南にあるのはもう少し高くなり、氷河の発達が山の割によいのは注目すべきことだろう。

六月二十九日 西方のタブレ峠の下のチャイキアに正午到着した。午後久しぶりに高山帯で、植物がほとんどなくなる高さまで採集に出た。マナスルのところと比べると、もうすっかり雨季になっているので、花が非常に豊富になっている。エヴェレスト隊がチベットで初めて発見した、ジャコウのおりのする紫色のサクラソウ（ブルムラ・ウオラストニー）もたくさんあり、シオガマ類も無数に、赤、黄の花を咲かしていた。その翌日は、タブレ・ヒマールの西の山の雪線まで採集に出て、今年の旅行中でいちばん収穫の多い日になった。この一つをこそ、是非採らねばならないと、日本を出るときから心に決めていた、青いケシ（メコノプシス）も、ここで初めて咲いているのにお目にかかることができた。もう高山植物もほとんど消失しかかっている四八〇〇メートルの岩場で、ちょっととした岩登りのようなことをして進んでいたとき、同行のアン・テンバが、岩かげから声をあげて、「サーブ・ジスワン・ノウ・フィニシュ・サー」と呼ばった。わたしが近づいてみると、岩のすきまのほとんど、どうもないうようなところから一〇センチばかりのたけで、三輪の淡青のケシが咲いていた。この種の花の咲いている個体は非常に少なく、その翌日と合わせて、三本しか採ることができなかった。

チャイキア滞在の最後の七月一日は、チベットと境をするタブレ・パンジャンまで登った。峠は四九〇〇メートルで、雪は全然ない。チベット側に向かって広い谷が開いており、その向こうにまだ少し雪をかぶった山が並んでいる。気のせいかな、チベット側の空の色の青さは、すんで濃いように感じた。いっしょになったヤクの群れは、なんの感興もなげに峠からチベットへ降りていった。帰路に、チベットから塩を運ってくるヤク百五十頭に追いつかれた。私の概算によると、低地の住民は一戸あたり約十頭内外の牛を持っているものが多いので、一年間にどうしても牛に食わせたり家族の食用のため、一軒で一回、ひとりの荷になる米を持って出て、ほぼ同様の塩を持ち帰る必要がある。もし、フリ・ガンダキの下流に、一万戸の農家があれば、一日当り約三十人の人が、米と塩を交換に来るはずになる。それは、ヤクの荷物として十五頭分にあたるから、百五十頭のヤクの隊商の運んでいるのは、十日間分の交換用となる。ヒマラヤ越しの塩貿易の大きさというものはばかにならない。

チャイキアから、川沿いに東に向かって一直線に谷が続いて、向こうの端は、やはりチベットと境するトリズリ・ガンダキにぞむムラ・ダゼン・パンジャンが見える。その峠の裏にまっ白な大きな姿をした山が時々雲の晴れ間に出てくる。ゴサインタンもその方角にあたるので、是非、その山をはっきり見るため、こんどは東に向かって移動することにした。一日行進して、四〇〇〇メートルのバゼツが次の泊まり地になった。ここには捨てられた夏の放牧小屋（カルカ）があり、水の便も非常によい。モンスー

ンになると、ヒマラヤ山中では、森林限界以上のいたるところのカルカに人がいて、乳を集めてはバターとチーズを作っている。

七月三日 ムラダゼン・パンジャンに登った。四八五〇メートルのこの峠名はインド測量局の地図によると「サルプ峠」となっているが、それは明らかに誤りで、サルプ峠はスリンギ・ヒマールの北側にある峠である。予想外に低かったが、チベット側、トリズリ・ガンダキ越しの山々はすばらしかった。大きな山はゴサインタンとちがって、トリズリ・ガンダキのすぐ前につっ立っていた。山の名前は、いっしょになったチベット人に問うてもわからなかったが、フリフ・ヒマール山群の一部で、高さは七〇〇〇メートルくらいは十分ありそうだ。さらに魅力的だったのは、その南にあたってゆるやかな谷がはいっており、多くの白いゆるやかな氷河が、それにまた次々に流れこみ、まわりは六、七〇〇メートル級のゆるい山々が並んだロン・ツェと呼ばれる谷だった。

七月五日 ツムジエに帰りついた。モンスーンになってからの高山帯の植物は、予期にたがわず豊富で、出発のとき用意した五百枚の新聞紙では、動きがとれなくなって、これ以上の採集を打ち切って、帰らざるを得なくなった。モンスーン中の行動にもかかわらず、行進中雨を歩いたのは、十一日間でわずか四時間くらいしかなく、採集中でも雨にあったのは、一時間くらいしかなかった。ヒマラヤでも、ちょっと裏手にあたれば、モンスーンも以外に勢力が弱いということをつくづく感じさせられた。

ガネシユ・ヒマールを探る

七月九日 再びツムジエから前回と同様な編成で、ガネシユ・ヒマールに出発した。ツムジエにはもう、ニュージールランド隊のものにはなにも残っていない。ガネシユ・ヒマールの登り口、トロ・ゴンバ・コーラは、ツムジエからシアル・コーラと分れている。しばらくあらかじめ、ニュージールランド隊から聞いたことをたよりにして、川沿いでなく、ツムジエからいきなり山腹にとつた。しばらく登ると草つきになり、露岸にはユリのようなノトリリオン（桃色の花がたくさん咲きほこっていた。それを越すと、日本のウバメガシに似たヒマラヤの常緑カシ（ケルカス・セミカーピフォリア）の森林になると同時に、はじめて山ヒルが出てきた。この谷すじには、木から落下する山ヒルがいて聞いているが、幸いそれには会わなかった。この谷唯一の人家、たったふたりのラマのいるゴムバ・ルンダンの寺院の庭で、雨の降っている最中に、テントを張ることになった。雨は夜になってもやむことなく、テントのフライをたたいている。雨の音の間に寺にいらるおしのラマが暗い一室にすわって、夜中ずつと鈴をならしながら行をつづけ

ているのが、混じって聞えてくる。このラマは一体なんのため、かくもぼろぼろの衣をまとい、汚れきったからだをしながら、肉

体を苦しめる行をせねばならないのか、まことに人間という動物が作りあげた伝統と文化には、奇怪な一面がある。
翌日、雨の中をランプーから流れ出す川、バリ・チューのふちまで来ると、橋が流れている。対岸のカラマツ林は雨にかすんで

まるで北満のカラマツ林を連想させる風景である。その間に木を切って架橋をし、翌日は朝早く出発した。十時にニュージール

下隊がベース・キャンプをおいた場所に出る。なおも進んで、二軒の家のあるカルカ、バルツェにとまる。妙なことに、ここでニ

ュージール下隊の前例にならなくて、この住人に、道路料と称するものを一ルビー支払わされてしまった。

七月十五日 朝は、まれにみる快晴になって、初めて自分の位置が、地図と対照できた。ガネシュ・ヒマールの主峰の直下で、

ランプーは少し陰になって見えない。トロ・ゴンバ・コーラは、もうすっかり氷河になっていて、この氷河は長さが数キロあって

ビムタコーラの氷河に匹敵する長さだ。南の方、氷河の対岸には、ガネシュ・ヒマールの支脈が東西に並び、アイス・フォールが

並んで主流のトロ・ゴンバ・コーラ氷河に落ちこんでいる。絶えずどこかのアイス・フォールに雪崩が出て、絶え間なく音が聞える。

この支脈の壁は、いくらなんでも手のつけようもないほどだ。ともかく本流の先を見ようと、氷河に沿って登っていったが、二

時間足らずで、行きつまってしまった。この先は、石におおわれた氷河の上を行くほかはない。その上もう雲が巻き始め、最奥が

見える地点まで来ていたが、ガネシュ主峰の東の科尔を見ることはできなくなっていた。

もうこのテント地の採集は十分らしいので、翌日は下降を始めた。ニュージールランドのベース・キャンプ地に来ると、そこに一

つのテントがあって、植物採集をやっているガードナー隊員が、シェルパひとりをつれて再びこの地に時期を変えておとすれ、滞

在していた。見ればシャツはぼろぼろで、素足のまま私を呼んでいる。そしてすぐに、塩が切れたから分けてほしいといった。私

はテントに立ち寄って塩を分けた後、山や植物の話始めた。登って来るときには雲のためわからなかったが、この地点はガネシ

ュ主峰と、ランプーの間の科尔の直下にあたっている。この科尔から流れ出る大きい氷河は途中で消失して、それが幾つかの小川

になって、岩壁を割って流れ出している。

彼の話によれば、科尔までは技術的にたいした困難はないということだった。そしてその上は、チベット側がまっ白な大きな斜

面になっていることが、こちらからもよくわかった。ランプーもここから登るに都合がよい。少し下ってから草つきにとっつき、

たいして急でない氷河に出られる。それより驚いたことには、ニュージールランド隊は、対岸の支脈の山を攻撃したことだった。ル

ートをくわしく聞けば、なるほど、西の端に近く、大きな尾根が一つ出ている。その上は、ここで見ているよりも、登るに容易だ

とのことだった。ツムジェから六日間かけて、パ

ルツェにきたが、帰りは二日間で帰ってしまった

た。これでヒマラヤの高山植物採集も一段落にな

った。私が選べば、ヒマラヤの五名花は、シャク

ナゲ(ロードデンドロン)、サクラソウ(プリム

ラ)、青いケシ(メコノプシス)、コドノプシス、

シャナンツスに票を入れるだろう。これらの採集

は、最後のシャナンツスをツムジェからカトマン

ズへ向けて帰還の途につく前日、スリンギ・ヒマ

ールのハイネズの中で採ったのでやっと全部完了

した。

ヒマラヤの五名花



全ヒマラヤにはう灌木まであり ①シャクナゲ類は大喬木から花の色は紅赤白 ②コドノプシス ③メコノプシス ④サクラソウ ⑤シャナンツス 花の色は黄青紫など 花の色は黄青紫など 花の色は黄青紫など 花の色は黄青紫など 花の色は黄青紫など

ブリ・ガンダキを下る

七月二十六日 いよいよカトマンズへ向けて、

四十日間滞在したツムジェを出発した。長い滞在

の後の出発は、最後の最後までいろいろな問題が

おきて、出発がおくれる。シェルパたちは村人と親しくなり過ぎ、複雑な関係を結ぶと、威厳をもって村人のポーターを指揮する

ことができなくなる。第一日はほんのちょっと進んだだけで、人夫は命令に従わず、これ以上進まず、先に進んだわれわれは、空

腹と寒さにふるえながら、岩小屋で一夜を明かすはめにおちいった。道は対岸のニヤックよりはるかに高く、ひどく急な草つきの

上に細々と続き、危険の多いところにもかかわらず、ポーターの行進はきのうの罪を恐れてか、はなはだ迅速だった。もう

翌日は、ブリ・ガンダキの本流を竹のつり橋で渡って、本隊が数ヶ月前三百人以上のポーターを連れて通った道に合した。もう

バナナがはえている地帯まで降りてきた。われわれの物資はひどく切迫していた。タバコは数日前からなくなり、いたるところの

人家をさがして、かびたシガレット一箱、二箱と得て、それでしのいでいた。砂糖はとっくの昔にきれていた。ジャガートの税関吏は、あらゆる便をはかってくれたのはありがたかった。

ハルチョックまで下ってから、川から離れて山腹に登りはじめた。同時にものすごく山ヒルの多い地帯に踏みこんだ。ひどいところでは、一歩ごとに数匹の山ヒルが伸び上がってくるほどだった。立って、ヒルをくつかから払いおとししていると、別の足の方におとした以上のヒルが寄ってくる。ネパール語で山ヒルを「ズカ」という。朝から晩まで「ズカ」「ズカ」と叫びながら行進する日が続いた。しかし、くつ下の中や、シャツの間にDDTをまきこんでおくと、中へはいったヒルも死んでしまうことも発見した。ネパール人は、付近に多い野生のサンショ(土名ニチムール)の実を持っていて、ヒルがすいつくと、その実をつぶして液をかける

と、ヒルはすぐにくらげおちた。こっけいだったのは、付近のグルン族が、てんでに首から紐で小さなはさみをぶらさげており、ヒルが吸いつくと、その胴体をはさみでチョキンと切る事だった。われわれが下った尾根の上にはグルン族が多く、上部では、畑作専一のグルンの大きな部落がたくさん出てきた。特有の白い胸に十字に結んだ男の上衣、首や手首や、耳、鼻におびただしい装飾をして、腰巻をした女など、畑作グルンの中に特に多かった。そして彼らの中には、なんらかのラマ教の影響らしいものが見られた。それが少し下って水田ができるころになると、ブラマンやネワリ族が現われてきて、ラマの影響は消えて、こんどはヒンズーの堂が村の中に出てくるようになる。

八月四日 アルガート・バザールに到着して、やっとポカラ街道の上まで出た。アルガートでほとんど全部のポーターを、專業のポーターに切りかえた。カカニの丘のバンガローで一日最後の避暑をして、八月十三日カトマンズの郊外バラジでデイリー君を迎えられて、久しぶりに自動車に乗り、出発の時の宿舎シャーハ氏邸については午後四時だった。

科学班の旅は百四十日間にわたり、その間のキャンプ地は約八十カ所、そして歩いた距離は約一五〇〇キロメートルにおよんだ。持ち帰った標本は植物、腊葉標本二箱、種子など一箱、民族標本一箱などで、土壌の標本や、チョウ類のほか、生きたシヨウジョウバイも四種類ばかり持ち帰ってきた。

登山隊遠征日誌

一九五三年

三月

- 四日 先発隊の田口、加藤(泰)、村山、加藤(喜)は二十三時四十分、BOAC機で羽田空港発。
- 五日 先発隊、カルカッタ着。
- 六日 先発隊、カルカッタにて税関、および関係方面と折衝。
- 七日 先発隊、カルカッタから空路カトマンズ着。
- 八日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 九日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 十日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 十一日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 十二日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 十三日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 十四日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 十五日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 十六日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 十七日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 十八日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 十九日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 二十日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 二十一日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 二十二日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 二十三日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 二十四日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 二十五日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 二十六日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 二十七日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 二十八日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 二十九日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 三十日 先発隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。

四月

- 一日 本隊、チャウラン・フェデーアルガート・バザール。先発隊は滞在して本隊と再会。
- 二日 本隊、滞在。先発隊、アルガート・バザール・ソタ。
- 三日 本隊、アルガート・バザール・ソタ。先発隊、ソターマチャ。コーラとフリ・ガンダキの出あい点。
- 四日 本隊、ソター出あい点。先発隊、出あい点・ドマン。
- 五日 本隊、出あい点・ドマン。先発隊、ドマン・サル・ライリイ。
- 六日 本隊、ドマン・サル・ライリイ。先発隊、サル・ライリイ・パンシン。
- 七日 本隊、サル・ライリイ・パンシン。先発隊、パンシン・ニヤック。
- 八日 本隊、パンシン・ニヤック。先発隊は滞在して本隊と再会。

- 一九日 本隊、空路ホンコン、バンコック経由、二十三時カルカッタ着。
- 二〇日 本隊、九名、空路カトマンズ着、先発隊と合流。
- 二一日 隊長、高木、村木、空路カトマンズ着。
- 二二日 本隊、カトマンズにおいて政府、および関係方面と折衝。
- 二三日 先発隊、高木、加藤(泰)、村山、加藤(喜)、山田、山崎、石坂、シエルバ八名、通訳一名、ポーター百九十名、カトマンズ発、ジップルフェデー泊。
- 二四日 本隊、隊長、田口、辰沼、村木、竹節、依田と科学班、中尾、川喜田、通訳二名、シエルバ七名、ポーター八十名、カトマンズ・ジップルフェデー。先発隊、ジップルフェデー・チャトラ

九日 本隊、滞在。先発隊、ニャックービーの下。
一〇日 本隊、ニャックービーの下。先発隊、ビーの下ニバルチャン。
一一日 ビーの下ニバルチャン。先発隊、バルチャンロー。
一二日 本隊、バルチャンロー。先発隊、ローからサマをへてベース・キャンプ到着設置準備。
一三日 本隊、ローからサマ村をへてベース・キャンプ地に到着、先発隊と合流。

一四日 ベース・キャンプにて登攀準備。
一五日 ベース・キャンプにて登攀準備。
一六日 天候 曇り時々日ざしを見る、午後曇り、小雪ちらつく。
気温 最高一四・八度、最低零下一・五度。

隊長、高木、加藤(泰)、山崎、石坂、竹節、依田でサマの僧院訪問。加藤(喜)、山田、村山はマナスル氷河左岸偵察。四五〇メートル付近まで登る。

一七日 天候 曇り、午前中一時日ざしも見える、午後、時雨模様。
気温 最高一六度、最低零下一度。

高木、村山、村木、加藤(喜)、山田、山崎、石坂、シエルバ五名、第一キャンプの偵察および荷上げ。九時三十分ベース・キャンプ発、マナスル氷河左岸を登り、十三時三十分、高度四六〇メートルに達し、第一キャンプの予定地として荷物を置く。ベース・キャンプ帰着十四時三十分。携帯無電機はずでに感度良好とはいいがたい。

一八日 天候 曇り、午後雲低くなり、夕刻より小雪。
気温 最高八度、最低零下二・九度。
田口、加藤(泰)、辰沼、竹節、依田、シエルバ九名、ポーター五名、第一キャンプ偵察および荷上げ。九時三十分、ベース・キャンプ発。十四時、第一キャンプ予定地に到着。本日の無電通話おむね良好、四二〇メートル付近より雪となり視界なし。十六時ベース・キャンプ帰着。

一九日 天候 曇り、昼ごろより雪、夕刻より吹雪。
気温 最高五・二度、最低零下〇・三度。
隊員は装備、食糧の整理、ベース・キャンプの改造。シエルバ十三名、ポーター五名、第一キャンプに荷上げ。加藤(喜)、村木、ベース・キャンプ―森林限界間に電話線架設。本日までには隊員は一〇―一五キロ、シエルバは一五―二〇キロ程度の荷上げを行い、第一キャンプには装備品の大部分約八〇〇キロの荷上げ完了。
隊長は高木、田口、加藤(泰)とあすよりの行動案を決める。

第一隊―高木、田口、竹節。
第二隊―加藤(喜)、山田、村木。
第三隊―村山、山崎、石坂。

二〇日 天候 雪。
気温 最高七・九度、最低零下二・七度。
悪天候のため行動なし。

二一日 天候 早朝快晴、昼ごろより曇り、夕刻雪。
気温 最高一二度、最低零下五度。

十九日の攻撃計画に基き、高木、加藤(喜)隊は午後第一キャンプ建設にかかり、三人用三、二人用三を張る。村山隊は十六時ベース・キャンプ帰着。天候はまだほとんど回復していないらしく、昼ごろから曇り出し相当な吹雪となる。ベース・キャンプ―第一キャンプ間の電話の架設完了、通話良好。

二二日 天候 晴、曇りより曇り。
気温 ベース・キャンプ最高一二度、最低零下五・九度。
高木隊は第一キャンプより黒岩に向かう途中、五〇〇メートル付近に絶好のキャンプ地を発見、ここに第二キャンプを建設。第一キャンプの荷物をここに集結することに決する。その後から身で、さらに黒岩を偵察に登ったが、天候不良のため引き返し第二キャンプに泊まる。加藤(喜)隊は第一隊とともに

二三日 天候 晴、時々曇。
気温 ベース・キャンプ最高一〇・九度、最低零下二・八度。
高木隊は第二キャンプよりナイケ・コル往復、黒岩に第三キャンプを建設する目的で第二キャンプを出たが黒岩は意外に遠く、輸送混乱するおそれがあるため、五三〇メートルに第三キャンプを設け、ナイケ・コルを第四キャンプとすることに決する。加藤(喜)隊は第一キャンプ―第二キャンプ間の電話線架設を完成し、第二キャンプに泊まる。村山隊はベース・キャンプ―第二キャンプ間の荷上げをなし、第一キャンプに泊まる。

二四日 天候 晴、時々曇り、午後風やや強し。
気温 ベース・キャンプ最高一八・二度、最低零下二・八度。
高木隊は第二キャンプ、第三キャンプ付近の状況を研究した後、隊員のみベース・キャンプに下る。加藤(喜)隊の隊員および高木隊のシエルバは、第三キャンプとナイケ・コル間の登路の固定を行い、赤旗を五〇メートルおきに立てる。加藤(喜)隊のシエルバは第二キャンプ―第三キャンプ間の荷上げ。村山隊は第一キャンプと第二キャンプ間の荷上げをするともに、午後ベース・キャンプよりの荷上げ隊を誘導し、第二キャンプに荷上げ。午後、ベース・キャンプに下った高木隊と相談の結果、当初の計画が著しく変更を見た現在、好天を惜しむべきであるが、一応全員、ベース・キャンプに下り、作戦決定を要することになり、明二十五日、加藤(喜)村山隊、全員をベース・キャンプに下すことに決定、その旨第二キャンプに電話をもつて達する。

二五日 天候 晴、時々曇。
気温 ベース・キャンプ最高一二度、最低零下四・八度。
加藤(喜)村山隊は第二キャンプと第三キャンプ間の登路固定および荷上げ。第一キャンプ、第二キャンプの全シエルバは第一キャンプの荷物を第二キャンプに荷上げ。ベース・キャンプよりシエルバ一名、ポーター九名、第二キャンプに荷上げ、十六時、ベース・キャンプに全員帰着。

二六日 天候 晴、時々曇。
気温 ベース・キャンプ最高一四度、最低零下三・五度。
全員休養して今後の作戦決定。午後、隊員とシエルバ合同運動会を催す。

二七日 天候 晴、後薄曇。
気温 ベース・キャンプ最高一五度、最低零下一・五度。
村山隊九時ベース・キャンプ発、十三時第二キャンプ着。村木、電話保線のため第二キャンプまで行き帰る。

二八日 天候 曇り、午後より雨。
気温 ベース・キャンプ最高一四度、最低零下〇・七度。
村山隊シエルバは第二キャンプ、第三キャンプ間を二往復し、荷上げ。ポスト・ランナー、ベース・キャンプ発、カトマンスに向かう。

二九日 天候 午前中晴、午後みぞれ、夜晴。
気温 ベース・キャンプ最高一五度、最低零下一度。
村山隊第二キャンプ、第三キャンプ間の荷上げおよび電話線架設、第三キャンプに泊まる。加藤隊は、九時ベース・キャンプ発、十四時第二キャンプ着、同所に泊まる。第一キャンプ以上は午後吹雪となる。ぶどう酒をあげ、はるか陛下の御健康を祈る。

三〇日 天候 晴、後曇。
気温 ベース・キャンプ最高一九度、最低零下二度。
村山隊第三キャンプよりナイケ・コルに第四キャンプを建

設。加藤隊第二キャンプ―第三キャンプの輸送および各キャンプの荷物整理。高木隊ベース・キャンプより第二キャンプにはいる。隊長、加藤(泰)ベース・キャンプ北側高地偵察。

《五月》

一日 天候 早朝降雪、積雪四〇センチに達する。雷鳴あり、午前

やみ晴、午後曇。
気温 ベース・キャンプ最高一五度、最低一度。

昨日ベース・キャンプ、第一キャンプ間の四二〇メートル付近に大雪崩あり電話線切断され、早朝、加藤(泰)とディリ、補修に登る。加藤(喜)隊は第三キャンプから第二キャンプ往復荷上げ。村山隊は第四キャンプから第三キャンプ荷上げ往復。

二日 天候 晴。

気温 最高一三度、最低〇度。

高木隊、第二キャンプより第四キャンプにはいる。加藤隊は第三キャンプと第二キャンプ間の輸送ならびに整理。村山隊は村山、せきのため第四キャンプより第三キャンプに下り、第四キャンプにおける責任者を辰沼と決める。本日から九日まで連日、ポーター四名、ベース・キャンプから第二キャンプまで補給す。

三日 天候 晴、午後小雨。

気温 ベース・キャンプ最高一八度、最低零下一度。

高木、田口、竹節、山崎、石坂とシエルバ二名、北峰東バツトレスのルート探索、六〇五メートルに達し第四キャンプに帰る。加藤隊は第三キャンプ、第四キャンプ間の荷上げ、ならびに電話架設。電線は第四キャンプまでに一五〇メートルほど不足、本日で第二キャンプ―第三キャンプ間の荷上げ完了。

四日 天候 晴、午後曇。

気温 ベース・キャンプ寒暖計破損のため不明。

第四キャンプの全員は第四キャンプの強化、および第三キャンプ―第四キャンプの荷上げ。村山はシエルバ二、ポーター三を指揮し、第二キャンプ、第三キャンプ間の荷上げ。十三時に竹節、依田、第四キャンプよりベース・キャンプ帰着。

五日 天候 晴、午後時雨。

第四キャンプの高木、田口、村山、加藤(喜)、村木、山田、山崎、石坂とシエルバ三名はアイス・フォール偵察、六一〇〇メートル付近に達し第四キャンプに帰る。他は第三キャンプ―第四キャンプの荷上げ。

六日 天候 ベース・キャンプ午前中晴、午後曇。

第四キャンプ付近は雪で偵察できず、シエルバ二名、第四キャンプ―第六キャンプの荷上げ往復。昨日で第四キャンプまでの荷上げは完了。前進根拠地が確立された。第三キャンプと第二キャンプは無人にして、補給物資の引継は第二キャンプまでベース・キャンプから登り、第四キャンプより第二キャンプまで受け取りに下る方法を探る。

七日 天候 第二キャンプ曇後雪、昨日以来東南風に変る。

隊長、竹節、加藤(泰)ベース・キャンプ―第二キャンプ、同行四人のポーターはベース・キャンプに帰る。第四キャンプよりシエルバ一名、ポーター二名、第二キャンプに下る。第四キャンプ付近降雪のため全員停滞。

八日 天候 午前中晴。十一時ごろより、東南風、谷より雲上がり、雪となる。

第四キャンプの高木、田口、加藤(喜)、山田、村木、シエルバ三名、第六キャンプにはいる。石坂、第四キャンプから連絡に第三キャンプ往復。隊長、竹節、加藤(泰)第二キャンプから第三キャンプに登る。

九日 天候 晴後曇。

第六キャンプの加藤(喜)山田、村木らはアイス・フォールを六三〇メートルまで偵察して第五キャンプにはいる。高木、田口組と入れかわる。三田隊長ら第三キャンプから第四キャンプにはいる。

一〇日 天候 薄曇、午後時々小雪。

気温 第四キャンプ最低零下四度。

高木隊の田口、高木、シエルバ一名はから身で、第六キャンプの位置の雪崩の危険性およびその上の登路偵察に登る。第六キャンプの安全性確認。村山隊はシエルバ三名と第五キャンプより第六キャンプに荷上げ、第五キャンプに帰る。村山隊は、ノース・コル攻略まではサポーターとして行動。

一一日 天候 午前中晴、午後雪。

高木よりの報告により、各隊は十三日までに、ノース・コルを攻略していったん全員、第四キャンプに帰り、休養の後、頂上攻撃に移ることになる。これがため第四キャンプの強化、第二キャンプ、第三キャンプの残余物資の荷上げおよびベース・キャンプの最後の整理を必要とし、加藤(泰)再びベース・キャンプに下る。高木隊は第六キャンプより左にトラバースして登り、六六〇メートルの第七キャンプにはいる。加藤(喜)、村木は、第七キャンプまでから身でラッセルし、第六キャンプに帰る。石坂、山崎、シエルバ三名、第五キャンプより第七キャンプに荷上げ、石坂は第六キャンプに泊まり、村山、山崎は第五キャンプに下る。

一二日 天候 曇、小雪。

高木隊、第七キャンプより、田口、高木、山田、ガルツェン、ノース・コルに向かう。思いのほか斜面大きく、七〇〇メートルに達したが、雪のため視界狭く、コルを確認できず、今後の攻略の基地としては、第七キャンプを根拠地とすることにす。

連日の奮闘で、各隊とも疲れが出たので、午後は休養。十三日、全員第四キャンプに下るはずであったが攻撃を続行することにす。村山隊は休養。

一三日 天候 曇、雪。

高木、加藤隊、第七キャンプで休養。村山、山崎、第五キャンプ停滞。石坂、シエルバ二名、第七キャンプの往復。加藤(泰)、依田、ディリーはベース・キャンプから第二キャンプに登る。

一四日 天候 晴、午後曇、雪。

高木、加藤隊、悪天候のため行動できず、第七キャンプに停滞。村山隊、第五キャンプ―第七キャンプ間荷上げ。加藤(泰)、依田、ディリー第二キャンプ―第四キャンプ。

一五日 天候 晴、後雪。

高木、田口、加藤(喜)、村木、ガルツェン、サルキら第七キャンプからノース・コルに第八キャンプを建設して泊まる。村山隊、第五キャンプ―第七キャンプの荷上げ。シエルバ三名、第四キャンプ―第六キャンプに荷上げ。

一六日 天候 午前中晴、午後雪。

第八キャンプの田口、加藤(喜)、サルキはフラットー偵察。田口、村木は第七キャンプに下る。高木、山田、シエルバ三名、第七キャンプより第八キャンプにはいる。石坂、シエルバ一名、第六キャンプから第七キャンプ往復。村山、山崎、第五キャンプ停滞。竹節、第四キャンプ―第五キャンプ。辰沼、依田、第四キャンプから第五キャンプ往復。

七三五メートル付近の雪洞―加藤(喜)、山田。

第八キャンプ―高木、シエルバ四名。

第七キャンプ―田口、竹節、村山、村木、シエルバ一名。

第六キャンプ―石坂、シエルバ二名。

第五キャンプ―山崎、シエルバ二名。

第四キャンプ―加藤(泰)、依田、ディリー、シエルバ四名。

ポーター三名。

一八日 天候 雪。ベース・キャンプ―隊長、辰沼、シエルバ二名。

加藤、山田、悪天候のため、プラト―偵察を断念して第七キャンプに下り、第八キャンプの全員と第七キャンプに下る。村木、第七キャンプ―第四キャンプ。石坂、グンディ、第六キャンプから第七キャンプ往復。グンディ、第七キャンプに泊まる。山崎、シエルバ二名、第五キャンプ―第七キャンプ、山崎第七キャンプに泊まりシエルバは第四キャンプ、第六キャンプに帰る。シエルバ二名、第四キャンプから第六キャンプの往復。

一九日 天候 雪。

高木、加藤(喜)、山田、第七キャンプ―第四キャンプ。石坂、シエルバ二名、第六キャンプ―第七キャンプ、石坂、第七キャンプ泊まり。田口、竹節、村山、山崎、シエルバ五名、悪天候のため第七キャンプに停滞。昨日より大部参つていたディリ、ガルツェン、第四キャンプ―ベース・キャンプ。

二〇日 天候 曇、後雪。

竹節、山崎、石坂、グンディ、第七キャンプから第八キャンプ往復。シエルバ四名、第七キャンプから第六キャンプ往復。シエルバ二名、第六キャンプから第七キャンプ往復。依然として天候不良。次の攻撃に備えて第七キャンプでは荷上げ続行。昨日の決定を上方キャンプに伝えるとともに、加藤(泰)、食糧補給のためベース・キャンプに下る。

二一日 天候 晴。

気温 第六キャンプ最高一九度、最低零下二六度。田口、病気のサルキにつきそい第七キャンプより第四キャンプに下る。第七キャンプのシエルバ三名、六三〇メートル往復。第七キャンプは休養。田口、第四キャンプに下る途中、第四キャンプよりの新戦指示を受取りただちに第七キャンプに

伝える。

二三日 天候 晴、午後曇。

気温 第四キャンプ最高二〇度、最低零下二〇度。昨日の指令により、第七キャンプ、第六キャンプの全員ナイケ・コルの第四キャンプに下る。

二四日 天候 晴。

気温 第四キャンプ最高一六度、最低零下一四度。全員第四キャンプで休養。加藤(泰)、辰沼、ガルツェン、他シエルバ一名、ベース・キャンプ―第二キャンプ。

二五日 天候 快晴。

気温 第四キャンプ最高一七度、最低零下九度。第四キャンプ全員休養。本日は南風が吹き、休養はまことに惜しい気持。夕方まで頂上攻略の作戦会議、三十一日までの行動予定できあがる。加藤(泰)、辰沼、ガルツェン、シエルバ一名、第二キャンプ―第四キャンプ。

二六日 天候 快晴。

気温 第四キャンプ最高四度、最低零下一四度。高木、加藤(喜)、山田、石坂、シエルバ十一名、第六キャンプ―第七キャンプ。シエルバ五名は第六キャンプに帰る。田口、竹節、村木、山崎、依田、シエルバ二名、ポーター一名、第四キャンプ―第六キャンプ。シエルバ二名、ポーター一名は第四キャンプに帰る。本日の配置次のとおり。

第七キャンプ―高木、加藤(喜)、山田、石坂、シエルバ六名。

第六キャンプ―田口、竹節、村木、山崎、依田、シエルバ

の攻撃を受けた呼吸器の障害いえず、ともに下る。残りし者は、テント地の整備に一日を費す。加藤(泰)、辰沼、シエルバ三名、第六キャンプ―第七キャンプ。

三二日 天候 晴。

加藤(喜)、山田、山崎、石坂、ラクバ、ミンマ・シター、グンディ、アン・テンバ、アン・ノルブ、第八キャンプ―第九キャンプ、加藤(喜)、山田、石坂、第九キャンプに泊まり、ほかは第八キャンプに下る。シエルバ二名、第六キャンプから第四キャンプ往復。早朝、加藤(泰)、辰沼、第八キャンプに向かい出発したが、加藤(泰) 猛烈な腹痛にたおれ、ついに全員第七に停滞。九時四十分、第八キャンプより出発した攻撃隊、サポ―ト隊の九名がプラト―に向かつて、急斜面を登るのを望見、十二時三十分、プラト―直下に達したところ、雲がかかり姿を見失う。十四時三十分、六名のサポ―ト隊の下降を見、三名の攻撃隊、第九キャンプ設立を確認する。本日の配置は次のとおり。

第九キャンプ―加藤(喜)、山田、石坂、第八キャンプ―山崎、グンディ、ラクバ、アン・テンバ、ミンマ・シター、アン・ノルブ。

第七キャンプ―田口、高木、加藤(泰)、辰沼、村木、シエルバ五名。

第六キャンプ―シエルバ二名、第四キャンプ―村木、シエルバ二名、ポーター三名、ベース・キャンプ―隊長、竹節、依田、ディリ、サガ、バンシー、

六月

一日 天候 晴、十二時ごろより頂上に曇かかる。加藤(喜)、山田、石坂は七時、第九キャンプを出発、十二時、

三〇日 天候 晴。

昨日第八キャンプに登った連中は、やはりノース・コルの強風下に一夜を明かした。高木はテントを強風に押しひしがれ、一睡もできず。加えて昨秋(五二年)受けた傷が痛み、ついに後を加藤(喜)に託し第七キャンプに下る。ガルツェンも前回

五名。

第四キャンプ―加藤(泰)、辰沼、村山、シエルバ三名、ポ

ーター三名。

ベース・キャンプ―隊長、ディリ、サガ、バンシー、ポ

ーター五名。

二七日 天候

午前中晴、十三時ごろより曇、雪となる。十五時ごろより雷鳴をともない吹雪となり、夕刻おさまり、晴。高木隊第七キャンプにて休養。第七キャンプからアン・ツェリン四号ら五名のシエルバ、第八キャンプに荷上げ。田口隊、シエルバ五名、第六キャンプ―第七キャンプ。加藤(泰)、辰沼、村山、第四キャンプより黒岩頂上に登り、秩父宮様の御茶碗を埋め記念塔をたてる。

二八日 天候

夜半より強風、早朝におよぶ、晴天。第七キャンプ全員風のため停滞。第六キャンプのシエルバ三名、第七キャンプにはいる。第四キャンプのシエルバ二名、第六キャンプ往復。

二九日 天候

午前中晴天、昨日の風まだおさまらず久し振りで頂上より雪煙あがる。午後、小雪。高木、加藤(喜)、山田、山崎、石坂、シエルバのガルツェン、アン・テンバ、ミンマ・シター、グンディ、ラクバ、アン・ノルブ、第七キャンプより第八キャンプにはいる。村木、シエルバ三名、第七キャンプから第八キャンプ往復。竹節、依田、第七キャンプ―第八キャンプ―第四キャンプ。加藤(泰)、辰沼、シエルバ二名、第四キャンプ―第六キャンプ。

三〇日 天候 晴。

昨日第八キャンプに登った連中は、やはりノース・コルの強風下に一夜を明かした。高木はテントを強風に押しひしがれ、一睡もできず。加えて昨秋(五二年)受けた傷が痛み、ついに後を加藤(喜)に託し第七キャンプに下る。ガルツェンも前回

七七五〇メートルに達し、引き返す。十四時三十分第九キャンプを出て、十八時に第八キャンプを撤収して、第七キャンプに帰る。山崎、シエルバ三名、サポーターに出て第七キャンプに下る。田口、加藤(泰)、シエルバ、第七キャンプ―第四キャンプ。第四キャンプの全シエルバ五名、ポーター三名、第五キャンプ、第六キャンプを撤収し、第四キャンプに下る。

二日 天候 晴。
加藤(喜)、山田、第七キャンプ―ベース・キャンプ。高木、辰沼、村木、石坂、シエルバ四名は第七キャンプ―第四キャンプ。山崎、シエルバ五名、第八キャンプ―第四キャンプ。シエルバ四名は第四キャンプから第六キャンプを撤収。田口、村山、第四キャンプ―ベース・キャンプ。第七キャンプ―第六キャンプ間アイス・フォールの登路は、すっかり雪がくさり、クレバス随所に口を開き、スノー・ブリッジもほとんど危険な状態になり、このルートもあと一、二日が限度であろう。

三日 天候 晴、後曇。
早朝より全シエルバ、ポーター撤収にかり、第二キャンプに第一回の荷物を降ろし、再び第四キャンプに帰り、十時三十分残余を持ってベース・キャンプに向かい下る。高木、加藤(泰)、辰沼、村木、山崎、石坂は十一時ごろより第四キャンプを出てベース・キャンプに下る。ベース・キャンプより十名のポーター第二キャンプにいたり荷下げ、十六時半に全員ベース・キャンプ着、昨日着いた科学班の中尾、川喜田に久しぶりで対面、夕食後の歓談はアルコール大分はいり夜半過ぎまで続いた。

四日 天候 曇、後雨。
全員休養。
五日 天候 晴。
ベース・キャンプ撤収準備。

六日 撤収準備。
七日 撤収準備。

八日 ベース・キャンプ撤収。八時に中尾、川喜田と別れ、人夫十名ベース・キャンプ発、昼にラルキヤ・マーケット、チベットのシエルバけんかを始め予定地にいたらず、峠下に宿営。

九日 ラルキヤ・マーケット七時発。十五時三十分五二〇メートルの峠通過、ビムタコーチ二十時着。
一〇日 ビムタコーチ七時発―ゴ―十六時着。
一一日 ゴ―七時発―トンジエ十四時着。

一二日 ポカラで飛行機チャーターの要務を帯びた田口、加藤(泰)、村山、加藤(喜)先発。他は一日休養。先発タールに十五時着。
一三日 先発隊、タール七時発―シレチヨール・オダール十七時着。本隊トンジエ八時発―タール十五時着。

一四日 先発隊、シレチヨール・オダール七時発―クディ着。本隊タール―シレチヨール・オダール。
一五日 先発隊、クディ滞在。本隊、シレチヨール・オダール発クディの手に泊まる。

一六日 先発隊、クディ―ミダム・コーラの横断地。本隊クディ滞在。
一七日 先発隊、横断地―モア・バティ。本隊クディ―ミダム・コーラ横断地。

一八日 先発隊モア・バティ―ポカラ。本隊、横断地―ドバン。
一九日 先発隊ポカラ滞在。本隊、ドバン―サウレ・パンジャン。
二〇日 本隊サウレ・パンジャン―ポカラ。
二一―二六日 ポカラ滞在。

《七月》

七日 十二時十分ポカラ発、ヒマラヤン・アビエーション機でカトマンズに五十八分着。

《八月》

一―二日 カトマンズにて残務および帰路の折衝。
一―二日 隊長、竹節、辰沼、依田、山崎、石坂、カトマンズ発―カルカッタ着。

一―三日 ポカラに残った荷物を率領してサガ、パンシー、カトマンズ着。
一―四日 竹節、辰沼、依田、山崎、石坂、カルカッタ発。高木、山田、加藤(喜)、村木、カトマンズ発。空路カルカッタ着。

一―六日 竹節、辰沼、依田、山崎、石坂、十八時二十五分、BOAC機で羽田着。
一―七日 田口、加藤(泰)、村山、カトマンズ発―カルカッタ着。
一―八日 高木、加藤(喜)、山田、村木はBOAC機でカルカッタ発。

二―四日 高木、加藤(喜)、山田、村木、羽田着。隊長、田口、加藤(泰)空路カルカッタ発。村山、日本郵船第五満鉄丸でカルカッタ発。
二―四日 隊長、田口、加藤(泰)は十九時四十五分羽田着。

一―三日 村山、神戸着。科学班、カトマンズ着。
一―四―一八日 科学班、カトマンズ滞在。コイララ首相、ゼネラル・カイザーなどに会見。帰国手続、諸事務に追われて、日を過ごす。
一九日 カトマンズよりカルカッタへ飛び。再び、なつかしのスペンセス・ホテルへはいる。
二〇―二二日 カルカッタ滞在、通関の手続、領事館の児玉氏の御好意で万事かたづいた。

二三―二四日 再びBOAC機で、ラングーンに到着、一泊。
二―四日 ホンコンへ飛び、毎日新聞特派員、新井宝雄氏の歓待を受ける。
二―五日 無事東京着、横会長、三田隊長初め、盛大な出迎えを受ける。(加藤泰安)

運行表

この運行表は一九五三年登山隊のもので、隊員、シエルバ名などは略号、記号をもち、その一覧表は紙面の都合で運行表末尾に付した。天候はベース・キャンプにおける記録。ベース・キャンプには、この表にでないが、通訳のサガ、シエルバのパンシーは全期間を通じて滞在し、通訳のデイリーも第四キャンプに登った以外はベース・キャンプに滞在していた。×印はその位置のキャンプに停滞したことを示している。

CAMP	BC	C1	C2	C3	C4	C5	C6	C7	C8	C9			
月日	3850	4600	5000	5300	5600	5900	6000	6100	6600	7000	7100	7500	8000
4/17	曇	高村喜山水崎石	S-5										三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
18	曇	田原辰竹依	S-9 P-5										三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
19	曇	S-13	P-5										三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
20	曇	X 全員停泊											三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
21	晴	村崎石	5.7.8.10.12.13.14.15	a									木崎,石Cは電話 線架設 三田泰辰BC
22	晴	X 三田辰竹依		高田竹 1.4.11 喜山水 3.6.9 村崎石 7.10.13									三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
23	晴	X 三田辰竹依		喜山水 3.6.9 村崎石 7.10.13									三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
24	晴	X 三田辰竹依		喜山水 3.6.9 村崎石 7.10.13									三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
25	雨	X 三田辰竹依	14	喜山水 3.6.9 村崎石 7.10.13									三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
26	曇	X 全員停泊											三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
27	曇			辰村崎石 1.3.5.7.8.10.11.12.13.14 木 4.6.9.15 P-5									三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
28	曇	X 高田辰竹依	4.6.9.15	辰村崎石 1.11 喜山水 5.7.10.12 辰村崎石 1.11									三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
29	晴	X 三田辰竹依	15	辰村崎石 5 喜山水 1.7.10.11.12 辰村崎石 1.11									三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
30	曇	X 三田辰竹依		辰村崎石 5 喜山水 1.7.10.11.12 辰村崎石 1.11									三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
5/1	雪	X 三田辰竹依		辰村崎石 5 喜山水 1.7.10.11.12 辰村崎石 1.11									三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
2	晴	X 三田辰竹依		辰村崎石 5 喜山水 1.7.10.11.12 辰村崎石 1.11									三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
3	晴	X 三田辰竹依		辰村崎石 5 喜山水 1.7.10.11.12 辰村崎石 1.11									三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
4	晴	X 三田辰竹依	15	辰村崎石 5 喜山水 1.7.10.11.12 辰村崎石 1.11									三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
5	晴	X 三田辰竹依	15	辰村崎石 5 喜山水 1.7.10.11.12 辰村崎石 1.11									三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
6	晴	X 三田辰竹依	15	辰村崎石 5 喜山水 1.7.10.11.12 辰村崎石 1.11									三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
7	雪	X 辰竹依		辰村崎石 5 喜山水 1.7.10.11.12 辰村崎石 1.11									三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5
8	晴	X 辰竹依		辰村崎石 5 喜山水 1.7.10.11.12 辰村崎石 1.11									三田泰辰竹依 S-9 田原辰竹依 S-9 P-5 田原辰竹依 S-9 P-5

ナナ・コノ

ナナ・コノ

ナナ・コノ

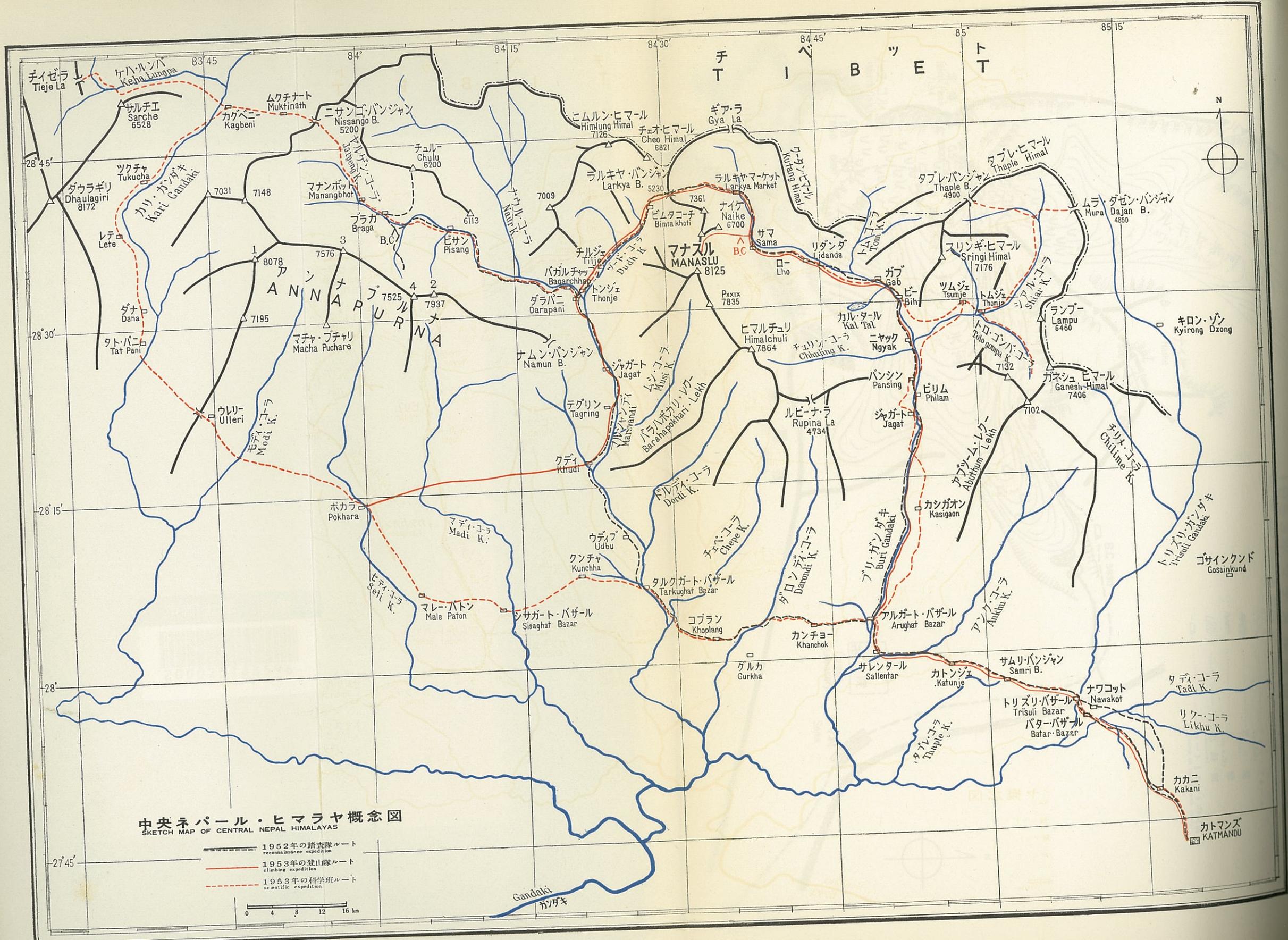
C317電話線架設

CAに食堂を作る

竹カを作つて喜山水崎泊まる

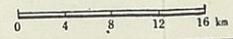
	4000	5000	6000	7000	
23	晴後曇 ×三	P-4 1,12	13,15 a,b,c ×高田喜村山木崎石竹依	3,4,5,6,7,8,9,10,11,14	
24	晴後曇 ×三	P-5	12,15 a,b,c ×高田喜村山木崎石竹依	3,4,5,6,7,8,9,10,11,13,14	
25	晴 ×三	P-4	12,15 a,b,c ×田兼原村木崎竹依	4,12,15	
26	晴強風 ×三	P-4	×兼原村 4 b,c 田木崎竹依	高喜山石 1,3,5,6,7,8, 9,10,11,13,14	兼原村兼文宮 カカをCSの地点 に建設
27	晴後曇 ×三	P-3	X4 b,c 兼原村	田木崎竹依 10,11 9,13,14 ×高喜山石 1	
28	晴強風 ×三	P-3	×兼原村 4 a,b,c	12,15 9,13,14	×高田喜山木崎石竹依 1,3,5,6,7,8,9,10,11
29	晴後曇 ×三	P-3	×村 4 a,b,c	兼原 12,15 13 14 ×田 兼原 12,15	高喜山崎石 1,5,6,7,8,10 高木 3,9,11 竹依
30	晴強風 ×三	P-3	×村 4,13 a,b,c 竹依	兼原 12,15 14,15 ×田水 3,9,11	高 1 ×高喜山崎石 5,6,7,8,10
31	晴後曇 ×三竹依		×村 4,13 14,15	×高喜山 1,2,12 3,11	高喜山 崎 5,6,7,8,10 高喜山石
61	晴後曇 ×三竹依		×村	×高喜山 1,2,12 3,11	高喜山石
2	後曇 ×三竹依	P-5	田村 b,c ×兼 4 3,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14,15	a,b,c	
3	晴後曇 ×三田村喜山竹依	P-10			
4	晴後曇 ×三田村喜山竹依	P-10			

隊員略号	シエルバ記号	H・C 登録番号	ポーター記号	キャンゾ高度
三 三田 幸夫	1 ガルツェン	57	a ラツカコ・パツカル	B.C 3850メートル
高 高木 正孝	2 バンシー	51	b セメソト	G.1 4600
田 田口 二郎	3 ツン・ツェリン 4号	101	c ヘイボン	G.2 5000
泰 加藤 泰安	4 サルキ	157	—ともにもツクネム—	G.3 5300
辰 辰沼 広吉	5 ラツバ	164	その他記号	G.4 5600 (チイテ・コル)
村 村山 雅美	6 グンデク	167		G.5 5900
喜 加藤 喜一郎	7 ミソマ・ソター	168		G.6 6100
山 山田 二郎	8 ツン・ソルフ	172	S シェルバ (以下の数は人数)	G.7 6600
水 村木 潤次郎	9 ニマ・テソソ	177	P ポーター (以下の数は人数)	G.8 7100 (ノース・コル)
崎 山崎 英雄	10 ツン・テソバ	179		G.9 7500
石 石坂 昭二郎	11 ツン・グワ			
竹 竹節 作太	12 ニマ・ツェリン			
依 依田 孝喜	13 キツバ			
	14 ニマ・テソバ			
	15 ツン・ツェリン 5号			



中央ネパール・ヒマラヤ概念図
 SKETCH MAP OF CENTRAL NEPAL HIMALAYAS

- 1952年の踏査隊ルート
 reconnaissance expedition
- 1953年の登山隊ルート
 climbing expedition
- 1959年の科学班ルート
 scientific expedition

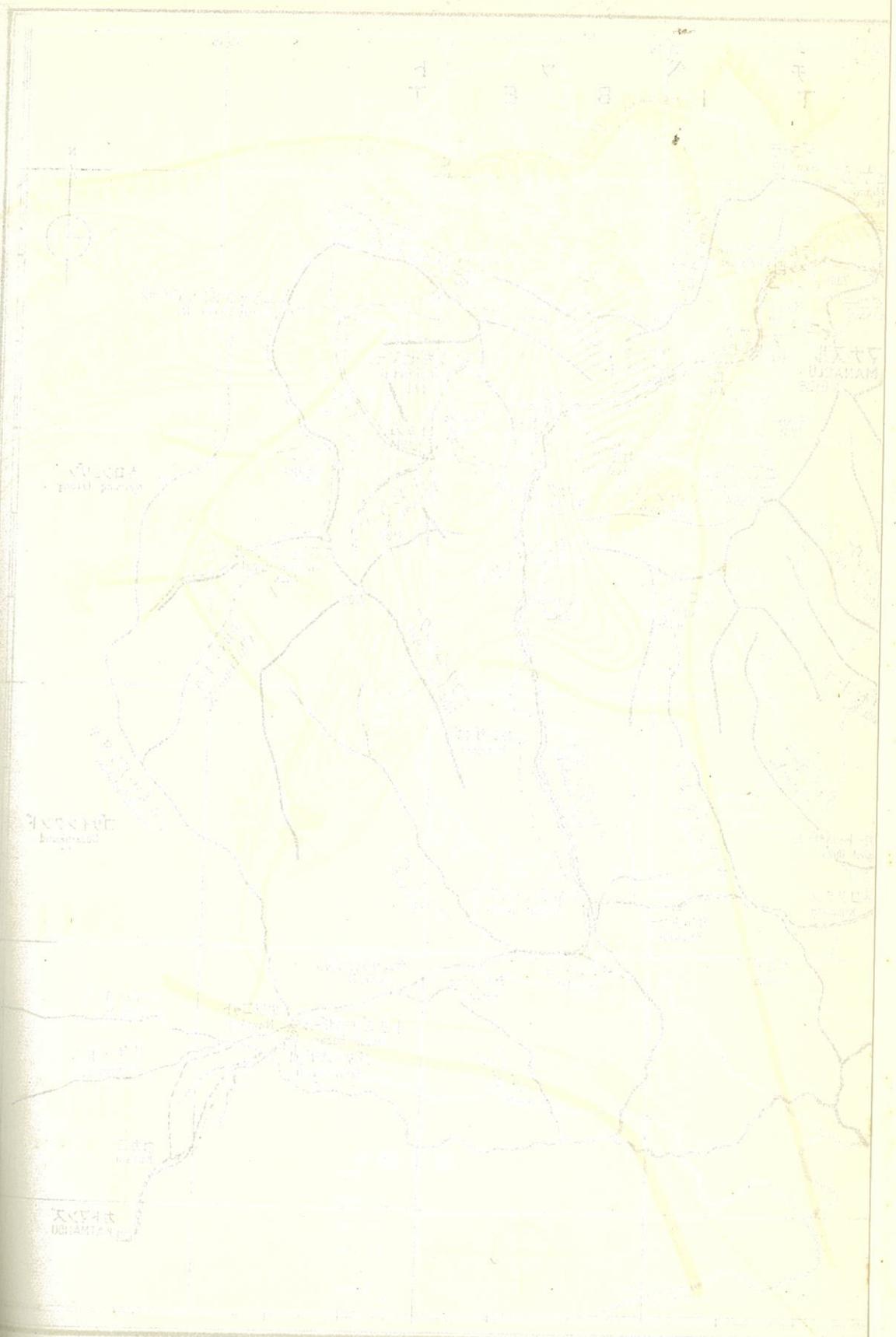


チ
T
I
B
T
E
T

ア
N
N
A
P
U
R
N
A

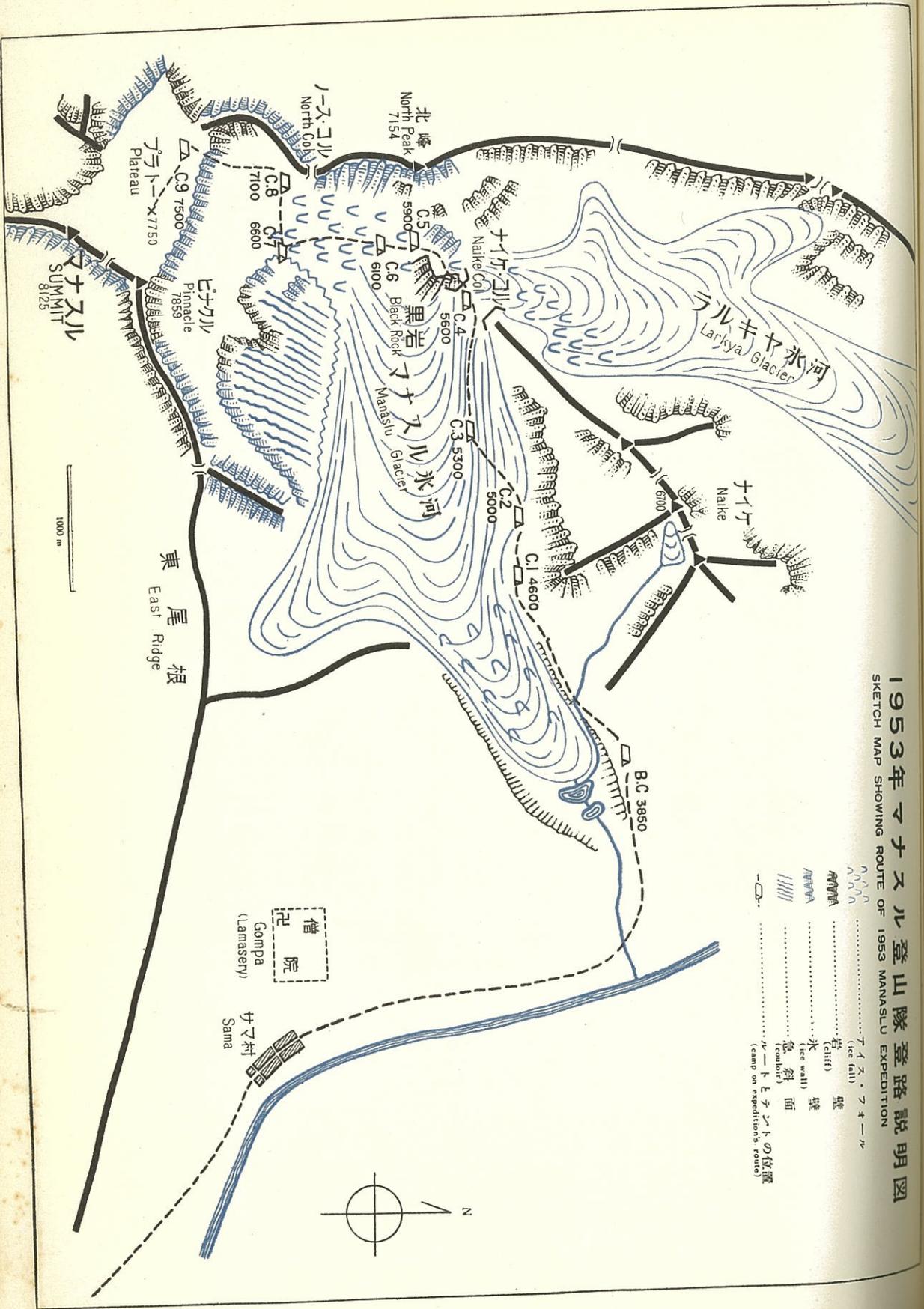
ガンダキ
Gandaki

カトマンズ
KATMANDU



1953年マナスル登山隊登路説明図
 SKETCH MAP SHOWING ROUTE OF 1953 MANASLU EXPEDITION

- 〰〰〰 氷 (ice fall)
- 〰〰〰 岩 (cliff)
- 〰〰〰 壁 (ice wall)
- 〰〰〰 急斜面 (ice sclopes)
- マナスル登山隊の位置 (camp on expedition's route)



I 隊 員

松方三郎

三田幸夫(52) 万邦交易取締役。一九二五年のカナダ、アルバート(三八九五メートル)初登頂隊の隊員であり、その後主としてインド、南方方面の貿易に従事し、インド滞在中にはシッキム・ヒマラヤ方面の旅行もしている。一九五三年の登山隊の隊長。日本山岳会評議員。

今西錦司(51) 理博、京大人文科学研究者、京大講師。専攻は自然史学、生態学。京大の白頭山冬期登山(一九三四年)のほか蒙古、ボナベ島、大興安嶺などの学術踏査にリーダーとして参加、一九五二年の踏査隊の隊長。日本山岳会評議員。

竹節作太(46) 毎日新聞社運動部長。スキー選手として一九二八年オリンピックに出場、一九三六年のナンダ・コット(六八七メートル)初登頂の際は毎日新聞社の記者として特派され、一行とともに登頂した。一九五二年の踏査隊の時には一行におくられて参加して後半の踏査に加わり、一九五三年の登山隊では隊員のひとりとして参加、報道方面の仕事に当った。

加藤泰安(41) 新アジア貿易通信社勤務、一九三七年以来数回蒙古地方にはいっている。登山隊ではもっぱら輸送と兵站の

仕事に当った。日本山岳会理事。

高木正孝(40) 神戸大学教授。専攻は心理学。欧州留学中(一九三八―四七年)ドイツならびにスイスのアルプス諸峰に親しんだ。日本山岳会理事。

田口二郎(40) 岸本商店勤務。一九三七年から四七年まで滞欧、アルプスの各方面で山に親しんだ。高木とともに氷河にいての経験者として踏査隊ならびに登山隊において重要な役割を与えられた。日本山岳会理事。

辰沼広吉(37) 医博、慶応義塾医科大学講師。一九五三年登山隊のドクターとして隊員の保健、医学方面の資料収集、治療などに当った。日本山岳会理事。

依田孝喜(36) 毎日新聞社写真部員。登山隊のカメラマンとして参加した。

中尾佐助(35) 浪速大学助教授。専攻は栽培植物。ボナベ、蒙古、小興安嶺、カラフトなどの学術調査隊に参加している。マナスルの踏査隊ならびに登山隊において常に科学班員として資料の収集に当った。

村山雅美(34) 市田株式会社勤



科学班の中尾 川喜田(右) 隊員

川喜田二郎(32) 大阪市大助教授。一九四二年の大興安嶺隊
隊員。専攻は人文地理。登山隊科学班員として参加、人文方面
の資料の収集と調査を担当した。

加藤喜一郎(32) 佐倉飼料株式会社勤務。

山田二郎(31) 佐倉飼料株式会社勤務。日本山岳会理事。

村木潤次郎(29) 早大鑄物研究所助手。日本山岳会理事。

一九五三年の登山隊では村山、加藤、山田、村木などの
層が年齢の上でも中心となり、自然実際の山でも登山隊の
中堅となるわけだったが、装備その他の隊の準備について
も、隊員の中ではこの辺が中心となって働いた。

山崎英雄(28) 札幌医大解剖学教室勤務。

林 一彦(28) 京大病理学教室勤務、専門は外科。一九五二
年踏査隊では登山隊員として、またドクターとして働いた。

石坂昭二郎(24) 東京出版販売株式会社勤務。

一九五二年の踏査隊は六名、一九五三年の本隊は十五名
となっているが、その内四人は両方の隊に加わっているの



ディリー(右)とサガ氏

で正味は十七人となる。
そしてそのほとんどすべ
てが学生時代からそれぞ
れの学校の山岳部に属し
その少なからぬものが、
現に日本山岳会の役員と
して責任を担当してい
る。厳格な意味でのヒマ
ラヤ登山の経験者として
はわずかに竹節一名を数え、アルプスそのほか海外での登
山の経験者としては三田、高木、田口の三名をあげ得るに
過ぎないが、今西、加藤(泰)、中尾、川喜田の四人は方面
は違うが、海外へのエキスペディションの経験を持ってい
た。他の約半数にとっては日本以外の土地でこうした旅を
するのは全く初めてのものだったが、日本では四季を通じ
て山に親しみ、ことに冬山にかけては少なからぬ経験を持
ち、その上に山岳会の仕事や、国体などの経験から相当多
角的に勉強を積んでいた。

隊員の名前を掲げる場合、通訳や連絡のために終始隊と行動
をともした次のふたりの現地の協力者の名を逸することはで
きない。

ディリー君はクリシナ君の令弟で二回ともマナスル隊の通訳
として活躍し、サガ君は本隊の科学班つきとして働いてくれ
たのである。

―年齢順―

2 シェルパ

竹節 作太

シェルパの故郷

インドの最大都市カルカッタから、汽車で一夜北上すると、
世界的に有名な避暑地ダージリンに着く。ダージリンは海拔二
千余メートル、ヒマラヤの前山の上に開ける町で、このタイ
ガー・ヒルに立てば、チュンピの深谷をへだてて、世界第三位
のカンチェンジュンガ(八五八〇メートル)を目の上に仰ぐこ
とができるし、はるか西北の空に、世界最高のエヴェレストの
氷峰が輝いている。この大観に接しようと、世界の遊客がぞく
ぞくと訪れる。

モルゲンロートに映えるこれらの氷峰を仰ぐため、遊客は真
夜中にホテルを出発して、四人乗のダンディー(山かこ)か自
動車でタイガー・ヒルへ行く。その案内役を勤めるのがシェル
パである。そこでシェルパはタイガーという名をもらった。ヒ
マヤン・タイガー、これがシェルパの最初の名である。

ダージリンのはずれにあるカルカッタ・ロード、エンピ・ロ
ードなどには、六、七万人のマウンテン・シェルパが住んでい
て、多くは菜園を営んでいる。この中から有名なガイドが出る
のである。エヴェレストの英雄テンシン、日本のマナスル隊に
参加したガルツェン、パンシー、サルキその他もこの住人で

ある。しかし、シェルパの本当の故郷は、エヴェレストの南麓
に開けるソル、クーンブ地方である。

ソル、クーンブ地方は、海拔三〇〇〇―五〇〇〇メートルの
高原地帯で、ナムチャ・バザールが中心となっている。シェル
パ族は、ヤク、牛、羊とともに草を求めて西に東に移動する遊
牧の民なのである。ソル、クーンブ地方には八、九万のシェル
パが住み、大部分は牧畜をし、一部はインドからはいつてきた
綿布、雑貨、穀物をヤクや羊に負わせて、エヴェレストの西方
にある五千余メートルのナンパ・ラという峠を越えてチベット
に行き、帰りには岩塩、染料、羊毛などを運んで来るのを業と
している。

シェルパ育ての親

一九二二年(第二回)、二四年(第三回)のエヴェレスト遠征
隊の隊長を勤めたブルース將軍は、若いころからインドに在勤
していたが、その多くの年をヒマラヤ辺境の部隊で過ごした。
將軍は高地住民のシェルパが、氷雪の山では非常に有能な素質
をもっていることを発見して、登山技術を教えこみ、登山や測
量に使用した。一八九五年ナンガ・バルバットの氷河で、有名
な登山家マンメリーとともに消えたふたりのグルカ兵などは、
ブルース將軍に育てられたシェルパの先達である。

シェルパが次第に数を増してきたので、ダージリンのヒマラ
ヤン・クラブでは、各人にナンバーを与え、その中でも技術が
すぐれ指揮能力のある者をサーダーとして、指揮をとらせるこ
とになった。ナンバーは初めから一連となっていて、死んでも

それは消えない。

一九三六年立教大学ナング・コット隊のサーダーだったナルサンは五番、アン・ツェリンは三十九番だった。マナスル隊のサーダー、ガルツェンは五十七、パンシー五十一、サルキ百五十七、アン・テンバ百七十九などである。現在ナンバーのあるシェルバは八十名ほどであるが、番号のないいわゆる未熟シェルバが非常に多い。マナスルに來た五人もまだ番号をつけてもらえなかった。今年（一九五三年）のようにイギリス、日本、ドイツ、スイスその他合わせて十カ国もの隊が一時に押し寄せると、八十人ばかりのシェルバでは、とても間に合わない。そこで、彼らの故郷ソル、クーンプ地方から多くの若者が狩り出されることになる。

山の英雄たち

優秀なシェルバは各国からひっぱりだこである。エヴェレストの初登頂者テンシンは一躍世界の英雄となったが、彼ほどエヴェレストに強い執着をもったシェルバも少ない。若いころはポーターとして、イギリス隊にしたがって、北側からエヴェレストへ行ったが、大戦後の一九五一年に、シプトンが初めて南側から踏査したときに、その有能を認められて選抜された。五年の春と秋には、スイス隊のサーダーとして抜群の成績を収めた。ことに春の攻撃には、隊員のランベールとふたりで、頂上直下三〇〇メートルまで迫った。そしてついに、ヒラリーとともに多年の念願を達してエヴェレストの頂上に立ったのであった。エヴェレストからがいせんしたテンシンを、ネパール

国民は熱狂して迎え、カトマンズでは、テンシン祭が三日も

続き、キングは勲章と終身年金を与え、議会はエヴェレストをテンシン峰と改名すると決議した。するとインドでは、これに負けずに、市民権と豪華な邸宅を与え、インドの誇りとした。

ネパール人にいわせると、テンシンの故郷ソル、クーンプ地方はネパール領だから、テンシンはいわずとしたネパール人だ。するとインドでは、生れはネパールでも、現在の住所はダージリンだから、われわれの同胞だという。ところでダージリン在住のシェルバは、今までインドの市民権を持っていなかったのだった。テンシンによってシェルバたちの地位も向上したわけである。しかし、シェルバの間では「テンシンはチベット人で本当のシェルバではないが、彼は強いから仲間に加えてやっているのだ」といった話がある。

テンシンのほかに、ヒマラヤですぐれた働きをしたシェルバはたくさんいる。一九二四年イギリスのエヴェレスト隊にしたがったイシェイ、チェディ、ソンチュンビの三人は、荒れ狂う烈風とすべっこい氷雪の斜面を八六〇〇メートルの高さまで、重い荷を運んで、イギリス山岳会から金メダルをもらった。このほかアン・ペンバ、ロブサン、ボムなどもすぐれた働きをした。

一九三一年にスマイスらにしたがってカメット（七七五メートル）の頂上に立ったレワの働きも忘れられない。彼はこのとき凍傷で両脚を切断した。このほかナング・バルバットの悲劇に登場するシェルバたち、一九五〇年フランスのアンナブルナ（八〇七八メートル）で活躍したアン・タルキーやサルキなど数え切れないほどの山の英雄たちがいる。ヒマラヤン・クラ

プでは、こうしてすぐれた働きをしたシェルバに、荣誉あるアイガー・バッジを与えることにしている。現在までの受賞者は十六人ほどだが、生存者はバサン・ラマ、テンシン、アン・タルキー、パンシーの四人だけである。

山に召される運命

ヒマラヤ登山史には、シェルバの悲壮な死がつきものであると、いってもよいほど多く死んでいる。

それは単に技術が未熟だからとのみは断定できない。酸素の欠乏、身を切るような烈風、すべっこい氷雪と岩の急斜面、あるいは死のアイス・フォールなどの極悪条件に耐えて、重い荷を負って登るのであるから、常時死の危険にさらされているのである。

ソンチュンビはエヴェレストの八六〇〇メートルまで重い荷を運んで歴史的な働きをしての帰路、第五キャンプ付近で落石にあたって死し、ロブサンは一九二九年に、ドイツのパウエル隊長にしたがってカンチュンジュンガで死んだ。一九二一年のイギリスのエヴェレスト隊で荷を運んでいた七名は、ノース・コルで雪崩にさらわれたし、一九三〇年国際登山隊とともにカンチュンジュンガへ行ったサーダーのチェタンは、雪崩に呑まれた。

翌三二年同じカンチュンジュンガのドイツ隊では、シャラー隊長とともにバサンが氷壁から真下の氷河のクレバスへつぶてのように落ちていった。ナング・バルバットの悲劇はあまりにも有名である。この山

では二十名近くのシェルバが消えた。一九三四年には隊長メルクルはじめ、隊員三人のドイツ人とともに六名のシェルバが、突如襲撃したモンスーンのために、頂上直下から退去の途上、力尽きていずれも凍死した。この時奇跡的に、足と手の凍傷だけで、生命を拾ったキッダは二年後、ナング・デヴィで死んだ。

さらに山の最大悲劇といわれる一九三七年のナング・バルバット事件がある。ドイツ隊のカル・ウィーン隊長以下七隊員、シェルバ九名が、第四キャンプに就寝中、突如落下した大雪崩の下敷となってしまった。このシェルバの中には、立教隊とともにナング・コットの頂上に立ったアン・ツェリン二号がいたのだ。このときベース・キャンプにいたため助かったナルサンは、立教隊のサーダーを勤めたことも忘れられない。今ではナング・バルバットは、シェルバにとって恐怖の山、鬼門の山として、だれも近づこうとはしない。

こうしてシェルバたちは次々と山に消えていくので、ナンバ―はまるで老人の歯のように欠番が多い。『山に召される子』といった運命が、シェルバにつきまとい続けているように思えてならない。

信仰と迷信

朝に夕に黄金色にバラ色に映えるヒマラヤの氷峰を仰ぎつつ育ってきたシェルバたちは、われわれ下界の者には測りしれない信仰と迷信をもっている。彼らは山を非常に恐れる半面、心の郷里のようになつかしむ。彼ら日常の簡易な生活ぶりから察

すると、いずれも生命をかけてまで山に登らずとも、平地には、生活にさしつかえない程度の仕事はいくらでもころがっている。

それなのに、危険をおかしてまで山に登るところに、山に對するあこがれと親しみを持っているともみられる。

彼らはヒマラヤの尊い山上には、シンギ(狛犬)が住んでいると信じている。その尊いお山はエヴェレスト、ツィリグマ、チョモルハリ、ゴサインタン、カイラスの五山である。

これらのお山へはるばる詣でて、山上のシンギを拝し、そこから流れ出す氷河の水を飲むと、長命幸福になれるといっている。

カングリ クツドニール ヨンエ

カンジュ トンニール ヨンエ

カンギ サンギール カルモ

ゴンバ シュンニール ヨンエ

「シンギの住む山にきて、雪の上にはすわっているシンギを拝し、氷河の聖水を飲んで、勇んで下山する」という意味の歌をシェルパたちはよく歌った。

立教隊のサーダー・ナルサンも、アン・ツェリン二号も信仰あつたらマ教信者だった。朝に夕に珠数をつまぐって「オム、マニ、ペー、メー、フン(真理は蓮の葉の上に)」をととなえていたし、朝出発のときはかならず生米をお経とともに天にばらまいた。

マナスルに参加したガルツェン、パンシーも同様だった。パンシーは、ことのほか信仰あつく、長男をラマ僧にするんだといつた。

われわれがベース・キャンプを出発するとき、パンシーは付近からネズの生葉をたくさん折って来て、もうもうと煙を上げて、安全を祈ってくれた。カンチェンジュンガへ行ったパウエル博士も、出発の光景を次のように述べている。

「われわれがいよいよカンチェンジュンガの攻撃を始める朝、シェルパたちは、ネズの生葉を山のように積み上げて、大仕掛の火をたき、祈禱の旗は天にひるがえっていた。彼らはいよいよこれからだと、山におわす神に、心からの祈りをささげたのだ。」

人が山で死ねば、それは神がお召しになったのだ。それがその人の寿命なのだといっている。

一九三四年ナンガ・バルバットで死んだピンゾ・ヌルブの死体を、隊員が雪の穴に埋めようとしたとき、シェルパたちは、それをさげきった。

「そのまましておいて下さい。ヌルブは神様の敷いて下さった死の床に眠っているのです。動かしてはいけません。」

一九三一年カンチェンジュンガで、ドイツ人シャラーとともに千仞のクレバスに呑まれたバサンの遭難場所を、一週間後に通って頂上を目指したとき、シェルパたちは急に立ち止まり、隊員の足下にひれ伏して、先に進んでくれるなど懇願し、さては荷物を投げ出して逃げ帰った。

「この突発的な申し出を、われわれは理解できなかった」と、パウエル隊長は述べているが、シェルパは「遭難地へ同じ時刻に行く、必ず自分も遭難する」と信じているからだ。

エヴェレストはついに登られた。これは九回目初めて成功したのであるが、初め失敗を重ねていたころ、チベットのタラ

イ・ラマは、「エヴェレストは、百年の間は絶対に人間を寄せつけない」と断言したそう、シェルパたちもこれを信じていた。「登れない山へ多額の金を使って来るには、何かこんたんがあるに違いない。あるいは山登りを看板にして、チベットの埋蔵金を掘りに来たんじゃないか」といううわさがあつた。

当時の隊長ブルース將軍は、「イギリスには、山岳を崇拜する宗派がある。われわれは、世界最高のエヴェレストを礼拝しにやってきました」と、答えたというエピソードもある。

マナスル隊もこれと似た話を経験した。ベース・キャンプに着いて、二、三日後、ふもとのサマ僧院に詣でたところ、その七十五歳になる老僧正は、「カンブンゲン(マナスルのチベット名)の頂上には、ダイヤモンドと黄金があると伝えられているが、登ってもそれだけとはならないでくれ」といった。

すると、サーダーのガルツェンは、すかさず「日本人のほしがついているものは、そんなお宝ではなくて、頂上の写真だけだ」と、当意即妙の答えをしたので、老僧正は満足げであった。

こんな明答をしたガルツェンも、ヒマラヤにはイエティ(雪男)がいて、人間の心臓をとり食うと信じている。イエティとは、人間の顔をして、全身まっ黒な長毛におおわれた一・五〇メートルから二メートルあつて、二本足で歩く怪物である。

こ奴は雪山をハヤテのように走って、人間の心臓ばかり狙う。しかも人語を解して、吹雪の夜などは、テントの入口にたずんで、友だちの声色をまねて誘い出そうとかかる。こ奴に見つかつたら絶対に助からぬというのだ。

マナスル踏査のとき、東尾根の雪上に点々と、動物の足跡が印されてあつたのを見たシェルパたちは、「イエティの通つた跡

だ」と恐れおののいた。翌日、チベット人を連れて、その近くのモレーンを歩いてみると、「イエティが出た」と叫んだ彼は、風よりも早くすつとんで行ってしまった。なるほどその雪上には、前日見たよりはるかに大きな動物の足跡があつた。幅二〇センチ、縦四〇センチ以上はあつた。内心ビクビクでその足跡をつけて行くと、三〇〇メートルほど先の氷河のセラックスの間に、うごめくまっ黒で大きな動物の姿が見えた。これを望遠レンズで、カメラに収めようとしたが、あわてていたため、レンズの装置するのに手間どっている間に、見えなくなつた。その動物の正体はなんであつたか、自分にはわからない。

シェルパたちの迷信は、まだまだたくさんある。山にはいる前に生物を殺すと、山は荒れるとか、肉を直接火で焼くと、火の神様の怒りにふれるとか、われわれには解し兼ねることがたくさんある。しかし、若いシェルパたちには、そうした迷信はらい落そうとしている様子が、見えてきたことはうれしい現象だ。

彼らの賃金

彼らの賃金は、ヒマラヤン・クラブで決めてくれる。ダーズリン在住のヒマラヤン・クラブのヘンダーソン夫人が、いっさい面倒をみてくれている。十七年前ナンダ・コットのときは、サーダー・シェルパが一日三ルピー(当時約四円)、シェルパが一ルピー(約一円三十銭)であつた。

食糧、汽車賃、装備はもちろん隊の負担である。万一、死亡

したときには、独身者三百円、妻帯者四百円を支払うことになつていた。

現在、一カ月でサーダー一八〇ルビー（一ルビーは約七十五円）、カンサマ（料理人）一二五ルビー、最上シェルバー二〇ルビー、訓練されたシェルバー一〇ルビー、未訓練で家族持ち一〇〇ルビー、未訓練独身九〇ルビーという規定である。

なお汽車賃は三等、車中食費一日二ルビーで、契約したときに五〇ルビーの先渡しと一〇〇ルビーの支度金を先払いする。傷害のときは、指一本一五〇ルビー、一眼三〇〇ルビー、両眼五〇〇ルビー。死亡は独身で五〇〇ルビー、妻帯者は一〇〇〇ルビーを払うことになっている。

このほか装備品である寝袋、羽毛服、シャツ、くつ下などすべてサーブ（主人）と同じ物を与えられるので、彼らはこれを大切に持ち帰って売り払うので、何ヵ月かの賃金よりも高い収入となる。

彼らの見た外国登山隊

外国隊について、十数度もヒマラヤへ登っているパンシーやガルツェンらに、評判記を聞いてみよう。

イギリス隊はいばつていて労力を惜しみ、人使いが荒い。それが最近になるほどひどい。そのくせウイスキーをいちばんよく飲む。ただし、ブルース將軍とラットレヂ（エヴェレスト遠征四回、五回の隊長）のふたりだけは別だ。

スイス隊は金持で、食糧や装備が非常によい。隊員も親切で強い。しかし、装備品が多いので、シェルバは忙しくて疲れ

したが、そのころからすでに登頂を投げ捨ててしまつて、積極的になくなった。マナスルはもうあきたので、日本隊のサーダーを他の人にゆずると、仲間にもらしたという。

パンシー（51）五十一番。三六年エヴェレスト、三七年ガルワル、三八、九年シッキム、四九年ピラミッド・ピーク、五〇年アンナプルナ第一峰、五一年ガルワル、五二、五三年マナスルに参加。

タイガー・バッジの受賞者である。「五十一歳と登録されているが、竹節サーブと同じ四十七歳だ」といっている。彼は熱心なラマ教信者で、朝夕誦経を欠かさない。重い荷を負って氷雪の上へ登ることよりも、コックを好む。

フランス隊のアンナプルナでも、日本隊のマナスルでも、もっぱら料理役を勤めた。彼は料理場のかまどの前にすわっているときは、いかにも楽しそうである。ケーキを作ることが得意で、われわれは彼の作るおやつを、首を長くして待ったものだ。ただし、羊でも鳥でも骨のついたままで、いつも同じ味の料理には閉口した。「パンシー、その料理はこうするんだ」と教えても、「ノーグッド、サー」といって、決して改めようとはしなかつた。「タヌキおやじ」と隊員は呼んではいしたが、人あたりが柔らかなて憎めない好々爺だ。物知り、話上手であつたので、彼のかまどの前では夜ふけまで、隊員やシェルバの笑い声が続いた。

彼の弟アイラは、アンナプルナでフランス隊に仕えたが、これでもなかなかの「タヌキおやじ」だと、エルツォグは書いてある。アイラの細君はガルツェンの妹である。

サルキ（34）百五十七番。四六年ヌン・クン、チョモ・ユン

る。

ドイツ隊は労力を惜しまない点は、日本人に似ている。食糧や習慣が、シェルバと非常にちがうので苦勞する。よく死ぬので恐ろしい。特にナンガ・バルバットはまっぴら御免だ。

フランス隊は口やかましくてうるさい。シェルバを酷使するが、隊員は強い。しかしケチだ。

日本隊は労力を惜しまないし親切だ。顔がよく似ているので、近親感があつて親しめる。食事の習慣も似ているのでやりよい。ドクターが、シェルバや住民に積極的に治療してくれる。外国隊は住民の治療はしてくれない。ロキシ（地酒）をよく飲む。

マナスルの協力者

ガルツェン（39）五十七番。（ヒマラヤン・クラブの登録ナンバー、以下同じ）三六年、三八年エヴェレスト、三九年カラコルム、四六年ヌン・クン、四九年ピラミッド・ピーク、五〇年アンナプルナ第二峰（ティルマン）についてマナスル西面にも行く）、五一年チャウ・カンバ、五二、五三年マナスルのサーダー。

目玉のガルツェンというニックネームをもらっている。温順で実直で、むしろサーダーとしては内気過ぎて、不適當と思われるときもあった。

しっかりした技術を身につけてはいるが、割合に臆病にみえる。今年（五三年）はまったく元気がなく、ノース・コルでは、高山病ですっかり参つて、一時ベース・キャンプに下つて静養

モ、五〇年アンナプルナ、五一年ガルワル、五二、五三年マナスルに参加。

ヒマラヤン・クラブのノートには「将来を最も期待される若者」としてある。彼は確かに勇気とりっぱな技術者である。一九五〇年のアンナプルナでは、すばらしい働きをして、フランス隊から感状をもらった。このとき、ベース・キャンプからツクチャまで、四日かかる行程を一日半でフツとんだ後、第五キャンプ（七五〇メートル）まで荷を負い上げた、すばらしい体力を持ち、韋駄天のように足が早い。

マナスル踏査隊のとき、五三〇〇メートルの氷河で、高木がクレバスに落ち重傷を負つたので、その救援をベース・キャンプに頼む役を彼が引き受け、二日ばかりで登った險路を、たった二時間でフツとんでくれた。

料理も上手で、むしろパンシー以上の腕前をもっている。頂上アタックには、サルキの活躍を最も期待していたところ、第一回のアタックのときに、ノース・コルの深雪をむちゃくちゃにラッセルしたために、疲れ果てたあげく、持病の胃痛を再発して、使いものにならなくなったのは、かえすがえすも残念である。

非常にさっぱりした性質であるが、気が短くて、たびたびチベット人ポーターと争つた。特に帰路の第一日、ラルキヤ・マレーケットで、酒に酔つた上、ラマ僧をなぐつたために、シェルバとチベット人夫の乱闘を引き起し、一時はどうなることかと心配した。

アン・ツェリン四号（39）百一番。三六年カラコルム、四七年ガルワル、四九年ピラミッド・ピーク、五〇年ネパール、五

一年ガルワル、五二、五三年マナスルに参加。

付

シュルバの仲間には、アン・ツェリンという名が多い。ナンガ・バルバットで、メルクル隊長の従者をしたアン・ツェリンが一号で、立教隊とナンダ・コットに登ったのが二号、パンシは三号であったが、外国婦人登山家がつけてくれたニックネームを、そのままちょうだいしている。

四号アン・ツェリンは、陽気なシュルバの中では、異例のふあいそで無口者だ。五二、三年と合わせて六ヶ月ほど彼と生活したが、笑顔を見たのが二、三回しかなかった。

昨年(五二年)の踏査隊に加わる直前に、最愛の妻に先立たれたので、沈んでいるのかと思つたが、今年(五三年)も同様むつりしてとおした。酒もタバコも相当やるが、飲んだからといって、少しも朗らかにならない。馬力はあるが、氷雪上の技術は確かではない。第七キャンプでは、頭が痛いといつて一日中、テントの入口にうずくまって、夢遊病者のように、くつの紐を結んだり解いたりしていた。隊長の身の回りの世話をしていたが、あるとき、スウェーターを持って来いと命ぜられたが、なかなか持って来ない。行ってみると、三つの箱をひっくりかえして大汗で捜している。聞いてみると、彼は全然文盲で、箱に書いてあるナンバーを読めないで、その箱の重さによって中身を記憶していたのだということがわかった。隊長はその前に、都合で中身を入れ代えたので、目方が異なつたためにアン・ツェリンの感がすっかり狂ってしまったというわけ。これにはわれわれも、開いた口がふさがらなかつた。

ラクバ(29) 百六十四番。四九年ピラミッド・ピーク、四九年五一年パンチ・チュリ、五二年チャウ・カンバ、シュカール・ビ

ーク、五三年マナスルに参加。

日本の、いなかのあんなちゃんそっくりの顔をしている。非常に真面目でファイトも盛んだ。英語も、仲間のうちでは話せる方だし、絵も少々画ける。プラトリーまで荷上げたひとりだ。

将来はサーダーになれるだろう。後に科学班について行ったが、土地の娘と恋仲になって、そのために、科学班は迷惑したという事件があったが、来年(五四年)も是非雇いたいと思うひとりだ。

アン・ノルブ(23) 百七十二番。五二年エヴェレスト、五三年マナスル。

中背で少々肥え過ぎているが、なかなかの美男で、しかも素直で朗らかな青年である。プラトリーへ登ったときは五人のシュルバのうちいちばんへこたれたが、経験をつめばりっぱなシュルバとなろう。

ミンマ・シター(29) 百六十八番。四七年シッキム、四八年ローナック峰、五二年、エヴェレスト、五三年マナスルに参加。

エヴェレストでは、ハイ・キャンプまで荷を上げた少ないシュルバのひとりだ。気分のよい朗らかな青年で、歌が非常にうまい。人当りが柔らかで歌がうまいので、行く先々の娘たちからよく持てた。氷雪技術も割合にしっかりしていて、プラトリーまで登ったひとり。来年(五四年)は是非加えたい。

グンデイ(28) 百六十七番。五二年チャウ・カンバとエヴェレスト(秋)、五三年マナスルに参加。

秋のスイス隊エヴェレストでは、八二〇〇メートルまで荷を負い上げた。マナスルでもサポート隊となつて、第九キャンプ

ニマ・テンジン(24) 百七十七番。五二年ネパール、シュカール・ピーク、五三年マナスルに参加。

小兵で、いっけん小学校の先生の印象を与える。控え目に振舞い、馬力も技術もこれといったものがない。

キツバ(28) 未登録。五二年エヴェレストに参加。

電信柱のようにヒョロヒョロした奴で、性格もまったく変つている。トラベルのときは、飯やお茶を運ぶ役をもつぱら引き受けて、少しも目立たなかつたが、ベース・キャンプから上では、人間が変わつたように陽気となり、荷物もいちばん重いものを負つた。ことに第四から第七までの間をいちばん多く往復した。ところが、ベース・キャンプからの帰路は毎日ロキシーをた。ところが、酔つてチベット人ポーターと格闘などした。ボカラであおり、酔つてチベット人ポーターと格闘などした。ボカラで滞在中は暇さえあれば眠りこけて、「キツバの頭は変になつたんじゃないか」と心配したほどだった。また尻からヤニが出るほどタバコを吸いちらした。

一九五一年シプトンがエヴェレストへ行ったときは、ボス

ト・ランナーとして雇われた。

ニマ・テンバ(20) 未登録。五二年エヴェレストに参加。最年少者で、隊員から「チビ」と呼ばれた。技術も馬力もまだ子供の域を脱していない。

アン・ツェリン五号(29) 未登録。中肉、中背で女のような感じを受ける。先発隊がタージリンでシュルバを選んでいくときに、総髪をお下げにしたチベット人が現われたので、女かと思つたそうだ。初めての雪上生活なので、彼にはなにも期待はできなかった。トラベルの途中で、何年も会わなかつた姉とバツタリ会えて、とても喜んでいて。彼の姉は一族郎党を引き

まで荷を負い上げ、その途上、プラトリーの壁で、アン・テンバのスリップによって、彼をまじえた三人のシュルバが、四〇〇メートル直下のノース・コルへ転落の一瞬前で、機敏な動作と強引な踏張りをみせて事なきを得た。

他のシュルバと異なつて、色白の優さ男に見えるが、どうして、ピンと太い筋のはいつた精神の持主であるし、技術もしっかりしている。父の郷里は、ソル、クーンブ地方から、三ヶ月もかかる中国の辺境だといふ。

ニマ・ツェリン(26) 未登録。五二年エヴェレスト、五三年マナスルに参加。

中肉、中背で頑健そうに見えるが、アイス・フォール登攀中に高山病にかかり、使いものにならなかつた。技術はまだ未熟である。ただし、村々の娘をあさることは一人前であつたようだ。

アン・テンバ(29) 百七十九番。五二年カメット、五三年マナスルに参加。

中背やせ形の青年で、陽気でおどけたところがあり、好感がもてる。技術はまだ未熟であるが、プラトリーまでサポートした勇氣は買つてよい。後に科学班と同行した。

アン・ダワ(24) 未登録。四九年ピラミッド・ピーク、五二年エヴェレスト、五三年マナスルに参加。

立教隊とともに、ナンダ・コットに登頂したアン・ツェリンの遺児である。シュルバの仲間では大兵の方で、馬力もある。素直で控え目の性質、向学心に富んでいる。技術はまだまだであるが、近い将来にりっぱなシュルバとなろう。親子二代日本

隊に使えたことを誇りとし、献身的に働いた。

連れて、われわれのポーターをつとめ、クディまで来てくれたのはありがたかった。

付記 II ついでながらシェルバの名に、ダワ、ミンマ、ラクバなど多いが、これはチベット人やシェルバ族は、子供

付

の生れた日の曜日によって名をつける習慣である。月曜はダワ、火曜はミンマ、水曜はラクバ、木曜はブルブ、金曜はバサン、土曜はベンバ、日曜はニマである。このほかにアンは赤ん坊、ツェリンは長命、カルマは星などである。

3 装 備

加藤喜一郎
村木潤次郎

梱包ならびに輸送

ヒマラヤ遠征では、よい梱包というのが準備にあたって頭を悩ます問題のひとつである。われわれの場合では、東京からベース・キャンプまで、別表にかかげた総重量六・五トンの装備などを、いかなる梱包によれば、最も安全に、そして輸送中途でなるべく手間を省いて運べるかの問題であった。徒歩旅行の始まるカトマンズまでの運送の方法は、まずカルカタまでは、船便と空便とにわかれ、同地で通関のために一カ所に集められ、カトマンズまで空輸されるという方法によった。この間は、長い船便は酷熱の大洋を通って行く。防湿という点も考慮されねばならない。しかし、われわれにとって梱包問題の最大の対象は、カトマンズからベース・キャンプまでの約二十日間の徒歩旅行にあった。もとよりこの間、遠征の荷は、三百人近い人夫の背にかつがれて行く。それには梱包は、あつかい易く、かつぎ易いかたちで、丈夫でしかもなるべく軽い材料でできており、防水の工夫があり、盗難予防の装置もあるようなものでなければならぬ。しかも、徒歩旅行中、登山にかかっているだけで必要となる純登山装備品を除けば、毎夜われわれの露営生活に必要な装備品が多くを占めているから、梱包の開閉は、

できるだけ簡単な仕かけのものが欲しい。ここで梱包容器と内容物との関係を大別すると別表のようなものである。

この荷物一個あたりの重量は三〇—四〇キロの間に止めてあり、船便の場合は、この四、五個をまとめて重量約二〇〇キロになるように大きな木箱に格納した。木箱はターポリン紙を入れて防湿してある。

背負木箱 (A) は $72 \times 42 \times 32 \text{cm}^3$ のベニヤ板製で、錠付き、外側はシート・カバー、またはキャンバス袋。個人装備用木箱は内部を三段に仕切っており、大きさはよかった。キャンバス袋は三種の大きさをうい、別に貨幣用として南京錠つきを若干用意した。

梱包要領は大体以上のようなものであるが、人夫との契約でひとりあたりの輸送重量が三〇キロであったため、カトマンズで再梱包をしなければならなかった。このことはカトマンズでの仕事を繁雑にし、

梱包容器	内 容	個数
木箱 A	個人装備 電気関係 器具 炊事用具 登山用品 山装備の一部 雑品	45
キャンバス袋	露営用具 登山装備 食糧の一部	大40 中40 小40
木箱 B	液体燃料を1ガロン かんに入れ5ガロン ずつ格納した	16
シート包	食糧 カートンボックス に入れこれを3 個ずつシートに包む	75

嚴重に三〇キロ単位とし、内地で行った梱包を現地で変更することなど絶対にないようにしておかなければならない。

次に包装材料の問題であるが、今回は防湿用としてターポリン紙を使用した。われわれの荷物は一度インドの酷暑の中を通り過ぎて、再び厳寒の地に向かうわけであって、なるべく温度変化によって影響されないようなものがよいと思う。ターポリン紙はほぼその目的を達しているようではあるが、一部高温のためターログがしみ出して内容物を汚損、使用に耐えなくなったものがある。これだけのために登攀が不可能になる場合もないとはいえないから十分注意すべきことである。

このように寒暖の変化の激しい環境に置かれる物としてはタール質の防湿材より、金属箔、たとえばアルミニウム箔などを使用した防湿紙を使用すべきではなかったかと考えている。

ベニヤ板で作った木箱は机、腰掛などの代用にもなり比較的好結果だったが、強度重量の点で、いまだ考慮の余地があるように思う。なお個人装備用の木箱には特に背負い用の環を取りつけたが、ほとんど使用せず不要であった。

最後にもう一つ今後の計画の際、注意したいのは液体燃料の輸送用容器である。今回はケロシン、木精がその大部分であり、これらを日本石油株式会社に依頼して、一ガロン入りのブリキかんに入れ、さらに五ガロンずつ木箱(B)に入れて運んだわけであるが、かんの破損による消耗が二割近くにもおよんでしまった。その分だけ余計に見込んで持って行けばよいといっても、その間の修理、点検などに要する労力はばかにならない。こんなマイナスの仕事をするのは無意味でもある。このように登攀に全く関係がないようなことながらも、細心な注意

を払はねばならないことは、ヒマラヤ登山の性格を端的に物語るものであるが、やって見ないとなかなかわからないものである。次におもな装備品について解説してみた。(一六二—一七〇ページのリスト参照)

第一類 高地用個人装備

羽根入りチョッキ オレンジ色で、両胸にポケットあり。きれ地一〇〇番双糸プロード。ベース・キャンプから第四キャンプぐらいまで、朝夕寒さを感じるころ着ると軽しい、活動的にできているので非常によい。中間地帯用として考えたもので吉田テント店製。

羽毛服(上下) 濃紺、上下ポケットなし。そと、ひざ下はジャージ、ズキン付きで上下ともチャック開閉、ナイロン地。目方は上下で一五〇〇グラムとしたが、羽根の量(上下で二〇〇匁)もちょうどよかった。着ていても活動的であり、ヒマラヤには是非必要である。今回はポケットをつけなかったが、これは必要である。フランス隊の見本をみて、われわれで改良した。東洋レーヨン株式会社製。

ウィンンド・ヤッケ(上下) 濃紺、きれ地はナイロン地、上衣ポケットはドンブリ式。目方、形は着て非常によかったが、防水は不完全であった。ズボンのふくらはぎの外側の所に紐をつけて絞るようにしたが、これは不必要。ポケットのドンブリ式はよい。ひとり二枚は必要。形式を示して東洋レーヨン株式会社で製作。

手袋類 手袋は七種類持って行ったが、結局、半分ぐらいし

か使用しなかった。モンsoon前の氷河上は非常に暑く六〇〇

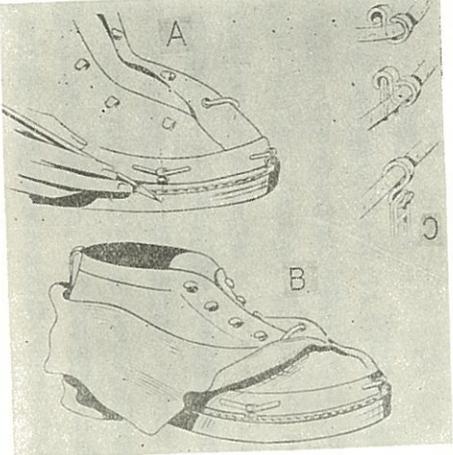
〇メートルぐらいまでは、手袋は夕方とか、くもっているとき以外は不要であった。結論としては下の方では皮の五本指手袋で十分であった。七〇〇メートルぐらいからは、いちばん下にミトン手袋、その上にミトンの皮手袋、そして非常に寒い時にはその上に羽毛入二本指手袋をすれば十分である。今回、以上のような使用方法で手は一度も冷たくなかった。回、このような使用方法で手は一度も冷たくなかった。くつ下類 今回は毛糸が悪かったのでどれも非常によくなかった。脱脂してなくて厚手に編んだものがよい。今回はいちばん下に薄手を二枚、その上にシブ・スキンくつ下、その上に厚手くつ下二枚が標準であった。サイズがほとんど同じであったから、はきにくく、足がしまってしまったが、だんだんに大き目のサイズとすべきだ。シブ・スキンは非常に水分を吸収するから油足にはよい。これをまん中にはけば、厚手くつ下の方はほとんど、かわいている。第八キャンプ以上で足は相当に冷たく感じたし、軽い凍傷に数回なっている。キャラバン中はナイロンで編んだ厚手のくつ下を使用した。伸び縮みした欠点をのぞけば、かわきも早く非常に丈夫なので低地用にはよい。これは東洋レーヨンで特別に作製したもの。

ラクダ下着(上下) 値段の関係上、中級品を持参したが、織り込みのなかに馬の毛のようなものはいっており、ちくちくして非常に不快であった。保温上ラクダは最良であるが、もっと高級品を持って行くべきである。群是産業株式会社製。

厚手スウェーター 色はねずみ色と濃紺、初めトックリ式のもの考えたが、結局、首をしめられる感じがするので、首の部分を開放式として襟をたてると頭の中ほどまでにくるような式に

した。形式としては非常によかったが、毛糸がよくなかった。やはり脱脂せぬ毛糸で厚手のものに起毛したい。群是産業製。

取付式オーバー・シューズ スイス製と吉田テント店の両方持参した。これは今後、是非必要である。途中、くつを水分から、および損傷から防ぎ、操作も非常に簡便である。これはくつの底皮のぬい目の所にひっかける釘を五カ所、自分で簡単に打ちつけられ、それにカバー金具をひっかけて、かかとの所で紐をしぼり、後は前を編み上げくつのように編みだけである。ただ防水をより完全にすることによって、非常に有効なと思う。ただ国産のはきれ地がかたすぎて、雪がはいってきしたが、スイス製のは不思議なほど雪がはいらなかった。



スイス(トリコニー)製オーバー・シューズ Aの鉛筆でさしている所にひっかける釘を打ちこんでCのようにカバー金具をひっかければBのようにすっかりくつをカバーできる

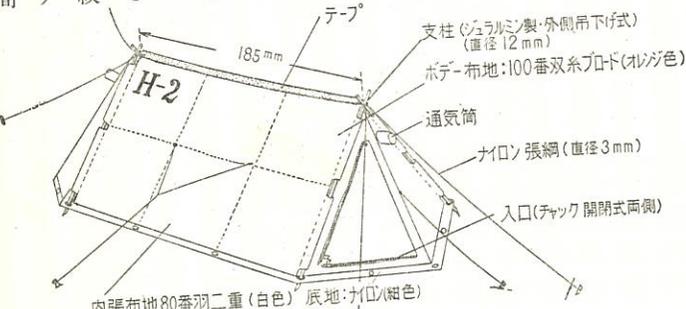
カッター・シャツ 特別の上着というものを考えず、フランスのワイシャツを各自二枚ずつ持参した。きれ地も最良のものであり、活動的で非常に暖かく特別の上着は不要である。大津

高地用雪眼鏡 色は濃茶色であってよかった。ひとりも雪目にならなかった。しかし、眼鏡のまわりの顔にあたる部分のきれ地およびゴムバンドが非常に粗雑であったので、破損が多かった。ひとり二個は必要である。好日山荘製。

高地用登山ぐつ 底はビブラムで、上を特別注文の皮とし、くつ先を大きくして中でゆっくり指が動かせるようにして凍傷に対して万全を期した。結論としては皮ぐつは耐寒限度があり、七五〇メートル以上はフェルトのくつを使用するとかして、重量の軽減、および保温を考へるべきである。今回、テント・シューズとして持参した羽根のくつは登山ぐつの上にはいい。みたところ七五〇メートル以上で非常に暖かくよかった。今後は羽根とかフェルトを多量に使用したくつに移って行くのではなからうか。今回のくつ底はスイス製と藤倉ゴム製のビブラムを使用した。日本製のはスイス製をしのぐものもあるかと思うと、すぐにへってしまうものがあつたり、製品に非常なむらがあり、今後、製作者の方でひと苦労してもらえば、日本製で十分である。皮は日本皮革株式会社特別に注文したが、それほどよいとは思わなかった。くつは高橋、森田両くつ店で、製作してもらつたが、両店とも、最初は最近のスキーぐつの傾向のように、くつ先を細くつとがらした式としたので、再度、作りかえてもらったが、それでも先がしまりすぎてしまった。今後、くつ屋にはスキーぐつと登山ぐつとは根本から異なることを、徹底的に教えこまねばなるまい。

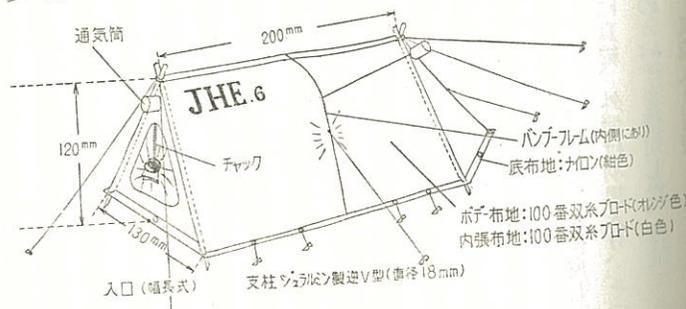
日焼止クリーム 全部スイス製のものを使用した。氷河の上は日中、四五度以上にもなり、輻射が非常に激しいから、どう

中間キャンプ用十張りの大きい方をできるだけ使用した。支柱および内張り取付けの点では使用簡便でよかった。欠点は小さかったこと、入口の開閉をすべてチャックとしたために、これが全部こわれてしまい、最後は入口をボタンで、やつと締めていたような具合だった。このような小さいテントは最後のアタック用としてのみ使用すべきで、第八キャンプあたりまでは輸送力が十分あるから、生活に快適なものを持って行き少しも体力の維持に努めるべきである。布地は外張りが一〇〇番双糸ブロードのオレンジ色、内張りは絹白色、底がナイロン地、張紐もナイロン、支柱はジュラルミン、製作は吉田テント店。



ミード型二人用テント(最高所キャンプ用) 全長185cm 全幅110cm 全高100cm 全重量3,750g

便をはかったが、この場合のチャックは、一つも破損せず、この式の入口は非常によかった。外張り一〇〇番双糸ブロード、オレンジ色、内張りも一〇〇番双糸ブロードの白色、底がナイロン地、張紐もナイロン、支柱はジュラルミンの一八ミリ。製作は吉田テント店。なお、ヒマラヤでは炊事をシエルバがやるので、以上のテントではなかなか多人数の炊事に時間がかかるし、操作も不便であるから、第七キャンプぐらまでは特別に炊事用テントを持参すべきである。マナスルに関しては第四キャンプ(五六〇〇メートル)が前進根拠地となるので、十分に休養を取るためにここまで大きいテントをあげるべきであり、食堂および隊員の雑談所としても、少なくとも十五名ははいる家型のテントがほしい。今回は雪のブロックとシートによって、倉庫と食堂を数日ばかりで作りあげたが、この労力は非常なものである。また第八キャンプ(七一〇〇メートル)はコルで、風も強くテントは雪にうずもれてしまうので、丸テントのように両者に強いテントを用意して行くべきであった。結局、頂上の近くはできる



ミード型三人用テント 全重量4,500g

しても日焼止クリームが入用である。四十数日で数回顔の皮がむけたし、くちびるはがさがさで、タバコもスnoopも吸えないこともあったが、これによって相当防げることは確かである。スイス製。

目出帽 今回はジャージの最良品を二重にして作成したが、非常に目がつんでおり、毛糸の目出帽より暖かかったし、また非常に伸び縮みするので、あごを出したり、かくしたりなかなか具合がよかった。好日山荘製。

絹下着(上下) 非常に暖かいものであるが、今回は作り方が大きすぎ、ズボン下も、ズボンのようにからだにばふふにあたるように作つたために、動くとかえって冷たく感じた。からだにぴったりとしたものを使用すれば、非常に暖かいものである。絹は低地では汗でべたべたするので使用すべきでない。細野テント店製。

第二類 露営用具類

ミード型二人用テント この種のテントは二種類作製した。a、最高所キャンプ用(八張) 使用簡便を計り、支柱は外からの取付け、まん中でさし込みとし、内張りも取付け、両側に三角の張り出しを出して入口の開閉はチャックで行うようにした。

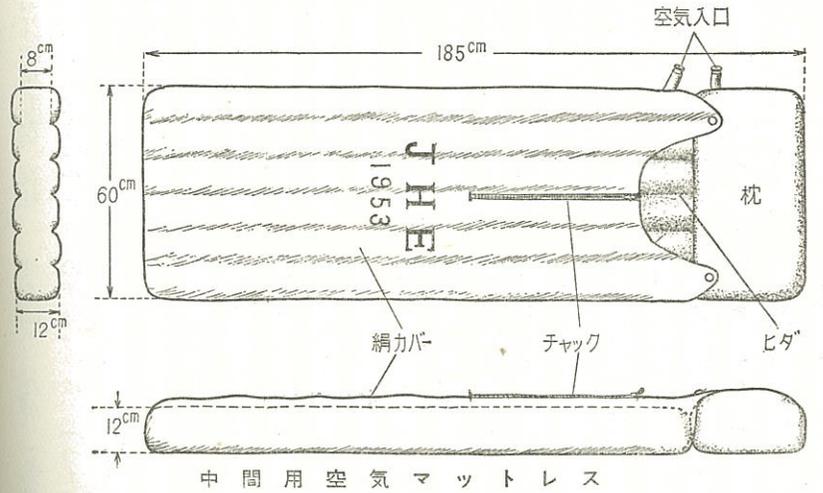
これは昨年の踏査隊の結論によってできるだけ使用簡便に、重量もまたできるだけ軽くすることを主眼として、でき上がったもので、今度の雪上生活五十日近い結論としては、小さすぎたため内にはいつている時間がながいのでからだは休まらず、

だけ簡単な軽いものを使用するとしても、ベース・キャンプからせめて第七キャンプまでは、体力などの維持からいっても十分余裕のあるテントを持って行くべきである。

ヘヤーロック・マットレス 外側を薄いパーバリーで、長さ

は頭から腰までを一枚としてこれをひとり二枚使用した。一枚は四つにたためるようになっていた。これはキャラバン用、ベース・キャンプ用、および空気マットレスのスペアとして持参した。空気マットより二枚使用すると重量も重くなるし、非常にかさばることが欠点である。雪上で長期に使用するとすれば、この上にビニールなどのカバーをつけねばならず、重量はますます重くなる。ただ、ベース・キャンプでテント全体にしきつめるとなかなか快適である。吉田テント店製作。

空気マットレス 高地用と中間用の両方製作した。高地用は枕付きで足をのせるところはなく、からだの半分、枕とからだのところは空気を一カ所に入れるようにして重量の軽減をはかった。中間用は、からだ全部と上部に絹でカバーを取りつけた。枕とからだの方とは別々に空気をいれるようにして、十分睡眠を取れるようにした。重量は高地用四〇〇グラム。中間用はカバー付きで一四〇〇グラムであった。



ねれてしまい、ほとんど使用しなかった。使用する場合にもひとり二個使用した中間用はカバーもついており、寝心地もよく非常に快適であった。難をいえば二、三個のうち、どこからともなく、空気のぬけてしまうものが数個あったことで、これは破損した所がわからず修理に困った。また厚さが少し厚すぎたが、これはミシンをたくさん入れて、空気をいれる労力を少しでもはぶくべきであり、また枕は相当高くすべきである。またマットの両側は高くした方が快適であると思う。藤倉ゴム株式会社製作。

空気入れ ふいご式とゴム袋式の二種類を使用した。ふいご式はある程度重量もあり、相当力を使用せねばならず、また破損しやすいのでよくない。ゴム袋式は長さ一メートルで直径四〇センチの袋になっており、吸い出し箇所には、ジュラルミンで中にセルロイドの弁がついており、軽いふうせんをつぶすようにして一回で非常にたくさん空気がはいり、簡単に破損もなく便利なものである。藤倉ゴム製作。

シュラフザック(寝袋) 一重の寝袋は寒いので、二重の寝袋を使用した。内側に真綿、外側は羽根入り、その上に綿のカバーを使用した。

a、真綿入り寝袋 きれ地は一〇〇

番双糸ブロード、中は真綿、重量一二〇〇グラム、オレンジ色。これは、羽根二重よりも内張りに真綿の方が暖かかったが、結果においては羽根二重の方が暖かかった。しかし、真綿と羽根と両方で寒くて寝られぬ晩は一回もなかった。これは製作の手違いから、たけが非常に短く、大きい人には小さくてきどくであった。これは今後、羽根にすべきである。ズキンはなく肩あてあり、入口はチャックなしで着物のあわせのようになおせるだけにした。吉田テント店製。

b、羽根入り寝袋 きれ地はナイロン、中は羽毛、重量一三五〇グラム、色はオレンジ色。ズキン付き、入口はチャック、その上にベロを出してボタンで止め、やはり大きさが小さいのがいちばんの欠点であった。ズキンは是非つけるべきである。が、いちばんの欠点であった。ズキンは是非つけるべきである。チャックの外側にベロを出したのは間違いで、むしろ中につけるべきである。というのは寝てから、あごにチャックがあたって冷たいからである。ナイロン地ははじめ非常に冷たく、ぬれてはいるように感じるから、いちばんからだにあたる所のきれ地はブロードとすべきである。高所では出入に相当苦勞するもので、入口のチャックはひざぐらいまであくようにすべきである。東洋レーヨン製。

c、寝袋カバー きれ地は綿、色はカーキ色、これはキャラバン中は暑いので、これだけで寝るため持参したが、高所でも使用することを考えると、もっときれ地は薄手のものでもよいと思う。これもチャックを入口につけて下まであくようにしたらいと思う。吉田テント店製。

装 スコップ ジュラルミン製、柄は木で軽くて非常によかったが、これもジュラルミンにしてもよいと思う。今回は五丁しか

持って行かなかったが、どうしてもモンストンの前だったらば、十五丁ぐらいは欲しい。欠点は強度が不十分。那須アルミニウム工業株式会社製。

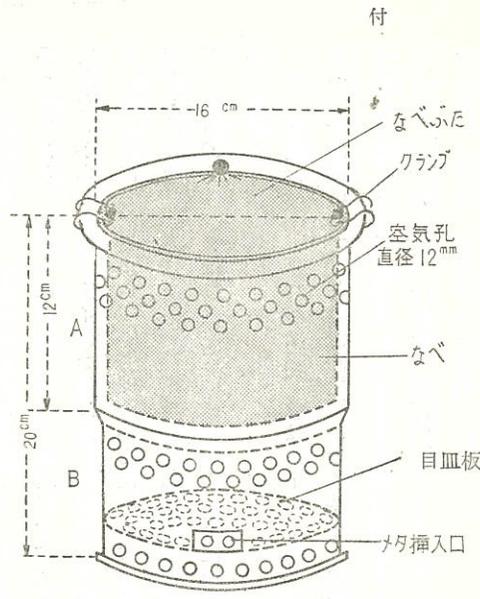
ペグ 雪の所は長さ三〇センチのV字形のペグを持って行ったが、第四キャンプあたりからは雪が粉雪のため、ペグが短くてきかずにスペアのピックルを使用した。今後は五〇センチぐらいのペグを何パーセントか用意すべきである。またアイス・ピンのようなペグを氷上のために持って行ったが、第九キャンプしか使用しなかった。

第三類 炊事器具

高圧鍋 特に軽量を目的として、二・五ミリのアルミニウム板を圧して作った。容量一升炊き、重量二・五キロ、昨年も経験したことであるが、シェルパは高圧鍋の使用を極度にいやがり、なかなか使用しようとしなない。彼らの米の炊き方は日本のでなく米を煮るのであるから三八五〇メートルのベース・キャンプでも、なんとか食べる程度にたぎあけるけれど、うまくないことはなほだしい。しかし、シェルパ、ポーターを入れて四十人にもおよぶベース・キャンプの炊事では高圧鍋はちょっと無理かもしれない。シェルパに圧力鍋の使用を教えこみ、安全に使わせるためには、それだけでも相当な仕事になることを覚悟すべきである。那須アルミニウム工業製。

ふた付き鍋 プリムス・ストーブとメタ・クツカーのいずれにも兼用できるようにした径一六センチ、深さ一二センチ、底の平らなアルミニウム製の鍋、ふたにはクランプを付け固定で

録
 きるようにし、運搬の最中に食糧を入れて運べるようにした。
 重量四〇〇グラム。那須アルミニウム工業製。



メタ・クッカー組立図 AとBは分割して重ね中にふた付き鍋を入れると一体になる

メタ・クッカー 固定燃料メタアセットアルデヒドを使用する炊事具はスイスのカタログを見ると数十種類発売されている。しかしヒマラヤの高所幕営でどんなものを使ってよいか、これを見ただけでは見当もつかない。そこで全く独自の立場で熱効率のよい簡単なものを作って見るつもりで設計し、那須アルミニウム工業会社に依頼して作製した。概略は図のようであるが、燃料計算の規準とした性能は下表の程度である。

水量	500cc
温度範囲	0°C~90°C
沸騰点までの時間	約15分
メタ使用量	8個(33g)

性能から考えるとそんなに悪いものとは思えないが、強度が弱いこと、たとえば運搬中に他の荷物に押されて変形したり、鍋を押さえるクラップがもげたりする場合は

第四類 登攀用具

ザイル 径九・五ミリ、八ミリ、五・五ミリの三種のナイロン・ザイルを使用した。九・五ミリと八ミリのものは確保用、五・五ミリは固定網用として予定していたが、それぞれの

機に応じて、適当に使用した。ナイロン・ザイルの優秀性はいうまでもないが、軽量であること、濡れないこと、凍らないことなど、マニラ麻の追従を許さない。今回はスイス製、アメリカ製、日本製(東京製網製)の三種類を使用した。が昨年まで、力が堅くて使いにくかった日本製品も非常によくなって十分使用に耐えるものとなった。スイス製は輸送中色が全部茶色に変色した。今後は日本製で十分である。東京製網株式会社製。

繩はしこ アイス・フォール登攀用としてマニラ麻八・五ミリの綱にジュラルミン・パイプの棧をつけた一〇メートルの繩はしこを十組用意した。重量は三八〇グラムである。元來繩はしこは急斜面にかけた場合は効果が垂直にぶらさげると登降の際、体が振られて困難であるし、クレバスの横断の際にはあまり役に立たない。どうしても次の機会には固定はしこを用意することを忘れてはならぬと思う。松田船具店製。

リュックサック 通常運動具店などで販売している大型リュックサックと称するものとはほぼ同型、食糧輸送に使用したカーボン・ボックスが三個はいる程度である。重量軽減のため帆布を使用せず平織薄手綿布を用いた。重量七七〇グラム特別に酸素ボンベ用のサスペンダーのついたリュックサックを四個用意した。好日山荘製。

ハイサック 主としてベース・キャンプまでの旅行に使用したナイロン綾織地を使用、ポケットは中央に一個チャックで開閉するようにした重量約三二〇グラム。最初はだらりとして背負いにくかったが、なれるに従い評判はよくなった。東洋レーヨン製。

シュタイグ・アイゼン アイゼン・バンドの取付けを従来の

多いし、目皿板(メタの燃焼位置)の面積が広過ぎるため必要以上にメタを使い過ぎる傾向がある。

アルコール・バーナー われわれの燃料計画は五六〇メートルまではケロシン、五六〇―六五〇メートルはアルコール、六五〇メートル以上はメタという三段階にわけてあり、液体アルコール用としてアルコール・バーナーを使用した。これは普通市販品であるがアルコールの気化ノズルがすぐつまり、アルコールを直接燃やしているような結果におちいってはなはだ効率が悪い。しかしアルコール・バーナーを改造するよりもプリムス・ストーブを改善して六五〇メートル程度までケロシンを使用する方がよいと考えている。好日山荘製。

燃料 前述のようにわれわれの燃料はケロシン、木精アルコール、メタの三段階に分けて使用したが、それぞれ特質があった。一概にその長短をうんぬんすることはできないが今回の経験のみから一応結論めいたものをあげて見ると、木精の使用をやめ、ケロシン系の燃料をできる限り高所(六五〇メートル)まで使用した方が炊事時間の短縮のためにも得策と考えている。ただし、そのためにはプリムス・ストーブのノズルの改善とケロシンの蒸気圧の吟味を行わなければならない。日本石油株式会社提供。

リング式をやめて、ホック式とし、ニッケル・クローム鋼を用いて余分の肉を減らして軽度なものに設計した。札幌門田に依頼して製作したものでスイス製品に比べてはるかに優秀である。重量約七〇グラム。

ビッケル 個人用は各自の好みのものを使用、シェルバならびに予備としては仙台山ノ内、ならびに札幌門田の製品を用意した。一般に日本製ビッケルは日本人の体格に比べてどうしても重過ぎる感じがする。次に氷を切るという点で、はなはだ不十分である。ビッケとブレッド(ビッケル頭部のとがった部分と刃のついた部分)ならびに柄とのバランス、柄の握りの形状などおおいに改善の余地が残されている。

ストック スキー用の普通品であるがモンズン前期のマンズルの深雪の場合、比較的有効であり、場合によってはビッケルよりも使いやすい日本の冬山でもストックだけ使う場合があるが全く同じ状態であった。

赤旗 広大な氷河の上を歩く場合、ことに連日午後から降雪を見たマナスルではなくてはならないもの一つであった。吹雪の際の見通し範囲を考えると旗の間隔はどうしても五〇メートル以上はなすことはできない。色彩も赤色、橙黄色の二とおりであったが濃色の雪眼鏡をかけた場合は橙黄色の方が優れている。旗を立てる棒はブリ・ガンダキ上部の部落から細い竹などを購入したが、上部七五〇メートル以上のプラトリーは全面水であるから竹では立たないので、その部分だけはもっとしっかりしたものを用意すべきである。なお旗と紐との縫い目も強風にさらされると、たちまち切れてしまうから七〇〇メートル以上で使用するのは特に補強が必要であると考えている。

懐炉 今回はベンジンを使用する白金懐炉と普通の懐炉灰を用いる古い型の二種類を用意したが白金懐炉は五〇〇メートル以上ではどうしても燃えず用をなさず、かえって普通の懐炉の方が七〇〇メートルまではよい成績を示した。こんな物は装備として不可欠の物ではないかもしれないが十分睡眠をとり生活を快適にするということがヒマラヤ登山の成功の鍵である以上、決しておろそかにしてはならないと思われる。

第五類 キヤラバン用具

綿紐 特になんに使うという目的ではなかったけれども赤く染めたテントの張網用の綿紐(径約四ミリ)を持って行った。これは荷物の梱包、旅行中人夫のためにシートでテントを作ったりする場合など実にあらゆる場合に役立ち帰りがわには若干不足勝ちであった。三二〇メートルを用意した。これは東京出発の梱包、現地の梱包、などに使用した全部の量である。

荷札 帰りの梱包の際に予定して約一七〇枚の荷札を持参したが、実際は登山の際、荷物の内容を明示するのになくはない物になった。大部隊になると、食糧装備など部門の担当者にはわかっていても、輸送を行う当事者たちはなにがなにやらわからず、大きなキャンバス袋の底までひっきり回して見なければわからないこともあり、荷物はどうしても荷札を付けて内容を示してやらねばならない。このように目的以外の用途に大部分の物が使われ帰りの梱包の際には不足したほどである。なお紙製のものは非常に弱いのできれ地製のものを持って行くべきである。

い薄い箱だとすぐなくなって不便である。

雨衣 布地にナイロンをしみこまして防水したマント型の物でリュックサックを背負ったまま着用できるようになってい。重量がやや重い欠点を除けば完全防水で相当優秀なものである。しかしモンスーン期の酷暑の雨の場合は汗のため内外ともほとんど同じ状態になってしまつて、雨衣よりも傘の方がはるかに有効であった。雨衣としても、もう少し簡単な軽い物でよいと思う。東洋レーヨン製。

第六類 通信器具

携帯無線電話機 一般にウオーキー・トーキーという簡単な近距離無線電話機でテント間の連絡に使う目的で三対抗持参した。使用に便利なように受話機部、本体、電池の三部に分けているが、無電機の性能はほぼ別表の程度である。

性能を向上するため、波長を六メガサイクルにしたがインド近辺の放送局がほとんどこの付近の波長を使用しているので妨害電波となつて作用しない。出力が弱過ぎてせいぜい二キロぐらいの距離しか通話できないことなどがわがわいして、あまり有効には使用できなかった。

JSCR-536-F	式
1.5 V	電圧
103.5 V	電圧
6メガサイクル	波長
19時間	寿命
1.73 kg	重量
1.00 kg	重量

シート 木箱梱包用に多数持参した。これには大、中、小の三種あり、小は軍隊用携帯テント程度である。シート類も旅行中の食堂を作る場合、ベース・キャンプの補強、雪中の炊事場作業、モンスーン中のテントの雨おおいなど実に多方面に利用価値を持っている。使う場合は小さな物よりなるべく大きな物の方が便利である。吉田、細野両テント店製。

計量器 人夫に荷物を分配する場合、登山の際の担送力を考えて登攀計画を立てる場合、計量器がなくてはならない。なお物品の重量が一応わかっているものもこれにかけて納得させるなど人夫操縦にも微妙な用途がある。今回はスプリング秤二〇キロ用と五〇キロ用を用意した。

のこぎり ベース・キャンプのまき採取用として持参したが、なた以外の木工具を持たないネパール人たちには大もてでシェルバたちは大喜びでいたずらをしていった。しかし実際のまき取りにはほとんど不用で、かえって第四キャンプに持ちあげてイグルール作りの際の雪切りにおおいに重宝した。

折畳式椅子 旅行中とベース・キャンプの生活用に布を張った簡単な折畳椅子を持って行った。普通の登山では考えられないこんな物が生活を快適にするためには重要な役割を果している。しかし紫外線の猛烈なこの地方では布地の吟味が必要で、われわれの持参した椅子はベース・キャンプを出発してポカラへ着くまでに、全部布地はきれてしまい木の枠に綿紐を何条もくくりつけて腰掛けの布地代りにするというありさまであった。

マッチ よいも悪いもない必要不可欠の物であるが、要は軸が大きくて火の消えにくいもの、箱の内容が多い方がよい。小さく、これは将来通信器材の改善が重大な問題となるわけである。日本電気株式会社製。

携帯ラジオ 中島無線株式会社のお世話により、全波受信器大型二台、小型一台を用意した。インド付近の放送局は前述のようにほとんど短波ばかりで長波、中波の用途はないが、ともかくインド気象台から受ける毎日の気象通報によるモンスーンの予知、日本からの受信などなくてはならない重要な物であった。欲をいえば高所に運搬して使用するものであるから極度の堅牢性が欲しい。今回の受信機は調整ダイヤルがほとんど全部破損してしまつた。

携帯無線電話機 テント間の連絡に無電機と併用した。電池不要の圧電気現象を利用するノーベル・フォンである。配線は強度を考へて径二ミリの被覆鉄線を使用した。この重量は一キロメートルあたり約一〇キログラムであり、これを氷河上に設置した。性能は五キロぐらいまでは明瞭に通信できるが、それ以上になると通信がやや困難になるほか、無人のテントに放置しておくとき吸湿のため、はなはだしく性能が低下する。電線は設置、保全に若干手間がかかるけれども通信確保のためには相当有効であり、五キロぐらいずつ区切って連絡すれば通信もさしつかえないと思われ、将来はこの利用をもう一歩つっこんで研究する必要がある。ノーベル・フォン株式会社製。

裝備一覽表
 *絹下着(上下)
 高地用登山ぐつ
 日焼止クリーム
 取り付式オーバー・シューズ
 カバー式オーバー・シューズ
 補修用具品
 ザージ二本指手袋
 ジャージ
 スポンジ(くつの中に入れる)
 *ネール(少々)
 丸首メリヤスシャツ
 目出帽
 皮くつ下
 *三本指猫毛手袋
 皮バンド
 羽毛ぐつ

<i>underwears, silk</i>	36	170 g
<i>pair of boots, vibram</i>	32	2,100 "
<i>anti-sunburn paste</i>	60	
<i>pair of boot-cover</i>	15	320 "
<i>pair of over-shoes</i>	35	400 "
<i>repair tools</i>	11	
<i>pair of mittens, woolen</i>	21	150 "
<i>knitted cap, woolen</i>	28	
<i>sponge sole</i>	30	
<i>nails for boots</i>	少量	
<i>underwear, cotton</i>	102	190 "
<i>knitted cap, "medebo"</i>	28	100 "
<i>socks-cover, sheep skin</i>	21	80 "
<i>pair of mittens</i>	21	120 "
<i>belt</i>	21	100 "
<i>eiderdown shoes</i>	21	420 "

第二類 露營用具類
 Part 2: Camping Equipments

<i>Meade tent for 2 men</i>	18	4,500 g
<i>Meade tent for 3 men</i>	6	6,800 "
<i>tent for 4 men</i>	2	8,800 "
<i>tent for 8 men</i>	2	19,000 "
<i>kitchen tent</i>	1	19,000 "
<i>roof tent for 20 men</i>	1	17,000 "
<i>roof tent for 10 men</i>	2	10,250 "
<i>zeltsack for 2 men</i>	5	1,200 "
<i>hair lock mattress</i>	60	1,000 "
<i>air mattress, large</i>	23	1,400 "
<i>air mattress, small</i>	16	400 "

裝備一覽表
 List Of Equipments

第一類 高地用個人裝備
 Part 1: High Altitude Equipments

品目 item	数量 quantity	重量 weight/per
羽根入チョッキ	21	330 g
羽毛服(上下)	27	1,500 "
ウインド・ヤツケ(上下)	30	550 "
皮二本指手袋	25	150 "
毛糸二本指手袋	25	75 "
毛糸五本指手袋	25	80 "
皮放出五本指手袋	25	150 "
毛中細くつ下	120	60 "
毛薄手くつ下	60	20 "
*ストッキング	11	60 "
長くつ下	42	80 "
象足	15	600 "
厚手ソックス	42	80 "
長ズボン	30	860 "
ラクダ下着(上下)	33	560 "
厚手スウェーター	30	600 "
薄手スウェーター	21	320 "
絹マフラー	21	30 "
ゲートル	25	50 "
平地用雪眼鏡	25	170 "
高地用雪眼鏡	50	210 "
*二本指ナイロン地手袋	30	100 "
カッター・シャツ	42	400 "

第四類 登攀用具

Part 4: Climbing Equipments

ザイル 9.5 mm	climbing rope, nylon 9.5 mm	200 m	1,800 g/30 m
ザイル 8 mm	climbing rope, nylon 8 mm	120 "	1,200 g/30 "
ザイル 5.5 mm	climbing rope, nylon 5.5 mm	200 "	600 g/30 "
補助ザイル 8 mm	climbing rope, nylon 8 mm	600 "	1,200 g/30 "
* 繩はしご 10 m	rope ladder, 10 m	10 "	3,800 g
カラビナ	Piton (Karabiner)	200	140 "
アイス・ハーケン	ice piton	140	80 "
ロック・ハーケン	rock piton	50	80 "
* 小ピッケル	ice axe, small	5	700 "
ハンマー	climbing hammer	23	450 "
アイス・バイル	ice beil	2	620 "
リュックサック (大)	rucksack, large	26	770 "
ハイサック	rucksack, small	15	320 "
シュタイグ・アイゼン	crampon	32	700 "
アイゼン・バンド (皮)	crampon band, skin	45	
ピッケル	ice axe, large	38	1,000 "
* スキー	ski	6	4,800 "
* シール (ナイロン)	nylon seals	6	350 "
ストック	stick	11	1,100 "
地図入れ	map case	10	50 "
磁石	compass	11	20 "
赤旗	marker blag	600	12 "
国旗	national flag	5	15 "
* 白金懐炉	pocket warmer	21	90 "
懐炉	Japanese pocket warmer	4	90 "
発煙筒	signal fire	40	200 "
アイゼン・ケース	crampon case	25	145 "

羽根入り寝袋
真綿入り寝袋
* 特殊天幕
スコップ
輪かん
寝袋カバー
* ふいご
ゴム袋ふいご
ベッグ
ポールスペアー
空気マット修理具

	付	録
sleeping bag, eiderdown	28	1,350 g
sleeping bag, silk wadding	28	1,200 "
special tent for high altitude	3	6,800 "
scoop	5	700 "
snow racket	10	800 "
sleeping bag cover	21	900 "
bellow	10	530 "
bellow, rubber bag	10	350 "
peg	18 bags	750 g/1bag
tent pole, spare	21	160 g
repairing tools for air mattress	20	500 "

第三類 炊事用具

Part 3: Kitchen Equipments

高圧鍋	pressure pot	5	2,500 g
ふた付き鍋	pan with lid	30	400 "
メタ・クッカー	meta-cooker	20	500 "
メタ	meta	340 cases	220 g/1case
プリムス・ストーブ (スペアー)	primus stove, svea	10	1,550 g
アルコール・バーナー	alcohol burner	10	140 "
ローソク (25匁)	candle	700	100 "
* ローソク立	candle stand	25	65 "
ケロシン	kerosene	70 gallon	3,800 "
ベンゾール	benzol	20 "	3,500 "
メタノール	metanol	20 "	3,400 "
プリムス・ストーブ修理具	repairing tool for primus stove		
ペンチ (小)	pliers, small	2	200 "
プライヤー (小)	pliers, small	2	180 "
バイオリン線	violon string	若干	
* 石油コンロ	petroleum stove	2	4,000 "

装備一覧表			
しゃもじ	spoon, Japanese	12	20 g
たわし	scrubbing brush	10	100 "
パン焼網	roasting net	4	100 "
魚網	roasting net (for fish)	3	140 "
かん切り(大小)	can opener	34	15 "
せん抜き	bottle opener	5	25 "
包丁(肉用)	meat knife	4	150 "
包丁(野菜用)	vegetable knife	4	190 "
包丁ケース	sheath for knife	4	180 "
おろし金	grater	2	130 "
*のこぎり(2尺まき用)	saw	3	1,200 "
洗うちわ	fan, Japanese style, large	10	15 "
*せんす	fan, Japanese style, small	15	20 "
南京錠	padlock	72	80 "
*消火器	extinguisher	12	1,300 "
プリムス・バックキング・スペアー	primus packing, spare	100	
ガスライト・スペアー	gas light mantle, spare	1	120 "
床屋ばさみ	scissors, barber's	1	60 "
床屋くし	comb, barber's	1	2,200 "
肉引器	meat chopper	1	2,200 "
水筒	canteen	21	320 "
じょうご	funnel	5	20 "
ホーク・セット	knife, fork & spoon	37	115 "
定期入(連絡用)	card case, large	12	100 "
ハンド・ドリル	hand drill	1	650 "
*万力	vice, small	1	2,120 "
ペンチ(大)	pair of pincers	2	295 "
ラジオ・ペンチ	radio pincers	1	110 "
モンキー・スパナ	monkey spanner	1	250 "
*半田ごて	soldering iron	1	225 "
*半田	solder (soft)	2	450 "
*ペースト	soldering paste	1	235 "
針金(銅)	copper wire	1	

		付	録
テルモス(2合入)	thermos bottle, small	25	800 g
テルモス(5合入)	thermos bottle, large	5	1,070 "
*四本爪アイゼン	crampon, four nails	30	940 "

第五類 キャラバン用具

Part 5: Equipments For The March

綿紐(赤4mm)	cotton tape	3,120 m	
荷札	tag	1,700	
シート(大)	sheet, large	9	20,000 g
シート(中)	sheet, medium	20	2,000 "
シート(小)	sheet, small	50	1,500 "
キャンバス袋底付き	canvas, boots	60	1,300 "
キャンバス袋(中)	canvas, medium	30	1,000 "
キャンバス袋(小)	canvas, small	30	700 "
人夫用番号札	fiber checks (for porter)	260	8 "
半ズボン(綿ギャバ)	knee-breeches	30	360 "
半そで開襟		30	250 "
*ニッカー用薄手くつ下	pair of knicker's stocking	21	80 "
懐中電燈(ヘッドライト)	electric torch	10	370 "
懐中電燈	electric torch	25	220 "
電池	dry cell	260	150 "
電球	electric bulb	150	3 "
綿表ズボン(デニム生地)	pair of cotton trousers	21	500 "
計量器(30kg)	balance, 30 kg	1	730 "
計量器(25kg)	balance, 25 kg	1	700 "
フライパン	frying-pan	3	1,450 "
ボール	bowl	40	130 "
皿	plate	30	35 "
盒	tray	10	300 "
しゃくし	spoon, large	12	15 "

裝備一覽表			
弁当箱	<i>lunch box</i>	21	280 g
雨衣	<i>rain coat</i>	28	1,200 "
ソックス(ナイロン)	<i>pair of nylon socks</i>	90	60 "
手袋(ナイロン)	<i>pair of nylon gloves</i>	71	45 "
*平地用ぐつ	<i>boots for caravan</i>	21	1,600 "
バスケット・シューズ	<i>basket shoes</i>	28	960 "
文房具類	<i>box of stationary</i>	1	3,000 "
タイプライター	<i>typewriter</i>	10	90 "
コップ(三組)	<i>three cups, set</i>	5	80 "
フード・パウダー	<i>foot powder</i>	4	1,000 "
テント・キーパー用作業服	<i>overall for tent keeper</i>	2	800 "
木工用のこぎり	<i>saw, for wood</i>	4	30 "
きり	<i>gimlet</i>	4	30 "
小袋(金袋)	<i>small bag</i>	24	300 "
ポーター・シューズ	<i>shoes for porter</i>	50	1,870 "

第六類 通信ならび観測器具
Part 6: Communication & Meteorological Instruments

携帯無線電話機	<i>JSCR-536-F walkie-talkie</i>	6	4,000 g
携帯ラジオ	<i>portable radio set</i>	3	3,500 "
携帯ラジオ用付属電池一切	<i>dry all and supplements</i>	5	1,200 "
携帯有線電話機	<i>portable telephone set</i>	10 km	9,800g/1km
携帯有線電話機用電話線	<i>cable for telephone</i>	2	5,000 g
テープ・レコーダー	<i>tape recorder</i>	1	
大型アネロイド型気圧高度計	<i>aneroid altimeter (for Radiosonde Calibration)</i>	1	
航空機用アネロイド型気圧高度計	<i>aneroid altimeter (for aviation)</i>	1	
携帯用アネロイド型高度計	<i>portable aneroid altimeter</i>	6	
沸点温度計	<i>boiling point thermometer</i>	1	
週巻自記気圧計	<i>barograph (weekly winding)</i>	1	
温度計	<i>thermometer</i>	3	

釘(真 鍍)	<i>nail, brass</i>		
*木ねじ	<i>screw for wood</i>	800	
ドライバー組合わせ	<i>screw driver (set)</i>	2	130 g
やすり	<i>file</i>	2	260 "
*目立やすり	<i>file, small</i>	6	55 "
笛	<i>whistle</i>	12	20 "
*ラ ッ バ	<i>signal horn</i>	5	150 "
手拭	<i>towel, Japanese</i>	300	30 "
タオル	<i>towel</i>	120	30 "
トイレット・ペーパー	<i>toilet paper</i>	18,000	
せっけん	<i>toilet soap</i>	100	100 "
粉せっけん	<i>powder soap</i>	20	690 "
蚊取線香	<i>mosquito incense</i>	20	180 "
ズック・バケツ	<i>water bag</i>	9	98 "
歯ブラシ	<i>tooth brush</i>	24	25 "
ガソリン・ランプ	<i>gasoline lamp</i>	3	2,450 "
くつ修理具	<i>shoe-repairing set</i>	2	
くつ修理台	<i>shoe-repairing stand</i>	1	1,850 "
万能ナイフ	<i>knife</i>	40	300 "
軍 足	<i>pair of cotton socks</i>	100	80 "
ティー・ボール	<i>globes for tea</i>	5	30 "
シナ 鍋	<i>Chinese style pan</i>	2	820 "
さらし木綿	<i>cotton, bleached</i>	2	600 "
B・H・C	<i>B. H. C.</i>	10	90 "
D・D・T	<i>D. D. T.</i>	10	290 "
釣道 具	<i>fishing tackle</i>	1	300 "
折畳式椅子	<i>chair, canvas</i>	10	3,500 "
マ ッ チ	<i>matches</i>	1,500	
歯みがき粉	<i>tooth powder</i>	24	120 "
く つ 油	<i>shoe-grease</i>	25	200 "
綿 毛 布	<i>cotton blankets</i>	50	800 "
鍋 (32 cm)	<i>pan (32 cm)</i>	6	1,200 "
一升入やかん	<i>kettle</i>	4	400 "

最高温度計	maximum thermometer	6
最低温度計	minimum thermometer	6
週巻日記温度計	thermograph (weekly winding)	1
アスマン乾湿球湿度計	Assmann's aspiration psychrometer	1
ポリメーター (遅れ係数小)	polymeter (small time lag)	1
週巻日記湿度計	hygrograph (weekly winding)	1
風車型風向風速計	wind vane and air meter	1
プロペラ型発電式指示風速計	propeller dynamo anemometer	1
望 遠 鏡	telescope	1
トランシット	transit	1

NOTE: Asterisc shows the instrument not used. (*印は使用しなかったもの)

4 食 糧

山田二郎

食糧の面での種々の失敗と教訓もまた、今回の登頂不成功の大きな要因の一つであった。これらの失敗の要因の中には、後述するように適当な高度馴化とまったくわれわれ日本人としての食欲、消化力の特異性による予期以外の失策もあったが、また他面、登山一般の原則よりも明らかに失敗に類することもあった。これから今回の登山での準備、行進、攻撃と順を追って経過をたどり、検討も加え今後の資としたい。

準 備

他の諸部門と同じく今回の計画が決定されるや、ただちに隊員決定に先立ち舟橋明賢(日本山岳会理事)を中心とし学習院大学山岳部員有志の助力により食糧準備委員会を組織し、川島四郎(農学博士)、堀田彌一(日本山岳会評議員、ナンダ・コックト遠征隊長)、織内信彦(日本山岳会理事)、辰沼広吉(日本山岳会理事)など諸氏、その他食品、医学上の諸權威の意見と、助力により、ヒマラヤン・ジャーナル第十一号(一九三九年)掲載のティーステール博士の『ヒマラヤの食糧問題』その他内外の文献を参考とし、食糧の調達と包装とが進められた。同委員会ですす最初決定された食糧準備の原則は次の通り

であった。

- 1、あまり水分を含んでいないもので、かつ廃棄物の少ないもの、つまりコンパクトなものであること。
- 2、保存良好で、かつ船舶輸送、熱地での運搬にも変質しないこと。
- 3、嗜好にあうものであること。
- 4、単位重量あたりの摂取可能カロリーの大きなること。
- 5、寒地で手袋などはめたままでも取り扱えるものであること。
- 6、軽量のものであること。
- 7、消化容易で、かつ消化に多量の酸素を必要としないこと(詳細は医学的考察の項にゆずる。)
- 8、高地で食欲減退を起した時でも、のどを通りやすいものであること。
- 9、調理が容易で、特に高地では沸点の低下を考慮すること。

食糧の準備は昨年(五二年)の踏査隊報告に基く登山計画により、まずベース・キャンプまでの食糧として隊員十五名の往復各四週間分の調味料ならびに嗜好品、ベース・キャンプ用として同じく十五名の四週間分、第一キャンプから第三キャンプまで(低地キャンプ食)としては隊員、シェルパ共通として四百二十人の一日分、第四キャンプから第六キャンプ用(高地キャンプ食)として同じく三百十五人の一日分を用意することとなった。以下行進間の食糧より順次述べて見よう。

行進間の食糧

踏査隊報告をもとにして主食ならびに副食は現地調達可能との前提を基礎に、われわれの嗜好に適した調味料、嗜好品を日本から携行した。これらは十五名七日間分を一単位とし、カーボン・ボックス四個に梱包した。(内容は一七六一七ページのリスト参照)このほかベーコン、バターなどはカルカッタで購入、紅茶、砂糖をカートマンズで追加し、残余の肉類、野菜、主食の米、小麦粉など、それぞれ行進中の入手可能地でそのたびに必要量を購入した。

行進間のいちばん大きい課題は日本から根拠地までいかにして隊員の健康状態を最良に保つかということであるが、隊員の最も悩まされたのは生野菜の不足で、カートマンズを出発後はただちに野菜不足に陥ったのであるが、万一を考えて日本から携行したわずかの乾燥野菜に頼らざるをえなくなった。行進間の生野菜をすべてカートマンズから携行することはきわめて困難であり、今後の重要な課題といえる。次に主食の米であるが、これは現地購入のものは外米臭くおせじにもうまいものではなかった。これは主として費用の点が解決のカギと思われるが、正味行進は往復一ヶ月あまりであることを考え、一日一食は内地からの携行米が望ましいと思われる。

昼食としてはロティー(小麦で作った『お好み焼き』の皮状のもので、焼きまたは油で揚げて食する)が好評でこれで十分まかなえよう。

隊員の士気の点より、次に問題とされたものは紅茶、コーヒー

、ココアなど嗜好品の不足または皆無であった。緑茶ならびに抹茶はあまり気味であったことは注目すべきことである。現地入手可能と思われた牛乳類もほとんどなく、粉ミルクの不足は痛切に感じられた。また使用材料に関係なく調理の単調さは士気の点からも考慮すべきであり、料理人の適切な指導はおおいに研究の要がある。

踏査隊にはなかったものとして、粉しょうゆは非常に歓迎され、またのり、福神づけを初め携行したものは全く好んで食べられたことは携行食糧がよかったというよりは、隊員の食欲の旺盛さを物語るものであろう。ただハムかんづめ、ウィンナー・ソーセージかんづめなどは味が付きすぎていて、あきやすいように思われた。かんづめ食品携行のときはこの点を十分考慮し選択すべきである。

鮭くん製もおおいに期待してバックを解いたところ、全くかびがはげしく、使用できなかった。梱包をさらに研究すべきであった。

ベース・キャンプの食糧

全く行進中のものと同じであり、われわれの携行した副食のほか、鶏、羊、鶏卵、米、ジャガイモ、大根、にらなどを現地で購入したが、米は海拔三八五〇メートルものベース・キャンプではなかなかよく炊けず、これがため下痢を起した者の出たことは失敗であった。

その後のはかゆとして食事するようにしたが、嗜好の点もありさらに積極的にイーストを携行しパンを焼かせるか、あるいは

米を用意することが望ましく、ベース・キャンプの性格を考えればこの程度のことには少々無理をしても用意すべきであらう。

時々料理人バンシーの作ってくれるサブゲッティは非常に好評であった。これらはもっと多量に用意するならばベース・キャンプ食としては理想的と思う。なんとしてもヒマラヤ山中では現地調達が可能でなく、ことに量の点でもごく貧弱なものであることは十分考慮する必要がある、今回もしまいには鶏卵、鶏肉の調達隊を遠く派遣して購入に当らせ、これがため同地方の鶏卵、鶏肉の値上がりをもたらしたなど、笑い話ですまされぬことであらう。このほか肉類補給源として七頭ほどのヤクを使用したが、屠殺法によるものか一種独特の臭みがあり、後にはこれが鼻について特に高地のキャンプではのどを通らなかつた。今後はみそ、あるいは酒かすなどをより多量に携行し、これにつけて置くならば、保存上も臭み止めにも、また残りのみそを使用するなど有利なものはあるまいか。生野菜不足と関連して野菜つけ物も用意して行ったならば大いに好評を博すことと思われ、奈良つけ、たくあん、みそつけなども夜のテントの話題に上ったもの一つであった。

また火の容易に得られるベース・キャンプでは魚の干し物なども用意していたらと思つたことであつた。

以上個々に述べてきたのであるが、要するにベース・キャンプの食糧としては登山期間を通じ、このキャンプで食事をする延人数はきわめて少数であり、かつ高地で疲れた隊員の休養のキャンプとしての性格を考え、かなりぜいたくと思われる品でも隊員の口に合つた、かつ高地には携行できないようなものを中心にしてできる限り変化に富んだ献立を準備すべきであらう。

なお、ベース・キャンプには個々の食糧のほか公用副食を二回分用意した、これはベース・キャンプ食と大差ない。またベース・キャンプより上のキャンプに一日往復をする隊員、シエルバ用として携行食を二百十人の一日分、高所キャンプ用予備、追加食糧が用意されたが、これらは次の高所キャンプ食の項で一括論することとしよう。

攻撃間の食糧

攻撃間の食糧は低地キャンプ食(第一―第三キャンプ用)と高地キャンプ食(第四―第六キャンプ用)とに分けられる。

低地キャンプ食 低地用として用意されたものは二人一日用を一バックとし、次のような品目をライファン製袋に収容し、さらにこの上をポリビニール製袋でおおい、これらを二、三個ずつカートン・ボックスに収めた。内容品として、主食はクラッカー、ビスケット、クリーム・サンド・イチ、オートミール、また米などで、副食はいずれも一様にコンデンス・ミルク、チーズ、レーズン、粉ミルク、粉末紅茶、固型スープ、ぶどう糖、レモン粉、角砂糖、ドロップ、ジャム、ビタミン錠などである。レモン粉、粉末紅茶その他細かいものはライファンまたはセロファンに包んだ上、前記大袋に入れられた。このほか特別食として若干の乾燥野菜(たまねぎ、キャベツ、ほうれん草、にんじん) チキン・スープかんづめ、果物かんづめ、ネスカフェ、バター、塩、味の素、粉しょうゆ、ハムかんづめ、ウィンナー・ソーセージかんづめ、抹茶などが一括してカートン・ボックスに入れ六箱用意された。各品目を見ただけでは日本の

山ではなかなか口にはいりそうもないぜいたくなものばかりで、チーズが激しいかびのため食用に堪えなかったほか、いずれも難点は見い出せぬように思われるのであるが、この低地キャンプ食がわれわれを失敗に導いたともいえるくせ者なのである。というのは、一カ月あまりにわたりほかに間食もなく連日前記のものばかりを家庭で食べさせられた結果を御想像いただければ十分であろう。

これは食糧に最も重大な、かつ基礎的原則ともいうべきヴァラエティが皆無であったこと。また主食の大部分を占めたビスケット、クラッカーの類が全く甘、辛いずれかの味付けのものばかりであったことが大きな原因であった。

いままで、これら低キャンプ食糧はこれまでの諸外国遠征隊ならびにわずかの日本遠征隊の経験を基礎とし「海拔四〇〇〇メートル以上では高度の影響により人間の食欲、ならびに消化能力が極度に低下し一般人が平地で摂取しているものは到底のどを通らず、また消化もされない」ということを前提として作製されたものであり、常識的にいって「病人が食べられるような」食糧ということが根本となっていたのである。

しかるに今回の登山隊では海拔五六〇〇メートルの第四キャンプまでの間で食欲または消化力の減退をきたした者は一名もなく、一般的にいって六六〇〇メートルの第七キャンプで多くの者がこの点の変調をきたし、また二、三の隊員は七一〇〇メートルまたは七五〇〇メートルの第八、第九キャンプでも食欲は平常であり、かつ消化の点でもさしたる障害を認めなかったのである。

このような状態が、適当に高度馴化を行ったということのほ

か、日本人に特有の特殊性であるか、あるいは今回の隊員に限られたものであるかを決定するには、なお今後多くの経験と研究を要するであろう。これまでの諸外国遠征隊の食欲の問題に關する報告が正しいものであるとすれば、われわれ日本人は確かに何か彼らと異なった特殊性を持っているように思われるのである。したがって食欲が減退しても、かろうじて食べられるような食事を平常の食欲と消化力を持つ人間に連続して、かつヴァラエティなく与えられたとすれば、その結果はおのずから明らかであろう。

「人によっては、あるいはかかる高度でも食べることでできるかもしれないから」という趣旨で携行された低キャンプ特別食も前記のような状態では全く焼石に水にもならず、非常な番くるわけであった。

結局、今回の日本隊の低キャンプ（ベース・キャンプより海拔六〇〇〇メートルと一応仮定す）食糧はできる限り平常のしかも日本人の口に合ったものとし、主食も味の付いていないものか、また米をさらに広範囲に利用するなど消化のよい食品を種類多く携行することを考えるべきであろう。

高地キャンプ食 これは低地キャンプ食のうち、ぶどう糖をオバルチンに変えたもので、それ以外は全く同一でありオバルチンは医学的見地よりビタミン補給源として加えられたものである。これらの食糧も今回は低地キャンプにも徹底的に食傷してしまつたわれわれにはビスケットというのもしやなほどに敬遠され、ベース・キャンプで調理し運ばれた雑炊、ヤクのメンチボール、みそ汁などが大いに歓迎されたのが実情であり、これら応急食も大多数、なかでも若い攻撃メンバーには十分消化

吸収され、なんらの支障をもきたさず第二回攻撃時最高の第九キャンプ（海拔七五〇〇メートル）で朝夜の一回にわたり最も好まれたものは八丁みそ入り雑炊（アルファ米を使用）であったのであり、同キャンプに泊まつた三名の隊員のうち二名は食欲盛んで、ビーフ・ステーキ、にぎりずしなどを食べたいと思つたほどであった。しかし、これらの食欲は単なる「食い意地」に過ぎず、実際にこれを出された際に平らげられ、かつ消化できなかつたかは疑問である。

以上の経験より、次の段階で危険な飛躍なしに試みらるべき

攻撃食糧は、低地キャンプ（四〇〇〇—六〇〇〇メートル）では隊員の嗜好に適し、かつ高度の使用にも堪えられるわれわれ日本人の平常食を主体とし変化の多い食品をかなり自由に選択し、高所キャンプでは今回と大差ない食糧を主体として、これに若干の質的改良と変化を与えて長期使用によるあきを防ぎ、これに今回携行の二ないし二・五倍の特別食——高所食糧のほかになお食欲、消化力の変らぬ者に与えるための平地食に近い性質を有する食品——をあわせ用意するといった趣向のものとなるであろう。

食糧一覧表

まぐろかんづめ	tinned tuna	560
いわしかんづめ	tinned sardine	600
かきかんづめ	smoked oyster (tinned)	400
干しだら	dried cod-fish	150
さけのくん製	smoked salmon	320
スパゲッティ	spagetti	1,275
粉スー	instant soup	980
固型スー	cube soup	160
緑茶	green tea	2,400
抹茶	green tea powder	160
フルーツ・ソルト	fruits salt	160
粉ミルク	powdered milk	640
ドロップ	fruits drops	1,400
チューインガム	chewing gum	500
果物かんづめ(みかん、桃、あんず)	tinned fruits (orange, peach, apricot)	5,400
干しりんご	dried apple	300
ようかん	Japanese bean sweets	1,710
乾燥野菜(にんじん、じゃがいも、ほうれんそう)	dried vegetables (carrot, potato, spinach)	500
計	total	54,565

ベース・キャンプ特別食 (6人/週分)
Base Camp Special Ration (6 men/week)

乾燥野菜(玉ねぎ、キャベツ、ほうれんそう)	dried vegetables (onion, cabbage, spinach)	380
チキン・ヌードル・スープかんづめ	chicken noodle soup (tinned)	390
ハムかんづめ	sliced ham (tinned)	480
ウィンナ・ソーセージかんづめ	wiener sausage (tinned)	720
バターかんづめ	butter (tinned)	300
粉しょうゆ	powdered soy	240
ココア	cocoa	620
チョコレート	chocolate	570
計	total	3,700

食糧一覧表
List of Food Supply

行進間およびベース・キャンプの食糧 (15人/週分)
March & Base Camp Ration (15 men/week)

品名 item	重量 weight (g)	
砂糖	sugar	19,250
食卓塩	table salt	2,460
粉しょうゆ	powdered soy	840
かつお節	dried bonito	1,900
ケチャップ	ketchup	1,410
酢(濃厚)	condensed vinegar	350
八丁みそ	"miso" (bean-mash)	1,000
洋辛子	mustard	360
粉さんしょう	"sansho" powder (Japanese pepper)	80
粉わさび	powdered "wasabi" (horse-radish)	280
七味唐辛子	Japanese red pepper seasoning	80
カレー粉	curry powder	200
こしょう	white pepper	100
味の素	"ajinomoto" (seasoning)	400
福神づけ	"fukujinzuke" (a kind of pickle)	1,280
雲丹	salted sea-urchin	1,350
塩辛	salted squid	1,950
梅干	pickled plums	300
のり	"nori" (dried larer)	1,020
とろろこんぶ	dried sea tangle	100
ウィンナ・ソーセージかんづめ	wiener sausage (tinned)	1,440
ハムかんづめ	sliced ham (tinned)	240
コーン・ビーフ	corned beef	560

高所キャンプ特別食 (6人/週分)
High Camp Special Ration (6 men/week)

乾燥野菜 (玉ねぎ、キャベツ、ほうれんそう)	<i>dried vegetable (onion, cabbage, spinach)</i>	380
チキン・ヌードル・スープかんづめ	<i>chicken noodle soup (tinned)</i>	390
ハムかんづめ	<i>sliced ham (tinned)</i>	480
ウイナ・ソーセージかんづめ	<i>wiener sausage (tinned)</i>	720
バターかん入り	<i>butter (tinned)</i>	900
味の素	<i>"ajinomoto" (seasoning)</i>	100
粉しょうゆ	<i>powdered soy</i>	60
果物かんづめ (あんず、桃、みかん)	<i>tinned fruits (apricot, peach, orange)</i>	1,500
ネスカフェ	<i>Nescafé</i>	270
抹茶	<i>green tea powder</i>	80

高所キャンプ食 (1人/日分)
Highcamp Ration (1 man/day)

ビスケット、クリーム・サンドまたはクラッカー	<i>bisquit, cream-sandwich or cracker</i>	220
コンデンス・ミルク	<i>condensed milk</i>	100
粉ミルク	<i>powdered milk</i>	15
粉末紅茶	<i>tea powder</i>	15
レモン粉末	<i>lemon powder</i>	10
角砂糖	<i>cube sugar</i>	80
オバルチンまたはオーツ	<i>Ovaltine or Quaker oats</i>	80
チーズ	<i>cheese</i>	40
乾ぶどう	<i>raisin</i>	50
乾あんず、乾プラムまたは甘納豆	<i>dried apricot, dried plum, or sweetened beans</i>	130
ドロップス	<i>fruit drops</i>	80

ベース・キャンプ予備食糧 (全食用食糧とも)
Base Camp Additional Ration

砂糖	<i>sugar</i>	8,250
食卓塩	<i>table salt</i>	1,640
ケチャップ	<i>ketchup</i>	3,840
洋辛子	<i>mustard</i>	180
粉さんしょう	<i>"sansho" powder (Japanese pepper)</i>	140
味の素	<i>"ajinomoto" (seasoning)</i>	200
雲丹	<i>salted sea-urchin</i>	1,620
塩辛	<i>salted squid</i>	2,340
ウイナ・ソーセージかんづめ	<i>wiener sausage (tinned)</i>	3,780
コーン・ビーフ	<i>corned beef</i>	560
まぐろかんづめ	<i>tinned tuna</i>	560
干しだら	<i>dried cod-fish</i>	600
粉末餅	<i>powdered rice-cake</i>	7,200
粉末スープ	<i>instant soup</i>	280
バター	<i>butter</i>	300
緑茶	<i>green tea</i>	600
抹茶	<i>green tea powder</i>	80
ココア	<i>cocoa</i>	1,280
チョコレート	<i>chocolate</i>	2,400
粉末紅茶	<i>black tea powder</i>	600
粉ミルク	<i>powdered milk</i>	2,480
ネスカフェ	<i>Nescafé</i>	1,200
果物かんづめ (桃、みかん)	<i>fruits tinned (peach, orange)</i>	6,200
ほうかん	<i>Japanese bean sweets</i>	1,560
ビタミン錠	<i>vitamin tablets</i>	1,160
計	<i>total</i>	49,050

ジャム	strawberry jam	85
固型スープ	cube soup	16
ビタミン錠	vitamin tablet	5
ソフト・チョコレート	soft chocolate	30
計	total	956

5 気 象

山田 二郎

観測と予報

山に登ろうとするかぎり、われわれは気象と必然的な関係にあることはいままでもないが、ヒマラヤの八〇〇〇メートル級ともなれば、それは一層重大な意義を持つてくる。ただでさえ息苦しく疲労した肉体には、内地の山では堪えられる程度の風でもひどくこたえるし、まして強い時には平均毎秒四〇メートルの風速にも達する西風(ジェット・ストリーム=Jet Stream)を考えれば登山の成否に天候の果す役割の大きさが想像されよう。

*ジェット・ストリーム: ヒマラヤの付近には高さ一〇キロ辺に最強風速毎秒一五〇メートルにもなるものがある。また一度吹雪や霧におそわれると退却が困難になる。

今回の登山隊でも初めから気象観測ならびに予報の重要性を認め、わが国中央気象台、気象研究所ならびにインド・カルカッタ気象台の非常なる御援助により気象に関するいっさいの準備と計画とが進められた。

気象計画として、初めは其の筋の専門家の参加を煩わすことも考慮されたのであったが、予算その他の面でこれが実現せられなかったことは遺憾であった。今回、私が攻撃のため高所キ

ャンプに登った後は辰沼隊員と通訳のサガ氏が代って気象観測にあたったのであったが、将来はできればベース・キャンプの気象観測は付近のキャンプにいる適当な隊員が気象係を担当するのがよいと思う。

気象係の任務は大別して気象観測と天気予報の二つに分けられる。

気象観測は将来ヒマラヤ遠征を行う人々のための資料としても貴重であることはもちろん、ヒマラヤ山中のような気象観測網上のブランク地帯の資料として気象学上からもきわめて重要な意義を持つものとして相当力を入れて行われた。幸いこのためには中央気象台および気象研究所、太田計器株式会社などより多くの優秀な器械を借用し、これを携行することができた。

次に予報については日本の中央気象台よりインド気象台前もって依頼交渉していただき、カルカッタ気象台でただちにカルカッタの放送局「オール・インディア」に折衝してくれたため、ほぼ時を同じくして登山するイギリスのエヴェレスト、スエイスのドウラギリ隊への放送とともに、マナスル日本隊向けの二十四時間予報を五月一日よりモンスーンのヒマラヤ到着後一週間まで、毎日午後六時より放送してもらうことができ、われわれもこれによりモンスーンの発生と進行とを確実に把握できた。この点、確信をもって行動できたことは非常に好都合であった。ただ、今回もわれわれがある程度強力な送信装置を用意し、毎日の気象観測結果をただちにカルカッタ気象台に打電すれば、気象台としても毎日の予報を出す上に役立ったと思うと、この準備のできなかったことはなおいに遺憾であった。

また帰路カルカッタ気象台にマル博士を尋ねた際の話で

は、次回にはある程度の登路と山の地形を前もって知らせてもらえれば、これら地形による局部的影響を考慮に入れて予報ができるよう努力するとのお話であったし、ヒマラヤも八〇〇メートル級のジャイアントともなればこのようなことは当然問題となるわけで予報もかなり詳細に行われるようになるであろう。

(気温はすべて摂氏温度で記載)

気象観測器械

大型アネロイド型気圧高度計 直径三〇センチ、厚さ一〇センチ、一二〇〇メートルまでメートル目盛を施したもので他の携帯用高度計のスタンダードとして携行、中央气象台で温度補正表を付けて借用したが残念なことにカトマンズからベース・キャンプ間の輸送中に故障を起し使用できなかった。航空機用アネロイド型気圧高度計 航空機用小型のもので非常に精密にできており、自動的に温度補正をするようになっていた。太田計器より借用したもので輸送中に故障してしまつたが、前進ベース・キャンプでスタンダードとして使用する予定であった。

携帯用アネロイド型高度計 一〇〇〇メートルまでを五〇メートル目盛で刻んだもので小型目覚時計程度のものであり、これによりベース・キャンプへの往復の行進間の経路の高度、ベース・キャンプより上の各キャンプの高度などいっさいに使用した。同型のもの六個を携行した。

沸点温度計 水の沸点を測定することにより気圧(高度)を

測定するもので、昨年(五二年)の踏査隊の携行したものに若干の改良を加え西村工業株式会社にて作製携行したが、この使用はなかなか技術的に困難を伴い測定法により気圧が著しく変化し事実上の使用は不可能であった。

週巻自記気圧計 中央气象台より借用した。気温の低下を考へ自記紙も普通のものほかに特殊用紙と赤インクを用意、また時計装置も特殊油を入れるなどの処置をしたが、これら自記装置はベース・キャンプに設置した関係上、さしたる低温もなく普通のもので十分であった。

温度計 正確度を期しタリウム入り水銀二重温度計を三本用意したが、いずれも輸送中に水銀が寸断し使用できなかった。

最高温度計 水銀入のもので五〇度から零下三〇度のものをエポナイト・ケースに入れ、六本用意したが良好であった。

最低温度計 アルコール入りのもので五〇度から零下五〇度までのものを前者同様のケースに入れ六本携行したが結果は良好であった。ただ最高、最低両温度計ともケースが少し弱かつたことは考慮すべきである。

週巻自記湿度計 中央气象台より借用、結果は良好であった。アスマン乾湿球湿度計 中央气象台から借用したが輸送中破損し使用できなかった。

ポリメーター 同じく中央气象台より借用したが結果は良好であった。

週巻自記湿度計 中央气象台より借用。結果は良好で前に述べた自記装置とともに自動的に連続してデータをとりうる点はおおいに有利であり非常に役に立った。

風車型風向風速計 旧陸軍で使用したものを中央气象台より

路の三つにわけて各観測結果につき簡単に述べてみよう。

行進間(カトマンズよりサマまで)

気圧——行進間は各観測地の地図上高度がわからぬため、実際気圧の測定は不可能であり、これは行われなかった。しかし、今回もアネロイド型気圧計による測定値のみは観測してあるので、将来各地の正確な高度がわかれば役立つことと思う。

気温——行進間の気温は各地の高度、緯度、測定日も異なるので、一概にはいえないが、最低気温は四月十二日ロー(海拔三二六九メートル)を出発の朝の零下二度であり、最高は四月一日アルガート・バザールでの十時から十四時までの最高気温三五・五度また気温の日較差最大は同じく四月一日の二四・五度(最高三五・五度、最低一一度)であった。

これによっても行進の後半では十一日間に気温は三七・五度も低下するわけであり、健康上、食料品の変質など考うべきことは多い。

湿度——湿度計破損のため測定できなかったが、「日向は暑くても木陰は涼しい」あるいは「ぬれ手拭をかぶって歩くと非常に涼しい」などのことは少なくとも日中の湿度低下によるものと思われる。

天候——十八日間の行進中、平均雲量は二・六(三月二十七日より四月五日まで平均雲量〇。四月六日より十二日まで、六・一)であり、だいたい好天であったが、四月六日夕刻(小規模)にわか雨以後、七日夕刻および九日午後にはそれぞれ中程度の雷雨があったが、午前中は晴天の日が多く、曇天であったのは四月十一日であった。

*雲量：全天のいく割が雲でおおわれているかということによ

借用携行したが、使用も簡便でありベース・キャンプまでの用には十分役立ち、キャラバン中も定時にこれを使用でき便利であった。

プロペラ型発電式指示風速計 毎秒一メートルまで計れるものを携行したが、少し重すぎあまり使用されなかった。

以上のほか携帯用目覚時計を係の者が、常に携帯し観測時間を忘れることを防ぎおおいに役立った。

(一六九七〇ページのリスト参照)

観測結果

観測は三月二十六日カトマンズ出発以来、ポカラでの七月三日まで続け、毎日六時、十時、十四時、十八時の四回それぞれインド標準時により行われた。

観測事項は、気温、気圧、最高、最低気温、湿度(ベース・キャンプ滞在中のみ) 風向、風速、雲の状態、(向き、速さ)空の状態、視程、天候であった。

行進間およびベース・キャンプでかなり詳細に観測が行われたが、高所のキャンプでは観測それ自体がめんどうとなるばかりでなく、設備もほとんどなかったため、テント外に出して置いた計器類が夜間降雪のため、埋没し観測の用をなさなかった象り、日中直射日光をさえぎるのに苦心するなど、なかなか思うとおりの観測ができなかったことはまことに残念であった。今後はさらに観測補助設備を工夫しなければならぬと思われ

る。簡単な百葉箱を改造しようなものが望ましい。次に行進間、攻撃間(ベース・キャンプと高所キャンプ、帰

て、雲の多さをあらわすことができる。この割合を雲量という。ほとんどまったく雲がなければ雲量は〇、すっかり雲でおおわれれば雲量一〇である。雲量八以上のときを曇、二以下のときを快晴、その中間を晴という。

風——風向は各観測地の局地的影響が大きいので意義は少ないと思う。風速の最大は四月五日、サル・ライリイにキャンプした際の十四時における毎秒七・一メートルの風速が最大で、この風は十八時までには毎秒二・二メートルの風速に低下していたにもかかわらず、ここに翌六日、本隊が到着した時に再び強風(実測値なし)であったとのことで、何か同地の地形的特色があるのかとも思われる。

雲——下層雲としては Cu (以下記号は雲級表参照) が多くこれに次いで、Fc が多く認められ、南東—南—南西方面より飛来するものが多かった。中層雲は Ac、As 相半ばし北—北西—西のものが多かった。上層雲は Ci、Cs が多く、後に Cc が認められ、これまた北—北西—西のものが多かった。各層別雲量の平均の比率は下層一〇〇に対しそれぞれ中層七二、上層一七であった。

—雲 級 表—

記号	名 称	階 級
Ci	巻雲(すじら雲)	上層雲
Cc	巻積雲(まだら雲)	
Cs	巻層雲(うす雲)	中層雲
Ac	高積雲(むら雲)	
As	高層雲(おぼろ雲)	下層雲
Sc	層積雲(くもり雲・ね雲)	
St	層雲(きり雲)	下層雲
Ns	乱層雲(あま雲)	
Cu	積雲(つみ雲・すわり雲)	日々の上昇気流によるもの
Cb	積乱雲(たち雲)	
Fc	片積雲(積雲の一種でちぢり雲といわれる)	

攻撃間 この間は前述のように各キャンプでの観測は十分に行われず、観測値も少数かつ断片的なのであるが、これらを概括し連続観測の行われたベース・キャンプでの観測値と高所キャンプのものを別個に一括記述しよう。

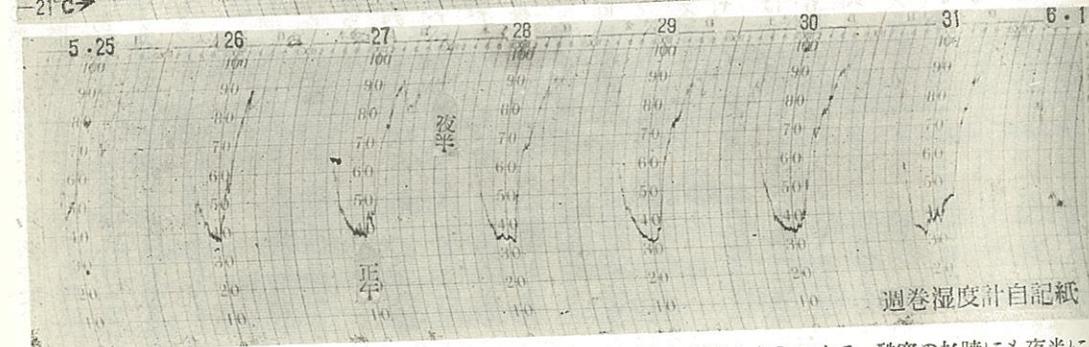
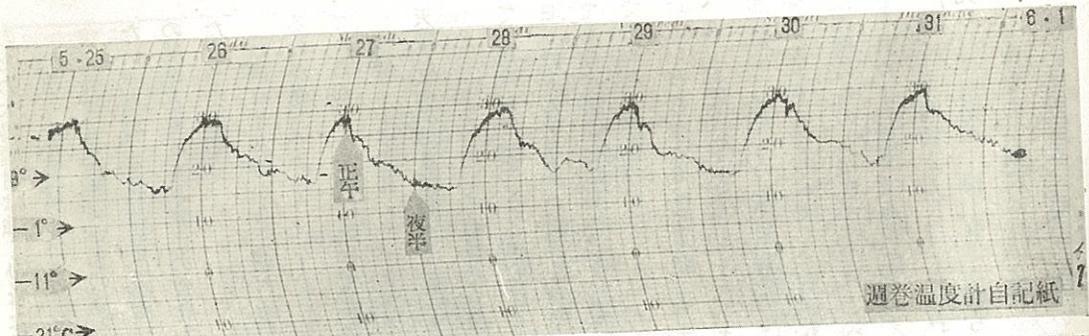
a、ベース・キャンプの気象

湿度——週巻自記湿度計による

期 間	最高 気温	最低 気温	最高 平均	最低 平均	最大 日較差
四月十三〜十九日	元	(-)	九・五	(-)	三・三
二十〜二十六日	三	(-)	一〇・九	(-)	一・七
二十七〜五月三日	一四・七	(-)	一三・七	(-)	一・七
四〜十日	一四	(-)	一三・三	(-)	一・七
十一〜十七日	一七・七	(-)	一四・三	(-)	一・四
五月十八〜二十四日	元	(-)	一三・九	(-)	一・五
二十五〜三十一日	元	(-)	一四・四	(-)	一・七
六月一〜七日	三〇・七	五	一七・九	六・六	一四・五

最高気温は主として十時から十四時の間に、最低気温は十八時から翌朝六時の間に現われるのが通常であった。また日較差は最高または最低気温の現われる日が最大であった。雪の反射

気 象



ヒマラヤで得られた自記記録 山田隊員はテントの中に目ざまし時計をすえつけて、酷寒の松曉にも夜半にも気象の定時観測を遂行された。その気はくは正に気象専門家をも感嘆せしめるものである。

その結果を見ると、上層雲行からジェット・ストリーム南の枝たる西風が次第に衰え、モンスーンの東風へと次第に移って行くありさまがよくわかり、攻撃の6月1日がちょうど風の交代期となって無風になったこともあながち偶然とはいえないような気がする。

ここに示されたものは6月1日より前1週間の週巻自記温度計、および週巻自記湿度計のベース・キャンプの草原における記録で世界的にも珍しいものである。

このインクは紫色で富士山頂候所などで使用し、低温でも凍らない特殊インクであり、自記ドラムを回転する時計にも不凍油が使用された。気温の方は、その絶対値を山田隊員が水銀温度計で転正しているの、真の値と大差ないと考えてよいが、湿度の方は、不幸にしてアスマン湿度計が破損したため転正すべき標準がないので、その絶対値は必ずしも正しいとはいえない。

しかし、これらの記録はいろいろの事実を物語っている。まず7日間をとおして、のこぎりの歯のように同じ日変化が繰り返されているのが珍しく、ヒマラヤの天気きがわめて安定したものであることを思わせる。おそらくジェット・ストリームが山塊のまわりを一様に流れているので、高気圧や低気圧などがなく、毎日同様な天気が繰り返されるのであろうと思われる。この点、変化の多い日本の山とは違っている。気温は4°Cと19°Cの間を往復している。これがほぼ同高度の富士山頂の1月の-20°Cに比べて著しく高いことはやはり緯度が低いためであろう。15°Cという日変化は富士山頂1月の平均6.4°C、東京の8°Cに比べれば著しく大きい。湿度の変化も実に大きく、ともに気候のきびしさを語るものであろう。気温は午前中は天気が良いので、日の出とともに急昇する。12時ごろより曇るのでこのこぎりの歯のようになり急降する。夜間もやはりのこぎりの歯のようなのので雲の去来があると見られ、日の出前に最低となる。湿度は気温と反対の変化をしている。(中央気象台 大井正一)

のため太陽輻射は強くひなたの熱さは非常なものがあつた。
 気圧——温度補正付気圧計破損のため気圧計の示す絶対値に
 ついては、なお検討修正の要があるので、この発表は次回に譲り
 たい。ただ、この程度の高度でも気圧の日変化または気象変化
 の前兆と見るべき気圧の変化もあまり敏感には感ぜられなかつ
 たよである。

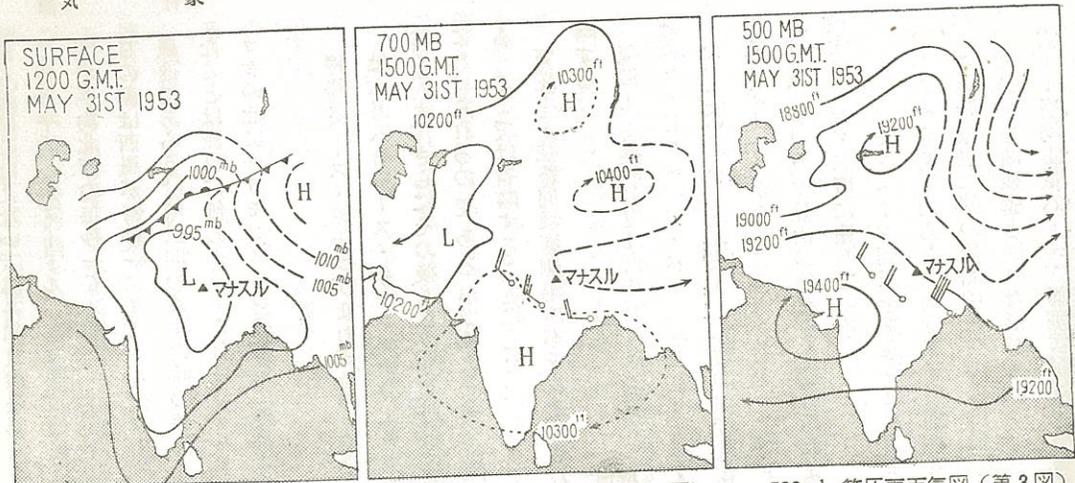
最高は十八時から翌朝六時の間に、最低は十時前後に現われ
 るのが通例であり、いうまでもなく気温変化と相関関係をなし
 ているが、一般的に低かった。

天候——ベース・キャンプでの五十六日間滞在中、終日の晴
 天はわずか三日であつたが、また一日中晴れなかつた日もわづ
 か九日であつた。その他の日はだいたい朝は晴、午後近くなつ
 て、Cu, Fc, Ns などが広がり曇つて来、夜間再び好天となる
 日がほとんどであつた。この間、雨が四回いづれも軽度のもの
 であり、雪は七回あり、うち五回は中程度、二回は軽度の降雪
 であつた。雪もベース・キャンプ付近では湿雪が多く日中のは
 げしい日射とともに短時間で消えてしまうものが多かつた。

風——風はやはりベース・キャンプの位置が局部的に方向に
 影響していたためか、南東または北西系統のマナスル氷河にそ
 って上下するものが多く、風速も最大毎秒一・六メートルの風
 速程度のもしか吹かず、ベース・キャンプとしては風にさえ
 ざられたよい場所であつたといえる。

雲——下層雲としては Cu, Ss, Fc, Ns がほぼ同程度に多く
 見られ、南南西—南—東より来るものが多かつた。ベース・キ
 ャンプ滞在の初期には時に北西方面のものもあつたが、後には
 東よりのものが多くなつて来ている。中層雲は Ac が多く、次

気 象



地上天気図 (第1図)

700mb 等圧面天気図 (第2図)

500mb 等圧面天気図 (第3図)

上の3枚の図は、マナスル攻撃の前夜、1953年5月31日の夜の天気図である。

第1図の地上天気図は、等圧線は5ミリバールおきに引いてある。時刻はグリニッチ時の12時 (1200 G.M.T) す
 なわちニューデリーの地方時で午後5時のものである。この天気図を見ると、この季節にはいつもそうであるように、
 インド北東部は弱い低圧部を作つていて、半島内部はほとんど全域にわたつて風弱く快晴である。この低圧部は半島
 内陸が過熱されるためにできる低圧部で、暴風雨をとまういわゆる低気圧とは全然性質が違うから、ヒマラヤ方面
 も比較的天気はよい方である。モンスーンはまだインド内部にはおよんでいない。

第2図は700ミリバールの等圧面天気図で、地上およそ1万フィート (約3キロ) の気圧配置と同等であり、第3
 図は500ミリバール等圧面天気図で、地上およそ2万フィート (約6キロ) の気圧配置と同等である。時刻はどちら
 もグリニッチ時の15時 (1500 G. M. T) すなわちニューデリーの地方時で午後8時のもの。図中の曲線は等高線で
 200 フィートおきに引いてあり、中国内部が破線になっているのは、そこでは観測実況がないので推定で引いたから
 である。

第2図と第3図を見ると、高層ではインド一帯は安定な亜熱帯高気圧におおわれていて、その稜線は北にのび、シ
 ベリア方面に温暖高気圧を分離している。高層の風はほぼ等高線に沿って流れるから、この図の等高線は風の流線と
 考えても差支えない。等高線の端につけてある矢印はその気流の流れる方向である。

第3図を見ると、ジェット・ストリームの主流は、ヨーロッパから大きくシベリアの北をまわり、その分流がヒマ
 ラヤに沿って流れているらしい。第2図にもほぼその形が出ている。

インドに3ヵ所矢羽根が記してあるのは、西からニューデリー、アラハバット、カルカッタで測つた高層の風であ
 る。矢の軸は気流の方向を示し、羽根の方は長い矢羽根1本で風速10ノット (5メートル/秒)、短い矢羽根1本で5
 ノット (2.5メートル/秒) を示す。

したがってヒマラヤの南に沿って自由大気の中では、地上およそ3キロから6キロくらいの所で、風は北西10メー
 トル前後である。カルカッタだけは地上6キロで20メートル吹いているが、チベット側の観測資料がないので理由は
 よくわからない。

山岳地帯の風はまた複雑に変形されるけれども、3枚の図を見くらべて見て、大勢は天気もよく風も弱いことがわ
 かる。まず攻撃にはよい時期であつた。

(中央気象台 久米庸孝)

いでAsが認められ、北西のものが大部分であり、速さも四月

末ごろより、それまでの中速から低速に変化している。これは
 ジェット・ストリームの南枝が次第に衰えるためで、やがて上
 層風が東風になりモンスーンとなる前兆と思われる。上層雲は
 Ccが多く、次いでCc、ごくわずかのCsが観察された。方向は
 北西—西のものが多く、速さは四月二十日ごろより中速から低
 速に変化している。全天の平均雲量は六・五、各層別雲量比は
 下層を一〇〇とし中層三二・七、上層は二三・九であつた。

b、高所キャンプの気象

気温——比較的長期観測の行われた第四キャンプ (五六〇〇
 メートル) での最低気温は五月二十七日の零下二〇度であり、
 最高は五月二十二日の二〇度であつた。なお最低気温は五月三
 十一日第九キャンプでの夜間の零下三五度であつたが、これは
 朝雪に軽く埋まっているものを掘り出して読んだ値であるので不
 正確のものと思う。また気温とは別であるが、テント内で日中
 には第三キャンプで四四度が記録されており、太陽輻射および
 その周囲よりの反射の強さを物語っている。

気圧、湿度——観測は行われたが、回数も少ないので省略
 し、雲の観察はベース・キャンプの観察中に加えてあるので略
 すことにする。

風——風速についても実測値はないのであるが、一般的にい
 って第七キャンプまでの間での風速は最大毎秒四メートルを超
 えなかつた。第八キャンプより上方では連日西または北西の風
 が認められ雪煙の進行によって推定しても少し強い時で平均毎
 秒三五から四〇メートルの風速はあつたものと思われる。しか
 し高所では空気密度減少により風圧が少ないので地上ほどには

からだにこたえない。第一回攻撃後第八キャンプ上の風は北西で毎秒平均一六メートル、第二回攻撃後は第八と第九キャンプ間で平均北西の毎秒一五メートル前後の風速と思われ頂上攻撃日の朝は西風が毎秒一二メートル、日中は一〇メートル程度の風速であろう。第二回の攻撃の時の風は異常に弱いものであったことは注目に値しよう。これはジェット・ストリームがヒマラヤの北に移りモンソンの東風になろうとする境目だと思われる。

帰路(ベース・キャンプよりポカラまで) 帰路のデータとしては六月八日ベース・キャンプ出発より同日ポカラ着までのものと、さらにその後七月三日まで同地滞在中のもの二つにわけられるのであるが、後者は低気象学的に意義はあっても、ここでは省略することにした。

気圧——往路同様観測場所がそれぞれ異なるので、これは省略する。

気温——最高温度は六月十六日クディでの三五・二度、最低は六月九日ラルキヤ・バザール上方キャンプでの零下四度であった。この間八日間に三九・二度の温度変化があり、高度も五三八メートルから一二〇四メートルまで下降していることを思うと、ヒマラヤ登山の特異性が認められよう。また日較差も最大は一七・二度に達している。

天候——モンソン到来を懸念された天気もポカラ到着までは、どうやらもったらしく雨は四回いずれも軽度のものであった。その他は五二回の観測中三分の二は曇、三分の一は晴であり、朝のうち晴後曇といった形が多かった。

雲——平均雲量六・一、層別雲量は下層雲平均五・四、中層

二・〇、上層〇・五であった。下層雲は六月八日より十五日まで山間ではNsが多く、これに次いでFc、Cuが認められた。方向はだいたいの谷の方に沿って上下するものであって、南東—南—南西からのものが多い。

十六日以降二十日まではCuが多くNs、Stがこれに次ぎ、方向は不定であった。中層雲はほとんどがAcで、時にAsも認められ東—南—西の方向よりのものが多くあまり一定していない。上層雲はCiが多くCs、Ccがこれに次いだ。方向も不定で、東—南—西—北北西までの間に散在している。これら中、上層雲はポカラ滞在中に逐次、東よりのものに近くなっていることは興味あることである。

モンソンについて

ヒマラヤ登山とモンソンとはきり離しては考えられぬほど密接な関係にあることはいうまでもなく、登山隊も五二年の踏査隊の経験にかんがみ、モンソン前に攻撃を行うべきか、後に行うべきかについて大いに論じられたが、気象学的な面からだけ考えても、

1. モンソン後には気温がはなだしく低下すること。
2. 風も特に冬季海拔一から一・二キロメートルを中心として吹き荒れている西風の帯ジェット・ストリームは頂上攻撃に非常な脅威であり、シカゴ大学におけるイン氏(Maung Tun Yin)の研究によれば、モンソン

中にはこの風はチベット方面にその流れを変え、ヒマラヤ地域では弱くなること。またこの流れの経路の

北への曲折はかなり急激に行われ、これがモンソンの突発的開始(Burstと呼ばれる)と関連のあることが指摘されていること。

3. 突発的に始まるモンソンの降雪の危険性も天気予報、ならびにラジオの利用により極度に低下させることが可能であること。

4. 日照時間の点よりしてもモンソン前は有利であること。

などモンソン前の攻撃を有利にする条件が揃っていることを考慮し、モンソン前の登山計画が決定されたのである。

次にこれらの予想について、今回の経験を述べて見よう。気温については、モンソン後のデータは記録されていないが、さきの踏査隊にも参加した隊員の経験によれば、モンソン後の日が照っていない時は、ほとんどテント外の行動は不可能といえるほど寒かった。しかしこんどのモンソン前の経験では日が暮れて後も、なお耐えられぬほどの寒さもあまり経験しなかった。このことよりしても、ある程度推定できると思う。登山隊の記録でも第九キャンプの最低気温零下三五度、第四キャンプ以下での最低が零下二〇度一回といった程度で日本の冬山で鍛えられた隊員には、寒さよりはむしろ太陽輻射による日中氷河上での高温の方がはるかにこたえた。

象 風はベンガル湾にモンソンの発生する五月二十三日まで、連日プラトーに雪煙が望まれ強風が推定されたのであったが、モンソンが発生してからは、風速は急激に低下してきたことが上、中層雲の動きからも認められた。この現象はかつて種々の報告書によって想像はしていたものの、そのあまりに明

確な変化にはおおいに目を見張ったものである。しかし、この風もその後しばらくモンソン状態の進展とこれに次ぐ一時的減退が数回くり返されるに伴い、あるいは弱く、あるいは強くなつたことが認められた。一般にインドの人々の間には「モンソン前に比較的天気の良い年にはモンソンの開始も突発的でなく、またモンソンの強さも弱い」といわれているのである。しかし今年も四月十日ごろより天候は決定的によかつたといえず、通常は毎年五月の第四週から六月の第二週ごろまでの間に突発的かつ決定的に始まるといわれたモンソンも、今年四月二十三日ベンガル湾に発生してより六月二十二日ポカラに滞在中同地より望まれるアンナプルナ連山が完全に見えなくなり、モンソンが本格的になったと認められるまで約一ヵ月の間、モンソンの状態はマナスル方面では一進一退といったありさまであったことを考えると、どこにもある気象上のいかならわしには何か根拠があるように思われるのである。山が完全にモンソンにはいつてからの状態については、それ以前に山を去っていた関係上知りえなかったことは残念であった。天気予報については、過去五十年間の統計の平均によれば、モンソンがベンガル湾に発生してより、マナスル地方に到達するまでには二週間を要するので、ラジオによる天気予報を利用する限り、登山行動中突然モンソンに見舞われることはまず無いと考えてよい。ベンガル湾でのモンソン発生を知ってからでもわれわれはかなり余裕をもって、その後の行動計画を立てることができた。ただ、八〇〇〇メートル級のジャイアントになれば、局地的に天候がかなり特異の性質を現わすことを考慮して天気予報を利用することが必要なのではあるまいか。

6 植物と動物

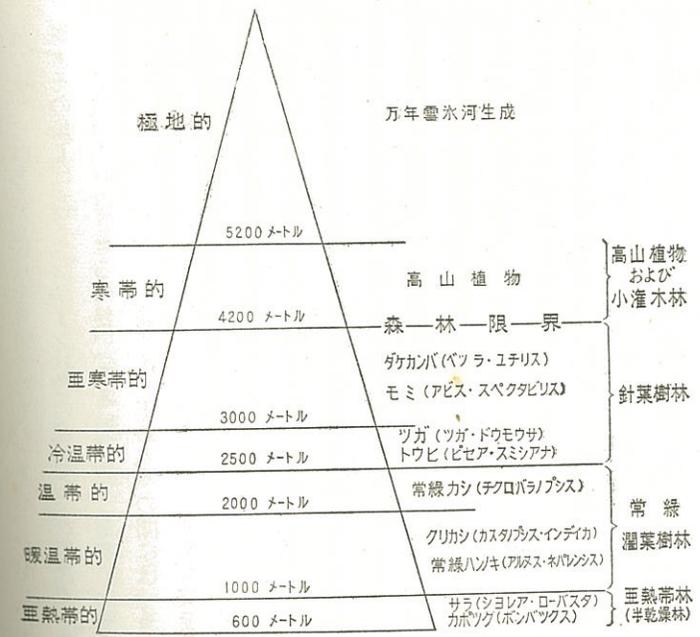
植物について

中尾 佐助

ヒマラヤ特に、われわれが観察した地帯の植物界は、日本の植物界に非常によく似ている。約二五〇〇メートルから四〇〇〇メートルにわたるトウヒ、ツガ、モミの林や、ダケカンバの森林限界の様子は、日本にそっくりである。ヒマラヤの植物は、日本、中国と共通な植物群が、南方低地のインド系植物群と、北方高冷乾燥の中央アジア、チベットのな植物群の間に、半島状になって細長く分布したものである。この半島の南岸は、ヒマラヤでは約一〇〇〇メートルくらいの高さで、クリカシ（土名ロコツツイス、学名カクタノブシス・インディカ）の出現によって見られる。これより高いところは、ほとんどの植物が、日本、中国と共通な種類か、または非常に近縁な植物になっている。しかし、大ヒマラヤの裏側へまわると、状況は変わって、乾燥寒冷なチベットのな植物群が分布している。この北の境界線は、大体グレート・ヒマラヤン・レンジの主峰を結んだ線に一致している。

ネパール・ヒマラヤの植物の垂直分布帯は、ヒマラヤ南面にくだる日本、中国的植物相では、規則正しく、日本人に親しい順序で現われてくる。サラの木の育一〇〇〇メートル以

下の亜熱帯林から、常緑潤葉樹林にはいり、ついでトウヒ、ツガ、モミの針葉樹林にはいる。森林限界は約四二〇〇メートルで、その付近で育っているのはダケカンバ（ベツラ・ユチリス）である。ヒマラヤの高山植物はその上から、見事に展開している。紅色、黄色、紫色のサクラソウや、青いケシ（メコノプシス）などもこの地帯に多く、また小型のシヤクナゲ類も地を埋めて、黄、紫などに咲き誇っている。ヒマラヤの垂直分布で著しいことは、落葉樹が少ないことで、日本でみるブナ林のようないものがなく、わずかにツガ、トウヒの林にカエデ類が、少

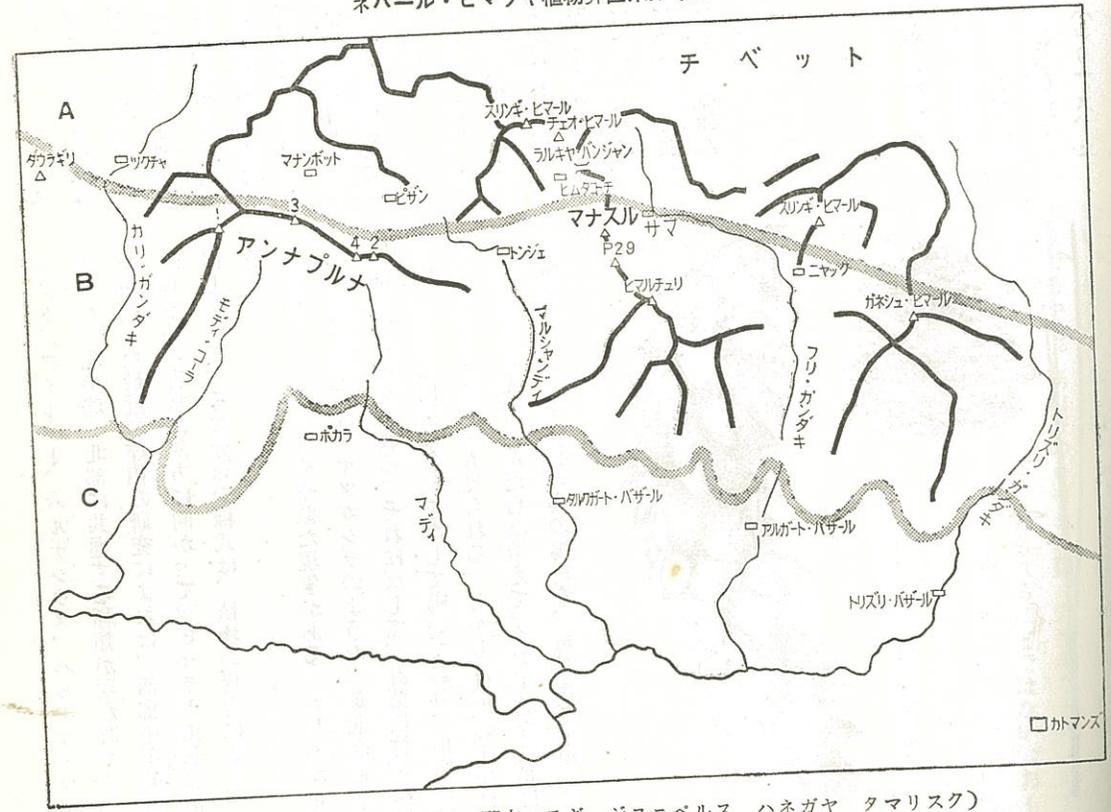


ネパール・ヒマラヤ植物の垂直分布帯

し混りこむだけである。

ヒマラヤの植物界の中で、特に中部ネパールで忘れることのできない点の一つは、人為の影響と、地形の險悪のため、森林が意外に貧弱なことである。人為の影響は、人間の手による森林の切り開きのほか、家畜の食害が大きい。低地の稲作地帯では水牛、中高度では牛、高地ではヤクやゾーが、いたるところに放牧されているので、その食害は顕著になっている。特に森林限界より上部は、万年雪のヘリまで、ヤクが夏期放牧されるので、高山植物は著しく影響を受けている。そのため、家畜の食わないシヤクナゲやサクラソウが増えているのに反して、禾本科などは貧弱になっている。また峡谷部の絶壁で、表土がほとんどたまりのないような土地は、森林が育たないが、家畜もはいれないので、たけの高い禾本が茂り、その間に松が散在している。ヒマラヤの松は二種あって、五つ葉の松（ピヌス・グリフツチー）は、常緑カシのゾーンより高い土地にはえ、三つ葉の松（ピヌス・ロックスブルギー）は、それより低いところにはえている。その下端は一〇〇〇メートルより少し下までである。ヒマラ

ネパール・ヒマラヤ植物界区系分布図



- A チベットの植物相 (カラガナ 灌木ヨモギ ジュニベルス ハネガヤ タマリスク)
- B 日本・中国的植物相 (モミ トウヒ ツガ カンバ カエデ 常緑カシ サクラソウ)
- C インド的植物相 (サラ ヤシ カボック ノボタン ボダイジュ)

ヤの高山帯には、ハイマツはないが、ハイネズ（ジュニベルス類）は数種あって、その様子はハイマツに似ている。この類は同じ高さでも、場所によってはえている量がたいへんちがっている。乾燥した日当りのよい、安定した斜面に多く、北面や湿地にはほとんどない。また水成岩の崩れたところやモレーンの上にも少ない。この類はヒマラヤの最高所で得られる最上の燃料で、四五〇メートルくらいまで、多量にはえていることがある。このあたりには、ほかにしばしば低いだけの灌木性のシヤクナゲが多量にあるが、それは燃料としてほとんど役立たない。

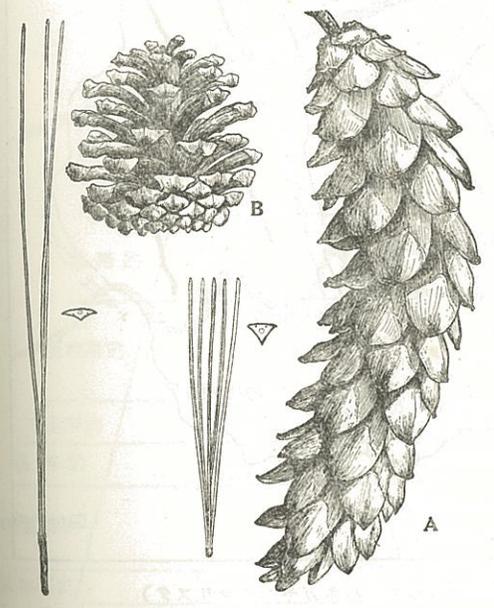
ヒマラヤ山中で得られる食用の野草は、あまり多くない。その原因は、やはり家畜の食害が大きいためだろう。特に野生ネギ類は日本、中国的植物相では多くない。わずかに森林限界付近の木陰にあるギョウジャニンニクが、六、七月ごろ食用となるくらいで、ほかに多くない。おもしろいものでは、大形のケシ（メコノプシス）の花茎が、皮をむけば生のままうまく食べられ、シエルバも喜んでいることと、やはり野生のある種の芹科の花茎が、セロリーのように食べられることだろう。

動物について

動物界でも、大体は植物と同一の傾向に、種類や分布が見られる。チョウを例にとってみると、水田がまだ分布している二〇〇メートル以下の土地では、そのほとんどが、インド平野や南方地域に共通の種類からなっている。それが三〇〇メートルくらいまで上がると、ヒマラヤ特有の種類（コリアス、エ

レクト、フィルダー、バルナシウス、ハルドウイツキー）などのほか、北半球の北部に共通する種類が現われてくる。旧大陸を一括した最近の蝶相の研究によれば、西部中国的蝶相が、東は日本から帯状に西方に向かって、ヒマラヤ山脈に沿って突き出している、その分布の様式は、植物の場合によく一致して

る。鳥界でも、これにやや似た現象がある。カリ・ガンダキの上流の乾燥地帯には、ヤツガシラのような、華北などと共通な乾燥地帯の鳥が見られる。それに反して、針葉樹林帯には、コガラが、日本と同様に群れをなして鳴いており、川原には、キセキレイやカワガラスも見られる。しかし、低地の水田に行けば、このように日本で親んだ鳥は消えて、インド的な鳥相になって、熱帯性のホトトギス科の鳥の鳴声を、毎日ボダイ樹の木陰から



ヒマラヤの松 Aは五つ葉の高地松 Bは三つ葉の低地松

しい。森林帯の代表獣クマ、シカ類やイノシシは少ないという印象であった。高山帯のカモシカ類、野生羊などは、時たま群れをなして現われるが、常時見られるほどではない。おもしろいことの一つは、ジャコウジカが案外多いことで、森林限界付近の林には、しばしばその糞が見られ、その狩りは、土地の人の話題になっている。

聞くようになる。

ヒマラヤ、特に中部ネパールでは、大型哺乳動物は非常に少ない。インドに接するクライの低地は、今日でも野生のゾウ、サイ、トラ、ヒョウなどが多くいるので有名であるが、われわれの歩いた地帯まで来ると、ごくまれに、トラが出現する程度で、ヒョウは目だたないが、かなり平均に雪線近くまでいるら

地形と地質

中部ネパールの地質のほとんどは、水成岩の基盤から成っているように、これに属する岩層は、今度の旅行中ただ、マナスル付近およびスリンギ・ヒマール付近、すなわち最北部にいささか認められた花崗岩、もしくは花崗片麻岩のようなものだけであった。水成岩のほとんどは、中世層なのである。カリ・ガンダキ河谷では、その特色たる菊石（アンモナイト）の化石がおりびただしく見いだされ、特にヒンゾー教系統の土民たちは、それをしばしば神聖物扱いしている。この水成岩は、頁岩、石灰岩などいろいろあるが、全体にはげしい褶曲作用と、強圧による変成作用を多少こうむっているようで、その中でも特に著しいのは雲母片岩である。そして、これら片岩類は、いたる所の土民、特にヒマラヤ以北のチベット族、ゲルン族らによって巧みにスレートとして用いられ、石壁のみならず、しばしば屋根ふきに活用されている。

大ヒマラヤの主嶺は、これら水成岩の褶曲の著しい所であるが、特筆すべきことは、中部ネパールでは、その主嶺が、チベット国境よりもネパール領内に入りこんできていること、それは民族の分布にも著しい影響を与えている。カリ・ガ

ンダキ、マルシャンディ、フリ・ガンダキ、トリズリ・ガンダキなどの河谷は、いずれもこの大ヒマラヤを横切って、チベット高原とネパール低地とを結ぶ交通路を提供しているが、しかもなお、主嶺の険悪な河谷は、両者の間の障害たる点が多いのみならず、この主嶺は、その南北両地方の気候に差異を与え、また北部の海拔の高さに比べ、南部が低いいため、寒暖の差をも顕著にしている。

気候、植生と農牧業

ネパールの緯度は低い。そして山国にもかかわらず、川は深く山地を侵蝕しているので、重要な河谷低地の海拔高度は意外に低く、カトマンズとポカラの間では、しばしば海拔六〇〇メートル内外まで下る。そこで、これらの低地河谷の気候は、亜熱帯、場所によっては熱帯的とさえいえる。雨も、少なくともモンスーン期には多量である。それで、人手のはいらない森では、主にサル・トリ（沙羅双樹）が美林をなしていた。人里に結びついた所には、マンゴー、バンヤン、ボダイ樹、バナナなどがたくさんみられる。ところが、大ヒマラヤに近づき、かなり高い丘陵などにさしかかると、一種のカキの木、クス類がふえ、だんだんカシ類の多い地帯にはいる。カシは、日本の低地の森で、重要な木であるから、この辺、つまり海拔一五〇〇メートルから三〇〇〇メートルあたりまでが、日本的な暖かさの地帯であろう。

さらに、大ヒマラヤの北側にまわると、海拔が高いので、トウヒ、イチイ、ツガやカエデ類の多い地帯となり、さらに、三

五〇〇メートル以上になると、モミやシラカンバが多くなり、四〇〇メートル内外まで森林がある。その上はお花畑地帯になり、最後に万年雪の世界が出てくる。こういった植物分布帯の移行からして、寒暖の気候帯の移行もほぼうかがえよう。

これは、気候が相当湿っている場合で、フリ・ガンダキやマルシャンディをさかのぼっていけば、ほぼこういうふうである。けれども、アンナプルナおよびダウラギリなどの大山塊が、南方からの湿気を含んだ空気をささげると、カリ・ガンダキでは、すっかり様子が変わる。この河谷では、グナとガーサの間辺から、急激に気候が乾燥するようで、これから上流では、急激に森林がまばらになり、ネズ属のような樹木が多くなる。そして、カグベニー辺では、木も草もほとんどみえず、ただ、砂地にカラガナのようなさばく性灌木が、点在する半さばくとなる。

そこで、農牧業をみると、まず亜熱帯性の低地では、二〇度以下の傾斜地、平地はほとんど耕地で、森林らしい森林は、きわめてわずか見られるだけである。特に河谷は水田で、稲の一作が多い。丘陵地では、トウモロコシ、シコクビエ、陸稲などがたくさん作られ、家畜は牛のほかに水牛の多いのが目立つ。次に、暖帯ないし温帯性の高さでは、水田がなく、トウモロコシ、シコクビエが多く、裏作には麦類が作られる。家畜は牛が多い。さらに高く、温帯から亜寒帯気候に相当する所では、小麦、大麦が主で、ソバも多い。耕作地の最上限はほぼ三七〇〇メートル前後である。畜産は、牛のほかに羊、ヤギなどがだんだんふえる。そうして、三五〇〇メートル以上くらいでは、ヤクの飼われているのが目立つ。

しかし、ここでも、カリ・ガンダキ上流の農業は特色があって、気候が乾いているので、高山から流れ出す河谷の水をひいて、黄褐色の大地の上に小麦や大麦畑の青々としたオアシスが、点在するだけである。荒地にまでよく放牧がみられるのは、ほかと同じであるが、この地方でのみは馬、ラバ、ロバもかなり見られる。

交通・運輸と商業

交通路は全体に、貧弱きわまるもので、カトマンズ—ポカラ間でさえ、すべて人力運搬であり、額にかけたバンドで背中の荷物をかつぐ。天秤棒の使用は、カトマンズに近い所で若干みとめたのみ。この点では、かえって奥地の方が、馬、ラバ、ロバあるいはヤクによる駄載が発達している。カリ・ガンダキ上流はこのほか、この駄載による隊商の往来が多いが、それらはガーサの辺で、人夫による運搬に切り替えられる。駄載の範囲はこのほかに、マナンポットの谷やラルキヤ・バンジヤンを経由するあたりなどで、地形、気候（植生）などがその分布を制約していることがうかがわれる。

特に重要な商業は、大ヒマラヤ以北からの塩、羊毛、毛皮などを、以南の米、製造品などと交易するものである。前者はチベットから輸入する分も多いようで、後者のうち製造品などは、インド方面からはいるものも少なくないらしい。これらの交通路のうち、カリ・ガンダキ經由が最も重要で、次いで、マルシャンディをさかのぼり、ラルキヤ・バンジャン、ギア・ラルを経たチベットと結ぶもので、フリ・ガンダキ經由のものは最

も比重が小さいらしい。なお、ネパール領のチベット人たちは、秋冬には、カトマンズやカルカッタまで商売に出かけるものも意外にいる。

集落の型

これも低地と高地に分けるのが便である。低地の集落には、一般農村のものとバザールふうのものがある。一般農村では、集落がほとんど丘陵の山腹や丘の上であり、谷にきわめて少ない。集合した家屋のほかに二、三軒ずつ散在したり、一軒ずつ散在しているものが並存している。各農家は、ちよつとした庭、生垣などで囲まれており、バナナ、マンゴーなどの果樹がそれに使われている。これに対し『何々バザール』と呼ばれているのは、交通路沿いに位置し、交通路はいきおい低地を連ねて走るから、河谷低地に位置することもまた多い。百姓専業でなく、商店を兼ねたり店を専業にするものが割合にある。家も一般農村のそれが主として、ワラぶきの入母屋であるに対し、バザールでは、しばしばレンガ作り二階、三階建の切り妻で町家ふうのものを見る。インドふうの文化の影響が強うかがわれる。低地では、いずれの集落もヒンズー教のほらをその中心近くに持っていることが多い。

これに対し高地部の集落は、概して密集の度合が高い。ことにカリ・ガンダキ上流やマナンボット付近では、屋根はチベットふうの平たい屋上を持ち、家々はほとんど壁を密着させ、ときに、昔の土侯やラマ寺のりっぱな建物がついていけると、集落全体が、一大ビルディングか城郭のような感を与える。二階建

は普通で、ときに四階建ぐらいのがある。カグベニー、マナンボットなど皆そんなふうであるが、チャルカボト・ガオンへ越す途中のサングダという寒村のときは、はなはだしい例である。だいたい、チベット族やチベットふうグルン族の村は、皆このような傾向があり、そして多くが丘の上や断崖にのぞむ高所にあたり、山腹や台地上の場合でも、多少とも高まった所に位置している。

こういう傾向は、乾燥気候の地帯で最も著しく、ブリ・ガンダキ上流など、東部の湿潤地方に移ると、同じチベットふう村落でも、たとえば家の屋根はスレートぶきや竹むしろを使った切り妻型になる。ときたまは散居的傾向を帯びた村もなくはない。

私が、スリンギ・トマール南麓のツムジェというチベット村で調べた例では、かような集村が一つずつ、父系氏族ともいべき集団によって住まわれていた。これが例外ではなく、チベットふう村落の数多くにみられる性格だという公算もかなりある。

民族とカースト

ネパールの低地部には、インドの有名なカースト制度がはいって来ているが、それらは、民族の相違と混同している感のあるものも多い。現地人自身が、カーストとか民族とかの概念が、あいまいである。いちがいにいって、インドの見解を固執するインド人やネパールの低地人は、すべてをカーストのちがいでいふふうに見なしたがる。それにしても、人により区々な

ことは、たとえばカトマンズの町のある紳士は、カトマンズ盆地に八種類、それ以外のネパールの地方に、十二種類のカーストがあると例挙し、科学班の通訳たるインド人のシャルマ君は、八種類をあげた。しかも、それら二、三の例示において、カースト名も一致したのもあれば、食いちがっているものもたくさんある。

私が旅行中あつめたカースト名は、ネワール、ブラマン、タマン、マガール、サルキ、チェトリ、タクリ、ダマイ、グルン、グルカ、タカリなどであるが、その中には、前記諸氏のいずれにも出て来ない名もある。またネパールで、グルカというのは、カーストや民族と同じカテゴリーには、はいられないものだらうが、かつてにグルンとならべて、別のカーストとして教える人もある。グルン族は、グルカ兵の主力をなした民族である。

しかも、現地村落民の間では「あれはネワールだ」とか「タマンだ」とか、互に識別している呼び名のあることは確かである。この中のあるもの、たとえばサルキは、くつ作りその他皮職のカーストとして知られ、事実カリ・ガンダキの谷筋などで、このサルキが道端に、くつ作りの移動店を作っていたりするあたりは、確かにカースト的なものを感じさせる。しかし、前記にカーストとしてあげた名のうち、大部分は、むしろカーストというより、民族名と取りたい感がある。彼らはネパール語のほかに、彼ら民族固有の会話言語を持っているようで、少なくともネワール、タマン、グルン、タカリなどでは、ほぼ確実文である。

とにかく、民族意識を異にするタイトルを持った彼らは、ネパール低地では、きわめてしばしば同一村または、同一集落に

混合社会を作っている。かような『混合社会』が現われてくるのは、海拔一〇〇〇—一五〇〇メートル以下の低地部である。

これに対し、大ヒマラヤの高地一帯には、ほぼ一種の民族が大部分を占める所がある。この中で、今度明白に認められたのは、マルシャンディ河谷およびブリ・ガンダキ河谷のグルン族と、カリ・ガンダキ河谷のタカリ族である。後者は人口一万といわれ、ツクチャの町は、いわば、彼らの首府のような感がある。毎年の祭のうち、その一祭には、全河谷のタカリ族が、ここに近いある部落に集合するという。彼らはもともと、この河谷の仲継商業に精を出して来たが、約二十五年ほど前から、彼らの民族の社会生活万般——教育面、宗教面、産業組織、自治組織など——の改善を、自発的に企図し、精力的にそれを行ってきたようである。特に商業において目ざましく、ポカラの町の経済的実権は、ネワール族をしのいで、彼らの手中にあるらしい。

グルン族の方は、ネパールの典型的山地民族とみるべく、彼らはまた、あまり水田を作らず、トウモロコシとシコクビエの農業にその根幹をおいている。このグルン族の大半は、ネパール低地ふうの文化もかなり浸潤して、たとえばネパール語を解するものもかなり多く、服装もそうである。しかるに、マルシャンディでは、トンジエ付近から上流のマナンボットの谷やツード・コーラ流域、ブリ・ガンダキでは、ニヤック以奥の本流——サマに向かう谷——河谷では、非常にチベットふう文化に染まったグルン族がいて、一見、チベット族と区別がつかない。現地の他民族は、彼らを『ラマ・グルン』と呼んで、他

のグルンおよびチベット族と区別し、彼ら自身もまた、自分たちをチベット族とちがって、グルン一派と考えているらしい。ブラガ部落のあるラマ・グルンは「自分たちは村内では、チベット語よりグルン語を話している。村外ではしばしば、チベット語を使う」といった。しかし他方、ほとんどグルン語を忘れかけている地方もあった。

最後にチベット族は、中部ネパールでは、主としてポティヤあるいはプティヤと呼ばれている。今度のコース中では、カリ・ガンダキ上流と、プリ・ガンダキの東岸の大支流シアル・コーラ流域がそれである。前者では、中流のタカリ族に接して、カグベニーの少し下流辺から優勢になり、東は、ニサンゴ・パンジャン—ムクチナートの峠——を境に、マナンポットのラマ・グルン地帯に接している。シアル・コーラでは、本流に合流する点までで、同じくグルン族と接している。

宗 教

宗教は、これを一応二大別できる。大ヒマラヤの一線を大体の境として、南はヒンヅー教の勢力圏、北はラマ教の勢力圏といえよう。したがって、中間にまたがるグルン族のように、北部は『ラマ・グルン』の俗称どおり、ラマ教の方にはいる。けれども、ラマ教もヒンヅー教も、民間諸俗信を多量にとり入れていて、ときに、それらのかたまりのような感があるといわれるくらいであるから、もちろんこんなレッテルで、すべての信仰慣行が割り切れるものではない。たとえば、前記タカリ族は、最近彼ら古来の信仰というジャングリ教を公に是認した。

各のツォスムに名前がある。カンダリング、ブランガル、シムシェというのがそれで、私たちはカンダリングのブルーという家の物置を占領することになった。ここにテーブル、いすをこしらえ、ラジオや書棚をすえ、机上に高山植物の花をいけるとりっぱなルームになった。

この村でまずおもしろかったのは、一軒ずつの家族が、同じツォスムの中では皆親類だったことである。家には戸主があり、戸主は大体父方の系統をたどって、多くは長男があとをつぐ。こういった家から時々分家ができ、こうしてふえて一つずつのツォスムになったのである。だから各ツォスムは皆ひとつの祖先からわかれた家々の固まりで、その中には本家筋というものがあり、総本家をツォングといっている。これを結婚していないとみると、同じツォスムのうち同士では絶対に結婚してはいない。かならずほかのツォスムかほかの村と通婚する。通婚はほとんど嫁入りで、妻は夫の家にはいる。けれどたまたまあとつぎの男の子がいないと婿養子を招き入れる。ツムジエでは、他村の男がこうして養子に来て姉妹と結婚したが、子供ができぬといつて妹娘をも妻にしているいわば一夫二妻で、しかも姉妹妻という例がひとつあった。

ツォスムはまた各々自分たちの神をもっている。これらの神の名を私たちにいうことを彼らは非常に恐れ「極秘にしてくれ」といつて私に告げた男があった。だから私も仁義を重んじてここには公表をしばらく差し控える。しかし、三つのツォスムの三つの神のうち、ある神はそのツォスムの人たちがチベットからここに移住したとき、いっしょにやってきたという。またある神は、ツムジエ村の東をかきぎる深い小さな峡谷のあたり

また、ラマ教支配下のツムジエ村でも、ラマが干渉しない氏族神崇拜が別にあり、ラマ教の儀式や慣行の中に織りこまれて、古来の宗教信仰が生きていると思われるものもある。

ツムジエで見た風俗、習慣

私がツムジエ村で四十余日間滞在して調べたなかから風俗、習慣などで、二、三おもしろいことを採り上げて最後に一言のべておこう。

調査対象に選んだツムジエ村は、ブリガンダキ上流を降り、途中から高い峠をこえて、その大支流シアル・コーラの流域に踏みこんだ最初の村だった。海拔三一〇〇メートル、上を仰げばスリンギ・ヒマールの雪嶺が頭上からおおいかぶさるように迫り、下を見下せば、はるかに深くシアル・コーラの峡谷がみえる。その深い谷をへだてて朝な夕なガネシュ・ヒマールを向いに眺めることとなった。ものすごい大斜面の山腹に、わずかに傾斜のゆるんだ中腹が点々とあり、ここにツムジエをはじめ、ルタール・ゴンバテンシン・カールなどというチベット人農村が十戸か二十戸くらいずつ固まってある。

ツムジエに着いたときには、できのよい麦畑がまだ黄金色に波打っていた。この村では主に小麦が作られ、大妻とソバがいくぶん見られる。滞在中に、大妻が先ず刈り取られ、一ヵ月後に小麦が刈られた。そのあとには、一部の畑がすぐ耕されてソバをまく村人がみられた。

ツムジエという村（ユールという）の中に人家の固まりが三カ所あるが、いわば、これらの『字』はツォスムといつて、各にある赤い大石であり、その名はラマ教では狂暴な自然力を指す悪魔の子孫となっていた。またほかの神は、ラマ教のあのマングラの中にある奇怪な悪魔様の神の一つと同じであった。

各家々の中には、いろいろ置いて食事をする（トブサという）部屋があり、この東に向いた所に窓がある。氏族の神は家々の中ではこの窓側にいることになっていて、その位置からみて家の戸主、兄弟や、主婦、子供たち、あるいは客人のすわるべきいろいろのそばの坐席がある。

しかし、ツムジエは、表向きにはラマ教が支配していて、四つの寺院がある。年中行事の幾つかのお祭りも皆一応ラマ教の祭りである。お寺のラマが司祭し、俗人はみだりに関係できない。ただ重要でない娯楽面などでおおいに関与する。またこういったお祭り行事で、女がいったい役割を果すことを禁じられていたのもおもしろい。チベット家屋に特徴的なタルチョ、あるいはドルジエという宗教的な旗のぼりがあるが、この旗のぼりの先端につける香木の取り替えなども、この村でも男にのみ許されている。ツムジエでは、畑の種まきも、女がまいてはいけなない。これは確かに女でも容易な軽労働なのだが。もつと皮肉な例では、ブルー老人の家でたいせつそうに植えてあるマヌというチベットから来た薬草は「女が触れると枯れる」ということになっていっているものである。

こういうふうには、何か宗教的なものに関連して女が締め出されているもの、それは必ずしも女性の社会的地位が低いということではないらしい。

この村では、チベット人たちに通有という一妻多夫の風習も確かにあることがわかった。遺憾ながら村人がそれをかくして

いたので少しの材料しかわからないが、この村でも一妻多夫の場合に夫は、かならず兄弟である。兄の妻は半ば公然と弟たちに性教育の手ほどきをし、また兄弟の年齢が進むとともに、いつしか弟の妻ということになることも多い。実際に一妻多夫の場合はいずれも多くみて全夫婦数の三割までかと思うが、それだけの割合にせよ制度として村内で公認されているのは事実である。また単に性的関係というだけなら、恐らく大部分の兄弟が同一の妻と関係をもったことがあるかもしれないし、兄弟以外のものも関係なしとしないだろう。けれども、兄の妻たるものに弟が関係することが自由なのに比べ、弟が別個に妻をもった場合、これに兄が関係することは厳禁されている。かように一妻多夫といっても、それは無秩序なものではない。

彼らの性的訓練は若いうちから牧場における男女の友だちつきあいから始まるという。しかし、もしもその少年少女が同じツオスムの者同士だったらどういうことになるだろうか。この点はいっさい知るところなく終ってしまった。また一妻多夫だといっても、この村の男女の数はすこし男が多いだけだったから、理窟からいえば女があまることになる。実際全部で三十六

戸、人数で二百人くらいのうち、オールドミスが数人もいることは見のがせない数だろう。彼女らの性生活の実態がわかるまでは一妻多夫制のほんとうの理解は困難だろう。

彼らの性生活はかなり解放的といえようが、それは性生活の精神面が没却されていることではない。彼らの嫁選び婿選びは、しばしば本人同士の恋愛から親を動かして成立させることもある。また受け身に立って親に結婚を強いられる娘の場合でも、未来の夫が気に入らねば駄々をこねることがある。そしていよいよ最後の拒絶の手段は、黒髪をたち切って「女ラマになり終生独身でおしたいわ」といって親を脅迫することである。性生活ならだれとでもよいといったものではないことはここからもうかがえる。

農業と土地制度、商売人としての彼らの活躍、金持ちと貧乏人、食物、衣服、すまいなどについても多々書くべきことはあるが、紙数の上から他日に譲りたい。ただ、村の中に、以上述べた人たちのほかに、ラマの家族と、低地から移住して来たカジャさん家族と、そして村の二つの家族の中に借金どれいとして三人の女性がいたことをつけ加えておこう。

8 医学的考察

ヒマラヤの診察（一九五二年の踏査隊）

林 一彦

文明の低いネパール人に予防注射の制度が行き届いていることを期待するのは無理だが、ただ天然痘の予防接種だけは定期的にやることがわかった。やはりあばたがこわいらしい。カトマンズ市にある大きな病院は、ピアー・ホスピタルのほかに、ミリタリーとマイルの二つがある。この二つは見るべきものがないというので割愛した。ただピアー・ホスピタルのみは、ドクターのS・C・マトゥンダール氏の案内で病床を見せてもらった。病室中、マラリア性、ビールス性肝臓疾患の多いのに一驚させられた。ベッドは百ほどもあるのか、男女は厳重に分たれ、また階級制のやかましいネパールは、ベッドまで各カーストによって区別されていた。

日本を出てから三週間を経て、ようやくカトマンズを出発、ヒマラヤに向かっている行進が始められた。これからベース・キャンプへ、一週一日の休日を取って三週間、われわれ隊員の健康はますます上の方といえただろう。

医学的考察
モンsoon後期といえども、暑気はかなり強く、水分蒸発に悩まされた隊員は、せっぱつまって、たんぼの水に口をつけたこともたびたびであったが、少々の食欲減退と下痢が二、三出

たほどで難なきをえた。ノミ、シラミの類はD・D・Tにて、マラリア蚊はキニーネの常用でのがれた。ヒルについて、ダージリンでミセス・ヘンダーソンに注意するよういわれた。イギリス製駆除薬（ディート=DITTO）と称する薬も買われ、相当神経質になっていたが、旅行全体を通じて、われわれの血を吸ったヒルは二、三匹であった。モンsoon後の乾燥と、地方性の強いということなのか、いずれかであろう。

旅も一週の終り、ブリ・ガンダキに出あわす一部落手前の、サレントールで一日の休養を取った。

三箱にあまる医薬品箱を整理し、メスなどの手術道具を見ているうちに、殺伐な医心が急におこり、施療を受けにむらがる村人の中に見付けた子供の脱腸を切って見ようという気持ちになってしまった。また高木隊員におつきあいを願って、炎天の木影で、物見高い住民に囲まれて、メスを入れた。大きくないから、カトマンズあたりに出て切ってもらうかもしれない。この患者を、いずれは切る必要があったのだが、医は仁術とばかりで、大真面目でやっていた。しかし、他の隊員に見ればもし死んだりしたら大迷惑、二度とボカラ東海道途上にあるこの部落は通れないことになってしまう。特に田口隊員などは、ここを帰路ひとり旅で通らねばならず、アンナプルナのベース・ハウスで別れる時まで心配していたようであった。

約二週を要して、マルシャンディ狭谷にはいる。この辺からヒマラヤ地方病の一種である甲状腺腫が多くなってきた。ヨーロッパ・アルプスから中央アジアにかけて多いこの疾患は、一応ヨード不足によっておこるとされているが、ブラジルなどでは南京虫の一種にさされても起るといわれ、原因は不明な点が

多いようだ。甲状腺のコブは他にもあるが、地方的甲状腺といわれ、大きなものをあごの下にぶら下げても特に害はない。ただあまり大きくなると気管支が圧迫されたり、心臓が弱ったりする。幸福のシンボルであるといって、もっともらしくぶら下げている彼らの顔にも、苦痛が現われているのも少なからず見られた。

まれに目玉の飛び出るバセドウ氏病に変化するものや、クレチン病といわれるものになることがある。クレチン病であろうかと思われるものをひとり見たが、この病はからだが倭小でうすのろでつんぼ、おしが多く、まことに気の毒な病、ネパールを広く歩くと多く見付かるのではないかと思われる。

このコブを下げているネパール人に、のどを指して「ガード」といってやると、薬をくれという。よろしい薬をやるから写真をとらせろというところである。中にはなかなか見事なのがある。

マルシャンディの入口に近いウディブという部落では、たくさんこのコブをつけた村人を見た。バンミーの話によると、彼の生れ故郷の近く、エウレスト山麓、グープの谷の西隣、ロングシャールという谷には、非常に多く谷中の人が皆持っている、ウディブの比ではないという。この村では四、五十人いるようではパーセントぐらいかと調べて見ると、案外少なく三パーセントから四パーセントの間であった。これだけでもわれわれの目を見はらせるのに、ロングシャールの谷は、コブの花でさぞ見物だろう。

二回目の休日をクディでむかえる。休日を利用して、隊員およびシエルバの血球を調べる。標高八〇〇メートルで数は全く

普通、ここからマルシャンディはぐんぐん上がるので対称として役立った。

この辺に来ると、薬は相当貴重なものになってくるようで、村の長者の往診で、ごっそり夕餉の玉子とロキシが増えたり村の医者という老人がキニーネをねだりに来て、半分粉になった四、五人分の錠剤を出したら、三拜九拜したりした。また朝出発まぎわに、腹痛の女が現われたが、すでにポーターとともに薬箱が行ってしまった後なので投薬をことわると、使いのものが一日行程の次のキャンプ地までついて来て、少しばかりの薬を持ち帰って行った。

アンナプルナ試登後、隊員は良行な馴化を得、血球数も正常の一・五倍、八百万近くになり、さらにチュール登攀で他の条件も満たされ、マナスル踏査に向かった。

マナスルのベース・キャンプ滞在中、唯一の物資補給地であるサマの部落には、チフスが流行をきわめていた。登山隊もここにお世話になる予定なので住民の感情を害してはまずい。医者は施療宣撫に専念せよということになってしまった。特に彼ら衆望の的である僧院長の娘が危篤であるというにおよんで、隊長の命令、すっかりベースでかんづめを食らってしまった。チフスが多いと聞かされて覚悟はしていたが、悪い所で出くわしてしまった。

早速僧院につれて行かれて患者を見せられた。患者は重態であり、死期を待つ十分の条件を具えていた。これに失すれば、聖カンブンゲン（マナスルのチベット名）に登ることすら、異邦人であるわれわれの滞在さえ許してくれないだろうと疑心暗鬼。さしをなげるわけには行かなくなってしまった。強心、血

漿注入の処置を三時間ごとにかよって、ようやくチフス特効薬オーレオマイシンを飲ませるところまで、こぎつけ、蘇生挽回の見込みがついた。この時は彼自身あっはれと思ひ込ませたが事実はさにあらず。原始人には歯みがきでもよくきくという原理にほかならなかった。

サマ滞在中、名医ぶりを發揮して次から次へと原住民の命を助け、大いに重宝がられ、馬にゆられて月を見ながら帰路を急ぐ日も再三であった。

薬が非常によくきくとき医者は往々、ドラマティックという言葉を用いるが、彼らに対する薬の効果はまさにドラマティックであり、また量も日本人容量の半分ぐらいで十分効果が期待できたことは驚くべきことであった。しかし、さらに驚胆させられたことは病気に對する抵抗力の強いことであった。三十五、六の体格のがんじょうそうな男を診療した。彼は一時重症であったが急足によくなり、ほとんどなおろかしていった。その後当方の再三の注意にもかかわらず、トウモロコシを食ひ、酒を飲んだ。御存知のようにチフス回復期患者の食欲は常人の考えのおよばぬほどの食欲が普通である、この時期には、腸内壁が脱皮を行っていて、壁が非常に薄くなっている。ここへ固形物を入れてやると、たちまち腸に孔があき腹膜炎を起す。この男も、サマを去る日近く、急を告げられ診察に行くとい腹は

今までの二倍近くも大きく、完全に急性腹膜炎を起していた。そばでは家族が盛んに祈禱を上げている、手術すれば助かるが、とてもそれだけの時間的余裕がないので、完全に見捨てた。注意を守らなかったからこのようになったことをいい聞かせ、すぐ逃げだすように立つと、何でもよいから薬をやってくれ

と袖をつかまえていたので、ピタミンの皮下注射をして帰って来た。二日後ベースを引きあげた途中、その家の前を通ったので家族を見舞う意味で立ち寄ったところ、なんと死んだらうと思っていた患者が、今は静かな息をして横たわっているではないか。腹は一部の腫瘤を残して平たくなっている。まれにこのような例があることは知ってはいたが、治療よろしきを得た早期のものだけであり、あのような程度のはなほだしいものが、こんなに早く治癒に向かいつつあるのを見て、ネパール原住民の生命力に驚胆するとともに歯みがき粉の原理もわかるような気がした。

約三ヶ月の山旅の間、二百人あまりの患者を診察して、以上のような病気のほかに、眼疾患やリューマチス性の病氣、性病に関するものもかなり多かつたことを付記します。

登攀の医学的考察（一九五三年の登山隊）

辰 沼 広 吉

ベース・キャンプから上の登行対策、ならびに調査には、次のような計画をたてたが、その医学的な成果を、ここでまとめらるまでにはいっていないので、今までにわかっている範囲について考察してみた。

馴化 最高点に達するまでに四十二日を費しているのは、パウアーのカンチエンジュンガ登山のそれとほぼ一致している。しかし高度が増すにしたがって、次第に症状が現われるのではなくて、波状的に症状が出てくるのは、生体反応として興味

あることである。また次第に高度を増す一方、適当な時期に、五〇〇メートルほど一時下降して再び登行するのは、馴化のためによい結果をもたらした。おそらくそれは一つの刺激として、作用するものではないかと想像される。高山病の諸症状は、大体予想どおりであったが、ただ七〇〇メートルの付近で、下痢を起した二、三のものがあつたが、これは副交感神経緊張の状態であると推定して、目下追求中である。馴化の問題は、登山計画と密接な関係を持つので、血液標本の結果を得たならば、是非決定的な結論を作りたいと思つてゐる。

馴化のための薬剤として、一般的に肝機能を高めるために、東京を出発する一ヵ月前から、総合ビタミン剤の服用を励行した。馴化のためには、各種の薬剤が考えられるが、結局隊員を二名ずつに分け、次のような薬品を与えた。総合ビタミン剤ルブラミン、メチオニン、コレテート、塩化アンモン、食塩などである。それらの有効度は、血液標本の成績を待たなければならぬが、症状的には、ルブラミンがよかつたように思える。胃粉末、および鉄を比較的大量に含んだものである。今後はこれにボルフィリンならびに金属を加えるのもよいと思う。

個人差 異なるものが八〇〇メートル級の山に強いかというところを、総合的体力の立場から考えなければならぬ。推定ではあるが自律神経安定型の体質、そして粘着性気質をそなえたものは比較的強いと思われる。しかし、これはさらに多くの例数と実証の裏付けが必要である。

歩行の経済速度 もちろん個人差はあるが、酸素の欠乏状態にあつて、疲労の回復をいかに早めるかという問題である。疲

労の蓄積はよくないので、各自が自分の経験からして自分に合った登高速度を考え、回復を計らなければならない。しかし、これは年齢による差があるので隊を組む場合に、考えなければならない問題である。

温熱環境の呼吸におよぼす影響 寒冷に対する呼吸の反応は、予想してゐたのであるが、今回は輻射熱による呼吸の変調を経験した。興味ある問題なので、今後の課題としたい。したがつて今回は、輻射熱計とカタ、寒暖計の携行を是非推奨したい。

凍傷と高度、気温の関係 いままでのヒマラヤにおける凍傷をかえりみると、気温と同時に高度の問題を予想しないわけにはいかない。少し専門的な言葉を使えば、寒冷血管反応の遅鈍ならびに温度分布の変化が考えられる。この問題に対しては、調査器具を携行できなかったため、実証する方法がないので残念ではあるが、重要なことであると思う。対策としては食塩の服用を準備した。

高山病と薬剤 高山病には種々の症状がある。これらに対して一時的ではあるが、対症療法としての薬剤を数種類試みた。結果として、少量の服用はきわめて有効であるが、大量の服用は必ず副作用をとまうので、注意しなければならぬ。いろいろの強心剤、鎮痛剤は有効であるが、催眠剤はあまりきかなかつたようである。鎮咳剤は、エフェドリン系の薬剤が、効を奏したのは興味のあることであると思う。

含水炭素食料と蛋白質食糧 現在までの考えでは酸素の少ない場所では、含水炭素が有利であるということは、ほとんど定説となつてゐるが、最近蛋白質もきわめて有効であると考えられる。ほか、輻射熱が強いので、衣服の色に注意をはらふ必要もある。また輻射熱の呼吸におよぼす影響もあるので、帽子の構造を改良するのは有効であろう。

酸素 現在使つてゐる薬剤は、一応生体に反応して、各種症状に対してきよくみえるが、実は一時的なものであつて、すべて根本的に疲労の回復または、症状の消失に役立つものではない。各国のヒマラヤ遠征隊も、大量の薬剤を使つてはいるが、決してそれだけで苦痛なく登山が行われているわけではない。酸素が不足すれば、食物も十分には食べられない。睡眠できない場合に、睡眠剤を服用するよりも、酸素を使った方が、副作用もなく、はるかに有効である。またいかなる薬剤も、十分な効力を発揮し得ない、第四キャンプ（五六〇〇メートル）の高度でも、試みに酸素を使つて、イグルーを作れば、きわめ

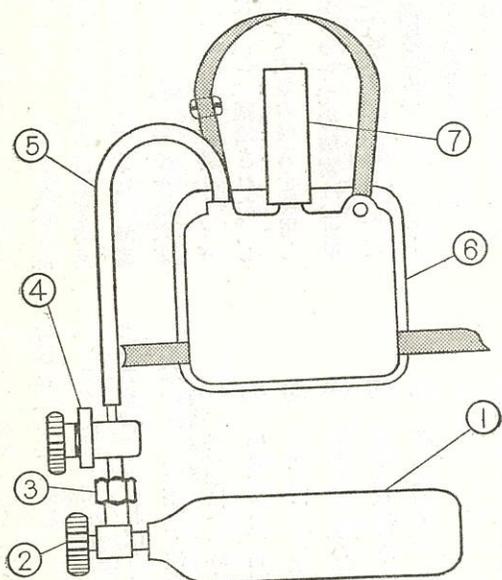
人もあるが、十分な実証がないので、今回は高所用としては、

含水炭素を主体として計画された。しかし、比較的高所で、糧事情の関係上、肉類を用いたが、数名のものが下痢を起した。この下痢は高度によるものか、蛋白質の過剰によるものであるか決定したいが、今後の研究対象となる。ヒマラヤのような長期にわたる登山では、実際の問題としては、いかによい栄養価をもつた食糧でも、これを摂食できなければ、全く意味のないことである。結局個人の好みを中心にして、含水炭素と蛋白質をいかなる割合に組合せるかである。

温度差に対する衣服の種類 ヒマラヤは、昼間の輻射熱と夜間の気温とはなほだしい差のために、衣服の種類が問題になつてくる。高所では衣服の着替えも困難な行為となるので、十分な研究を必要とする。皮膚に直接ふれる下着は、薄絹がよいという意見にしたがつて、その着用

を試みた。その意味は発汗した場合、絹は湿るが、皮膚に冷たく感じないこと、薄いためにきわめて早く乾燥することである。しかし今回の絹下着は、やや厚く大きさが体に合っていないため、むしろ常に冷感を覚え失敗であつた。

発汗に対して、衣服構造を十分に考えなければならぬ。たとえば、昼間登行時は、全衣服の前ボタンを簡単にはずすことによつて、体温の発散を計ることが出来る。そ



- ① ジュラルミン製酸素ポンベ
内容積 約2リットル
充填圧力 150気圧
- ② 酸素ポンベ用安全板付き閉止弁
安全板 破壊圧 200気圧
- ③ 袋ナット
- ④ 流量調節ハンドル付き減圧器
調節範囲 0~1.2リットル/分
- ⑤ 導気管(ゴム管)
- ⑥ 呼吸袋(両面ゴム引き羽二重)
- ⑦ 口片
(アクリル酸樹脂 黄銅の二重パイプ)

て薬に作業ができる。高度からくる不安に対しても、酸素があれば解消し多くの危険がさけられる。したがってその危険を除くという意味でも、ヒマラヤ登攀には、まず酸素の問題を考えなければならぬ。もちろん特殊な体質をもった天才は、酸素なくして登頂に成功するかもしれない。しかし、ヒマラヤは天才だけのものではないのである。エヴェレスト登攀にさいしイギリスでは三十二年の間、酸素携行可否について、議論された。しかし、一九五三年のイギリス隊はきわめて大量の酸素を使用した。これらの事実を考えると、ヒマラヤでの酸素は、重量の問題ではなくて重要性の認識ということであると思う、たまたわれわれの場合は八八四〇メートルの高度をもつエヴェレストよりは低いので酸素使用の方法はおのずと異なるのである。マナスルの場合は非常用としての価値を認めなければならぬ。今回使用したボンベは別表のようなもので、重量は三・八キロ、開放式のものである。使用時間は、六〇〇〇〜七〇〇〇メートルで六時間、七〇〇〇〜八〇〇〇メートルで四時間というものであったが、ボンベ輸送の関係上、充鎮が十分でなく、使用時間がきわめて短縮したため、応急手当と試験用以外実地での登攀に活用できなかったのはまことに残念であった。しかし、試験用として使用した結果、疲労の回復という点で、価値は認められた。また呼吸深度ならびに血液水素イオン濃度の関

係から炭酸ガス混入が考えられる。その細部にわたるデータは後報の予定である。マスクに関しては着用の慣れの問題もあるので、さらに研究と練習を積み重ねなければならぬ。

登攀の医学的調査方法を参考までに列記してみよう。

- (1) 各高度における自覚的症候の記載。
- (2) 脈膊呼吸の測定(安静時、運動時)
- (3) 数取器による疲労状態の調査。
- (4) 運動負荷後の疲労回復の状況を、脈膊の測定で追求。
- (5) 血液塗抹標本の作製。
- (6) 血色素測定。

追補II現在、血液塗抹標本の検査中であるが次のような事実を知った。

ベース・キャンプを出発してから逐次高度を増すことにより、三十日間で血球の膨化、以後高度を一〇〇〇メートル下降して、十二日間で縮小をきたす。さらに高度を増すとき、再び血球の膨化をきたし、以後高度を下けても急速には縮小を起さない。この事実は四十二日という日数と馴化の間に、なんらかの関係が予想される。

9 写 真

依 田 孝 喜

三月十八日、われわれの乗ったロンドン行BOAC機は、美しい光の流れが交差する夜の東京上空を、ゆるく旋回しながら高度を上げると、やがて進路を東にとって、暗やみの太平洋上を快速に飛んだ。二十世紀の文明に身をゆだねながらフットと、地球を駆ける男”という古い映画を思い出した。ニュース・カメラマンの主人公が、特種を追って文字どおり世界中を飛び回る、スピードとスリルに富んだアメリカ映画である。そのとき主人公を気取って思わず私はほくそえんだのであった。しかし、数日後に舞台は一変した。インドからネパールへ、そしてはだしの兵隊がいるカトマンズの飛行場に降り立ったとき、文明の先端を駆けるニュース・カメラマンの夢は終り、代って日本登山隊員としての、地味な苦勞の多い仕事が始ったのである。

隊員のひとりに加えられた私の任務は、もっぱらカメラマンとしての責任を果すことである。数多い毎日新聞社のカメラマンを代表し、読者、ひいては国民に登山隊の動静、活躍を伝えるところに、ネパールあるいはヒマラヤという未知の世界をレンズをとおして報道することが私の任務であった。撮影する対象はきわめて多種多様であり、これを記録するカメラもまたいろいろである。私は自分の任務を支障なく遂行す

るために、必要と思われたすべての機材を携行した。隊に届けたリストは次表のようなものである。

—カメラと交換レンズ—				
スピード・グラフィック	名刺型	エクター f4.5	101 mm	1
ウォーレンサック	テレフォト	f5.6	250 mm 望遠レンズ	1
キャノン	4Sb セレナー	f1.8	50 mm	1
キャノン	4Sb セレナー	f2.8	35 mm	1
	セレナー	f3.5	100 mm 望遠レンズ	1
	キャノン・オートアップ	接写器		1
ニコン	S ニッコール	f1.4	50 mm	1
	ニッコール	f2.5	35 mm 広角レンズ	1
	ニッコール	f3.5	135 mm 軽鏡望遠レンズ	1
フィルモ	オートマスター	16 mm	映画撮影機	1
	(ターレット式三種レンズ付き)			
—フィルム—				
コダック	スーパーXX	名刺判フィルム・バック		200 ダース
コダック	スーパーXX	35 mm フィルム		100 本
富士カラー	35 mm	フィルム		50 本
コダック	スーパーXX	16 mm シネフィルム		1000 フィート
コダクローム	(カラー)	16 mm シネフィルム		500 フィート

このほかに、写真三脚、携帯用組立暗室、フラッシュ・バルブ、各種現像薬品器具類など、総量百キロを越す機材が運ばれたのである。カトマンズに着いて、宿舎であるシャーハ邸にはいった私は、早速、部室の一隅に暗室をつくり、その日ネパール入りをした日本登山隊の第一報フィルムをただちに現像して東京へ送った。登山隊の記録をつづる写真のページは、こうし

て始められたのである。

カトマンズの数日は、カメラ・マンにとって目の回るような忙しさだった。大寺、大塔立ち並ぶ宗教の町、五色に彩られ、金色に輝く寺町の風物は、カメラの対象として興味はつきない。しかし、隊長について暑い日中、ボロ車に乗っての挨拶回りには閉口した。それでも、高官連の写真をとった後で、プリントして届けると、たいへんな喜びようで、こんなことでも、登山隊にとって何かと益することがあると思えばおろそかにはできない。夜はたいがい現像で遅くなる。カトマンズには、電気も水道もあると、お役人はいばっているが、電燈はローソクよりも暗く、水道は断水している時間の方が長いとあっては、自慢にもならぬ。第一、仕事の能率の上がらぬこととひどい。五、六ダースのフィルムを現像、水洗いし終るのに二、三時間かかってしまう。翌朝は早々と乾いたフィルムを整理し、キャプション(写真説明)をつけて航空便に託すのだが、五日間の滞在で撮影したフィルムは、大小合わせて約三百枚。このうち百枚ほどは、カトマンズ便りとして東京の毎日新聞本社へ送られた。

準備万端整った三月二十六日、七名の隊員とシェルパ、人夫ら百九十余名の第一陣が、先発隊として出発した。私は、隊長とともに本隊に加わり、翌二十七日シェルパ、人夫合わせて百名あまりの大部隊で、カトマンズを後にし、いよいよ、マナスルへの第一歩を踏み出した。その日から、さらにいっそうの困難と苦勞を加える仕事が始められたのである。

行程が進むにしがって、移り変わる景観、興味深い風物、未知の世界をいく私の目にうつるものすべてが、写欲をそそるも

のばかりである。肩にかけた二台の小型カメラと、手に持った

大型カメラによって、次々とこれらの対象を取材していくのであるが、送稿用は大型カメラで、カラー写真と記録用は小型カメラでと、一つの被写体にも、それぞれ機械を使い分ける苦勞は容易ではない。ときには、背中のリュックサックから一六ミリを出して、映画も回さねばならない。一日の旅を終えてプリント場に着けば、早速、携帯用の暗室を組立てて、その日写したフィルムの現像にかかる。しかし、電気も水道もない山の中では、すべてが苦勞の種である。人夫や土地の連中は、濁った水でも平気で飲むが、フィルムの操作に汚水は禁物、少しは遠くとも、川の水を汲んで来て液をつくる。暗室といっても、金わくを上下四方に組んだ中に、二重に張った黒幕をかぶせた縦横二尺ぐらゐのもの、両脇から手をつっこんで、液温と時間だけがたよりの盲現像である。しかし、できあがるネガは多少の濃淡はあっても、そこは商売柄、大体において調子は上々に上るものである。こうして、何ダースかの現像を終り、川へ行って十分水洗いを済ませたフィルムを、テントのまわりにつるし終るころには、もう夕食も始まる時間だ。食後のひと休みをしている間にフィルムは乾く。テントに持ち込んで整理し、説明をつけたり、日記を書いたりするうちに一日は終るのである。

ブリ・ガンダキにはいつてからは、いよいよ水に苦勞した。テント場の近くに清水はなく、本流はどろをとかしたように濁って、とうてい現像には使えない。たまたま、テント場の近くに湧き水でも見つけると、気ながに汲みとって大事に使い、やっとたまったフィルムを現像するのであるが、そんなときに

は、後の水洗いがたいへんである。一度、本流の水で洗ったところ、乾いた後に、膜面いっばい白い微粒粉がふき出してしまい、大失敗したことがある。どんなにめんどうでも、二度と写すことのできないたいせつなフィルムだと思えば、最後まで手を尽さねばならない。こんなにも現像に苦勞するのは、ネパールでは、検閲がうるさく、未現像のフィルムを送ることができないからで、現像されておれば、開封されても心配はなく、後はレポートといっしょに、飛脚に持たせてカトマンズから航空便で送ることができるといっわけである。こうして、いろいろ

と苦勞の多かったキャラバンも、どうにか無事終えて、四月十三日やっとマナスル山麓のベース・キャンプへ着くことができた。さて、これから本格的なマナスル登山になるのであるが、私はカメラマンとして感じたことだけを二、三記してみる。五六〇〇メートルの第四キャンプには前後二週間ほど滞在したが、最初登ったときには、猛烈な高山病にやられ、一日中テントの前にしゃがみ込んでうなっていた。しかし、そんなときでも必要な写真だけは、どうにか写していたのだから、身についたネバリという職業意識だけは、案外強かったのである。

標高六〇〇〇、あるいは七〇〇〇メートルという高度においても、肉体的にはともかく、写真取材の技術的な面にはなんら困難を感じることはなかった。猛烈な酷寒を考慮して、各カメラのシャッターには、特別な操作が施されていたが、予想に反して気温はおおむね暖かく、夜半こそ零下三〇度くらいまで下ることはあっても、日中は逆に三〇度近くも上り、強烈な太陽

の直射と雪の反射で、目もくらむほどであり、心配したシャッターの故障などは全然起らず、各カメラの性能を十分に発揮して、撮影することができたのはありがたかった。

つらかったのは、原稿を出すために、フィルムの現像に、いちいちベース・キャンプまで下ることであった。高所キャンプでも、技術的に現像できぬことはないが、液の調製や保温、水洗いなどの困難と、貴重な燃料の消費などを考えると、不可能に近い、安心して満足な仕事をするためには、どうしても条件のよいベース・キャンプまで下らなければならない。第四キャンプからだと、ちょうど富士山の頂上から、吉田あるいは御殿場の町あたりまで、現像しにいっわけであり、下りはよいとしても、また登って来ることを考えると、いささかゆううつにならざるを得ない。しかし、一度下に降りて仕事を済ませた後、十分な休養と栄養をとって再び登って来ると、今度は高山病の心配もなく、からだの調子もすこぶる好調なのは、苦あれば楽ありのたとえどおり益する面も大きかったわけである。

今度のヒマラヤ行に携行した写真機材は、結果的に見て、すべて当を得たものと思われるが、ことにレンズの選択において成功であった。ヒマラヤのように、スケールの大きな対象には、絶対に広角レンズが必要で、ライカ・サイズの小型カメラには、三五ミリ広角が標準レンズとして適切であり、二八ミリが広角として、さらに役立つものと思われる。名刺判に使用した二五〇ミリ望遠レンズも、非常に有効であった。豪壮な雪崩の様相や、ものすごいアイス・フォール地帯の難関に行く隊員の動きなど、巨大なヒマラヤの山容と、小さな人間との対象をみごとにとらえてくれたのである。また、写真版に集録した写

真の中に見られる「マナスルの残月」も、このレンズによって写しとることができたのであるが、これは、われわれが登頂を逸してベース・キャンプに引きあげたある朝、徹夜で原稿を書いていた竹節さんにゆり起されて写したもので、明けやらぬマナスルの山すそから見た壮麗なヒマラヤの夜明けである。ベース・キャンプはまだうすやみの中に眠っているが、八〇〇メートルの頂あたり、今しも朝の陽光をハッシと受けて黄金色に輝き始めたところ、その左肩には残月が青白く浮んで、その見事な構成は、ヒマラヤならではの見られぬ神秘的な景観である。この時の撮影データーは、名刺型のスピード・グラフィック・カメラに二五〇ミリ望遠レンズ、赤フィルター使用で1/10秒の露出であった。

初めてのヒマラヤ登山で、私としてはいろいろと経験したことは多かった。ともかくも七一〇〇メートルまで登り、五台の

カメラといろいろなレンズを使い分けて、カラー写真もとり、映画も写すことができたというのも、けっきょくは、ベストを尽して、自分の任務を果そうという責任感にほかならない。

今度のマナスル登山は、惜しいところで失敗に終わったというものの私自身としては、初めてのヒマラヤ登山で、未知の世界であるネパールの風物やヒマラヤの大景観などを、あますところなく取材できたことは、大きな収穫で、一面、非常な成果をあげることができたものと喜んでゐる。こうして写したフィルムを、新聞や雑誌を通じ、あるいはカラー・スライド、映画などによって、ひとりでも多くの方々に見ていただき、それによってネパールあるいはヒマラヤというものに対する興味と認識を深めてもらい、ひいては、マナスル登山に対しても、いっそうの理解と協力を得ることができれば、望外のしあわせである。

10 経 費

望 月 達 夫

ヒマラヤに限らず海外への遠征に多額な経費が必要であることはあらためて説明するまでもないし、またこのような遠征が簡単に実施できない事情も主にこの点にあるのだが、戦後のわが国の事情では、ヒマラヤ遠征には一体どのくらいの費用がかかるのかという目安をたてるのが、中々むずかしい問題であった。この点からも、この遠征の経費の点にふれておく意味があ

るであろうし、またさらに募金に依られた法人個人に対して、これがどのように使用されたかの明細を明らかにする責任があるであろう。

二回にわたるマナスル遠征の経費は、後援者である毎日新聞社内に設けられた、ヒマラヤ登山後援会と本会ヒマラヤ委員会の協力の下に、全国的に募金が進められ多くの法人個人から少なからぬ寄付寄贈を受けた。本会はこれらの協力を深謝するとともに、募金部門を担当した人々の労を特に多ししなければならぬであろう。

これらの資金は、かねてヒマラヤ委員会が決定した遠征予算書に基づき同委員会が定めた経理担当者において管理支出された。この場合採られた方針は、当然のことながらできうる限りの経費節減であった。他から援助をうけず個人の費用で海外遠征に出かける場合を考えると、自由気ままな浪費をつつしむべきであるのももちろんだが、ことに社会的な経済援助をうけて行うマナスル遠征のような場合は、節約の着意は最大限にもたれなければならない。また、将来にわたってこのような遠征を繰り返すためには、できるだけ安い費用で遠征が実行できる確信を深めたいということも、われわれの念願にほかならなかった。

ここに示した経費の内訳は、われわれの経験の少ない点から、この初期の目的を完全に果たしたとはいえないであろうが、わが国から派遣する遠征隊が、どのくらいの費用を必要とし、またどの費用に多額を要したかの一例を示すものと思われ、また将来の遠征隊の経費予算作成に対しても多少の参考とはなるであろう。従来外国の遠征報告書などでも、経費の細目

《収入の部》	
一般からの募金	24,406,176
毎日新聞社拠出金	5,000,000
収入合計	29,406,176
竹節分(踏査隊)毎日新聞社分担	1,500,000
	30,906,176

《支出の部》	
西堀氏の調査費(52年2月のネパール派遣)	1,316,353
踏査隊費(内訳の1)	8,566,218
登山隊費(内訳の2)	22,307,928
事務費(内訳の3)	2,203,387
募金経費(内訳の4)	1,376,309
支出合計	35,770,195
差引不足額(毎日新聞社立替)	4,864,019

=支出の内訳は 213~214 ページにあり=

は明示されない場合が多く、それが記載された例は戦前ではバ
ウアーのカンチエンジュンガの報告書『ヒマラヤに挑戦して』
がほとんど唯一のものであったし、近くは一九五〇年に行われ
たスコットランド隊のガルワール遠征の報告書ぐらいのもの
がある。

付

なお、経費予算とその実績の点にふれるならば、踏査隊の場
合は、その行程、日数に大きな変更がなかったため、ほとんど
予算をくくるわずことなく、総経費八百五十六万余円中予算を超
過したのは十五万円あまりで、この原因は主として荷物輸送費
の超過であった。登山隊の場合は帰路のボカラ滞在と定期空路
中止による飛行機の特別手配などの予測しなかった事情が起っ
たため、事務費の面で十七万円あまりの節約をしたが、なお総
経費二千二百余万円中百四十万円ばかりが予算超過となった。
しかし、この点を一応除外すれば、二回の遠征ともに予算作
成が大体正確であったことを示すものであると同時に、全隊員
とその準備を熱心に支援した人々が内地外地で、経費節減に深
く留意したことによるのだと思う。

経費の処理方法を、われわれは登山隊費、事務費の二つに分
別した。登山隊員は、この遠征に必要とされた直接経費で、こ
れはさらに一九五二年の踏査隊費と一九五三年の登山隊費に分

けて明示される。事務費とは、この計画が実行に着手された一
九五二年六月から登山隊の事務が終了した一九五三年十月にい
たる十七ヶ月間の、遠征業務遂行のための諸費用である。この
ほかに募経費があるが、これはいうまでもなく募経費のための
必要経費で、事務処理は会の方でなされた。以上の分類に基い
て示されたのが次のものである。

毎日新聞社は募金事務のため、世話人を学界、財界各方
面に求め、赤間文三、浅尾新甫、東龍太郎、阿部孝次郎、
石坂泰三、今村荒男、春日弘、加藤正人、岸田幸雄、木原
均、小林中、酒井杏之助、洪沢敬三、杉道助、関桂三、高
山義三、中井光次、中島久万吉、中司清、中野種一郎、嶋
川虎三、服部峻治郎、原口忠次郎、藤山愛一郎、古田俊之
助、細川護立、本田親男、宮崎彦一郎、山際正道、吉野孝
一、渡辺義介、渡辺忠雄の諸氏に委嘱し、さらに顧問とし
て石川一郎、一万田尙登の両氏を挙げたヒマラヤ登山後援
会を組織し、約十ヶ月にわたり全国に資金募集を行った。

(五十音順)

支出の内訳

経費

1. 1952年踏査隊

外貨購入費	3,640,084.00	→
旅費	1,329,564.00	
荷物輸送費	872,276.00	
食糧備費	119,946.00	
装備費	1,969,665.00	
学術用具費	116,739.00	
医療費	141,929.00	
写真具費	206,590.00	
文具包費	9,580.00	
梱包費	69,114.00	
保険費	42,500.00	
土産物費	36,380.00	
雑費	11,860.00	
合計	¥ 8,566,218.00	

外貨総額	£ 3,540.00-0
インド貨換算	RS. 47,631
《内訳》	
ホテル宿泊料	RS. 7,607
タクシー代	2,165
荷物輸送費(航空)	3,841
シェルバ料金	11,697
ポーター料金	11,097
食糧、装備購入費	4,851
キャラバン費	6,373
雑費	
計	RS. 47,631

2. 1953年登山隊

外貨購入費	6,596,775.00	→
旅費	3,854,235.00	
荷物輸送費	1,502,283.00	
食糧備費	560,630.50	
装備費	7,785,769.50	
学術用具費	103,089.00	
医療費	176,480.00	
写真具費	173,145.00	
観測通信費	155,130.00	
文具包費	13,147.00	
梱包費	444,745.00	
保険費	532,400.00	
土産物費	306,882.00	
雑費	103,217.00	
合計	¥ 22,307,928.00	

外貨総額	£ 6,500.00-0
インド貨換算	RS. 86,340
《内訳》	
ホテル宿泊料(往)	RS. 8,419
同上(復)	5,176
タクシー代	2,982
シェルバ料金(リエゾンとも)	11,862
ポーター料金	21,090
食糧購入費	9,218
航空料金(荷物輸送費とも)	16,740
電信、郵便料金	4,404
特別費(謝礼など)	958
雑費	5,491
計	RS. 86,340

本経費のほかに写真関係費用として毎日新聞社が支出した金額は ¥1,515,173.00

3. 事務費 (1952年6月—1953年10月)

文具雑品費	46,242.00
通信費	305,406.00
旅交通費	297,880.00
備品費	223,014.00
弁当費	40,280.00
集会費	152,850.00
社交費	175,940.00
人件費	87,556.00
雑用費	90,200.00
調査研究費	136,513.00
京都生物誌研究会関係費	190,721.00
留守宅補助費	68,285.00
借室料	336,000.00
合計	¥ 2,203,387.00

4. 募金経費

銀行借入金利息	755,280.00
写真引伸代	71,319.00
事業部(毎日新聞社)経費	443,624.00
印刷代、封筒	33,637.00
その他雑費	12,900.00
中部支社(毎日新聞社)経費	59,549.00
合計	¥ 1,376,309.00

11 ネパール関係文献目録

主としてネパールの旅行、探検、登山に関するもの。ただしエヴェレスト遠征およびシッキム・ヒマラヤに関するものを除く。

- Auden, J. B.,: *Traverse in Nepal*; H. J. vol. VII, 1935, pp. 76—82.
- Balantine, H.,: *On India's frontier or Nepal, The Garbhas' Mysterious Land*. New York, 1896.
- Bendall, C.,: *Journey of Research in Nepal*. Cambridge, 1886.
- Bishop, R. N. W.,: *Unknown Nepal*. London: Luzac, 1952, pp. 124.
- Boeck, Kurt,: *Durch Indien ins verschlossenen Land Nepal*. Leipzig: Hirt, 1903, S. 15+319.
- 〃 : *History of Nepal and surrounding Kingdoms*. A. S. J. vol. LXXII (N. S. Calcutta) 1903.
- Briggs, R. A.,: *The identification of Dhaulagiri*; H. J. vol. VIII, 1936.
- Brown, Percy,: *Picturesque Nepal*. London: A & C. Black, 1912.
- Bruce, C. G., and W. Brook,: *Nepal*. G. J. vol. 65, 1925, pp. 286—300.
- Burrard, S. G. and H. H. Hayden,: *A sketch of the geography and Geology of the Himalaya Mountains and Tibet*. (2nd ed., 1934, revised by Burrard and Heron). Delhi: Manager of Publications, 1934, pp. 32+359.
- Dittert, René,: *Swiss Himalayan Expedition, 1949: North-East Nepal*; H. J. vol. XVI, 1950—51, pp. 25—37.
- Dyhrenfurth, G. O.,: *Zum dritten Pol: Die Achttausender der Erde*. München: Nymphenburger Verlagshandlung, 1951. S. 286.
- Egerton, F.,: *Journal of a Winter's Tour in India with a visit to the Court of Nepal*, 2 vols., 1852.
- Fergusson, F. F.,: *Hooker's Early Travels in Nepal and Sikkim*; H. J. vol. XVI, 1950—1, pp. 86—95.
- Fraser, J. B.,: *Journal of a tour through part of the snowy range of the Himaraya Mountains*, 1820.
- Hamilton, A. P. F.,: *An Account of the Kingdom of Nepal, Edinburgh*. Constable, 1819.
- Heim, Arnold und August Gansser,: *Thron der Götter. Zurich & Leipzig: Morgarten, 1937*. S. 270.
- 〃 : *The Throne of Gods: An Account of the first Swiss Expedition to the Himalaya*. London: Macmillan, 1939, pp. 26+235.
- Hunter, Sir W. W.,: *Life of B. H. Hodgson, British Resident at the Court of Nepal*. London, 1896.
- Herzog, Maurice,: *Amnapurna: Premier 8,000*. Paris: Arthaud, 1952, pp. 300.
- 〃 : *Amnapurna*. London: Jonathan Cape, 1952.

*ネパール関係文献目録

- p : *Amapura, Erster Achtausender*, Verlag Ulstein, 1952. S. 336.
 p : 処女峰ノミナブルナ (近藤等記) 東京 白水社 1953.
 p : *Amapura*. H. J. vol. XVI, 1950—51. pp. 9—24.
 Herzog, M. et Marcel Ichac, : *Regards vers l'Amapura*. Paris: Arthaud, 1951, pp. 97.
 Hodgson, B. H., : *Essays on the Language, Literature and Religion of Nepal and Tibet, with further papers on the Geography, Ethnology and Cosmology of those Countries, etc.* 2 vols. 1874.
 Hooper, Joseph Dalton, : *Himalayan Journals*; 2 vols. London: John Murray, 1854. pp. 28+408, pp. 10+487.
 Inanishi, Kimi, : *Amapura and Manasu*, 1952; *Sangaku Jour.* J. A. C, vol. 48, 1953, pp. 1—59.
 Kirkpatrick, W. J., : *Account of the Kingdom Nepal*. 1811.
 Landon, Arthur H. Savage, : *Tibet and Nepal*. London: A & C, Black, 1905. pp. 10+233.
 Landon, Percival : *Nepal*; 2 vols. London: Constable, 1928, pp. 23+358, 8+363.
 Leeson, Francis, : *A Note on the U. S. Expedition to Nepal, 1949*; H. J. vol. XV, 1949, pp. 46—53.
 Longstaff, Tom G., : *Notes on a journey through the Western Himalaya*; G. J., vol. 29, 1907, pp. 201—211.
 p : *Six Months' Wandering in the Himaraya*. A. J. vol. 23, 1907. pp. 202—228.
 p : *This My Voyage*. London: John Murray, 1950, pp. 324.
 p : *The Himalaya, in S. Spencer's "Mountaineering"*. London: Seeley Service, 1934. pp. 274.
 Maillart, Ella, : *A Journey to the Gosainkund (Nepal Himalayas)*; *The Mountain World*, 1953, pp. 137—148.
 Mason, K., : *A note on the Nepal Himalaya*; H. J. vol. VI, 1934, pp. 81—90.
 p : *Notes on Eastern and Central Nepal*, H. J. vol. VII, 1935, pp. 83—86.
 Mason, Kenneth, : *Rainfall and Rainy Days in the Himalaya. West of Nepal*; H. J., vol. VIII, 1936, pp. 86—95.
 Massieu, Mme Isabella, : *Népal et pays himalayens*. Paris: Alcan, 1914, pp. 228.
 Medlicott, H. B., : *Geological traverse in region of Katmandu*; R. G. S. I, vol. VIII, 1875.
 Michell, J. W. A., : *Twenty Years' Climbing and Hunting in the Himalayas*; A. J. vol. II, 1884, pp. 203—215.
 Montomerie, T. G., : *Report of a route Survey made by Pandit from Nepal to Lhasa*; *Jour. Roy. Geog. Soc.*, vol. 38, 1868, p. 129.
 Morris, C. John, : *Gurkhas (Handbooks for the Indian Army Compiled under the orders of the Government of India)*. Delhi: Manager of Publications, 1933, pp. 169.
 p : *A glimpse of unknown Nepal*; H. J. vol. VI, 1934, pp. 77—80.
 p : *The Gorge of the Arun*; G. J. vol. 62, 1923, pp. 161—173.
 Northey, W. Brook, : *The Land of the Gurkhas, or the Himalayan Kingdom of Nepal*. Cambridge: W. Heffer & Son. 1937, pp. 10+248.
 Oldfield, H. A., : *Sketches from Nepal Historical and Descriptive, with Anecdotes of Court life, and Wild Sport of Country*to which is added an Essay on Nipalese Buddhism. 2 vols., 1880.
 Quin, E. W., : *Sport in Nepal; Nineteenth Century*, vol. XXVI, 1899, pp. 60.
 Ripley, Dr. S. Dillon, : *Search for the Spiny Babbler; An Adventure in Nepal*. Boston: Houghton Mifflin, 1952, pp. 8+301.
 p : *Peerless Nepal—a naturalist's Paradise*; N. G. M. vol. XCVII, No. 1 Jan. 1950.
 Taylor, C. E., : *A Medical Survey of the Kali Gandak and Pokhara Valleys of Central Nepal*; G. J. vol. 41, July 1951. pp. 421—437.
 Temple, Sir Richard, : *Journals kept in Hyderabad, Kashmir, Sikkim and Nepal*; 2 vols., London: 1887.
 Tilmann, Harlod William, : *The Nepal Himalaya*; A. J. vol. 57, No. 280, 1950, pp. 305—312.
 p : *The Annapurna Himal and South Side of Everest*; A. J. vol. 58, No. 283, 1951, pp. 101—110.
 p : *The Nepal Himalaya. Cambridge Univ. Press, 1952*. pp. 272.
 Turner, R. L., : *A Comparative and Etymological Dictionary of Nepali Language*. London: Routledge, 1931, Imp. 4, pp. 23+935.
 Uddhana, Simha, : *The Garkha Conquest of Arki*. Lahore: Punj Printing Works, 1903.
 Vansittart, E., : *Gurkhas. Government Printing Office, 1906*.
 Wheeler, J. T., : *Short History of India and of the other Frontier states of Afghanistan, Nepal, and Burma*. 1880.
 Wright, Dr. Daniel, : *History of Nepal; Indian Antiquary*; vol. IX 1887.

(Abbreviations)

- A. J. = *Alpine Journal*
 A. S. J. = *Journal of the Asiatic Society of Bengal*
 G. J. = *Geographical Journal*
 H. J. = *Himalayan Journal*
 N. G. M. = *National Geographic Magazine*
 R. G. S. I. = *Records of the Geological Survey of India*

184 The first time down the valley, situated south of Camp Hill, the headwaters of the ...
183 ...
182 ...
181 ...
180 ...
179 ...
178 ...
177 ...
176 ...
175 ...
174 ...
173 ...
172 ...
171 ...
170 ...
169 ...
168 ...
167 ...
166 ...
165 ...
164 ...
163 ...
162 ...
161 ...
160 ...
159 ...
158 ...
157 ...
156 ...
155 ...
154 ...
153 ...
152 ...
151 ...
150 ...
149 ...
148 ...
147 ...
146 ...
145 ...
144 ...
143 ...
142 ...
141 ...
140 ...
139 ...
138 ...
137 ...
136 ...
135 ...
134 ...
133 ...
132 ...
131 ...
130 ...
129 ...
128 ...
127 ...
126 ...
125 ...
124 ...
123 ...
122 ...
121 ...
120 ...
119 ...
118 ...
117 ...
116 ...
115 ...
114 ...
113 ...
112 ...
111 ...
110 ...
109 ...
108 ...
107 ...
106 ...
105 ...
104 ...
103 ...
102 ...
101 ...
100 ...
99 ...
98 ...
97 ...
96 ...
95 ...
94 ...
93 ...
92 ...
91 ...
90 ...
89 ...
88 ...
87 ...
86 ...
85 ...
84 ...
83 ...
82 ...
81 ...
80 ...
79 ...
78 ...
77 ...
76 ...
75 ...
74 ...
73 ...
72 ...
71 ...
70 ...
69 ...
68 ...
67 ...
66 ...
65 ...
64 ...
63 ...
62 ...
61 ...
60 ...
59 ...
58 ...
57 ...
56 ...
55 ...
54 ...
53 ...
52 ...
51 ...
50 ...
49 ...
48 ...
47 ...
46 ...
45 ...
44 ...
43 ...
42 ...
41 ...
40 ...
39 ...
38 ...
37 ...
36 ...
35 ...
34 ...
33 ...
32 ...
31 ...
30 ...
29 ...
28 ...
27 ...
26 ...
25 ...
24 ...
23 ...
22 ...
21 ...
20 ...
19 ...
18 ...
17 ...
16 ...
15 ...
14 ...
13 ...
12 ...
11 ...
10 ...
9 ...
8 ...
7 ...
6 ...
5 ...
4 ...
3 ...
2 ...
1 ...

184 The first time down the valley, situated south of Camp Hill, the headwaters of the ...
183 ...
182 ...
181 ...
180 ...
179 ...
178 ...
177 ...
176 ...
175 ...
174 ...
173 ...
172 ...
171 ...
170 ...
169 ...
168 ...
167 ...
166 ...
165 ...
164 ...
163 ...
162 ...
161 ...
160 ...
159 ...
158 ...
157 ...
156 ...
155 ...
154 ...
153 ...
152 ...
151 ...
150 ...
149 ...
148 ...
147 ...
146 ...
145 ...
144 ...
143 ...
142 ...
141 ...
140 ...
139 ...
138 ...
137 ...
136 ...
135 ...
134 ...
133 ...
132 ...
131 ...
130 ...
129 ...
128 ...
127 ...
126 ...
125 ...
124 ...
123 ...
122 ...
121 ...
120 ...
119 ...
118 ...
117 ...
116 ...
115 ...
114 ...
113 ...
112 ...
111 ...
110 ...
109 ...
108 ...
107 ...
106 ...
105 ...
104 ...
103 ...
102 ...
101 ...
100 ...
99 ...
98 ...
97 ...
96 ...
95 ...
94 ...
93 ...
92 ...
91 ...
90 ...
89 ...
88 ...
87 ...
86 ...
85 ...
84 ...
83 ...
82 ...
81 ...
80 ...
79 ...
78 ...
77 ...
76 ...
75 ...
74 ...
73 ...
72 ...
71 ...
70 ...
69 ...
68 ...
67 ...
66 ...
65 ...
64 ...
63 ...
62 ...
61 ...
60 ...
59 ...
58 ...
57 ...
56 ...
55 ...
54 ...
53 ...
52 ...
51 ...
50 ...
49 ...
48 ...
47 ...
46 ...
45 ...
44 ...
43 ...
42 ...
41 ...
40 ...
39 ...
38 ...
37 ...
36 ...
35 ...
34 ...
33 ...
32 ...
31 ...
30 ...
29 ...
28 ...
27 ...
26 ...
25 ...
24 ...
23 ...
22 ...
21 ...
20 ...
19 ...
18 ...
17 ...
16 ...
15 ...
14 ...
13 ...
12 ...
11 ...
10 ...
9 ...
8 ...
7 ...
6 ...
5 ...
4 ...
3 ...
2 ...
1 ...

87. Snow-and-ice mantled Manaslu, illuminated by the first rays of sunrise, glitters like a gigantic radiant mass of gold in the dark green thin air 8,000 meters up. Note the clouds of powdery snow whipped up by the wind blowing furiously near the top. The moon hovers high above to the left. The picture was taken with 250 mm. telescopic lens on June 5 at 5 a.m. from base camp.

Flora of Manaslu

88. The *Polygonatum Hookeri* that bloom in early spring are distinctive for their refreshing lavender hue and extremely small size.
89. *Androsace strigillosa*, resembling primroses, grow abundantly in sparsely wooded areas and in shadows of rocks. Their petals' upper surface is white, but the under side is dark red.
90. *Berberis aristata* are thorny bush and bear clusters of yellow blossoms. They half cover fields.
91. Luxuriant growths of lilac-colored *Rhododendro campanulatum* blossoms in the spring practically envelop the base camp environs at Sama.
92. White *Anemone rupicola* are found in sparsely forested areas and shadows of rocks.
93. *Primula stuartii*, whose blossoms resemble yellow primroses, grow in abundance near the base camp and has an unpleasant pungent odor.
94. *Primula denticulata*, the Himalayan primrose, is a typical primrose variety of the Himalayas. They have pink blossoms.

Crossing Larkya Pass

- 95-96. The climbing expedition having broken base camp on June 8 crosses 5,230-meter Larkya Bhanjyang (pass) to descend Marsyandi gorge on the return trek.
97. A view of Manaslu's northern side from Larkya shows the summit towering high beyond the pinnacle. Near the site of the expedition's Camps 7 and 8 the steep solpe is scarred by paths left by crashing avalanches.

* * *

98. Manaslu from Bimtakothe, which was reached after descending Larkya pass. Adjacent to North Col at the extreme left stretches the extensive flat snowfield. Manaslu's crest projects slightly to the left of the snowfield. The contours of the pinnacle and plateau, left of the flat area, may be comprehended by comparing observations from both the northern side, as seen from Larkya, and the western side.
99. Crude bamboo-rope suspension bridges span Marysandi gorge.
100. The caravan battles the elements as the rainy monsoon season sets in.
101. Huge bamboo-woven umbrellas, called "ghum" for protection against the sun and rain are lined in-side with white birch bark.
102. A variety of *Aristolochia* are found in the Pokhara vicinity.
103. The Swiss geologist Dr. Hagen, Mita and Takagi discuss their experiences at the samp at Tar.
104. A splendid view of Annapurna range is presented at Pokhara where the expedition members waited two weeks for a plane to take them home.

The 1953 Scientific Expedition

(Photos by S. Nakao)

Soon after departure from Katmandu the expedition's scientific team of Sasuke Nakao and Jiro Kawakita separated from the climbing expedition and made a long 140-day trek

of 1,500 kilos (900 miles) about the foots of Annapurna and Manaslu gathering a vast lore of information on the region.

* * *

105. Baskets full of rhododendrons and white orchids are gathered in the Katmandu suburbs to be offered to god.
106. A Brahman village of round-roofed dwelling lie west of Pokhara. Despite their priesthood, its inhabitants cultivate the fields and lead a pure, but meagre, life.
107. The Himalayan foothills, such as near Arughat Bazar, are speckled with Indian sals (*Shorea robusta*) blossoms of intense fragrance.
108. A Nepalese child happily riding a swing was seen by the roadside during the descent of Kakani pass. At festival time four of them are said to be set up.
109. Dressed in their best, these Gurung lasses near Trisuli Bazar are on their way to a festival. Their men are the world famous Gurkha soldiers.
110. Both the French and apanese expeditions camped at the clearing shown in the foreground of Tukucha village. The inhabitants are Thakaris, but live Tibetans. In the background stretches an arm of snow-covered Dhaulagiri.
111. The westernmost camp of the journey was pitched on May 8 at the upper reaches of the Keha Lungpa. The day was fair in the wake of the driving snow the previous day, but the stream froze in the intense cold. The party suffered from lack of firewood and shortage of provisions here.
112. Tije La Pass at the headwaters of the Keha Lungpa. Water flowing down the other side of the divide does not enter the Gandaki but Karnari River. Far beyond rises Mukt Himal.
113. Dhaulagiri (8,172 meters) as seen from near Dheolari. To its right is Tukucha Peak. A thousand meters below this barley field flows the Kari Gandaki.
114. The scientific team ascends Nissango Bhanpyang (pass) on leaving Muktinath. At this altitude the yaks became stronger.
115. The rugged plateau of Kari Gandaki is covered with an abundant growth of *Ephedra*, the only vegetation in the vicinity. Beyond is Nissango Bhanpyang (pass).
116. These 6,000-meter class chain of peaks east of the Jargeng Khola's headwaters, usually wrapped in clouds, have been seen by few people.
117. Looking down the dreaded Buri Gandaki towards Ngyak from Sringi Himal, one can realize how high up he is. Far down the valley lies Arughat Bazar.
118. The cairn (right) at Thaple Bhanjyang (4,900 meters), reached on July 1, marks the Nepal-Tibet border. The caravan of yaks carry rice for Tibet and bring back salt to Nepal.
119. In summer months, nomadic Tibetan herders are encamped for several days' stretch at one place and move on to another. They milk cows and make cheese and ghee.
120. Small blue *Meconopsis* (*M. horridula*) grow above the 4,500-meter level. Much patience was needed to find even one of these.
121. Yellow *Meconopsis* (*M. nepalensis*) grow to a height of two meters. Boiled, its stalk is edible as a salad which the Sherpas found delicious.
122. Tibetan mountains as seen to the east from Mura Pajan Bhanjyang (pass).
123. Shown are Tibetans making cheese. As the sun breaks through, they quickly set to work to dry them. Pictured are two women laying out noodle-like long strips of cheese on filthy woolen garments. Tibetan cheese is full of dust.
124. A huge glacier flows down this valley, situated south of Ganesh Himal's main peak, the headwaters of the Tolo Gumpa Khola.

53. Village folk of Sama peer curiously inside a tent from where the portable radio blares forth.
54. The 13 members of the climbing expedition gather for a shot on finishing a stretch of work.
55. Before piles of food supplies, Jiro Yamada, in charge of provisions, explains about the rations to expedition members.
56. A steam bath set up at the edge of the camp is enjoyed by the party. A simple affair, consisting of pouring water on hot stones, it serves the purpose nicely.
57. "Yum, yum!" A supper of yak steak broiled over a flat stone griddle on a camp stove proves very popular. As much as 16 kilos (35 pounds) of meat disappeared in little time.
58. Yamada wasn't slicking up to go to any party in the high mountains in having a tonsorial job done by Kiichiro Kato.
59. The campfire scene is enlivened by a Sherpa putting on a native dance.
- * * *
60. The northeastern side of Manaslu as seen from a 4,000-meter height near the base camp.
61. Shojiro Ishizaka is shown leading a communications line party and Hideo Yamazaki, in the foreground.
62. Camp 1 was set up at 4,600 meters on April 21.
63. A party sets out on skis to reconnoitre above the glacier near the 5,300-meter level.
64. Battling the elements, Sherpas tote heavy loads of equipment and supplies up to advance camps.
65. Pankaibuchi as seen from Camp 2 above Manaslu Glacier.
66. Manaslu in the setting sun.
67. Following the expedition from Katmandu to Camp 4 was this dog, called Ron and petted by the party members.
68. Masataka Takagi (left) and Sakuta Takebushi crawl out of their tents at Camp 2 and inhale deeply the refreshing morning air.
69. Loudly chanting their native folksongs, Sherpas drop down from Camp 4 in the early morning hours to relay another load of supplies up-mountain.
70. Before the summit attack, Camp 4, which may well be called the advance base camp, was set up on the snowfields of Naike Col (5,600 meters). From here Manaslu's north side towers abruptly before one's eyes.
71. East of Camp 4, Naike Peak (6,200 meters) is a beautiful curved contour of white.
72. Takebushi (center) explains to Sherpas the captions of Manaslu photos appearing in a copy of the Mainichi newspaper, delivered to Camp 4.
73. Yamazaki obtains blood from Muraki's ear (right) for blood tests.
74. The Ganesh Himal mountains towering into the skies east of Camp 4 at 5,600 meters seem within an arm's reach. The pyramid-shaped peak in the center is Ganesh I and to its right, Ganesh II. In the lower photograph, Sringi Himal is shown at the left. The pictures were taken with 250 mm. telephoto lens.

Members of Climbing Expedition:

75. (1) Yukio Mita
 (2) Masataka Takagi
 (3) Jiro Taguchi
 (4) Taian Kato
 (5) Hirokichi Tatsunuma
 (6) Masayoshi Murayama
 (7) Junjiro Muraki
 (8) Kiichiro Kato
 (9) Jiro Yamada
 (10) Hideo Yamazaki
 (11) Shojiro Ishizaka

- (12) Sakuta Takebushi
 (13) Takayoshi Yoda
 (14) Members of the climbing expedition assembled at Camp 4.
- * * *

76. Avalanche! With a thunderous rumble, roar and crash, a mighty avalanche of tons of ice, snow and debris plunges 2,000 meters down Manaslu's northern face.
77. Raging blizzards howling past Naike Col buried tents under heavy blankets of snow.
78. Climbers using fixed rope scale the Black Rock between Camps 4 and 5.
79. Stiff gusts of westerly windblasts whip high columns of powdery snow into the air above Manaslu's North Peak. To the right, the naked face of the Black Rock is uncovered by the wind.

Expedition Collaborators:

80. The Sherpas.
 (1) Gyalgen
 (2) Pansy
 (3) Sarki
 (4) Ang Tsering IV
 (5) Tlakpa
 (6) Ang Norbu
 (7) Nigma Sitar
 (8) Ghundi
 (9) Migma Steri
 (10) Ang Tember
 (11) Ang Dowa
 (12) Nima Tensing II
 (13) Kippa
 (14) Nym Temba
 (15) Ang Tsering V
- Porters.
 (16) Lakarbagha
 (17) Haibang
 (18) Sampat
- * * *

81. Sherpas, heavily burdened with supplies, toil laboriously along red flag markers up the icefall.
82. Camp 6 is pitched by a couloir in the icefall sector at 6,100 meters.
83. Climbers scaling the icefall are dwarfed to ant-size by the immensity of Manaslu. The photo was taken using 250 mm. lens from Camp 4.

The Summit Attack Fails

84. To prepare for the second assault on the summit on May 29, Camp 8 was pitched at 7,100 meters on North Col.
85. The summit attack team of (right to left) Jiro Yamada, Shojiro Ishizaka and Kiichiro Kato are wished good luck by Sakuta Takebushi and Masataka Takagi as the trio takes off for the assault on May 31.
86. After spending a night at Camp 9 (7,500 meters) above the plateau, Kato, Yamada and Ishizaka set out on the final dash for the summit in the early morning of June 1.
- * * *

- meters) of its eastern ridge. To the left is the main peak and to its right, the pinnacle.
15. Footprints of an unknown huge creature was seen on the moraine of Manaslu's eastern ridge. On recognizing them, a Tibetan Sherpa shouted, "It's a yeti!" and fled. Cloud they have been footprints of the Abominable Snowman?
 16. Snow-capped Sringi Himal is reflected picturesquely on the mirror-smooth waters of Kal Tal (lake).
 17. The Larkya market place is the trading post between Tibet and Nepal. After crossing the Buri Gandaki to the right bank, Sama is only a short distance away. To the south rises a ridge of Himal chuli.
 18. The expedition, having completed final preparations at Katmandu, sets out from the Nepalese capital on March 26 and 27 with more than 300 Sherpas and porters.
 19. Intense mid-summer heat of over 40°C tormented the venturers on the trek through the lowlands. On coming to rivers members of the party would strip and take to the stream.
 20. Herds of water buffalos roaming in marshes were a common sight.
 21. Nepalese women toil laboriously, cultivating rice fields and transporting burdens. Dressed in black and wearing red necklaces, they cross mountain and valleys with loads and peddle their wares.
 22. Girls laden with wooden planks, believed to weigh as much as 80 kilos (175 pounds), to be used as lumber for building construction descend a mountain path.
 23. A young girl squats naked on the dirt floor of a humble peasant home. The woman who rocks the baby crib seems to be expecting another baby.
 24. A Nepalese bamboo craftsman cleaves a piece of bamboo to weave baskets.
 25. A girl dressed in her best plants a stalk at a rice planting festival.

The 1953 Climbing Expedition

(Photos by T. Yoda)

In April, 1953, the base camp was established at Sama and the ascent was launched. However, the summit attempt unfortunately met with failure and a second try was vowed.

- * * *
26. Smiles of contentment illuminate the faces of these carefree, innocent Nepalese shepherd boys who spend their days chasing or rounding up cows and goats.
 27. Junjiro Muraki counts piles of silver coins to be paid porters for their services. These as well as cigarettes are handed them on presentation of numbered tags.
 28. The tent camp is pitched in a mango grove at Trisuli Bazar.
 29. On reaching Buri Gandaki gorge the journey leads over precarious, primitive trails.

The Tortuous Road of Buri Gandaki

- 30-32. Heavily laden barefooted porters, chanting sutras, plod hazardously over crude foot-cramping log gangways tressed on the fringes of Buri Gandaki's rocky precipices. Bridges across and along the gorge are built remarkably scientifically.

Visits to Nepal Himalaya Villages

33. The two parties that started out from Katmandu a day apart enjoy a reunion after many days about a camp table at Ngyak on April 8.

34. The village of Pangsing lies on a mountainside. A part of Ganesh Himal is shown in the background.
35. On entering Lidanda village, snow-covered craggy peaks begin to hove into sight. Most of the inhabitants beyond this area are Tibetans.
36. The encampment area of Ngyak is surrounded by a great forest of pines. The size of the pine cones of the five-needled trees is remarkably large.

* * *

37. The Himalayas appear to be the home of these Tibetans.
38. A nomadic Tibetan family that wanders back and forth across Himalayan mountain passes rests by the roadside.
39. Some Tibetans neither trim their hair nor bathe, but adorn themselves.
40. A Tibetan Lama nun spins a goat yarn.
41. Manaslu in all its majesty first came into sight on reaching the village of Lho on April 17 after a long arduous trek from Katmandu. This view of the white giant's east face shows to the left the lofty summit and to its right, the pinnacle projecting like a pricked ear high into the thin air. This picture was taken using 250 mm. telephoto lens from top of a hill at Lho.
42. Reminiscent of Africa, Euphorbias are found in the Himalayan foothills.
43. A panoramic view of Manaslu from Lho. A Lama pagoda, called "chorten", stands at the entrance of the village. People walk on the left side.
44. A "chorten" at the entrance of Sama.
45. Bones of dead Lama priests are ground, mixed with mud and moulded into balls called "tsatsa". They are placed at Lama shrines..
46. A Buddhist altar was seen at the home of a Tibetan village head. At its entrance was a row of "mani" bearing scriptures. Each of these drum-shaped "mani" are spun as one advances to the altar. Many kinds of Buddhist images adorn the gorgeous altar.
47. The second floor of two-storied Tibetan homes made of piled slate is used as living quarters and the ground floor, for shops. Inside one of these dwellings a couple grinds corn.

Faces of the Natives

48. The majority of races inhabiting Nepal are of mixed Mongol and Aryan blood. Mountain and plains dwelling people differ widely in racial characteristics, the Mongols dominating the former. The Draidian racial blood of India is dominant in (1), (3) and (4); the Mongol, in (2), (5), (6) and (12); and the Aryan, in (7), (8), (9), (10) and (11). Marks on the forehead and nose in (7), (8) and (9) distinguish their religious sects. The long plaits of hair in (3) are "choti" of Indian priests. (13) shows Gurung dairymaids living in the Buri Gandaki area.

The Expedition Base Camp

49. The expedition base camp is situated at 3,850 meters (12,631 feet) near the extreme tip of Manaslu Glacier.
50. The Japanese flag flutters in the Himalayan breeze at base camp.
51. Monstrous Manaslu Glacier with its countless crevasses sprawls at the foot of Manaslu.

A Day at Base Camp

52. Distribution and examination of equipment and food supplies are begun without delay following establishment of the camp.

inevitable retreat and defeat.

According to their opinion, the balance of the route leading up the summit presented no formidable obstacles from the technical point of view. Well acclimatized climbers who might be able to stay overnight at say, a Camp 10, with the possibility that such could be established, might stand a reasonable chance of attacking the summit on the following day. Of course, this is all a conjecture based on all factors being just right at the same time.

To mark the altitude attained, a Japanese flag was planted on the spot with pitons, and a picture taken of it. At 2.40 p.m. the group reached Camp 9 where everything was picked up save the tent for the descent from the plateau. Snow conditions had so deteriorated on this day that an hour and a half was taken to cover a 150-meter descent. Members at Camp 4 glued their eyes on the descending figures and showed little anxiety fearing that some injury might have overtaken the party. After they negotiated the dangerous sector of the slope they were met by the support party from Camp 8, and continued down to Camp 7 where they stayed overnight.

Thus were we beaten in our bid for the summit. There remained no opportunity for another attack due to our having already exceeded the time limit set by our schedule. Most of the members and Sherpas had already been above Camp 4 from 30 to 40 days, and it was obvious that another immediate attempt would have been beyond their physical capacity. Food and fuel were again running short, and the weather heralded the approach of the monsoon.

By June 3 all the camps were evacuated, and the entire party reached the more homely atmosphere of the base camp where it was warmly welcomed by Pansy and others. After leading an existence of several weeks in the white realm of snow it was a welcome relief to be back in the green-carpeted valley. Spring was in the air, and from wide varieties of alpine flowers in full bloom wafted the sweetest fragrance. Yaks from Sama and other neighboring villages roamed lazily on the pastures around our base camp, and bells of different makes slung around these animals' necks brought forth sweet and soothing melodies.

On the evening of June 3, preparations were afoot for a grand banquet to be held, and a few bottles of wines had already been uncorked when the interpreter Sagar rushed into the mess tent with the stupendous news: The Katmandu radio announced that Everest has been scaled by two members of the British expedition. We, of course, rather doubted it at first, but a few minutes later a subsequent report came confirming the news source as the British Embassy at Katmandu, and that the two members were Hillary and Tensing. The news was to us a sensation without parallel. We voiced heartfelt admiration for the British party and joy that it was they who gained the victory after ten big efforts spread over 32 years. But there was a slight tinge of regret that there were no higher mountains left to conquer on the face of the earth. A congratulatory message was dispatched by the first courier to catch the British party at Katmandu.

On June 8 our base camp was completely evacuated, and return journey to Pokhara via Larkya Pass began. As we ascended the pass, the magnificent northeastern face of Manaslu looked defiant as ever. The slope leading up to the plateau was scarred with the paths of more than ten avalanches that had smashed their way from the edge of the plateau down to the Camp 7 level. This slope was last seen from Bimtakothi on the day following the Larkya Pass crossing.

Bidding our last fond farewell to the huge white castle of Manaslu from its western side, we continued our march to Pokhara while discussions for route to be taken next year was carried on enthusiastically each night in camps.

Photo Captions

The 1952 Reconnaissance Expedition

(Photos by S. Takebushi, J. Taguchi, S. Nakao and K. Hayashi)

The reconnaissance expedition of the Japanese Alpine Club to scout Manaslu, the 8,125-meter (26,658-foot) Himalayan giant, left Katmandu in the middle of September, 1952. In the course of a three-month journey during which Manaslu was skirted, a route to scale the peak was found on its eastern side.

* * *

1. Porters, teamed in groups of threes and fives, lock hands as they pick their way across shallow stretches of streams.
2. The Tadi Khola is crossed three days after leaving Katmandu. The way boatmen sponge one for wine money to carry him across streams on their flimsy dugouts during the monsoon season in Nepal is as bad as palanquin-carriers in old Japan.
3. Such clump of peepal and banyan trees whose roots entwine rocks are encountered here and there on roads of Nepal, offering inviting oases for travelers.
4. Rustic lodging and tea houses on the banks of the Tadi Khola beckon travelers awaiting transportation across the river, reminding one of those on the Tokaido road of old Japan.
5. Sherpas who cooperated with our expedition: (left to right) Anno, Sarki, Dako, Gyalgen, Pansy and Ang Tsering IV.
6. The party prepares to leave a camp at 5,850 meters in the morning to climb 6,200-meter Chulu. From here Annapurna III in the background looms high.
7. Posing for a shot at the foot of Annapurna IV are expedition members (left to right) Kazuhiko Hayashi, Masataka Takagi, Kinji Imanishi, Sasuke Nakao and Jiro Taguchi. Shown at the right is Sakuta Takebushi, who joined the expedition later in Nepal.
8. The whole village of Braga turns out to thresh barley. The Tibetan dwellings straddling the steep cliffside in the shadows of Annapurna range like eagles' nests remind one of a scene depicted in the motion picture "Lost Horizon".
9. "Chorten" and "moendang" are found at entrances of Himalayan villages. Lama scriptures and "Budhako murti" (images of Buddha) to lead devout villagers and travelers are carved on slate rocks of "moendang". This work represents the God of Joy.
10. Unlike its eastern face, the western side of Manaslu, as seen from near Namun Bhanjyang (pass), 4,300 meters, presents an impressive view of the 8,000-meter giant. To the right is P.XXIX.
11. A range of jagged icy peaks beyond Bimtakothi, as seen from Larkya Bhanjyang (pass). Three glaciers originate from this region. Shown to the left is Cheo Himal and to the right, Himlung Himal, both over 7,000-meters.
12. A caravan of yaks cross Larkya Bhanjyang (pass) on the Nepal-Tibet border loaded with grain from the Nepalese plains for Tibet. On the return trip it brings back salt, wool and dyestuff.
13. The northwest flank of Manaslu, spewing forth puffs of powdery snow, is impressively rugged, as seen from near Bimtakothi, in contrast to the more gentle slope of the east side.
14. The knife-edged jagged icy mantle of Manaslu's southeastern wall, as seen from the saddle (5,300

rice to bread enjoyed it. We also like the "chapatti" made by the Sherpas. Everyone had good appetites. Topping us all was young Ishizaka, whom the Sherpas dubbed the "Khana (food) Sahib".

Takagi's report awaiting us at Lho, the last camp before reaching Sama, warned Dr. Tatsunuma of a rumored typhus epidemic in Sama. The thrill and excitement that went through our spines on having our first sight of Manaslu from a neighboring hill at Lho is beyond description in words.

The Summit Assaults

The expedition reached Sama (3,850 meters), the base camp site, on April 13.

Although snow fell nearly every day, the necessary preparations to establish the higher camps were begun without delay. Nearly eight tons of supplies and equipment were unpacked and readied for onward transport under supervision of expedition members and the more experienced of the Sherpas.

The camps were gradually extended upward, and on April 20 Camp 4 was set up at Naiké Col (5,600 meters) between North Col and Naiké Peak. This col separates the Larkya and Manaslu Glaciers. While endeavoring to make this camp as strong and comfortable in every way determined efforts were made at the same time to proceed through the deep and dangerous icefall region leading up to North Col. Camp 5 (6,000 meters), Camp 6 (6,100 meters) and Camp 7 (6,600 meters) were established in stages, and finally on May 15 Camp 8 (7,100 meters) was pitched on North Col.

Over 500 red flag markers were planted along the route at intervals averaging 50 yards on the glacier and the tortuous paths through the séracs from Camp 2 to North Col. Those markers served to maintain open the transportation route during the duration of the climbing activities from base camp to Camp 8.

Our original plan was to attack the summit on or before May 19, but inclement weather conditions forced us to postpone our schedule. The weather reports transmitted by the All India Radio from May 1, as previously arranged, informed us of frequent appearances of monsoon conditions over the Bay of Bengal. The situation was such that to avoid being caught in the monsoon it was imperative that our climbing activities be completed at the latest before the end of May.

On the morning of May 19 the assault party of Kiichiro Kato and Yamada left Camp 8 to reconnoiter the high plateau leading to the summit. They encountered soft snow and were compelled to plough through knee-deep snow all the way.

They were able to attain only the 7,200 meter altitude where the slope steepened abruptly by 3 p.m. In the absence of a suitable spot to pitch a tent, they dug a hole in hard snow in which they spent the night huddled together. Kato slept soundly but Yamada woke up frequently during the night to clear the snow which clogged the hole opening. We were heartened on learning that they managed to camp out at such altitudes without much difficulties. Admittedly both climbers were not inexperienced in this type of improvisation in the snow. Kato had experienced over 70 nights in snow caves in the Japanese Alps on winter expeditions.

Unfortunately the weather deteriorated the following morning, and fresh snow avalanches were seen plunging down on both sides of the snow cave where they were bivouaced. The situation becoming more precarious for further ascent, they reluctantly returned to Camp 8.

By this time the physical conditions of all members of the party became a problem, the high altitude affecting some of the Sherpas rather seriously. Sirdar Gyalgen and young Mima Steri were ordered by Dr. Tatsunuma to descend to base camp. Sarki, the strongest of them all who had climbed to Camp 5 on Annapurna, was escorted by Taguchi down to Camp 4. No less a serious blow to our plans was the insufficiency of provisions and fuel at the higher camps for a decisive effort. The young Nepali student Dilli, who enthusiastically had volunteered his services as interpreter, took ill at Camp 4 and was sent down to base camp on a Sherpa's back.

An order was thus issued to the upper camps for a general withdrawal to Camp 4 on Naiké Col. At the reunion of all members an assortment of fresh food—considered luxuries at these altitudes—cooked by Pansy, the cook, at base camp were relayed to Camp 4 daily. Even snowy days did not deter the two teams of faithful porters who transported them to Camp 2 to keep open this flow of invigorating rations. With

the camp now well stocked with provisions and appetites well restored, both Sahibs and Sherpas became as fit and well as ever. The weather on these days held in the morning but, more often than not, turned cloudy in the afternoons with snow flurries or blizzards following.

By May 30 all the camps up to No. 8 were again re-occupied. However, strong winds prevented the attack party from leaving Camp 8 on its final assault until the morning of May 31 when the wind subsided and the skies cleared completely. Kiichiro Kato, Jiro Yamada and Shojiro Ishizaka comprised the assault group supported by six young and strong Sherpas, led by Hideo Yamazaki.

Leaving Camp 8 at 9.30 a.m. the party made good time owing to more favorable snow conditions. They passed their previous bivouac site much earlier than on first climb. Here the slopes rose sharply to an average gradient of 50 degrees. Rock slabs were often felt under the 30-cm. deep snow, and going grew perilous for the heavily laden Sherpas.

No sooner had they reached a point only 15 meters below the edge of the plateau and ropes were about to fixed for the Sherpas when Ang Tember slipped down the steep face and disappeared below a projecting rock. Very fortunately, however, Ghundi who was dragged down by Ang Tember saved himself and Tember by firmly anchoring himself with his crampons on this rock. Ghundi is said to have carried loads above 8,000 meters on Everest, and he more than lived up to his reputation on this occasion.

By 2.40 p.m. the entire party stood east of the rock tower at the extreme western edge of the plateau. A whymper tent bolstered by pitons was pitched at the measured altitude of 7,500 meters.

To Yamazaki fell the unwelcome task of leading the support party of Sherpas back down the precipitous slope. The Sherpas seemed frustrated and unhappy, and to add to Yamazaki's predicament, he himself was suffering from dizzy spells. Kato and Yamada saw them off on the first leg of the descent with an anchored rope, enabling each Sherpa to descend the icy slope step by step. Approximately 200 meters of painfully slow progress had been made when Hla'pa and Ang Norbu lost their footing, dragging Yamazaki down with them. Yamazaki fortunately had enough strength left to anchor the two Sherpas' fall by using his iceaxe in the nick of time. The party finally made it back to Camp 8, arriving in a state of complete exhaustion.

As usual, later in the day the sky became overcast with cumulo-cirrus clouds accompanied by westerly winds and snow flurries. At 6 p.m. the temperature was -25°C while the minimum during the night was -32°C .

Meanwhile, at Camp 9 the assault party of three were enjoying "miso-zosui", made with Alpha rice, for dinner. (miso—paste made from soya beans and normally used in soups; Alpha rice—rice dried after boiling and ready for immediate use either by pouring hot water or by boiling). Yamada slept well while the other two seemed to have had a restless night due mainly to the narrowness of the tent.

The night settled calm and quiet and June 1 dawned even finer than the previous morning. Getting up at 4.30 a.m. they left Camp 9 at 7 a.m., roped together in the following order: Yamada, Ishizaka and Kato. The ice plateau extended up as far as the summit, and the surface of the ice was so hard that even the spikes of iceaxes were found to be of no avail. Only the sharp points of the crampons could be relied upon.

Complicated networks of crevasses were encountered all the way though their mouths were not opened too wide for discomfort. The flag markers had to be thrust into narrow cracks of the ice. The ice plateau swept upward to the summit in three broad steps. The foot of the second step was attained at 9.30 a.m. and its ascent was rough going as they had to plough through powdered snow patched with skavra. Clouds began to appear ominously in the west and the gathering winds spattered snow on the southwestern edge of the plateau. The summit looking as unattainable as ever looked down forbiddingly on the three tiny black specks toiling upwards so slowly as to seem motionless.

At length the third step was approached. Here a halt was called to discuss the advisability of further ascent. The altitude here was 7,750 meters, and only another 375 meters to the summit! It was high noon already, and another estimated five hours were required to cover the remaining distance under similar conditions. Considering the fickle weather, limited time for the descent, and the physical conditions of the members, the decision to retreat was made. Indeed, it must have been a bitter pill for the three. One can only imagine their chagrin. However, they were faithful to our order to be brave in the face of an

Pansy (cook)	47	51	Ev. '36, Garh. '37, Sik. '38, '39, Pyramid '49, Anna. '50. Garh. '51, Manaslu '52.
Ang Tsering IV	39	101	K.K. '36, Garh. '47, '51, Pyramid '49, Nepal '50, Manaslu '52.
Sarki	34	157	Nun Kun '46, Chomo Yumo '46, Nepal '50, Anna. '50, Garh. '51, Manaslu '52.
Hlakpa	29	164	Pyramid '49, Panchi Chuli '49, '51, Chau Khamba, Sugar Peak '52.
Ang Norbu	23	172	Ev. '52.
Nigma Sitar	29	164	Sik. '47, Lhonak '48, Ev. '52.
Nima Tensing II	24	177	Nepal '52, Sugar Peak '52.
Ghundi	28	167	Chau Khamba, Ev. '52.
Ang Tember	29	179	Kamet '52.
Ang Dowa	24	(unregistered)	Pyramid '49, Ev. '52.
Migma Steri	26	"	Ev. '52.
Kippa	28	"	Ev. '52.
Nym Temba	20	"	Ev. '52.
Ang Tsering V	29	"	New.

Liaison Men

Dilli Bahadur Verma (Katmandu) Joined 1952 Manaslu reconnaissance expedition.
Sagar Prasad Sharma (Katmandu)

Katmandu to Sama

The main party of about 100 left Katmandu on March 27, a day later than the 200-man caravan, headed by Takagi, Darshan and Shah and their families escorted us on cars for 30 minutes to the outskirts of the city.

Our line of march led on the Pokhara road for about a week to Arughat Bazar, from where it forks to the right on the tortuous rail along the Buri Gandaki River for two weeks to Sama. Next to the 1952 reconnaissance party, this was the second Japanese expedition to journey over this route. But it must not be forgotten that a Japanese traveled the same course years ago. He was Ekai Kawaguchi, the first Japanese to enter Tibet. He left Katmandu in March, 1899 on the long trek. In his "Three Years in Tibet", he wrote the following at Jitpurhedi and Arughat Bazar where we camped on March 26 and April 1 respectively (p. 40-41):

The Sublime Himalaya

It was in the beginning of the month of March, 1899, that, followed by a retinue of three men and one old dame, I bade farewell to my kind host and, seated on a snow-white pony, given me by my fatherly friend, left the Kasyapa Buddha tower. I was not in good health that day, on account of fever and weakness, but I was obliged to start from Katmandu, for it was dangerous for me to stay there any longer, as I was quite a stranger to the Nepalese, and they might find out my nationality and stop me from proceeding further. So I took the assistance of the horse; and the good animal proved to be a splendid mountaineer, and carried me up steep ascents and down abrupt descents in

perfect safety. We directed our course towards the northwest, through the British Residency, the most beautiful and clean quarter in Katmandu, and through Nagar-yon, a hill famous for a cave where Nagarjuna, a great Bodhi-Sattva, used to meditate. We arrived at a village called Jittle-Pedee in the evening, and passed the night under the eaves of a shopkeeper's house.

The present Ruler of Nepal is a Hindu, and keeps the caste system as rigidly as it is kept in India, where the people belonging to that religion do not allow a foreigner to enter their rooms, or to eat with them. Therefore we were obliged to pass the night outside a house, or under a rock, or in the forests. Here I must not omit some interesting things about my travels among the Himalaya mountains from Katmandu to the lake Manasarovara through Nepal. The country being extra-territorial, I believe no bold European or American had trodden this precipitous path before me; hence I would like to mention everything connected therewith, but as my object is Tibet, I cannot spend much space on the inner Himalayas of Nepal. I shall only mention briefly what will be considered interesting by my readers in general.

On the third day of our departure from Katmandu, we travelled for more than forty miles, and arrived at a small trading town called Chung, situated on the west bank of the Kirong river (Tirsuli Gandaki). Just north of town, on the bank of that river there is a pretty forest in which we slept well through night, in a lonely spot, lulled by the rolling sounds of the mountain river's grand music. Early on the following morning we started on the northwestern path leading Pokhara, although there is a short we only five day's journey from the place to Kirong in Tibet; but there the officers of the frontier guard the passes against all strangers. In three days' journey after this we made about forty miles, passed the villages Bareng-Bareng and Sareng, and, crossing the river Agu, we arrived at a famous town, Algata. I have not met with any maps which mention this name. The town is situated on the west bank of the natives called Buri-Ganga (Buri Gandaki); this river is crossed by an iron hanging bridge. The town itself is important on account of its trade with Tibet; I saw more than fifty people from Tibet and Nishang—a northern frontier province of Nepal.

This road is not particularly difficult, but the stifling heat in the Himalayan lowlands is something anyone would flinch. Taking a hint from herds of buffalos cooling themselves in streams, on finding suitable spots some of us would very often strip and take to the water, holding umbrellas for shade against the burning sun and enjoying some relief. We called this "buffalo-ing".

We were dismayed by the many passes we had to cross, but the porters, unconcerned, plod on merrily chanting tunes. Here and there on the trail we lowered our packs at resting places called "chautara" among clumps of huge banyan trees whose roots entwined a parapet of rocks.

Despite the perilous path along the precipitous walls of the Buri Gandaki gorge, not one man of the big caravan tumbled down into the river. As the nights grew colder with our ascent up the valley, the porters passed the nights huddled about fires. While we had expected some of them to desert us because of the intensifying coldness, only about one percent of the 270 dropped out. Replacements were hired at nearby villages through the efforts of Dilli Bahadur Verma, liaison man and interpreter, and Sherpas.

Fortunately no one became seriously ill or injured on the trek to Sama. Dr. Tatsunuma rigidly forbade us to drink unboiled water and advised everyone indiscriminately on maintenance of health. He also treated sick inhabitants of villages on the way.

Faithfully following my instructions, Takagi of the advance party left detailed daily reports of his group's activities at each camping site. These reports always contained amusing incidents. One of them called the two Katos of his party champion fishermen. They usually caught two pounds of fish in the river and enjoyed tasty suppers. Takagi also informed me of finding a growth of edible "warabi" (bracken), which we welcomed since we were short of fresh vegetables. Since we parted company with the scientific team on the second day at Panchi Mana Pass we had to depend largely on the botanical knowledge of Takebushi, reared in the mountainous Nagano area, to select edible plants.

On the evening of March 31 we pitched camp on a beautiful grassy knoll, reminding me of greens often encountered on short golf courses, near the banks of the Ankhu Khola. Here we celebrated my 53rd birthday with some bottles of Scotch whisky given us by General Kaiser and songs and dances by Sherpas around a campfire in the shadows of Ganesh Himal. Having heard from Sherpas that Tilman also camped here, we called it "Tilman Hill".

Economizing on our high camp rations, we relied as much as possible on local foodstuffs, like eggs and chicken. Chicken may be regarded delicacy, but when had it every day regardless of Pansy, the cook's, culinary skill we soon tired of it. Although Nepalese rice is rather poor in quality, we Japanese who prefer

The bustle of preparation work and frequent visitors made my hopes of retrieving my lost sleeping hours seem impossible. One of my obligations was to pay a courtesy call on high government officials. H. R.H. King Tribhubana Bir Bikram and high government authorities, all received me cordially and graciously offered their kind cooperation to our expedition for which I expressed my sincere gratitude.

The King's warm words extended to our expedition and the Japanese double cherry blossoms in a vase set on a table in the Royal Palace left indelible impressions on us. We were also moved by the ail- ing General Kaiser borne out on an arm chair by four attendants at his mansion to greet us and give us encouragement. Also unforgettable was the thrilling account of General Kiran Shumsher, Commander-in- Chief, at his cocktail party, of his several week's expedition with 75 elephants in which 17 tigers were killed.

Together with provisions, cheap cigarettes, matches, hurricane lanterns, wash bowls, etc. for the porters, approximately eight tons of supplies and equipment were apportioned among about 270 porters— an average of 65-pound load for each. All preparations for the caravan of about 300 people, including the Sahibs and Sherpas, to make the three-week journey were finally completed.

Members Of The 1952-3 Expeditions

The 1952 Reconnaissance Expedition

Dr. Kinji Imanishi (leader)	51	Superintendent, Kyoto University Institute of Anthropology and professor of animal ecology, Kyoto University.	Leader of Kyoto University scientific expeditions to Mongolia, Ponape and Hsingan mountains; J.A.C. trustee.
Masataka Takagi	40	Professor of psychology, Kobe University.	Several years climbing experience in Germany and Swiss Alps (1938-47); high altitude climbing expert; J.A.C. director.
Jiro Taguchi	40	Kishimoto trading company.	Much glacier climbing experience with Takagi in Swiss Alps (1937-47); J.A.C. director.
Sakuta Takebushi	46	Sports editor, Mainichi Newspapers.	Cross-country skier in 1928 Winter Olympic Games and 1928 world students ski championships (D'Ampezzo Cortina); member of first party to conquer Nanda Kot (Garhwar Himalaya) in 1936.
Sasuke Nakao	35	Assistant professor of plant breeding, Naniwa University (Osaka).	Member of expeditions to Ponape, Mongolia, Hsingan mountains and Saghalin as scientific researcher.
Kazuhiko Hayashi	28	Instructor of pathology, Kyoto University.	

The 1953 Climbing Expedition

Yukio Mita (leader)	52	Director, Bampo Trading Company.	Member of first party to conquer Mt. Alberta (Canadian Rockies) in 1925; made tour of Sikkim Himalaya; J.A.C. trustee.
Masataka Takagi	40	(See under reconnaissance expedition)	
Jiro Taguchi	40	(See under reconnaissance expedition)	
Sakuta Takebushi	46	(See under reconnaissance expedition)	
Taian Kato (In charge of transportation)	41	New Asia Foreign Trade News Agency.	Member of Mongolian expeditions; J.A.C. director.
Dr. Hirokichi Tatsunuma (medical officer)	37	Lecturer, Keio University.	J.A.C. director.
Masayoshi Murayama (Assistant in charge of transportation)	34	Ichida Textile Company.	J.A.C. director.
Kiichiro Kato (In charge of equipment)	32	Sakura Grain Company.	
Jiro Yamada (In charge of provisions and meteorological survey)	31	Sakura Grain Company.	J.A.C. director.
Junjiro Muraki (In charge of radio and other instruments)	29	Assistant, Waseda University Metal Casting Research laboratory.	J.A.C. director.
Hideo Yamazaki (Assistant medical officer)	28	Instructor of anatomy, Sapporo Medical University.	
Shojiro Ishizaka	24	Tokyo Publications Sales Company.	
Takayoshi Yoda (Camera- man)	36	Photographer, Mainichi Newspapers.	

Scientific Expedition

Sasuke Nakao	35	(See under reconnaissance expedition).	
Jiro Kawakita	32	Assistant professor of geography, Osaka University.	Member of Hsingan mountains expedition.

The Sherpas

Name	Age	Himalayan Club No.	Previous Expeditions.
Gyalgen (Sirdar)	39	57	Ev. '36, '38, K.K. '39, Nun Kun '46, Pyramid '49, Anna. '50, Chau Khamba '51, Manaslu '52.

The 1952 Manaslu Reconnaissance Expedition

By Dr. Kinji Imanishi

A Japanese reconnaissance party of six members* including two scientists and one medical doctor left Katmandu on September 14, 1952, with the object of exploring the Manaslu area, especially the Buri Gandaki side of the mountain, and collecting specimens and materials there in the field of natural history.

Led by Dr. Kinji Imanishi, professor of animal ecology at Kyoto University, the party concentrated the first part of its journey on the Marsyandi side of Annapurna.

It first made an attempt on Annapurna IV following Tilman's route in 1950. The attempt, however, was frustrated by a heavy snowfall. The Japanese climbing team turned back from 5,700 meters at the foot of the first ice step. The ropes fixed there by the Tilman party still remained intact, and an axe-head which had been left by it was recovered by the Japanese team.

Before the team turned to Manaslu, it climbed Chulu (ca. 6,200 meters) on the northern side of Marsyandi valley. Three camps were pitched at 5,300 meters, 5,500 meters and 5,850 meters respectively. The timberline was passed at 4,500 meters and the snowline, at 5,500. The ascent was made on October 23 without encountering technical difficulties.

On the return journey to Thonje, a group of three members traced part of the route to Namun Bhanjyang to photograph the western face of Manaslu.

The monsoon was already over. In the forests, the crimson foliage of creepers and the yellow leaves of birches and maples looked beautiful under the blue sky. The season's most impressive flower was the purplish gentian.

The party ascended along the Dudh Khola. Some Bhutias were still found at Bimtakothi as Larkya Bhanjyang had been opened for yak, zho and sheep caravans. On November 9 the party crossed the pass, the watershed of which was covered by a thin layer of fresh snow.

Observable from the Sama side of the pass beyond the glaciers and snow-clad slopes was a direct route to the upper plateau region of Manaslu. It was inferred that this route was more advantageous; for between the northern peak and its spur, can be used to set up advance bases. This route may probably be the one discovered by Major Roberts and was later described by Tilman in his new book, "Nepal Himalaya" (p. 201).

The base camp was established at Sama. The northeastern face of Manaslu had been continuously explored until this camp was evacuated on November 29. The porters were recruited from Lidanda as Sama was badly infested with typhoid fever. The waters of the Buri Gandaki receded and permitted passage on the winter route along the riverside. Since the corn and rice fields were barren and dried up, any spot could be used as a camping ground. Near Arughat Bazar, butterflies and dragonflies were again found fluttering about. The party returned to Katmandu on December 15.

With the experiences gained in this expedition, the Himalayan Committee of the Japanese Alpine Club decided to send an expedition to scale Manaslu from the Sama side in the pre-monsoon season.

The 1953 Manaslu Climbing Expedition

By Yukio Mita

Hardly had the reconnaissance party returned to Tokyo in late December, 1952, were preparations for the challenge on Manaslu rushed.

A room in Dr. Hirokichi Tatsunuma's hospital in downtown Tokyo, used by the reconnaissance expedition, continued to serve as the Japanese Himalaya Expedition headquarters. By January, 1953 the Committee nearly completed selecting the expedition membership and assembling most of the food supplies and equipment. Until the day of departure the room was a scene of busy activity from morning to night with expedition members and others going in and out.

About this time the Himalayan Committee recommended me to be leader of the 1953 expedition. The task seemed a little too great for me whose experiences consisted of scaling Mt. Alberta of the Canadian Rockies nearly 20 years ago and making climbing tours in the Sikkim Himalayas and the Kulu region. Moreover, I considered my age and physical capacities. I believe I was selected for my several years' experience in India and knowledge of the local language and way of handling the hill people. In accepting the responsibilities I was encouraged by the quality of the expedition membership, which included such top-flight experienced Japanese climbers as Masataka Takagi, Jiro Taguchi, Sakuta Takebushi and Sasuke Nakao.

Following the advance contingent of four men, headed by Taguchi, our main party took off from Tokyo International Airport on March 18. Although I do not believe so much in Western superstitions, I was much relieved when our original scheduled departure on Friday, the 13th, was delayed.

We arrived in Calcutta late in the evening of March 19 and checked in at the Hotel Spences. Without a day's rest, early the next morning the party members began scurrying about in preparations work. Most of the air-borne baggage was already sent by the advance party by plane to Katmandu. Word came that the 15 contracted Sherpas from Darjeeling had arrived in the Nepalese capital.

We were kept busily occupied during the few days spent in Calcutta. I had to sweat through a 10-minute talk in English I was obliged to broadcast over the All India Radio. The some 40 rupees received as a token of gratitude was, to my amusement, the only income gotten abroad during the entire expedition.

It was a great pleasure to meet Mr. Crawford and Mr. Auden of the Himalayan Club and Dr. Mull of the Meteorological Survey Center at a cocktail party given in our honor by Japanese Consul-General Kasuya. We were most grateful to Dr. Mull for his kindness in promising to send special weather bulletins over the All India Radio for our expedition.

On winding up all preparations in Calcutta, Takagi, Muraki and I—the last contingent—left Dum Dum Airport abroad a twin-engined Himalayan Airways plane on March 22. To our disappointment, the high clouds prevented us from having our first sight of the snow-capped Himalayas. After an otherwise pleasant flight, our plane set down at the Katmandu airport.

As I disembarked with a hickory-shafted, tarnished mashie in place of a walking stick on my arm, I was immediately hemmed in by members of the advance party and Sherpas. I was first introduced to Loke Darshan, the Crown Prince's private secretary, a short, but handsome youth, who rendered much valuable assistance to the Japanese expedition the previous year. Fortunately, by chance, we were able to meet and talk at length there with former Nepalese Foreign Minister M. P. Koirala who was about to fly to India.

We were driven by car to the residence of a Mr. Shah in the heart of Katmandu. We were lodged in a special room on the second floor. On the lawn where our tents were pitched, the Sahibs (expedition members) and Sherpas were in the midst of work sorting out the mountains of supplies and equipment.

A Brief History Of The Japanese Alpine Club

By Iwao Naruse

The Japanese Alpine Club was organized in 1905. Its membership numbers approximately 1,500, and is the representative mountaineering club in Japan. The club, consisting of 11 local sections, is headed by its president, Yuko Maki.

The club room built by donations of the members is located in the compound of the Kishi Memorial Athletic Center at Kanda, Tokyo where many of the members gather and enjoy club life every Saturday afternoon. Its publications are the annual journal "Sangaku" and the monthly bulletin "Kaiho".

The club has sponsored so far expeditions to Nanda Kot (Garhwar Himalaya), 1936; Aconcagua (Andes), 1952; Manaslu (Nepal Himalaya), 1952 and 1953; and Annapurna (Nepal Himalaya), 1953; and was responsible for the expeditions to Mt. Alberta (Canadian Rockies), 1952, and for the two recent attempts to Manaslu, 1952 and 1953. Among the above the Alberta, Nanda Kot and Aconcagua expeditions succeeded in their conquest attempts.

This year's Manaslu expedition is now en route and the final assault will start in the middle of May.

Besides participating in the above big expeditions, many of the club members have had experiences in mountain climbing in the Alps and elsewhere.

The club is attempting to make constant contact with mountaineering organizations of other countries by means of exchanging magazines or bulletins.

MANASLU

1952-3

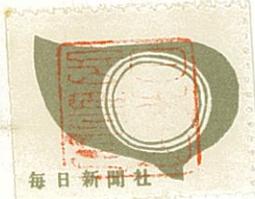
A Brief History of the Japanese Alpine Club.....	Iwao Naruse	1
The 1952 Reconnaissance Expedition	Dr. Kinji Imanishi	2
The 1953 Climbing Expedition.....	Yukio Mita	3
Photo Captions.....		11
List of Equipments		162-170
List of Food Supply.....		176-180

Cover lettering by Yuko Maki, president of J. A. C.

マ ナ ス ル

1952—3年

昭和29年3月1日印刷
昭和29年3月10日発行



毎日新聞社

定価 800 円

編者 日本山岳会
発行者 千歳雄吉

原色・写真版 凸版印刷株式会社
活版 凸版印刷株式会社
製本 宮本製本所

発行所 毎日新聞社
東京都千代田区有楽町1の11
大阪市北区堂島上2の36
門司市清滝町1の902
名古屋市中村区堀内町4丁目

1954 Mainichi Newspapers Printed in Japan

